

東関東自動車道埋蔵文化財調査報告書II

— 大栄地区(1) —

1 9 8 6

日本道路公団東京第一建設局
財団法人千葉県文化財センター

東関東自動車道埋蔵文化財調査報告書II

— 大栄地区(1) —

1 9 8 6

日本道路公団東京第一建設局
財団法人千葉県文化財センター

序 文

下総台地は、北方を利根川が東流し、また、台地上からは幾筋かの河川が発達する等、自然環境に恵まれている地域であり、多くの遺跡が所在しております。

東関東自動車道（市川～潮来間）は、全国的な高速自動車国道網整備の一環として計画されたもので、市川～成田間に引き続き、成田～大栄間も供用されております。

ところで、同自動車道は成田、潮来間（30.2km）の延伸が計画されたため、千葉県教育委員会では、同事業地内に所在する埋蔵文化財の取扱いについて、日本道路公団をはじめ関係諸機関と協議を重ねてまいりました。その結果、路線の変更等でできるだけ保存の方向をとりましたが、止むを得ず路線内にはいりました遺跡については、発掘調査による記録保存の措置をとることで協議が整い、昭和53年4月より財団法人千葉県文化財センターが発掘調査を実施することになりました。

調査は昭和59年3月に終了し、計58か所の遺跡から多くの貴重な資料を得ることができました。現在はこれらの諸遺跡の整理作業を実施しており、成田地区分については、既に「東関東自動車道埋蔵文化財調査報告書Ⅰ」として刊行されております。

このたび、大栄町に所在する9遺跡の整理作業が終了し、「東関東自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ」として刊行する運びとなりました。

本書に収載した遺跡のうち、新堀第1・第2遺跡では先土器時代のユニットが検出され、新林大富遺跡では、縄文時代中期の住居跡、新山台遺跡では、縄文時代中期加曽利E式期の豊富な土器と住居跡群が調査されました。

本書が学術資料としてはもとより、歴史に対する理解を深める資料として広く活用されることを望む次第です。

最後に、発掘調査から報告書刊行まで、種々、御指導いただいた千葉県教育委員会をはじめ、日本道路公団東京第一建設局、地元関係諸機関各位の御指導、御協力に御礼申し上げますとともに、酷暑酷暑の中、調査に協力された多くの調査補助員の皆様に心から謝意を表します。

昭和60年12月

財団法人 千葉県文化財センター

理事長 山本 孝也

凡 例

1. 本書は、日本道路公団東京第一建設局による東関東自動車道建設工事に伴う埋蔵文化財の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査から報告書作成に至る業務は、日本道路公団東京第一建設局の委託を受け、文化庁および千葉県教育委員会の指導を受けて財団法人千葉県文化財センターが行なった。
3. 本書に記載された遺跡は、大安場遺跡、来光台第1・2・3遺跡、新堀第1・2遺跡、新林大富遺跡、花立台遺跡、新山台遺跡の9遺跡である。
4. 整理作業および報告書の作成作業は、調査部長鈴木道之助、部長補佐根本 弘、岡川宏道の指導のもとに、齋木 勝、石田広美、高橋博文、栗田則久、岡田光広、池田紀子が行なった。なお、発掘作業担当者は別記による。
5. 本書の編集は、栗田則久が担当し、執筆は別記のとおりである。
6. 第1図は、国土地理院発行の5万分の1「成田」(N1-54-19-10・昭和53年6月)を使用した。
7. 発掘調査から報告書刊行にいたるまで、千葉県教育委員会をはじめ、日本道路公団東京第一建設局、同佐原工事事務所、大栄町教育委員会、また、地元関係諸機関等多くの方々から御指導、助言をいただいた。

目次

序 文

凡 例

序篇 大栄地区の歴史的環境	(栗田)	1
第I篇 新山台遺跡 (No.15)		5
第1章 調査概要	(栗田)	9
第2章 遺 構	(岡田)	11
第1節 先土器時代		11
第2節 縄文時代住居跡		13
第3節 縄文時代土壇		16
第4節 歴史時代住居跡		24
第3章 遺 物	(岡田)	25
第1節 先土器時代出土遺物		25
第2節 縄文時代住居跡出土遺物		26
第3節 縄文時代土壇出土遺物		53
第4節 歴史時代住居跡出土遺物		74
第5節 グリット出土遺物		74
第4章 小 結	(岡田)	112
第II篇 大安場遺跡 (No.7), 来光台第1遺跡 (No.8), 来光台第2遺跡 (No.9), 来光台第3遺跡 (No.10)		117
第1章 調査概要	(栗田)	123
第2章 調査成果	(栗田)	124
第1節 大安場遺跡		124
第2節 来光台第1遺跡		125
第3節 来光台第2遺跡		126
第4節 来光台第3遺跡		128

第III篇 新堀第1遺跡 (No.11), 新堀第2遺跡 (No.12)	129
第1章 調査概要 (栗田)	133
第2章 調査成果 (栗田)	134
第1節 新堀第1遺跡	134
第2節 新堀第2遺跡	135
第IV篇 新林大富遺跡 (No.13), 花立台遺跡 (No.14)	142
第1章 調査概要 (栗田)	147
第2章 調査成果 (栗田)	148
第1節 新林大富遺跡	148
第2節 花立台遺跡	153
結 語 (栗田)	155

挿 図 目 次

第1図	遺跡位置図 (No.7 ~No.15)	2
第2図	遺跡周辺図 (1)	3
第3図	遺跡周辺図 (2)	4
第4図	新山台遺跡地形図	7
第5図	新山台遺跡遺構配置図	9
第6図	先土器時代遺物出土状況図 (1)	10
第7図	先土器時代遺物出土状況図 (2)	11
第8図	002号, 003号住居跡実測図	13
第9図	004号, 005号住居跡実測図	14
第10図	101号, 102号, 103号, 104号土壇実測図	16
第11図	105号, 106号, 107号, 108号土壇実測図	17
第12図	109号, 110号, 111号, 112A・B号, 113号土壇実測図	19
第13図	114号, 115号, 116号, 117号, 118号土壇実測図	20
第14図	119号, 120号, 121号, 122号, 123号土壇実測図	22
第15図	001号住居跡実測図	23
第16図	先土器時代遺物実測図	24
第17図	住居跡出土縄文土器実測図 (1)	28
第18図	住居跡出土縄文土器実測図 (2)	29
第19図	住居跡出土縄文土器実測図 (3)	30
第20図	住居跡出土縄文土器実測図 (4)	31
第21図	住居跡出土縄文土器実測図・拓影図 (5)	32
第22図	住居跡出土縄文土器拓影図 (6)	33
第23図	住居跡出土縄文土器拓影図・実測図 (7)	34
第24図	住居跡出土縄文土器実測図 (8)	35
第25図	住居跡出土縄文土器実測図 (9)	36
第26図	住居跡出土縄文土器実測図・拓影図 (10)	37
第27図	住居跡出土縄文土器実測図 (11)	39
第28図	住居跡出土縄文土器実測図・拓影図 (12)	40
第29図	住居跡出土縄文土器実測図 (13)	41
第30図	住居跡出土土製品実測図 (1)	43

第31图	住居跡出土土製品実測图 (2)	44
第32图	住居跡出土土製品実測图 (3)	45
第33图	住居跡出土石器実測图 (1)	49
第34图	住居跡出土石器実測图 (2)	50
第35图	住居跡出土石器実測图 (3)	51
第36图	土坛出土縄文土器実測图 (1)	55
第37图	土坛出土縄文土器実測图 (2)	56
第38图	土坛出土縄文土器実測图 (3)	57
第39图	土坛出土縄文土器実測图 (4)	59
第40图	土坛出土縄文土器実測图 (5)	60
第41图	土坛出土縄文土器実測图 (6)	61
第42图	土坛出土縄文土器実測图 (7)	62
第43图	土坛出土縄文土器実測图 (8)	65
第44图	土坛出土縄文土器実測图 (9)	66
第45图	土坛出土縄文土器実測图 (10)	67
第46图	土坛出土縄文土器実測图 (11)	68
第47图	土坛出土縄文土器拓影图 (1)	69
第48图	土坛出土縄文土器拓影图 (2)	70
第49图	土坛出土土製品実測图	72
第50图	土坛出土石器実測图	73
第51图	001号住居跡出土遺物実測图	74
第52图	第II群土器実測图	76
第53图	第IV群土器実測图 (1)	78
第54图	第IV群土器実測图 (2)	79
第55图	第IV群土器実測图 (3)	80
第56图	第IV群土器実測图 (4)	81
第57图	第IV群土器実測图 (5)	82
第58图	第IV群土器実測图 (6)	83
第59图	第IV群土器実測图 (7)	84
第60图	第IV群土器実測图 (8)	85
第61图	第IV群土器実測图 (9)	86
第62图	第I・II・III群土器拓影图	87
第63图	第IV群土器拓影图 (1)	88

第64図	第IV群土器拓影図(2)	89
第65図	第IV群土器拓影図(3)	90
第66図	グリット出土土製品実測図(1)	92
第67図	グリット出土土製品実測図(2)	93
第68図	グリット出土土製品実測図(3)	94
第69図	グリット出土石器実測図(1)	99
第70図	グリット出土石器実測図(2)	100
第71図	グリット出土石器実測図(3)	101
第72図	グリット出土石器実測図(4)	102
第73図	グリット出土石器実測図(5)	103
第74図	グリット出土石器実測図(6)	105
第75図	グリット出土石器実測図(7)	106
第76図	グリット出土石器実測図(8)	107
第77図	その他の遺物	111
第78図	002号住居跡出土主要土器接合図	113
第79図	口縁部無文帯区画の推移模式図	114
第80図	大安場遺跡地形図	119
第81図	来光台第1遺跡地形図	120
第82図	来光台第2遺跡地形図	121
第83図	来光台第3遺跡地形図	122
第84図	溝状遺構実測図	124
第85図	石器実測図	124
第86図	001号、002号土壇実測図	125
第87図	土壇実測図	126
第88図	溝状遺構実測図	127
第89図	土壇実測図	128
第90図	土器実測図	128
第91図	新堀第1遺跡地形図	131
第92図	新堀第2遺跡地形図	132
第93図	C3グリット石器出土状況図	134
第94図	石器実測図	135
第95図	溝状遺構実測図	136
第96図	先土器時代石器実測図	137

第97図	グリット出土縄文土器拓影図	140
第98図	縄文時代石器実測図	141
第99図	新林大富遺跡地形図	145
第100図	花立台遺跡地形図	146
第101図	001号住居跡実測図	148
第102図	先土器時代石器実測図	149
第103図	001号住居跡出土遺物実測図	150
第104図	グリット出土縄文土器拓影図	151
第105図	グリット出土土製品実測図	152
第106図	縄文時代石器実測図	153
第107図	グリット出土縄文土器拓影図	153
第108図	石器実測図	154

表 目 次

第1表	先土器時代石器計測表	25
第2表	住居跡出土土製品計測表	45
第3表	住居跡出土石器計測表	52
第4表	土壇出土土製品計測表	72
第5表	土壇出土石器計測表	74
第6表	グリット出土土製品計測表	95
第7表	グリット出土石器計測表	108
第8表	グリット出土石鏃計測表	141

図版目次

図版1 新山台遺跡

1. 遺跡近景
2. 002号住居跡遺物出土状況

図版2 新山台遺跡

1. 002号住居跡
2. 003号住居跡

図版3 新山台遺跡

1. 004号住居跡
2. 004号住居跡ピット内遺物出土状況

図版4 新山台遺跡

1. 005号住居跡
2. 005号住居跡炉状況

図版5 新山台遺跡

1. 107号土壇
2. 108号土壇

図版6 新山台遺跡

1. 115号土壇
2. 118号土壇

図版7 新山台遺跡

1. 001号住居跡
2. 発掘風景

図版8 新山台遺跡

先土器時代遺物

図版9 新山台遺跡

住居跡出土縄文土器

図版10 新山台遺跡

住居跡、土壇出土縄文土器

図版11 新山台遺跡

土壇出土縄文土器

図版12 新山台遺跡

土壇、グリット出土縄文土器

図版13 新山台遺跡

グリット出土縄文土器

図版14 新山台遺跡

グリット出土縄文土器

図版15 新山台遺跡

第I群, II群, III群土器

図版16 新山台遺跡

第IV群土器(1)

図版17 新山台遺跡

第IV群土器(2)

図版18 新山台遺跡

住居跡出土土製品(1)

図版19 新山台遺跡

住居跡出土土製品(2)

図版20 新山台遺跡

住居跡、土壇出土土製品

図版21 新山台遺跡

グリット出土土製品(1)

図版22 新山台遺跡

グリット出土土製品(2)

図版23 新山台遺跡

グリット出土土製品(3)

図版24 新山台遺跡

住居跡出土石器

図版25 新山台遺跡

住居跡、土壇出土石器

図版26 新山台遺跡

グリット出土石器(1)

図版27 新山台遺跡

グリット出土石器 (2)

図版28 新山台遺跡

グリット出土石器 (3)

図版29 新山台遺跡

グリット出土石器 (4)

図版30 新山台遺跡

1. グリット出土石器

2. その他の遺物

図版31 来光台第1遺跡

1. 遺跡近景

2. 001号土壇

図版32 来光台第2遺跡

1. 遺跡近景

2. 溝状遺構

図版33 来光台第3遺跡

1. 遺跡近景

2. 土壇

図版34 新堀第1遺跡

1. 遺跡遠景

2. 遺跡近景

図版35 新堀第1遺跡

1. 先土器時代石器出土状況

2. 石器

図版36 新堀第2遺跡

1. 遺跡近景

2. 確認トレンチ状況

図版37 新堀第2遺跡

グリット出土縄文土器

図版38 新堀第2遺跡

1. 先土器時代石器

2. 縄文時代石器

図版39 新林大富遺跡

1. 遺跡近景

2. 001号住居跡

図版40 新林大富遺跡

1. 001号住居跡出土縄文土器

2. 先土器時代石器

3. グリット出土遺物

図版41 新林大富遺跡

グリット出土縄文土器

図版42 花立台遺跡

1. 遺跡近景

2. グリット出土縄文土器

3. グリット出土石器

序篇 歴史的環境

大栄町には、町のほぼ中央を北流して利根川に入る大須賀川があり、さらには西端に尾羽根川の上流域、東端には栗山川の上流域がみられ、これらの河川による侵食が著しく、台地は複雑な形状を呈している。これらの複雑な台地上には、先土器時代から中・近世にかけての多くの遺跡が立地している。その遺跡数は、『大栄町文化財目録』^(註1)では90ヶ所、『遺跡分布調査報告書』^(註2)では251ヶ所発見されている。これらの遺跡の立地状況は、やはり河川を望む台地上に多く分布し、中央部にはあまりみられない。

先土器時代の遺跡として、天神山遺跡^(註3)があげられる。ナイフ形石器・グレイバー・スクレイパー・ポイント等良好な資料が出土している。他は調査例が少ないため全体の様相が把握できないが、本報告書でも3遺跡で検出されており、今後調査例が増加するものと思われる。

縄文時代は、大栄町において主体を占める時期であり、特に中期に集中する。貝塚としては、晩期に属する奈土貝塚^(註4)が知られている。この遺跡は、昭和32年に早稲田大学高等学院歴史研究部によって調査された貝塚で、土偶や骨角器、貝製品等豊富な資料が検出された。

弥生時代の遺跡数はかなり少ないが、東関道の事業地内に所在する多々羅堂遺跡は、集落跡として発見され、良好な土器も出土している。

古墳時代に入ると、遺跡数がやや増加する。調査された遺跡は少ないが、鬼高期を中心とした多くの集落が存在する可能性が強い。古墳は、大須賀川の下流域に集中して分布している。これらの古墳は、古墳時代後期から終末にかけての群集墳がほとんどである。ただ、昭和58年度に調査された堀籠浅間古墳^(註5)は、周溝内より検出された壺より、古墳時代初頭の築造と考えられ、当地域を含めた下総台地の発生期の古墳を考えるうえでの良好な資料である。

歴史時代になると遺跡数がさらに増加し、集落跡を中心とした遺跡の存在が予想される。久井崎遺跡では墨書土器の出土も認められており、調査例の増加とともに多くの成果が期待される。

註

(1)大栄町教育委員会『大栄町文化財目録』1970

(2)大栄町教育委員会『遺跡分布調査報告書』1985

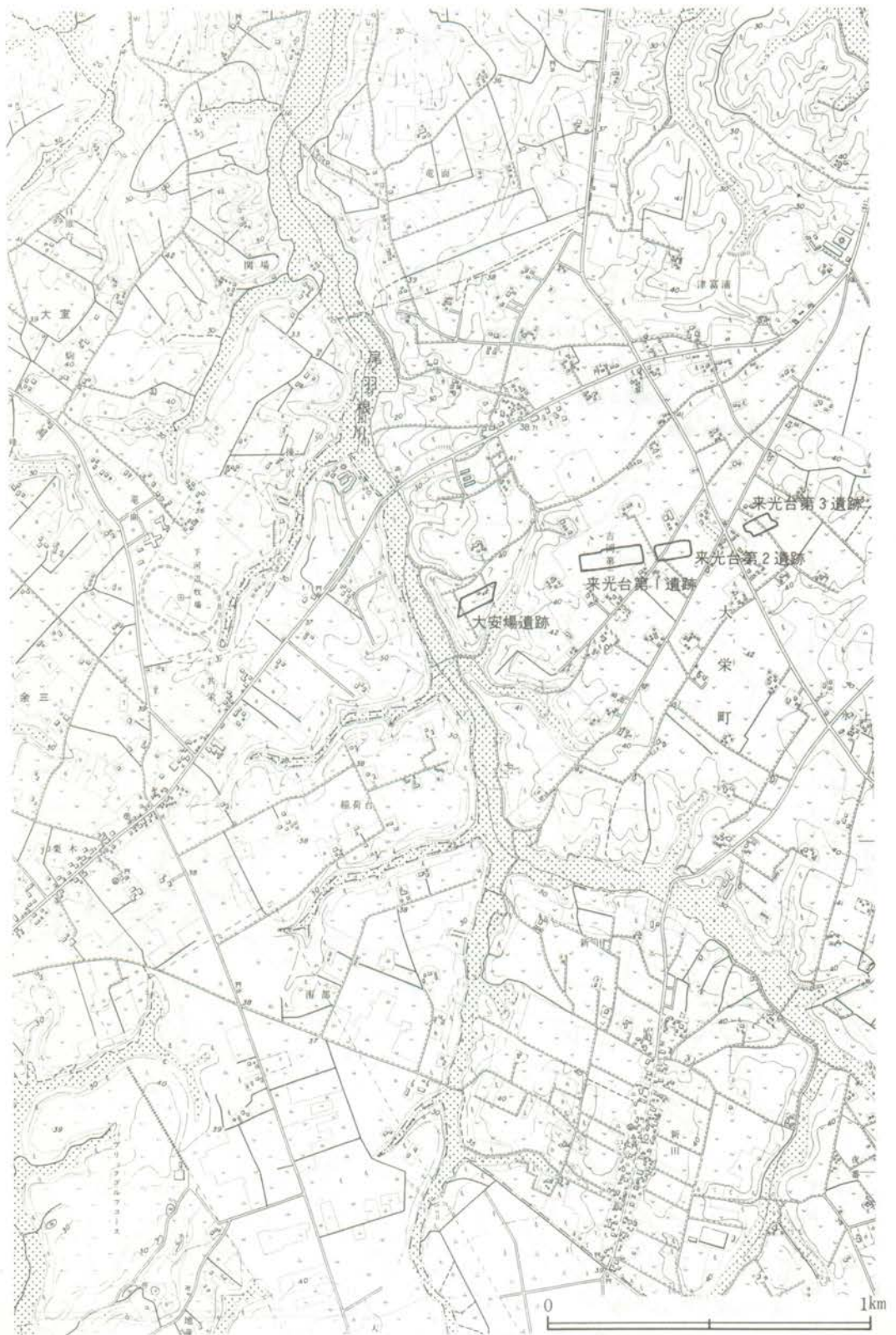
(3)武田 修『天神山遺跡発掘調査報告書』1984

(4)早稲田大学高等学院史学研究部「千葉県香取郡奈土貝塚発掘報告書」『早稲田大学高等学院史学研究誌第1号』1958

(5)福間 元『堀籠浅間古墳』1984



第1図 遺跡位置図(No.7~No.15)



第2図 遺跡周辺図 (1) (1/20,000)

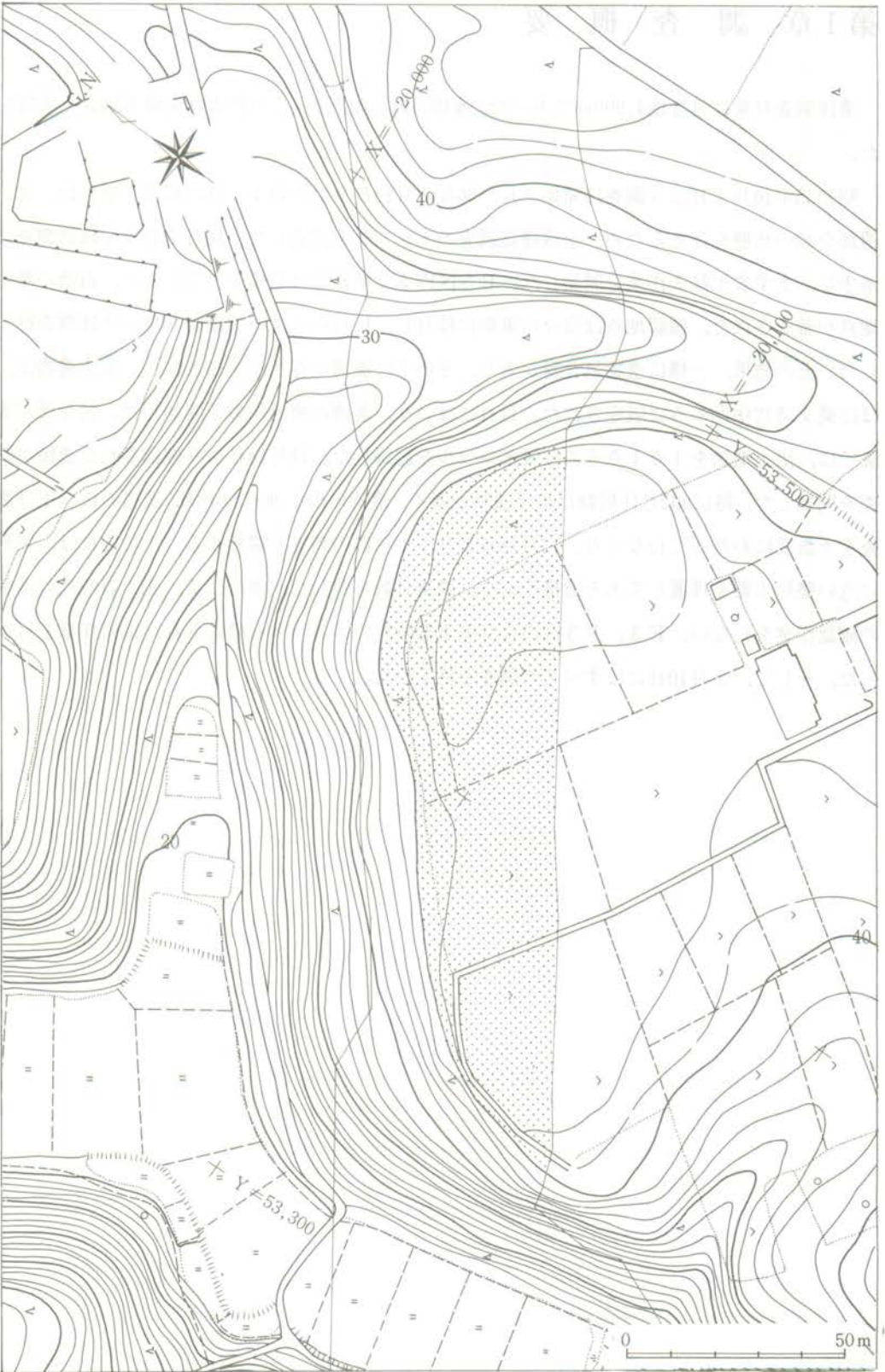
第 I 篇

新 山 台 遺 跡 (No.15)

遺跡コード 343—010

所在地 香取郡大栄町臼作字新山台117—12他

調査研究員 斎木勝, 奥田正彦, 岸本雅人

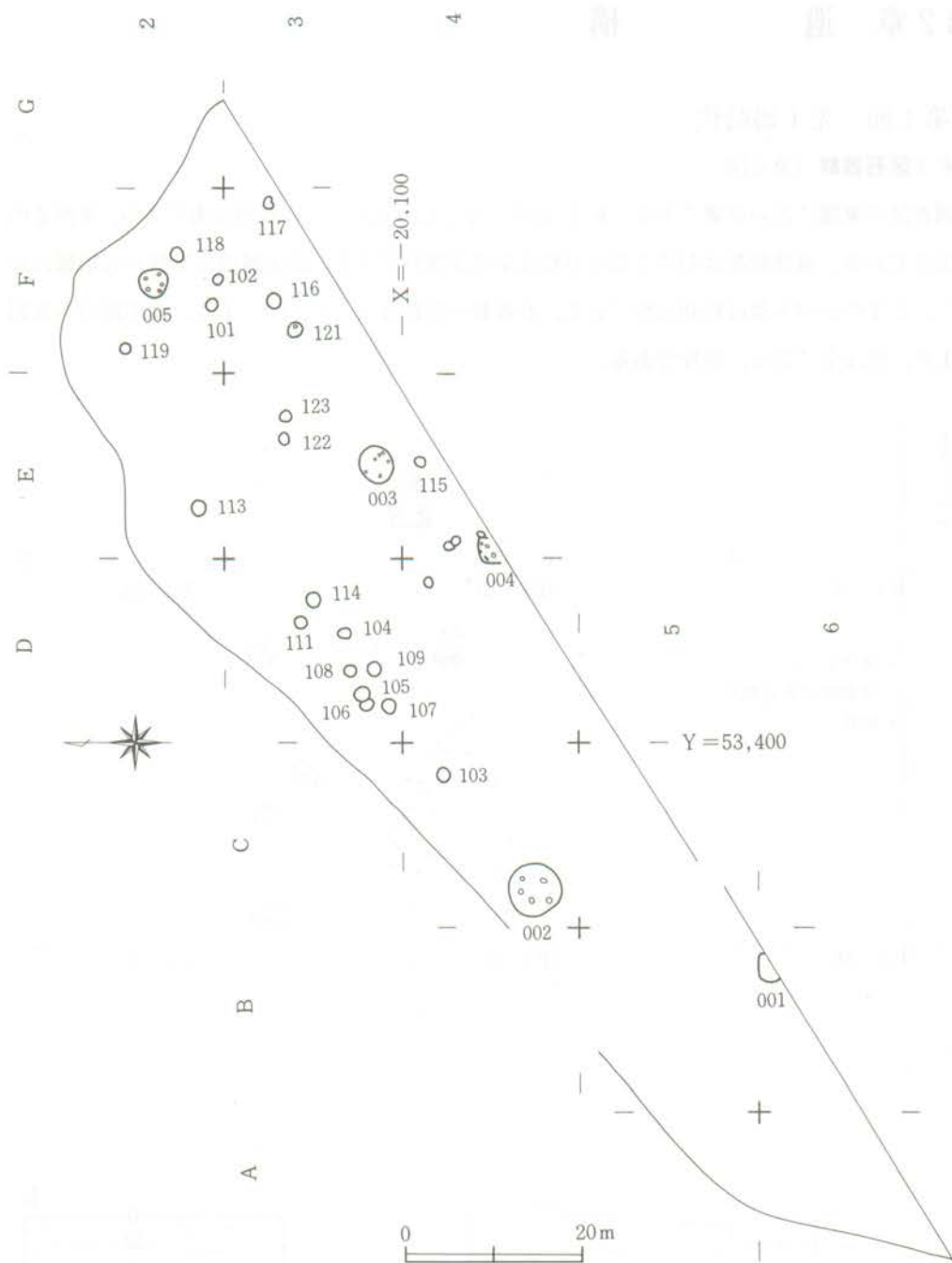


第4图 新山台遺跡地形图

第1章 調査概要

遺跡調査対象は包含地4,900㎡であった。遺物の散布状況から、当初より全面本調査を実施した。

昭和55年10月1日より調査は開始され、56年2月10日までの約4ヶ月の期間を要した。まず、遺跡全域の状態を捉えるため、全域確認調査のトレンチを設定した。10月7日より確認調査に着手し、まず表土除去作業を開始した。B5区内より単独的に石棒が出土したり、遺物の集中地点が確認された。確認地点は徐々に東側に移行し、10月いっぱい確認トレンチは調査終了した。その結果、一様に遺物包含層があり、その下に遺構の存在が予知された。出土遺物は、ほぼ縄文時代中期のみに限定された。11月にはいり、遺構の検出作業を開始した。包含層の調査では、出土遺物を1点1点その位置とレベルを記録した。11月18日より確認された遺構の調査を開始した。特に002号住居跡は出土遺物が多く、遺物の出土地点の実測、遺構の掘り下げ調査を十数度にわたって行なった。12月18日より、土壇群の調査を開始する。土壇内には、完形に近い甕形土器を埋置してある遺構もあり、調査日数を要した。併行して、先土器時代の遺物の確認作業を行ない、E3、F3区内より先土器時代のユニットも確認され、拡張作業を行なった。そして、2月10日にはすべての調査を終了した。



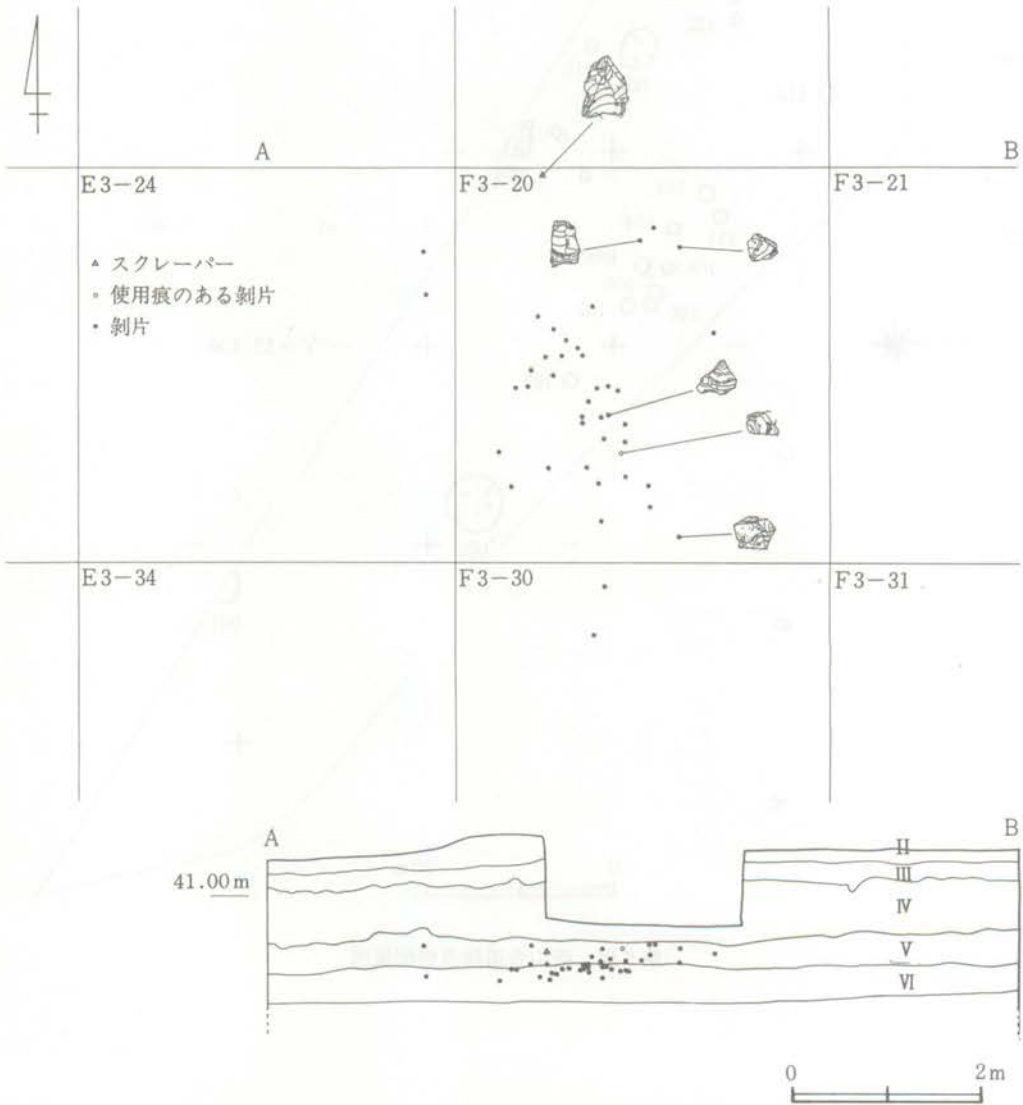
第5図 新山台遺跡遺構配置図

第2章 遺構

第1節 先土器時代

F3区石器群 (第6図)

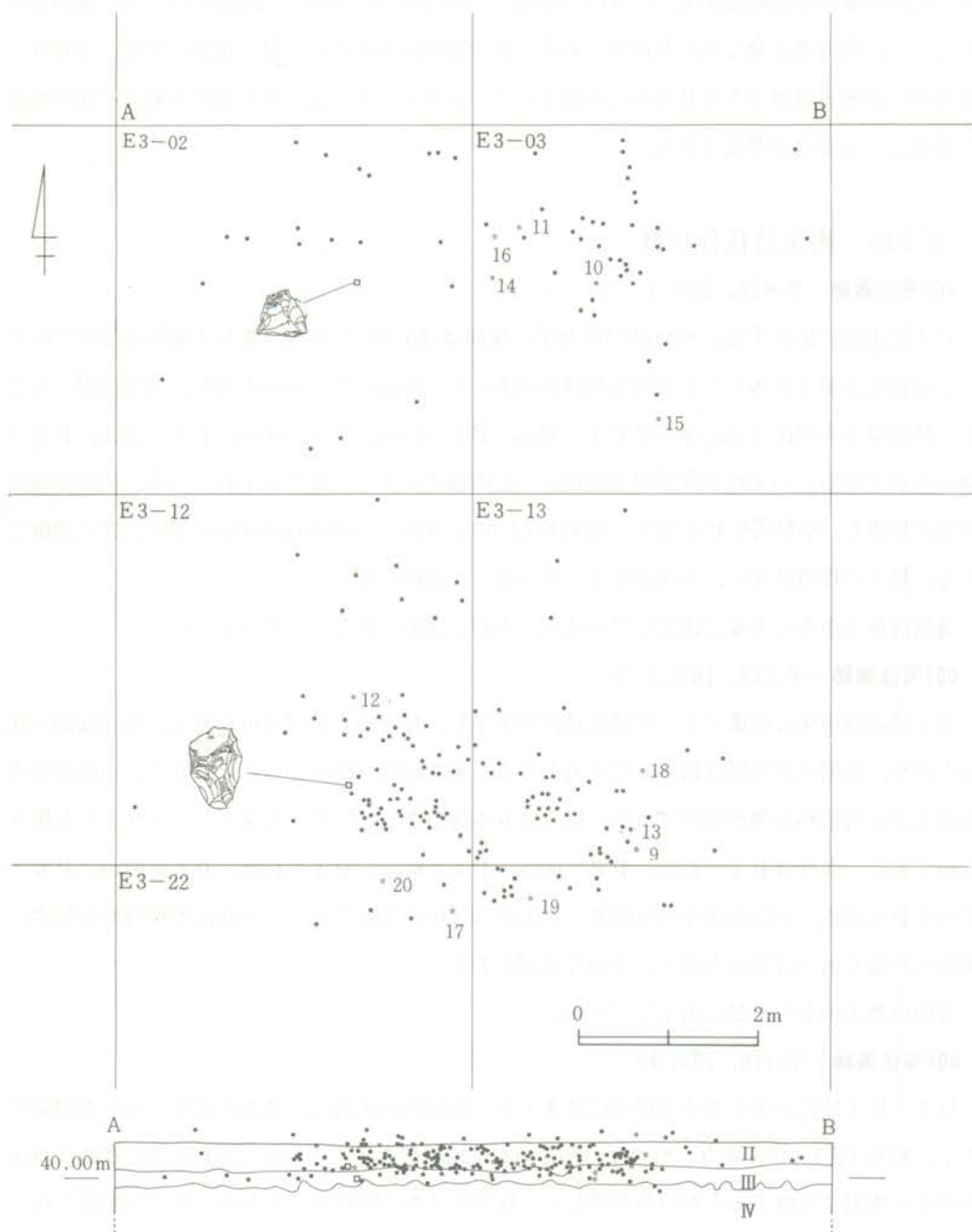
調査区の東端に近い位置である。F3-20区を中心に分布し、その範囲は南北4m、東西2mの広さである。遺物総数は43点を数え石材は全て黒曜石である。出土層位はV層からVI層にかけて、上下のレベル差は約40cm程である。石器群の内容はスクレイパー1点、使用痕のある剥片1点、他は全て剥片、碎片である。



第6図 先土器時代遺物出土状況図(1)

E 3 区石器群 (第 7 図)

調査区の東側で台地上の比較的平坦な位置である。石器群の集中は E 3-03 区と E 3-12・13 区に拡がり、北と南に 2ヶ所を認める。また両者の中間にも剥片が散在する。遺物総数は 223 点



第 7 図 先土器時代遺物出土状況図(2)

で、うち北側に64点、南側に147点を数える。石材はほとんどが黒曜石であるが南側からは砂岩の円礫2点及び安山岩の破碎礫2点も出土している。北側の遺物分布範囲は東西に6m、南北に3.5m程である。内容は石核1点、使用痕のある剥片1点、他は全て剥片ないしは碎片である。南側の遺物分布範囲は東西に5m、南北に2.5mを測る。遺物の内容は石核1点、使用痕のある剥片13点の他は全て剥片か碎片である。出土層位は両群ともにⅡ・Ⅲ層に集中しており、縄文時代遺物包含層であるⅡ層からの出土が多く認められる点は、両石器群が縄文時代の所産であることも十分に想定できる。

第2節 縄文時代住居跡

002号住居跡 (第8図, 図版1-2, 2-1)

C4区南西に位置する。形状は円形を呈し規模は径6.0mを測る。覆土は攪乱を受けていたが、暗褐色土層を主体として自然な堆積状況を示す。壁高は40~45cmを測り、床面は固くしまる。柱穴は5本検出され、深さはP1=38cm, P2=29cm, P3=86cm, P4=38cm, P5=88cmを各々測る。いずれも住居中央に向かって内傾するように掘り込まれている。炉は住居の中央に位置し、不整円形状を呈す。規模は径1.0m、床面への掘り込み50cmを測り、深く堅緻である。焼土の堆積は厚く、火床部はよく熱を受けた痕跡を残す。

遺物は覆土中から多量に出土しているが、本跡に確実に伴うものは少ない。

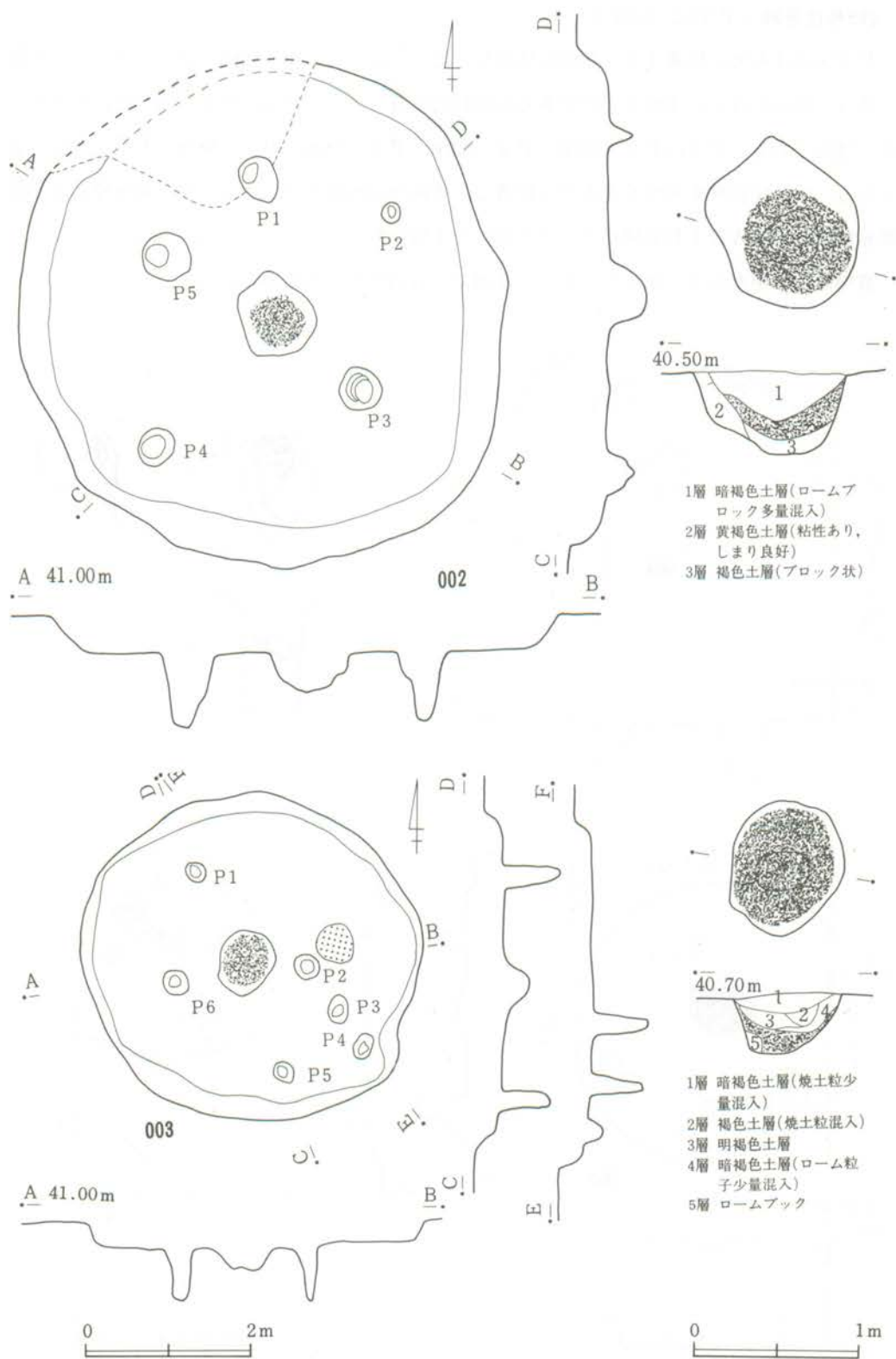
003号住居跡 (第8図, 図版2-2)

E3区南側中央に位置する。形状は楕円形を呈し、規模は4.2×4.0mを測る。壁高は25~30cmを測り、南壁及び北壁は緩やかに立ち上がる。床面は固く踏みしめられており、住居東側の床直上では白色粘土塊が検出された。柱穴は6本検出され、いずれも深くしっかりと掘り込みである。深さはP1=72cm, P2=69cm, P3=67cm, P4=17cm, P5=63cm, P6=67cmを各々測る。炉は住居中央に位置し、0.8×0.6mの規模を測る。形状は不整円形を呈す。床面への掘り込みは35cmを測り、堅緻な状況である。

遺物は覆土中から多量に出土している。

004号住居跡 (第9図, 図版3)

D4・E4地区が接する中央付近に位置する。住居の南側約 $\frac{2}{3}$ は調査区域外のため未調査である。規模は径4.6mを測り、形状は円形ないしは楕円形を呈するものと思われる。壁高は25cmを測る。床面は堅緻であるが凹凸が激しい。柱穴は3本の壁柱穴と2本の支柱穴が検出されており、支柱穴P4からは第IV群6類土器(117)1個体分が出土した。柱穴の深さはP1=25cm, P2=30cm, P3=32cm, P4=68cm, P5=78cmを各々測り、支柱穴と思われるP4, P5の掘り込みは深くしっかりと掘り込まれている。遺物は比較的少ない。

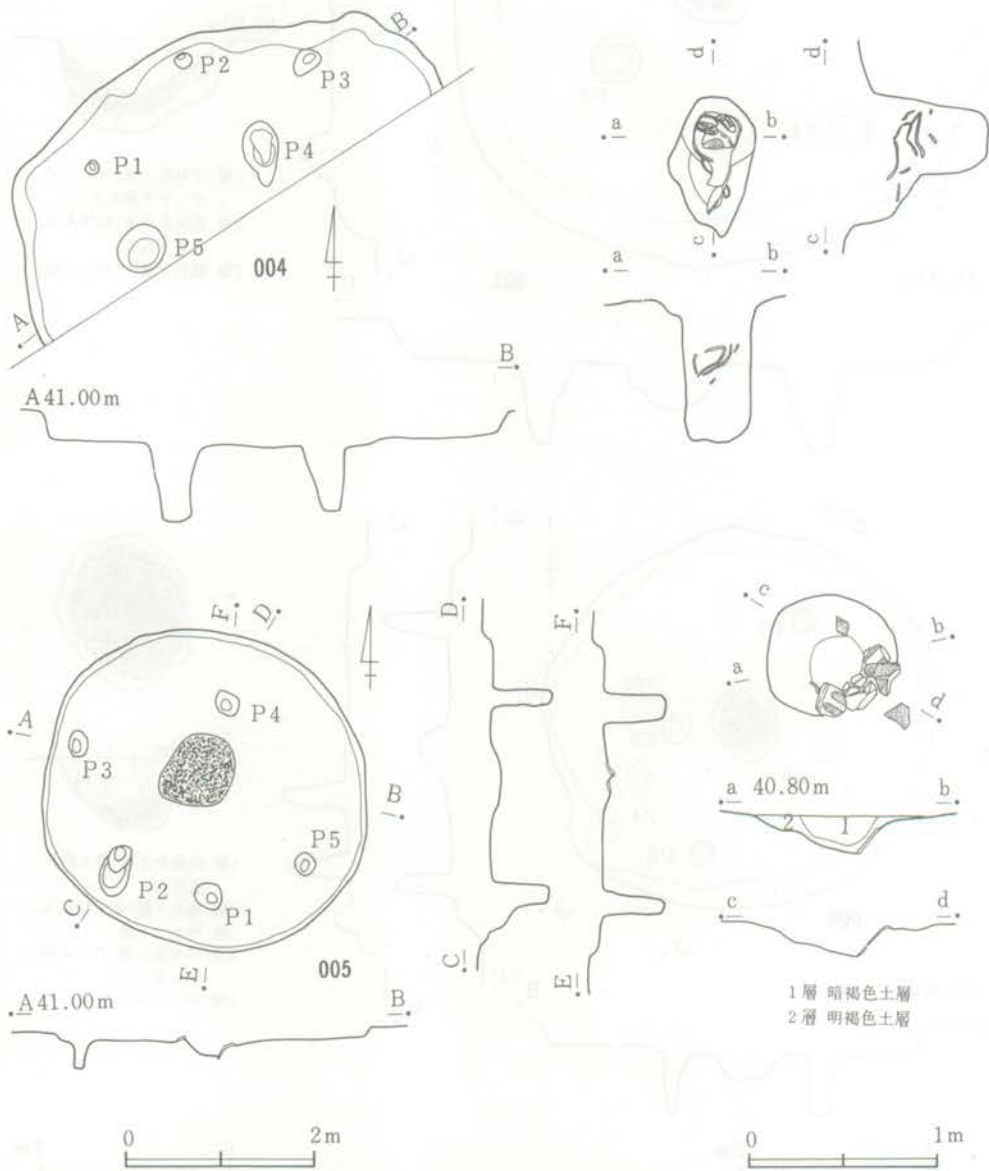


第8図 002号, 003号住居跡実測図

005号住居跡 (第9図, 図版4)

F 2区ほぼ中央に位置する。形状は楕円形に近く、3.5×3.2mの規模を測る。ロームへの掘り込みは12cmと浅い。床面は平坦であるが比較的軟質である。柱穴は5本検出され、いずれも深く堅緻である。深さはP 1=68cm, P 2=63cm, P 3=28cm, P 4=68cm, P 5=30cmを各々測る。炉は住居跡中央やや北寄りに位置し、床面へ20cm掘り込まれる。炉の南東壁には第IV群6類土器と第IV群1類異種Cとして分類した土器が敷かれたような状況で相伴している。

遺物は覆土中から多く出土しており、床面からは石皿の検出もある。



第9図 004号, 005号住居跡実測図

第3節 縄文時代土坑

101号土坑 (第10図)

F 2-41区に位置する。径1.1mを測り、円形に近い形状を呈する。掘り込みの深さは0.6mを測る。覆土は8層に分けられたが、下部ではロームブロックを多く含む層となっており、埋戻された状況を呈する。壁、坑底ともに堅緻である。遺物の出土はない。

102号土坑 (第10図)

101号土坑の東2m、F 2-42区に位置する。規模は径1.0m、深さ0.8mを測り、円形の形状を呈する。覆土は9層に分けられ、埋戻された可能性が強い。坑底は平坦で、壁はわずかに張り出しながら垂直に立ち上がる。遺物の出土はない。

103号土坑 (第10図)

C 4-13・14区に位置する。形状は円形に近く、規模は径1.1m、深さ0.6mを測る。覆土は自然な堆積状況を呈する。坑底は比較的平坦で、壁は北壁以外はやや緩やかに立ち上がる。遺物の出土は多く、第IV群土器4個体分等の遺物が出土している。

104号土坑 (第10図)

D 3-33・34区に位置する。形状は不整形円形を呈し、規模は径1.3m、深さ0.7mを測る。覆土は4層に分けられ、下層はロームブロックを多く含む層である。坑底は平坦で固くしまっている。壁は垂直に近く立ち上がる。上層付近で少量の焼土が検出されている。遺物は中層以上に多く見られた。

105号土坑 (第11図)

D 3-31・41区に位置する。106号土坑と重複しており、新旧関係は本土坑の方が新しい。形状は不整形円形を呈し、規模は開口部で径1.5m、底部では径1.3mを測る。断面形は逆台形状を呈し、深さは0.5mを測る。覆土は自然な堆積状況を呈している。坑底は固くしまり平坦である。遺物は第IV群土器が少量出土している。

106号土坑 (第11図)

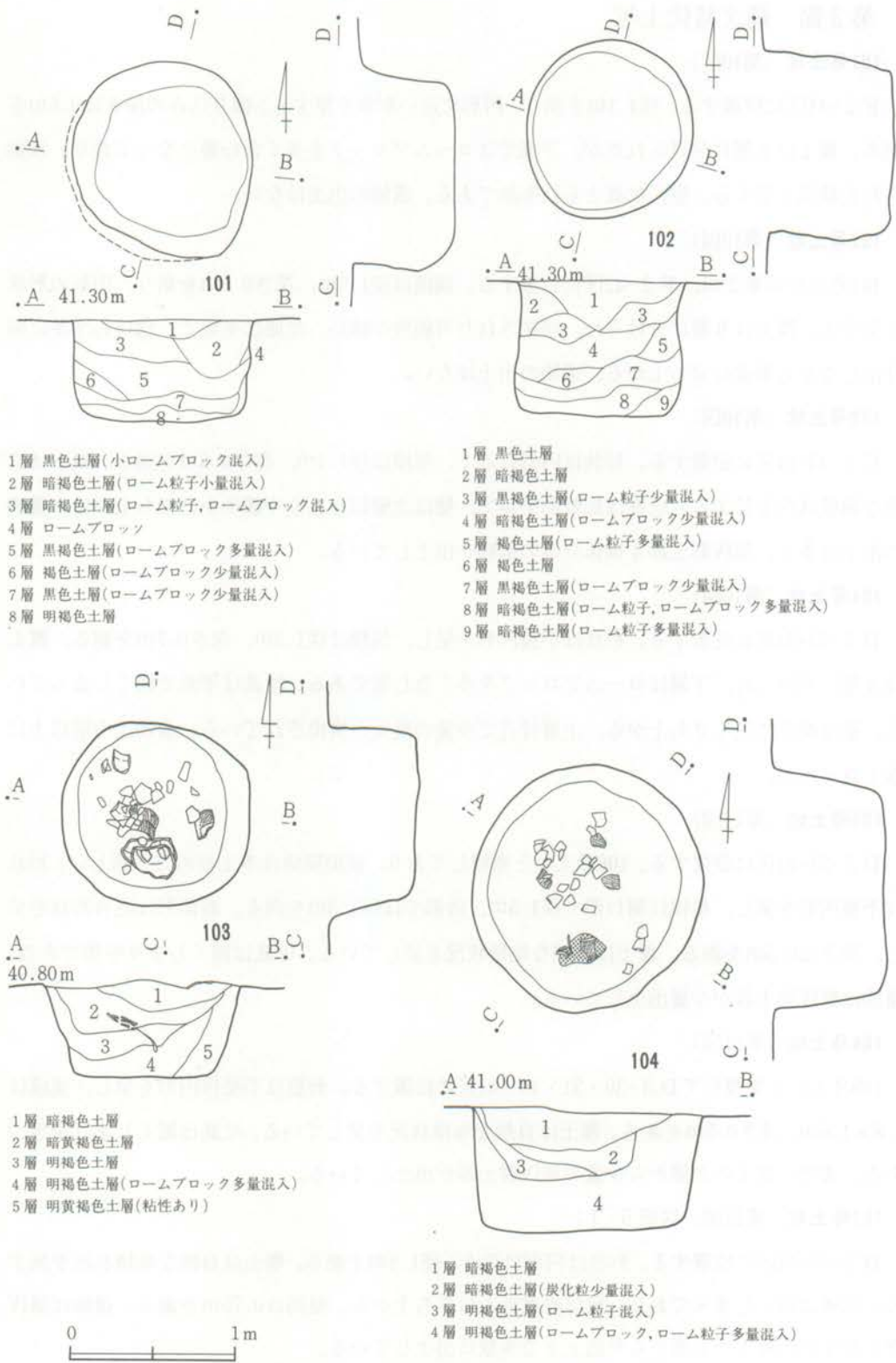
105号土坑と重複してD 3-30・31・40・41区に位置する。形態は不整形楕円形を呈し、規模は1.8×1.6m、深さ0.5mを測る。覆土は自然な堆積状況を呈している。坑底は固くしまり平坦である。遺物は覆土の上層から少量の第IV群土器が出土している。

107号土坑 (第11図、図版5-1)

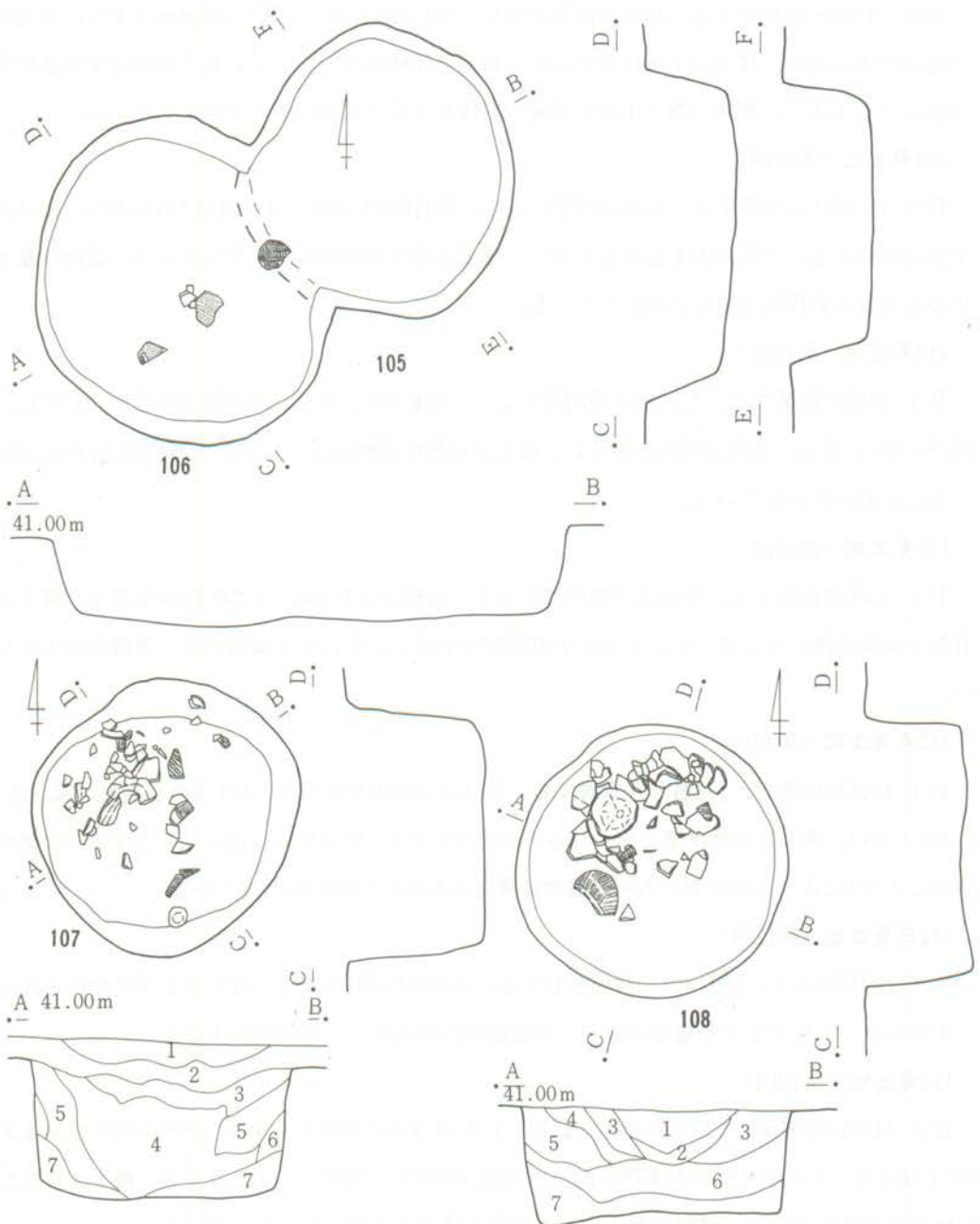
D 3-40・41区に位置する。形状は円形に近く、径1.5mを測る。覆土は自然な堆積状況を呈する。坑底は固くしまっており、壁は垂直近くに立ち上がる。壁高は0.75mを測る。遺物は第IV群土器片が、覆土の上層から坑底上まで多量に出土している。

108号土坑 (第11図、図版5-2)

新山台遺跡 (No.15)



第10図 101号,102号,103号,104号土坑実測図



- 1層 黑色土層
- 2層 明褐色土層(ローム粒子混入)
- 3層 暗褐色土層
- 4層 黑色土層
- 5層 軟質明褐色土層
- 6層 暗褐色土層
- 7層 褐色土層

- 1層 褐色土層
- 2層 明褐色土層(若干粘質)
- 3層 暗褐色土層
- 4層 明褐色土層(ローム粒子混入)
- 5層 明褐色土層
- 6層 黑褐色土層(ローム粒子, 炭化粒少量混入)
- 7層 軟質暗褐色土層



第11図 105号, 106号, 107号, 108号土坑実測図

新山台遺跡 (No15)

D 3-31・32区に位置する。形状は円形を呈し、径1.5mを測る。深さは0.6mを測り、断面形は逆台形状に近い。覆土は7層に分けられ、自然な堆積状況を呈している。坩底は中央部が周辺部より若干高い。遺物は覆土中から多量の第IV群土器と土製円盤等が出土している。

109号土坑 (第12図)

D 3-41・42区に位置する。形状は円形に近く、径1.6mを測る。深さは0.4mを測り、壁はわずかに傾斜する。坩底は南東部が若干高い。覆土は自然な堆積状況を呈している。遺物は覆土中から少量の第IV群土器片が出土している。

110号土坑 (第12図)

D 4-04区に位置する。形状は不整円形を呈し、径1.2mを測る。断面形は逆台形状を呈し、深さ0.5mを測る。坩底は凹凸が著しい。覆土は自然な堆積状況を呈す。土器の出土はないが、坩底に砂岩が置かれている。

111号土坑 (第12図)

D 3-33区に位置する。形状は不整円形を呈す。規模は径1.2m、深さ0.45mを測る。覆土は自然な堆積状況を呈している。坩底は中央部がやや低く、壁はやや傾斜する。遺物の出土はない。

112A号土坑 (第12図)

E 4-10区に位置し、112B号と重複する。形状は不整円形を呈し、径1.3mを測る。深さは1.1mと深い。覆土は自然堆積と思われる。坩底は平坦で、壁は垂直に近く立ち上がる。土層の観察により112A号土坑の方が古い。遺物は縄文式土器片が数点出土している。

112B号土坑 (第12図)

形状は円形に近く、径1.4mの規模を有する。深さは0.5mを測る。覆土は2層に分けられ、いずれもローム粒子を含む層から成る。坩底は凹凸が激しい。遺物の出土はない。

113号土坑 (第12図)

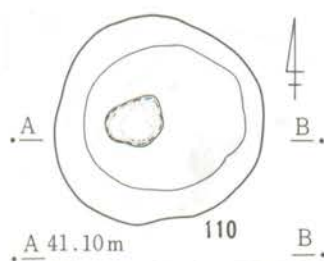
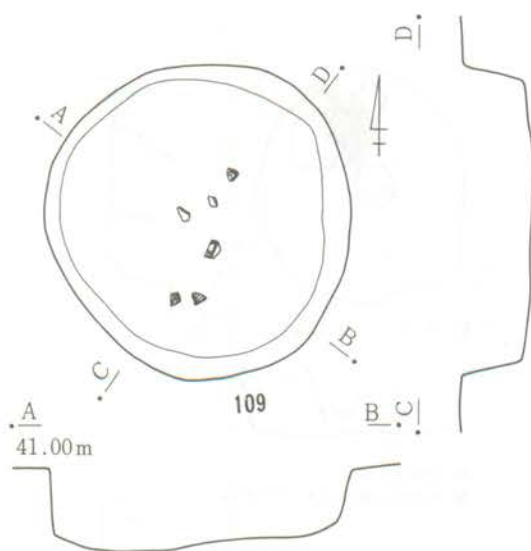
E 2-41区に位置する。形状は楕円形に近く1.9×1.8mの規模を有する。南壁を除く壁高は0.4mを測るが、土坑中央部から南壁に向かい坩底は緩やかに傾斜して立ち上がる。覆土は自然な堆積状況を呈している。遺物は覆土中から少量の縄文式土器片が出土している。

114号土坑 (第13図)

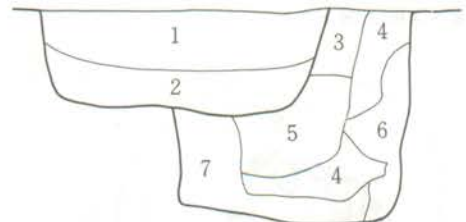
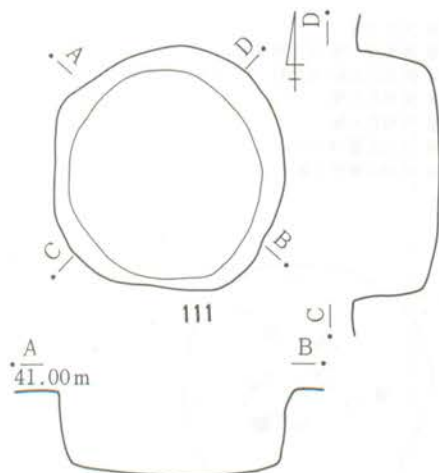
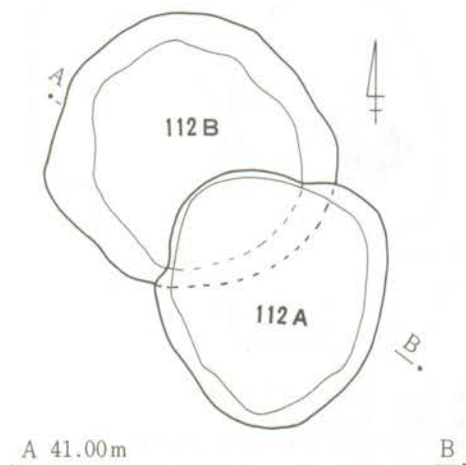
D 3-23・24区に位置する。形態はほぼ円形を呈し、径1.6mを測る。深さは0.55mを測り、断面形は逆台形状に近い。覆土は7層に分けられ、レンズ状に堆積する。坩底は平坦で、壁もしっかりとしている。遺物は覆土中から第IV群土器が出土している。

115号土坑 (第13図、図版6-1)

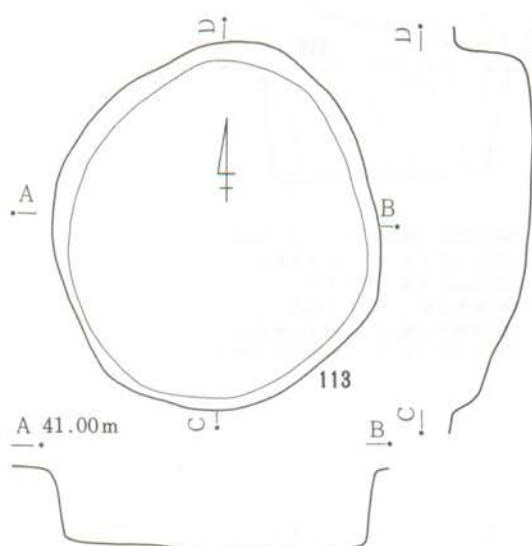
E 4-02区に位置する。形状は不整円形を呈し、規模は径1.1mを測る。断面形は逆台形状に



- 1層 黑色土層
- 2層 暗褐色土層
- 3層 軟質褐色土層
- 4層 明褐色土層(ローム粒子混入)
- 5層 暗褐色土層

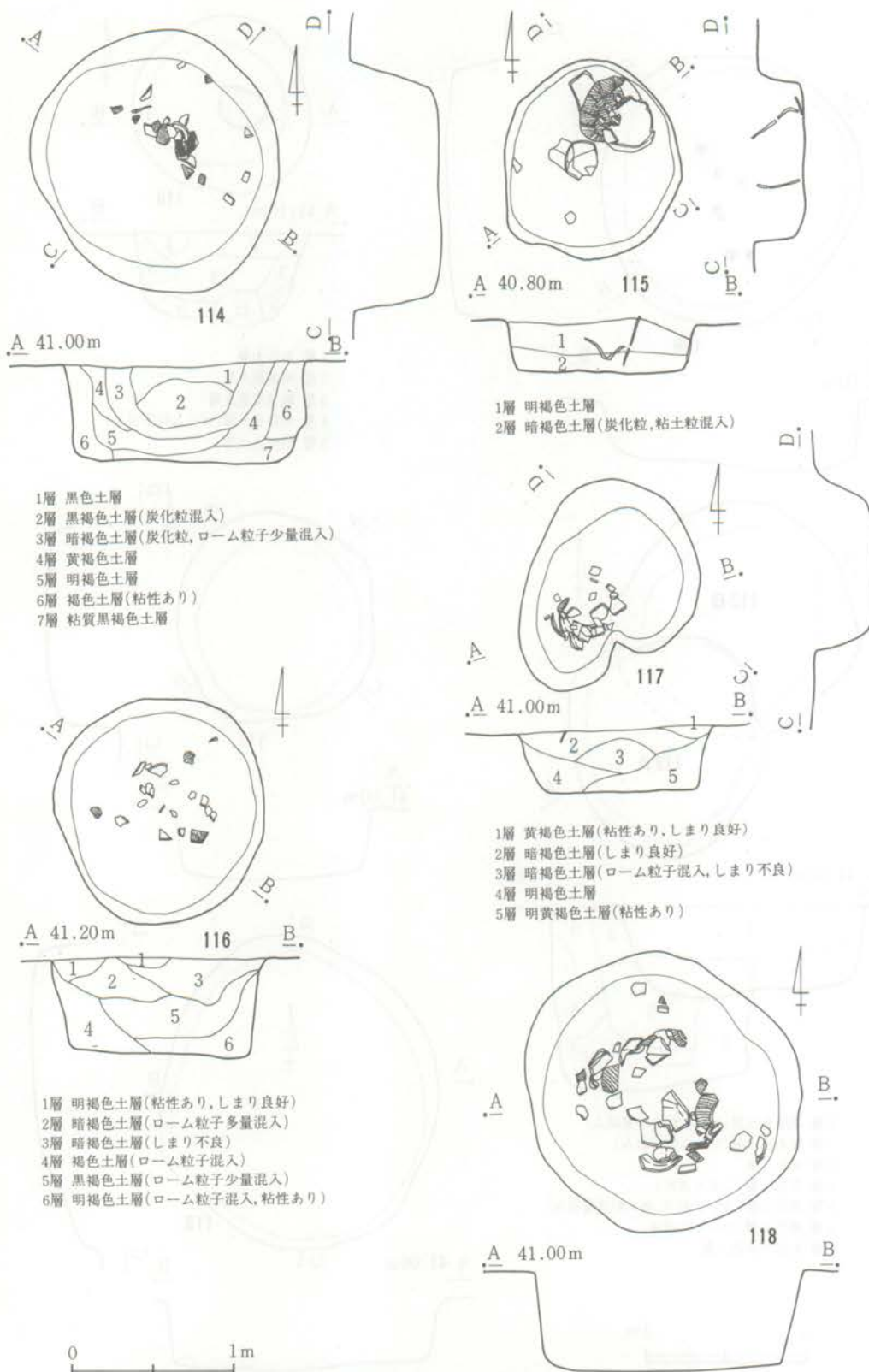


- 1層 明褐色土層(ローム粒子少量混入)
- 2層 暗褐色土層(ローム粒子混入)
- 3層 褐色土層
- 4層 黑色土層(しまり良好)
- 5層 黑色土層(ローム粒子, 焼土粒少量混入)
- 6層 褐色土層(ロームの崩落)
- 7層 粘質淡褐色土層



第12図 109号, 110号, 111号, 112A・B号, 113号土坑実測図

新山台遺跡 (No.15)



- 1層 黒色土層
- 2層 黒褐色土層(炭化粒混入)
- 3層 暗褐色土層(炭化粒, ローム粒子少量混入)
- 4層 黄褐色土層
- 5層 明褐色土層
- 6層 褐色土層(粘性あり)
- 7層 粘質黒褐色土層

- 1層 明褐色土層
- 2層 暗褐色土層(炭化粒, 粘土粒混入)

- 1層 黄褐色土層(粘性あり, しまり良好)
- 2層 暗褐色土層(しまり良好)
- 3層 暗褐色土層(ローム粒子混入, しまり不良)
- 4層 明褐色土層
- 5層 明黄褐色土層(粘性あり)

- 1層 明褐色土層(粘性あり, しまり良好)
- 2層 暗褐色土層(ローム粒子多量混入)
- 3層 暗褐色土層(しまり不良)
- 4層 褐色土層(ローム粒子混入)
- 5層 黒褐色土層(ローム粒子少量混入)
- 6層 明褐色土層(ローム粒子混入, 粘性あり)

第13図 114号, 115号, 116号, 117号, 118号土坑実測図

近く、深さは0.3mと浅い。覆土は2層に分けられ、自然な堆積状況を呈す。坩底はわずかに凹凸を有するが堅緻である。遺物は第IV群1類土器が3個体出土しており、うち1点は坩底上に倒置された状態で検出されている。

116号土坑 (第13図)

F 3-11・12区に位置する。形状は円形に近く、径1.3mを測る。深さは0.55mを測り、壁、坩底ともに堅緻である。覆土は6層に分けられ、下部ではローム粒子を含む層が主体となる。坩底は平坦で、断面形は逆台形状を呈する。遺物は覆土中から多量の縄文式土器片が出土している。

117号土坑 (第13図)

F 3-14区に位置する。形状は不整形で、南側は内側に入り込む。規模は1.3×1.0m、深さ0.35mを測る。断面形は逆台形状を呈する。覆土は5層に分けられ、自然な堆積状況を呈す。坩底は平坦で、壁もしっかりと立ち上がる。遺物は、覆土の中層以上に多量の縄文式土器片の出土を見た。

118号土坑 (第13図、図版6-2)

F 2-33区に位置する。形状は不整楕円形を呈し、規模は1.8×1.6m、深さ0.6mを測る。断面形は逆台形状を呈し、覆土は、最下層にロームブロックを多量に含む明褐色土層が認められた他は、自然な堆積状況を呈している。坩底は比較的平坦である。遺物は、覆土の中層以上から多量の第IV群土器が出土している。

119号土坑 (第14図)

F 2-20区に位置する。形状は円形を呈し、径1.4m、深さ0.2mの規模を有する。掘り込みは浅く、覆土はロームブロックを混入する褐色土層の単一層であった。坩底は平坦である。遺物は覆土中から少量の縄文式土器片が出土している。

120号土坑 (第14図)

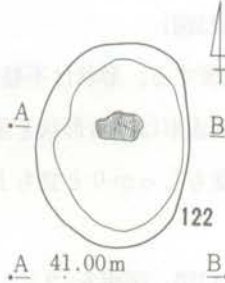
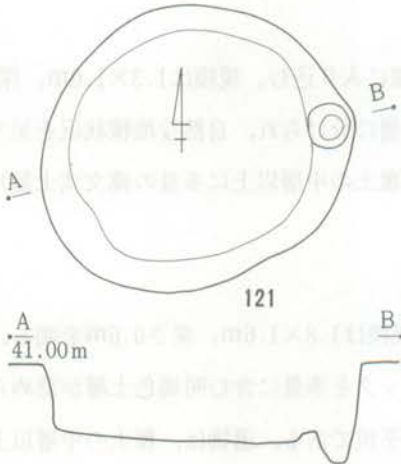
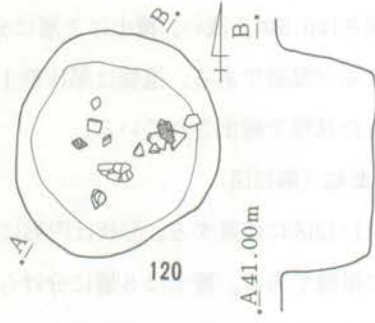
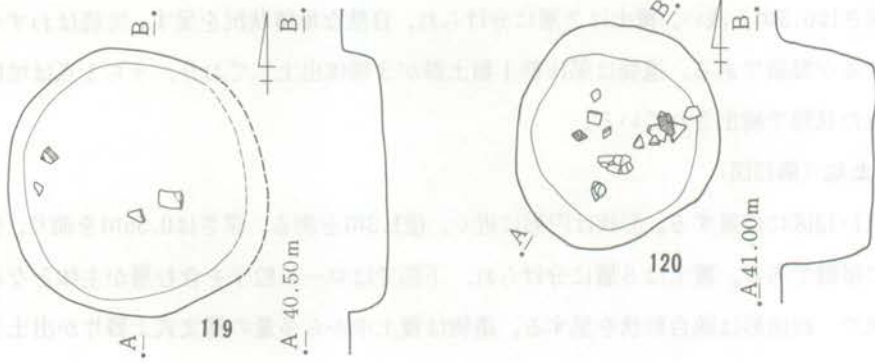
E 4-21区に位置する。形状は不整楕円形を呈し、規模は1.2×1.1mを測る。深さは0.5mを測り、断面形は逆台形状を呈する。覆土は最下層に多量のロームブロックを含む層を認めるが、中層以上は自然な堆積状況を呈している。坩底は平坦であるが、壁面は凹凸が著しい。遺物は覆土中から第IV群土器片が出土している。

121号土坑 (第14図)

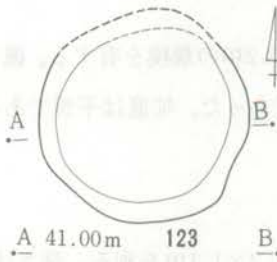
F 3-11・21区に位置する。形状は楕円形を呈し、1.7×1.4m、深さ0.4mを測る規模を有する。坩底は平坦であるが、中央付近はやや窪む。東側壁直下に径20cm、坩底からの深さ15cmを測るピットを有する。遺物の出土はなかった。

122号土坑 (第14図)

新山台遺跡 (No.15)



- 1層 暗褐色土層
- 2層 褐色土層(ローム粒子少量混入)
- 3層 褐色土層(ローム粒子多量混入)
- 4層 明褐色土層



- 1層 黒色土層
- 2層 暗褐色土層(ローム粒子少量混入)
- 3層 褐色土層
- 4層 暗褐色土層(ローム粒子少量混入)
- 5層 褐色土層(ローム粒子多量混入)

第14図 119号, 120号, 121号, 122号, 123号土坑実測図

E 3-13区に位置する。形状は楕円形を呈し、規模は1.4×0.8mを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がり、壁高は0.3mである。覆土は4層に分けられ、自然な堆積状況である。覆土上面から縄文式土器片が1点出土している。

123号土壇 (第14図)

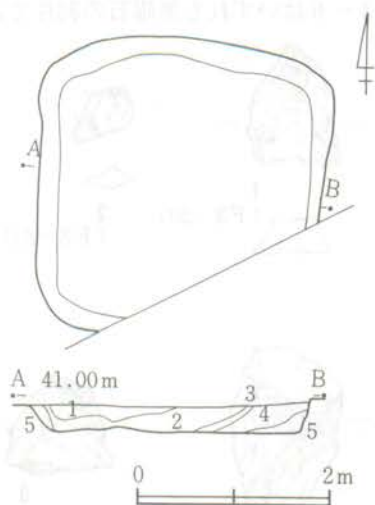
E 3-13区に位置する。形状は円形を呈し、径1.1m、深さ0.35mの規模を有する。覆土は自然堆積である。断面形は逆台形状であるが壇底の中央は窪んでいる。遺物の出土はない。

第4節 歴史時代の住居跡

001号住居跡 (第15図, 図版7-1)

調査区の南西端に近いB 6区に位置する。南東コーナー一部と南壁の大部分は調査区域外にあるが、平面形は方形を呈し、3×3mの規模を測る。ロームへの掘り込みは0.3mで、覆土の堆積は自然な状況を呈す。床面はやや軟質であり、周溝、柱穴等は検出されなかった。

遺物の出土は少ない。覆土中から坏底部、須恵器の瓶底部等が出土しており、当住居跡は歴史時代国分期の所産であると思われる。



- 1層 黒色土層(ローム粒子少量混入)
- 2層 黒褐色土層(ローム粒子多量混入)
- 3層 褐色土層
- 4層 暗褐色土層(ローム粒子多量混入)
- 5層 暗褐色土層(ローム粒子少量混入)

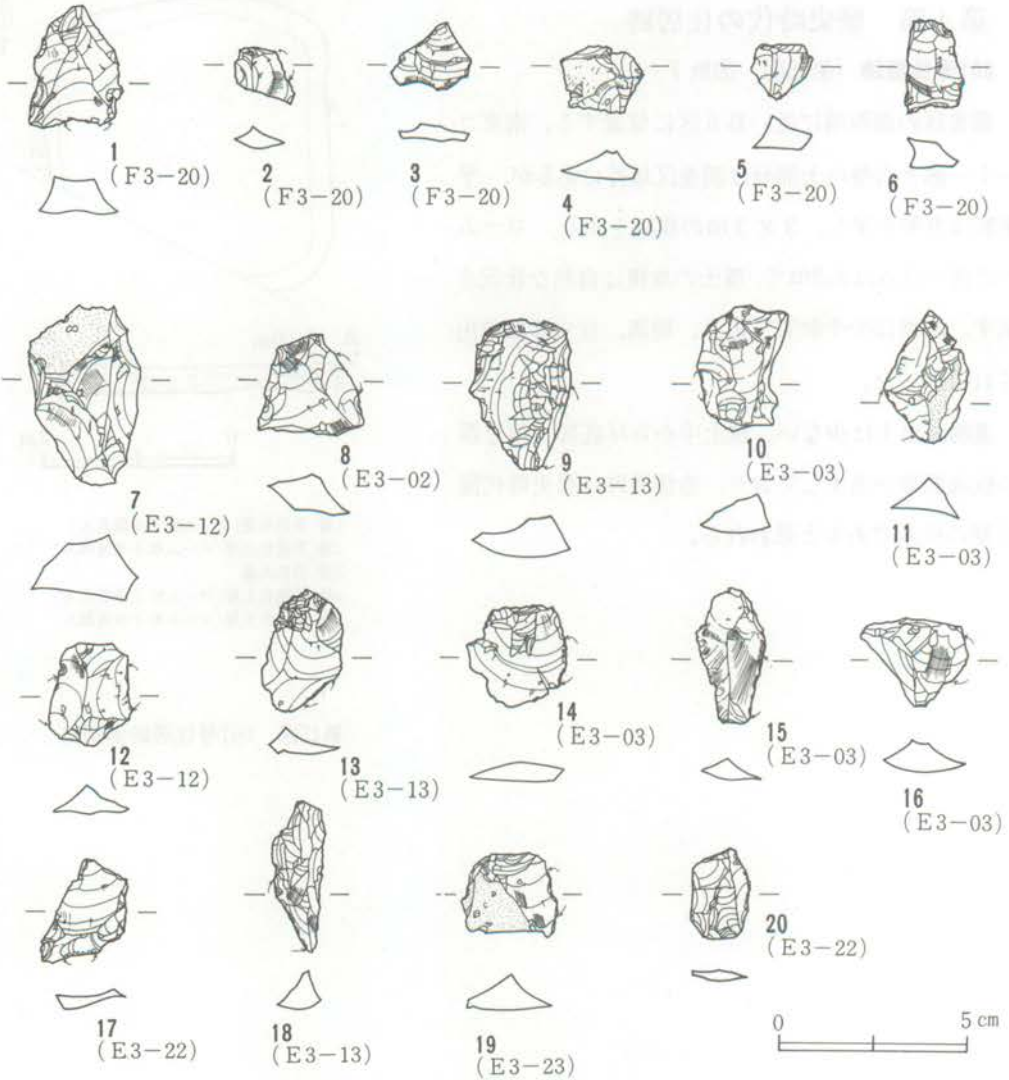
第15図 001号住居跡実測図

第3章 遺物

第1節 先土器時代遺物

F3区出土石器 (第16図1~6, 図版8)

1はエンドスクレイパーで刃部は弧状を呈する。刃部の調整は第一次剝離面である裏面から施されている。2は表面側縁の一部に使用痕のある剝片で、下端部は欠損したものである。3~6はいずれも黒曜石の剝片である。



第16図 先土器時代遺物実測図

E 3 区出土石器（第16図 7～20，図版 8）

7，8は石核である。いずれも剥離面は大きく粗い。8の側縁の一部には使用痕が認められる。9～19は使用痕のある剥片である。形状的には様々で統一性がない。20は縁辺に細かなリタッチの施された剥片で形状的に石鏃未製品の可能性もある。II層上面からの出土である。

第1表 先土器時代石器計測表

挿図 番号	遺物番号	器種	計測値 (mm)			重量(g)	石質
			長さ	幅	厚		
1	F 3-20, 0001	エンドスクレイパー	29.2	22.3	9.3	5.95	黒曜石
2	F 3-20, 0008	使用痕のある剥片	10.9	13.8	6.9	0.95	黒曜石
3	F 3-20, 0007	剥片	16.1	20.3	3.2	1.17	黒曜石
4	F 3-20, 0013	剥片	16.3	22.2	7.2	2.15	黒曜石
5	F 3-20, 0003	剥片	13.9	15.2	8.3	1.52	黒曜石
6	F 3-20, 0004	剥片	23.1	15.0	6.9	2.79	黒曜石
7	E 3-20, 0080	石核	44.3	28.2	15.8	18.86	黒曜石
8	E 3-02, 0015	石核	24.9	27.3	9.7	5.73	黒曜石
9	E 3-13, 0030	使用痕のある剥片	37.2	26.6	9.7	8.32	黒曜石
10	E 3-03, 0040	使用痕のある剥片	30.0	19.8	9.5	5.85	黒曜石
11	E 3-03, 0035	使用痕のある剥片	33.1	21.4	8.1	5.37	黒曜石
12	E 3-12, 0015	使用痕のある剥片	25.2	21.3	7.0	4.36	黒曜石
13	E 3-13, 0028	使用痕のある剥片	30.8	19.3	6.0	4.41	黒曜石
14	E 3-03, 0029	使用痕のある剥片	25.0	26.6	4.8	4.68	黒曜石
15	E 3-03, 0017	使用痕のある剥片	33.8	17.9	5.4	4.85	黒曜石
16	E 3-03, 0038	使用痕のある剥片	21.8	27.1	7.8	5.82	黒曜石
17	E 3-22, 0006	使用痕のある剥片	24.1	19.5	3.0	3.96	黒曜石
18	E 3-13, 0032	使用痕のある剥片	38.3	13.2	9.6	3.77	黒曜石
19	E 3-23, 0010	使用痕のある剥片	20.0	25.9	9.2	4.67	黒曜石
20	E 3-22, 0001	リタッチドフレイク	22.9	15.0	2.8	1.34	チャート

第2節 縄文時代住居跡出土遺物

○土器

当遺跡においては住居跡の覆土中からも多量の縄文式土器が検出されている。大形土器片が多く、復元したものや底部を含めると、実測可能だった土器は56点を数える。ここではこれらの土器をI～IV群に分類（グリット出土土器の分類を参照）し、これをもとに各住居跡毎に再

分類することにした。中にはグリット出土土器の分類中に収めきれないものが存在したが、分類の混同等の煩雑さを防ぐため異種として取り扱った。

002号住居跡

第IV群第1類異種A (第17図1, 2)

胴部に磨消縄文帯を有し、口縁部に円形刺突文が巡る土器である。1は逆U字状の沈線区画内に磨消が行なわれる。推定口径35cmを測り縄文はRLである。2は波状口縁を呈し、曲線的な磨消縄文帯を有する。縄文はRLである。

第1類 (第17図4~7・第21図34~39, 図版9)

胴部に磨消縄文帯を有する土器である。4は緩い波状口縁を呈し、磨消縄文帯を区画した沈線は派生して口縁部に巡り、一方は蕨状に表現される。5は3条及び4条の沈線を一単位とした磨消縄文帯によりH字状を主体とした文様構成となる。4, 5ともに縄文はRLで口唇部直下は横方向、以下は縦方向に施されることで羽状縄文を呈する。

第1類異種B (第17図8, 第21図40, 41)

沈線文だけで文様描出されるものである。8は地文にRL縄文が施され、横位の沈線文を主体とした文様構成をとる。口縁部は波状を呈する。40は3本の沈線が垂下する胴部破片である。

第2類 (第17図9~12, 第18図13~15, 第21図42~45, 第22図46~53, 図版9)

口縁部に横位一条の沈線を巡らせ、口縁部に無文帯を有する土器である。9の口縁部は緩く内湾する器形を呈する。縄文はRLで、胴部は縦位に、口縁部は横位に施される。52, 53は口縁部に施される沈線の幅は広く、ほとんど口唇部直下といえる位置に施されている。本類土器に施される縄文原体は圧倒的にRLが多く8割近くを占める。

第3類 (第19図16~18, 第22図57~62, 図版9)

条線文が施される土器である。16~18は櫛歯状工具を用い、比較的細い条線で円を描く。16の器形は鉢形を呈し、口縁部は強く内湾する。口縁部に沈線区画された無文帯を有する点は2類土器と共通する。17は口唇部に刻目を有する。口唇部の沈線区画は持たず、口唇部付近は横ナデにより地文を磨消している。57は底部付近の胴部破片で胴部には縄文も併用される。59は直線的な条線文を有し、口縁部は区画線を持たずに無文帯を形成する。

第3類異種 (第22図63, 64)

竹管状工具によりコンパス文が施される土器である。

第4類 (第22図54)

口縁部に区画沈線を持たずに口縁部無文帯を作り出すものである。54に施される縄文はLRである。

第5類異種 (第17図3)

微隆起線によって区画された口縁部無文帯内に刺突文を有する土器である。3は口縁部無文帯内に2段の刺突文が巡る。

第6類 (第20図, 第22図65~68, 第23図69~77, 図版9)

微隆起線により文様描出の行なわれる土器である。19は口径50cmを測り、波状口縁を呈する大形の土器である。微隆起線により楕円形の杵状文を描出する。縄文はRLである。20, 21, 68は口縁部に一条の微隆起線を巡らせ、胴部に微隆起線を懸垂させることでT字状の文様構成となる。いずれも口縁部は内湾し、頸部のくびれる器形を呈する。施文される縄文は全てRLである。23は推定口径26.8cmを測り、渦巻文を主体とした文様構成をとる。

第7類 (第22図55, 56)

全面に縄文の施される土器である。55はLR, 56はRL縄文が回転施文されている。

003号住居跡

第IV群第1類異種A (第23図78, 79)

78は口唇部直下に一条の沈線を巡らし、以下は2段の円形刺突文が巡る。文様は沈線により区画された磨消縄文帯が向かい合う形をとる。縄文は縦方向に転がされたRLである。79は波状口縁を呈し、口縁の波形に沿って口縁部無文帯と刺突文列を有する。文様は逆U字状の沈線によって区画された磨消縄文帯により描出される。

第1類 (第23図80, 81, 第26図103, 104)

80は波状口縁を呈する。器形は口縁部が緩く内湾し、頸部のくびれは弱い。磨消縄文帯により描出される文様は逆U字状を呈する。縄文はRLである。104の口縁部は区画線を持たずに無文部を作り出しており、4類土器的である。

第2類 (第23図82, 第24図83~87, 第26図105)

83は口縁部がわずかに内湾し、以下は直線的にすばまる器形を呈する深鉢形土器である。縄文はRL縄文が横方向に回転施文される。84は口縁部が開く器形を呈する。105は口唇部直下に沈線文を巡らす。器形は口縁部がわずかに内湾し、頸部を有する深鉢形土器である。

第4類 (第24図88, 89, 第26図106~110)

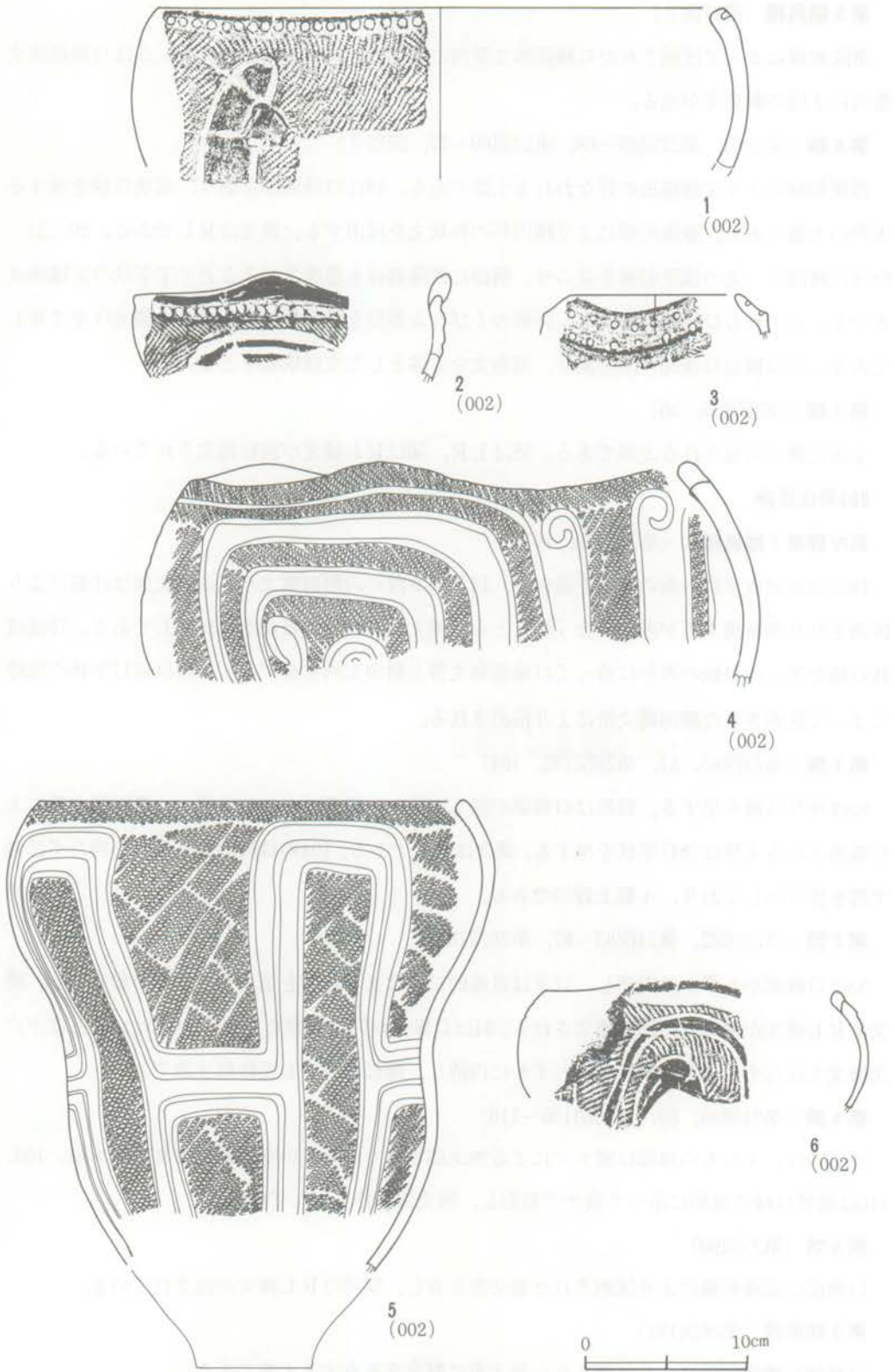
88, 89はいずれも口縁部は横ナデによる無文部を作り出している。縄文はRLである。109, 110は波状口縁の波形に沿って横ナデ整形し、無文部を作り出している。

第5類 (第25図90)

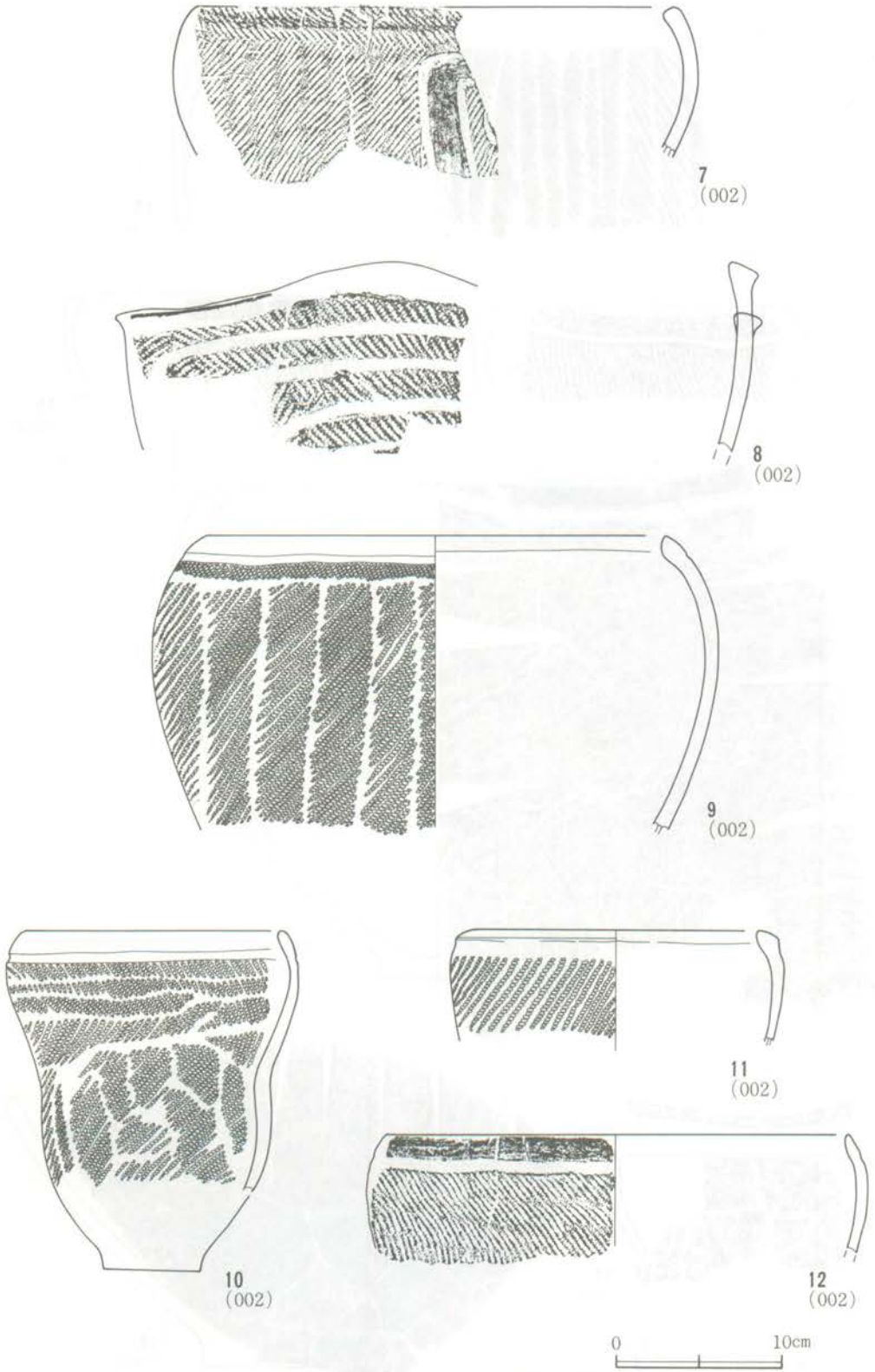
口縁部に微隆起線により区画された無文帯を有し、胴部はRL縄文が施されている。

第5類異種 (第26図102)

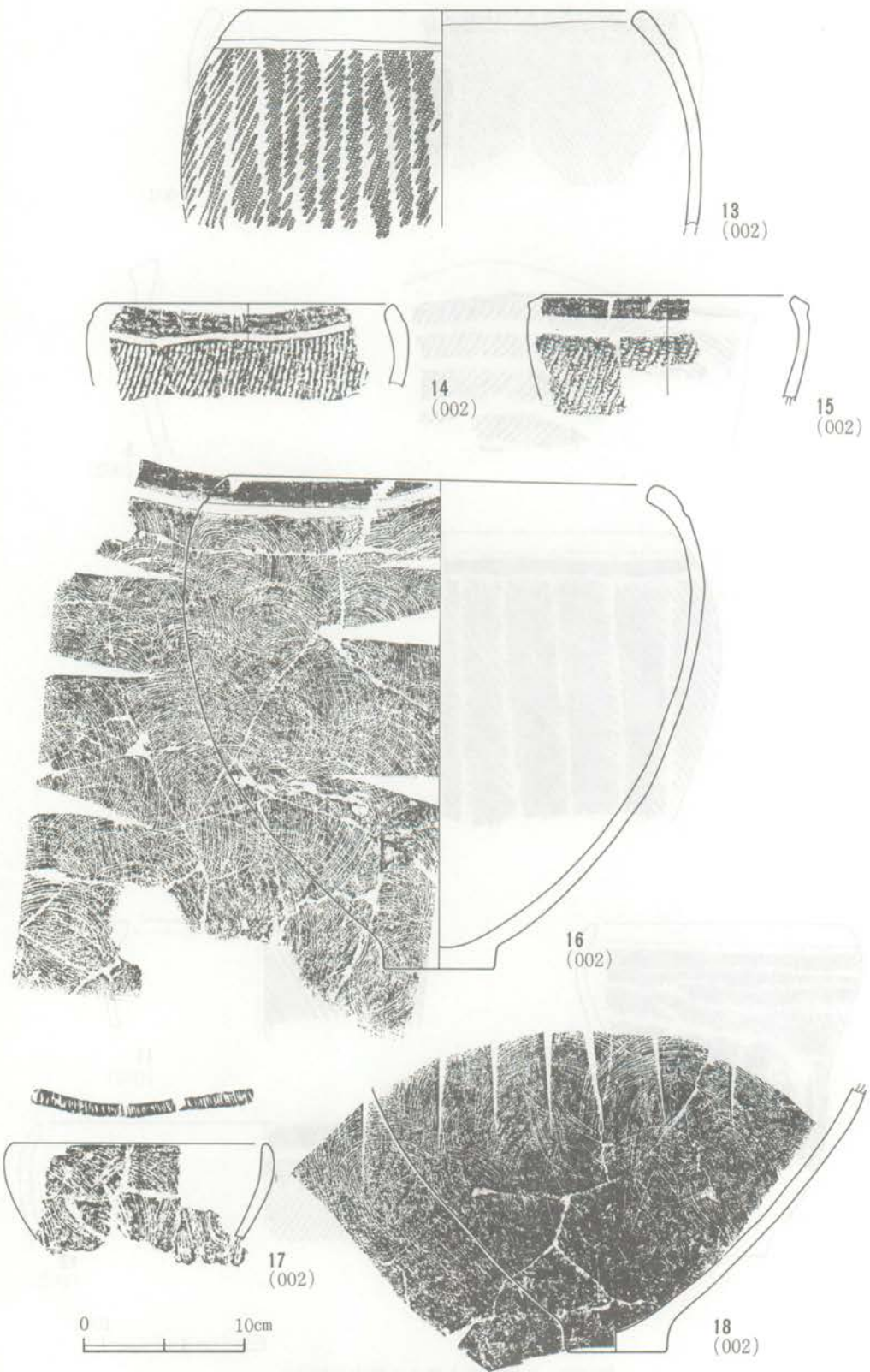
口縁部に微隆起線により区画された無文帯に刺突文を有する土器である。



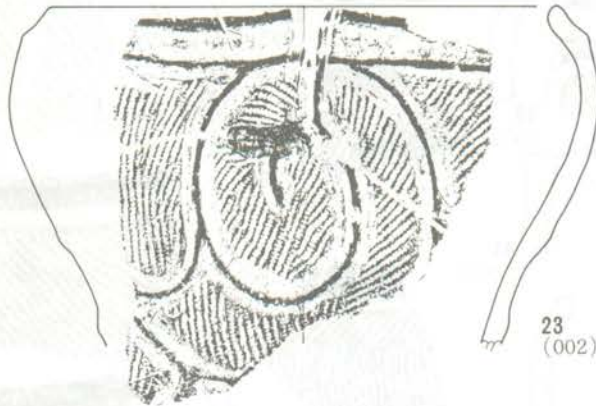
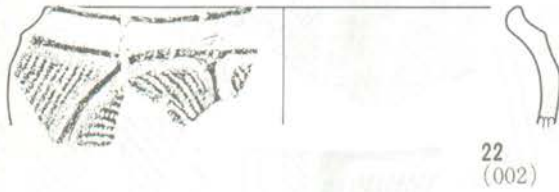
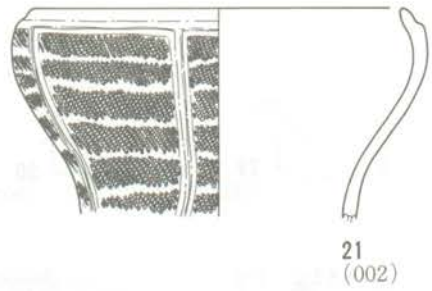
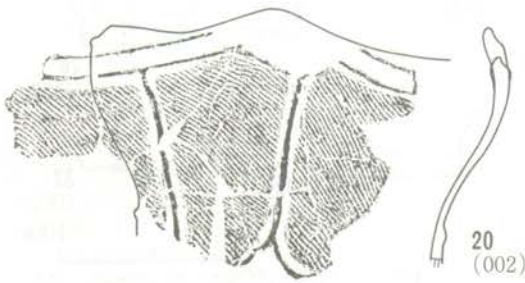
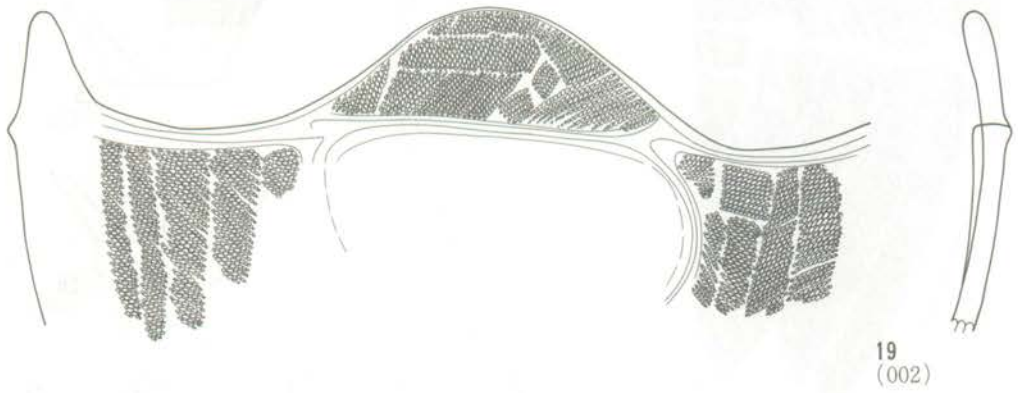
第17図 住居跡出土縄文土器実測図 (1)



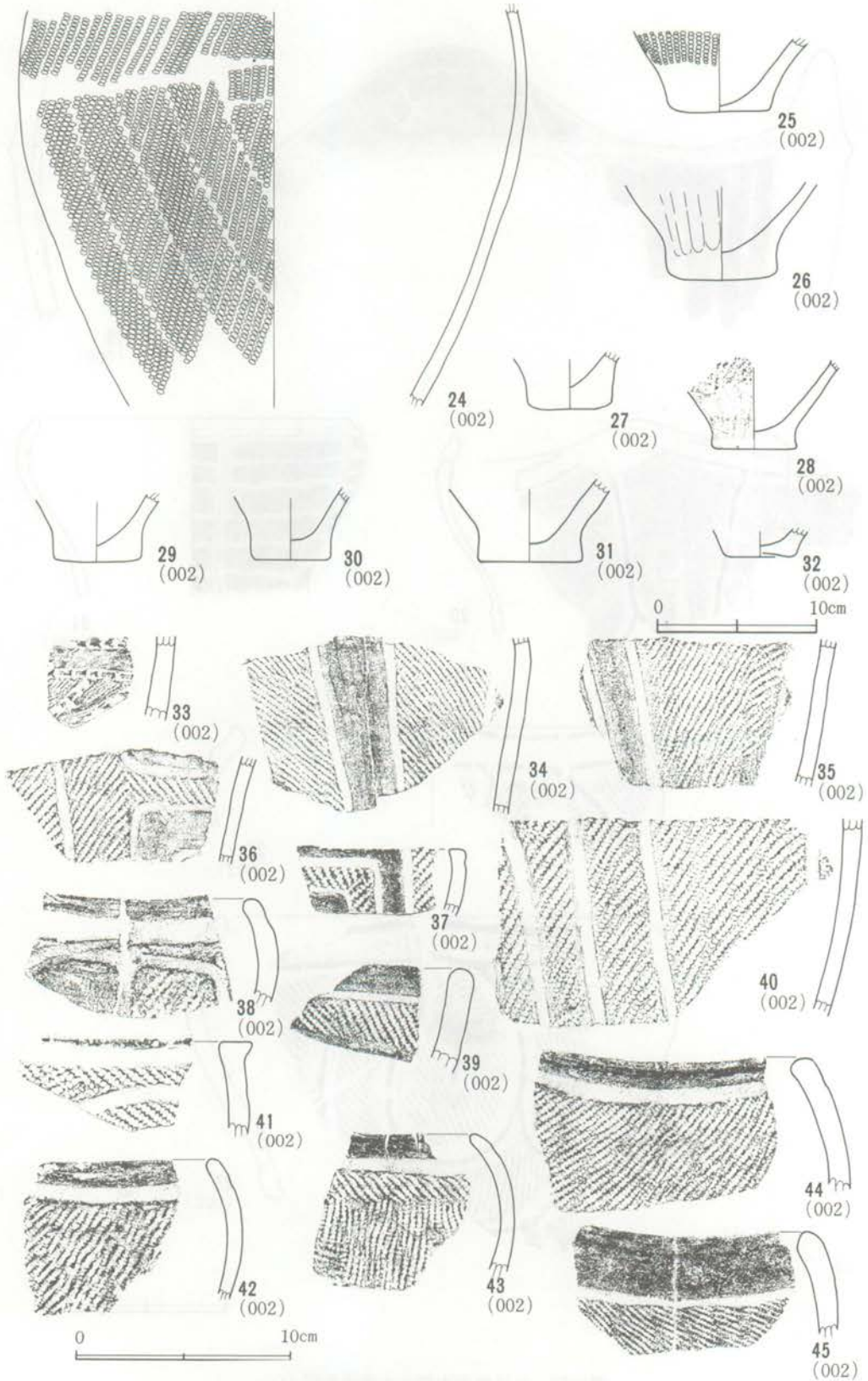
第18図 住居跡出土縄文土器実測図(2)



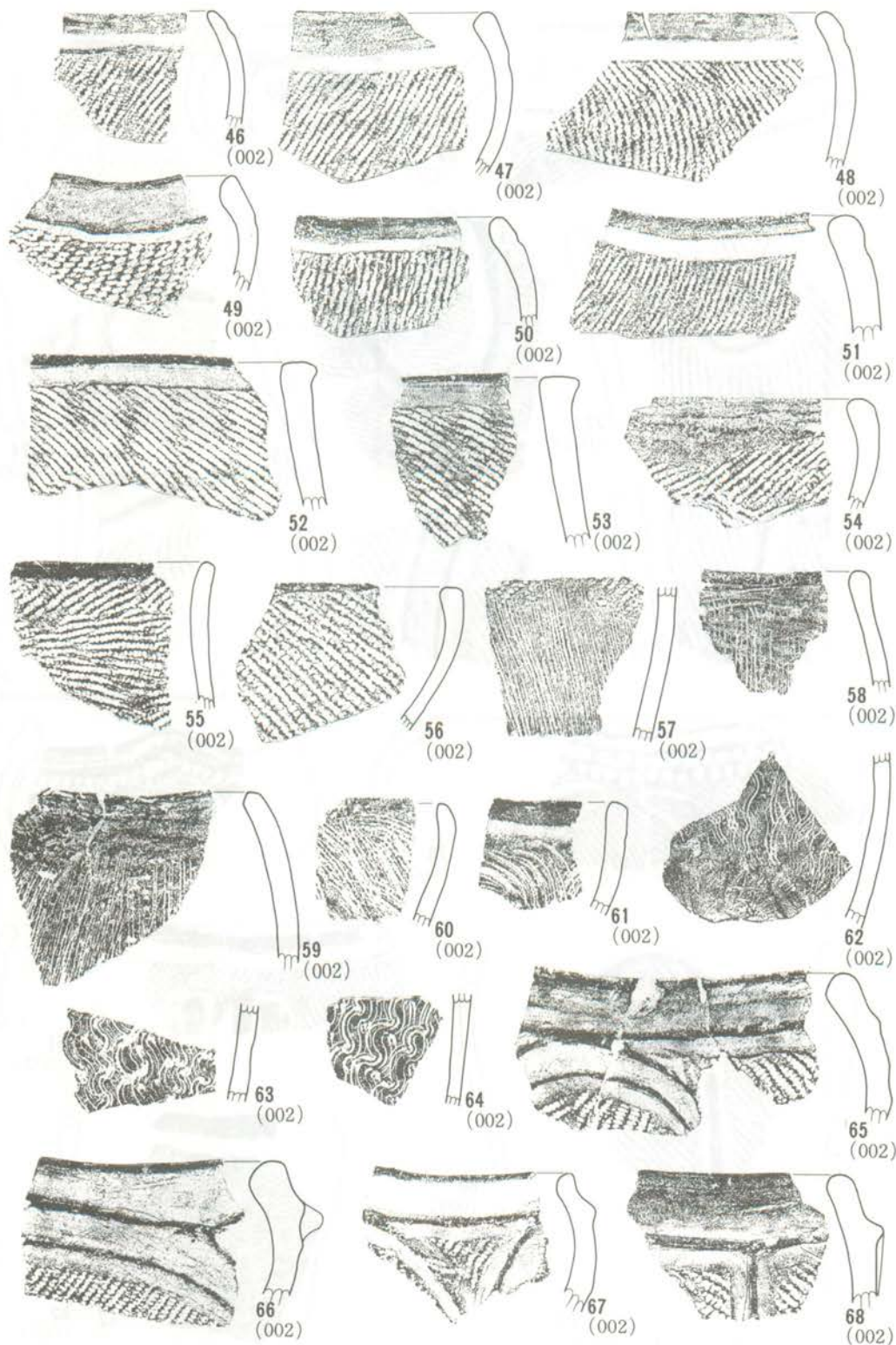
第19図 住居跡出土縄文土器実測図 (3)



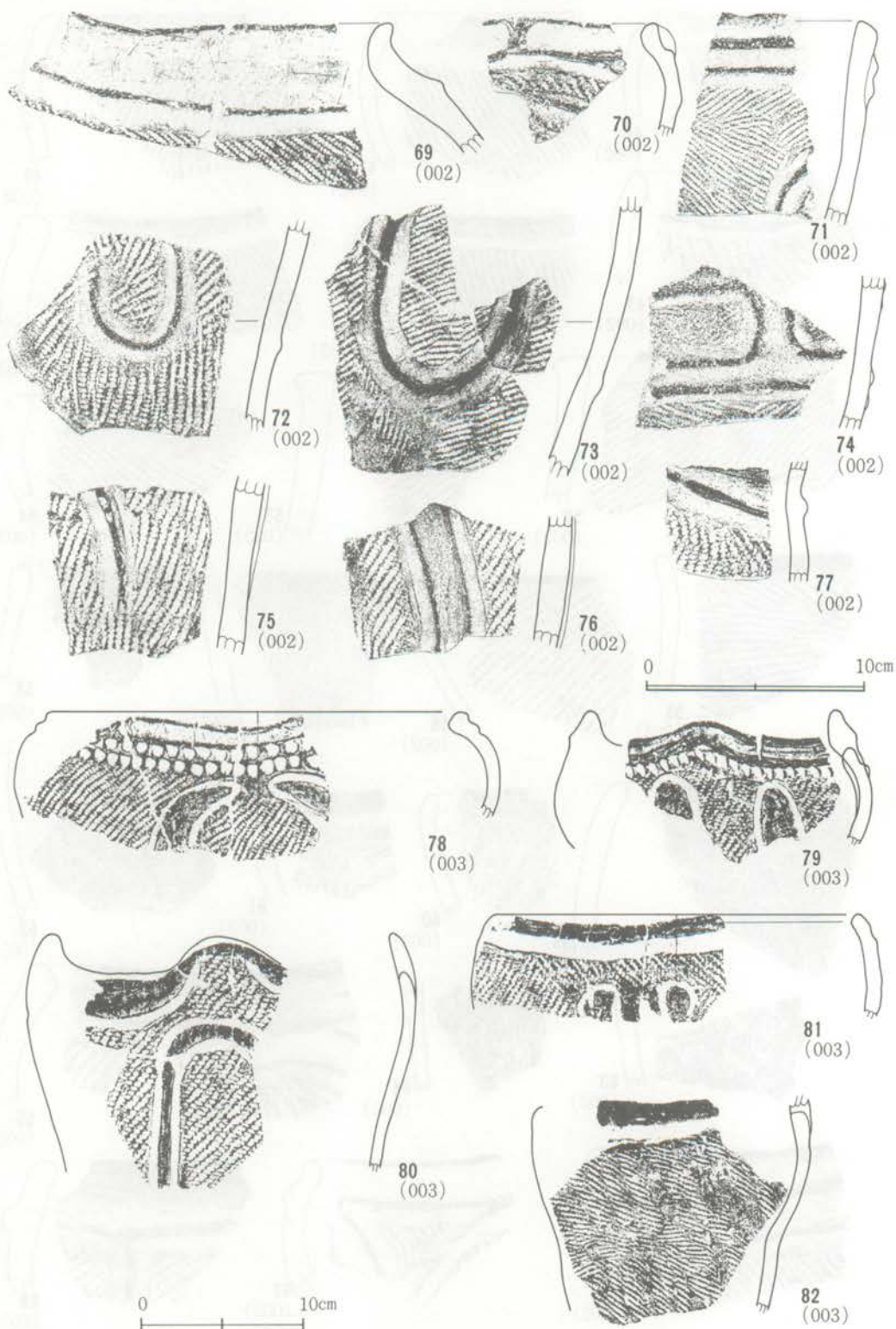
第20図 住居跡出土縄文土器実測図(4)



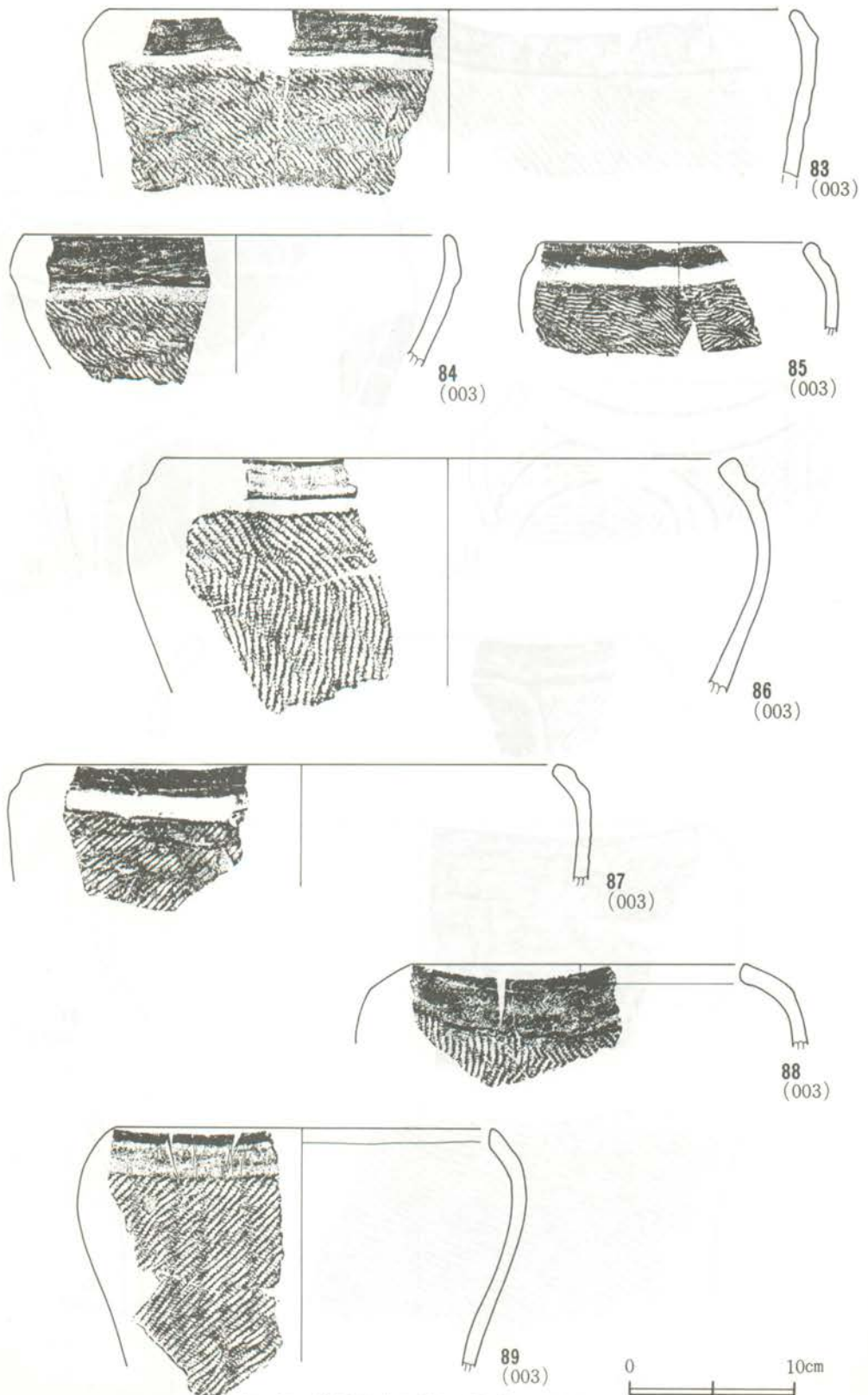
第21図 住居跡出土縄文土器実測図・拓影図 (5)



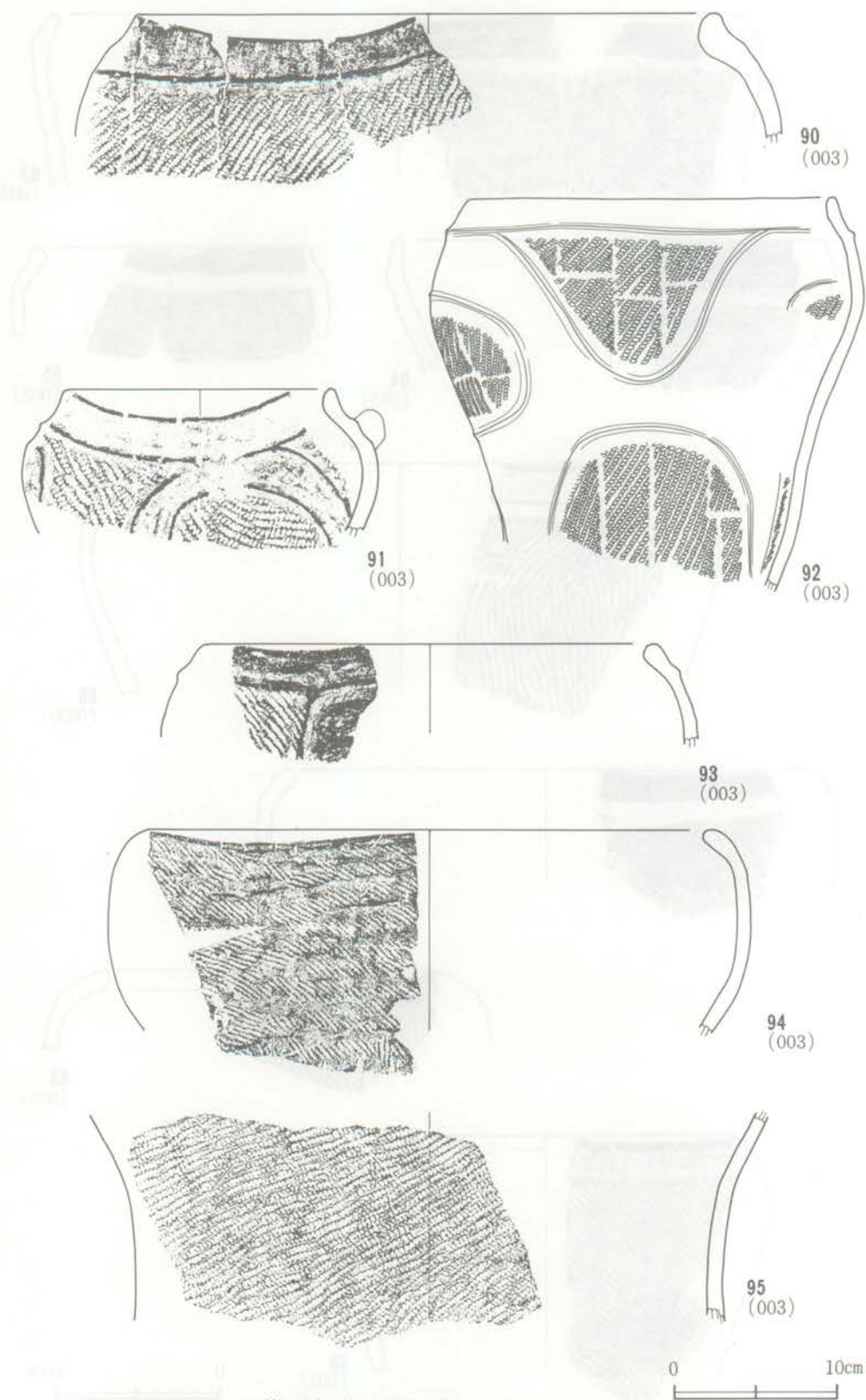
第22図 住居跡出土縄文土器実測図・拓影図 (6)



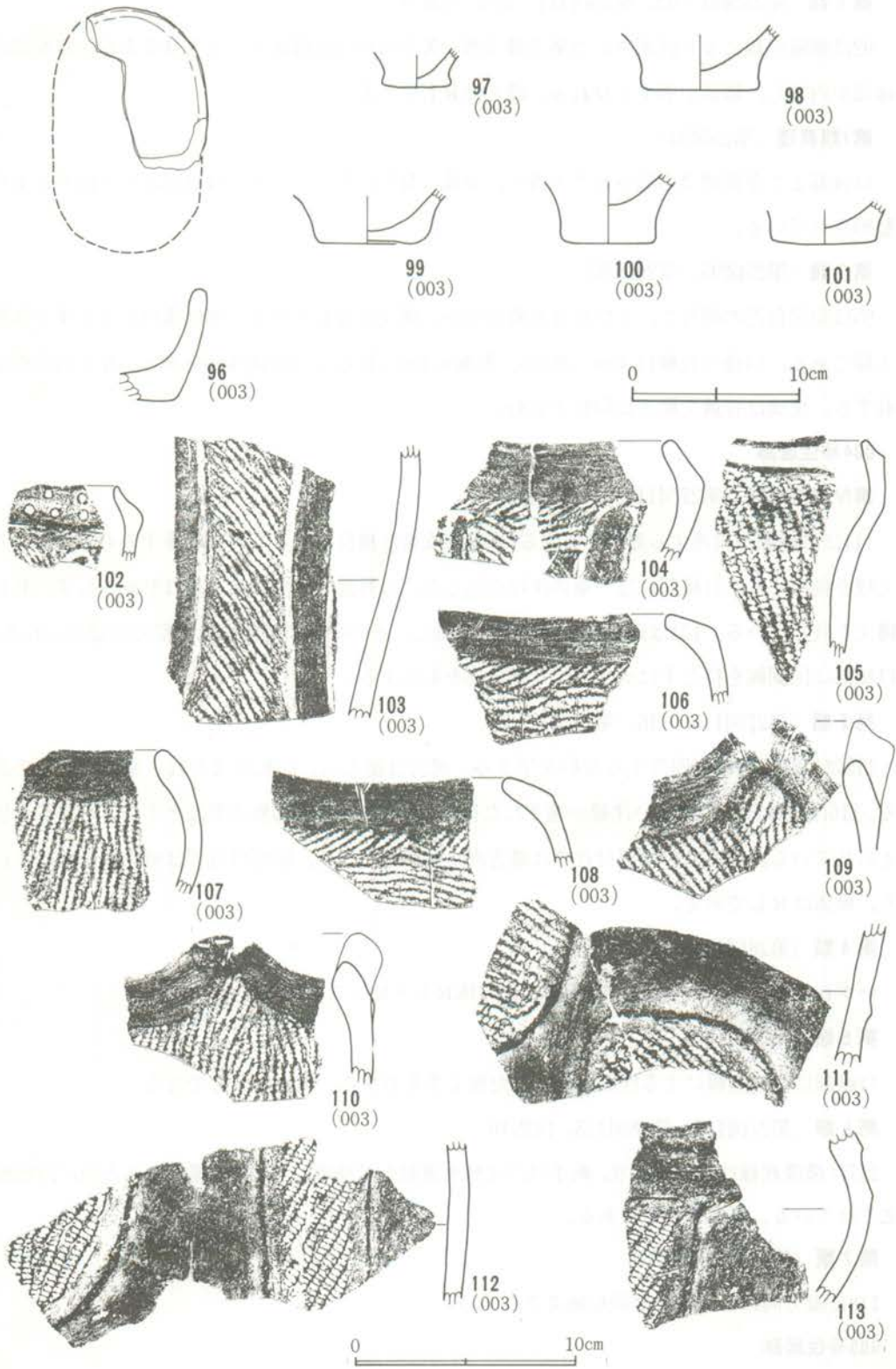
第23図 住居跡出土縄文土器拓影図・実測図 (7)



第24図 住居跡出土縄文土器実測図(8)



第25図 住居跡出土縄文土器実測図 (9)



第26図 住居跡出土縄文土器実測図・拓影図 (10)

第6類 (第25図91~93, 第26図111~113, 図版9)

92は微隆起線により区画された磨消縄文帯がX字状の文様構成をとるものである。器形は口縁部が内湾し、頸部が弱くくびれる。縄文はRLである。

第7類異種 (第25図94)

口縁部まで全面縄文の施された土器で、原体はRLが用いられる。口唇部はへら削りにより整形されている。

第7類 (第25図95, 第26図96)

95は頸部付近の破片で、くびれは比較的弱い。縄文はRLである。96は楕円形を呈する鉢形土器である。口径の長軸14.0cm (推定), 短軸9.4cm (推定), 器高6.6cmを測る。厚手の底部を有する。焼成は普通で胎土に砂粒を含む。

004号住居跡

第IV群第1類 (第27図114, 第28図121)

114は口縁部が内湾する器形を有する。磨消縄文帯は横位に巡るものと懸垂するものにより文様を描出する。口縁部には一条の沈線が巡るが、口唇部との間に無文帯は形成されず、RL縄文を残している。121は逆U字状の沈線文を施し、その両側に磨消された部分が認められる。口縁部は区画線を持たずにナデにより無文部を形成する。

第2類 (第27図115, 116, 第28図122)

115は口縁部が緩く内湾する器形を呈する。縄文は縦方向に回転施文され、原体はRLである。116は口縁部に幅の広い沈線が施された後、沈線上及び口縁部無文帯はナデによる整形が加えられている。縄文は口縁部付近では横方向に回転施文され、胴部付近では斜方向に回転される。原体はRLである。

第4類 (第28図124, 126)

いずれも小破片であるが、124の縄文は原体RLを使って羽状に施文される。

第5類 (第28図125)

口縁部に微隆起線による区画の施された無文帯を有する。縄文はRLである。

第6類 (第27図117, 第28図123, 図版10)

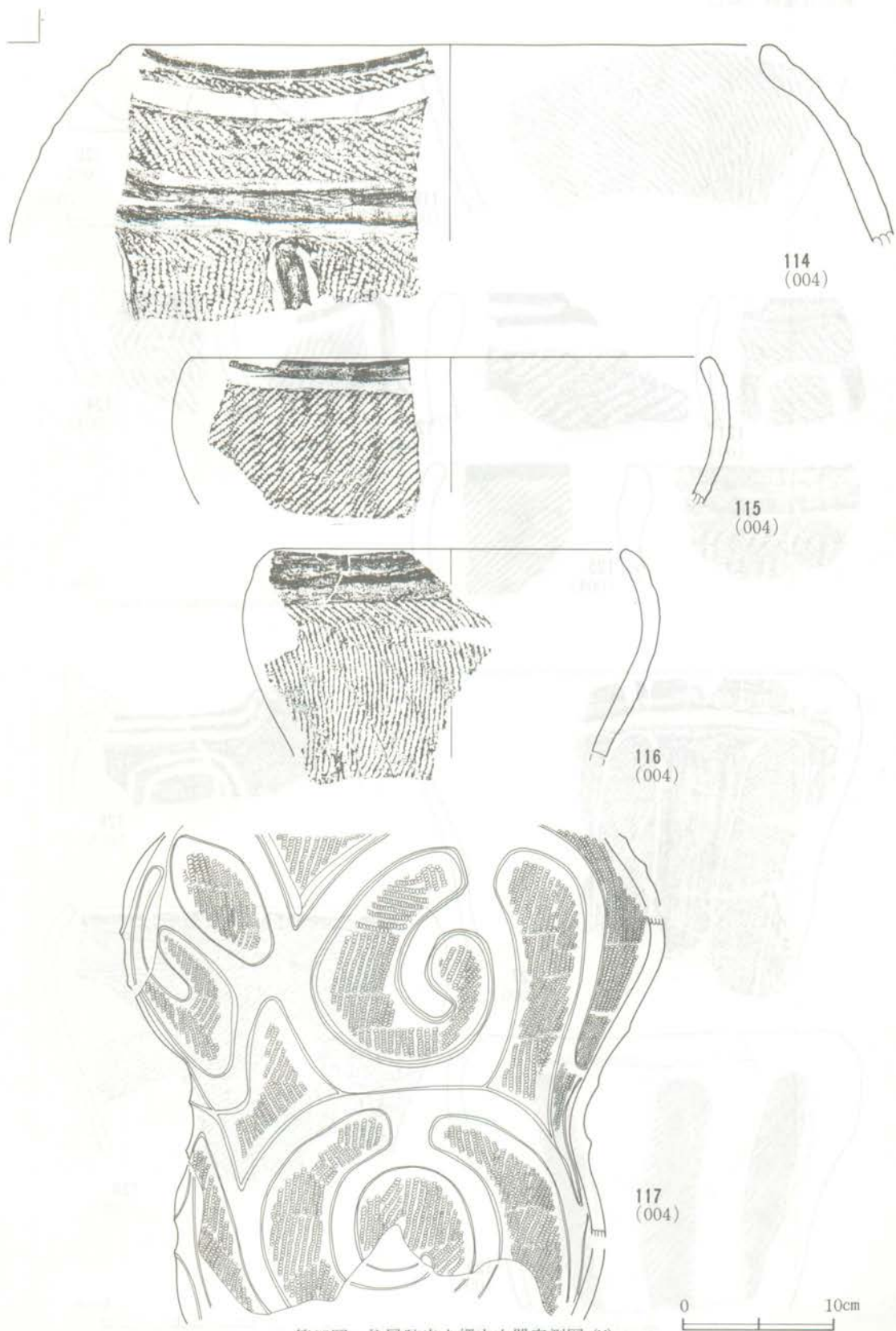
117は微隆起線により渦文状、蕨手状の文様を連続して構成している。縄文は多方向に回転施文されている。原体はRLである。

第7類 (第28図118~120)

118は縦方向にRL縄文が回転施文されている。

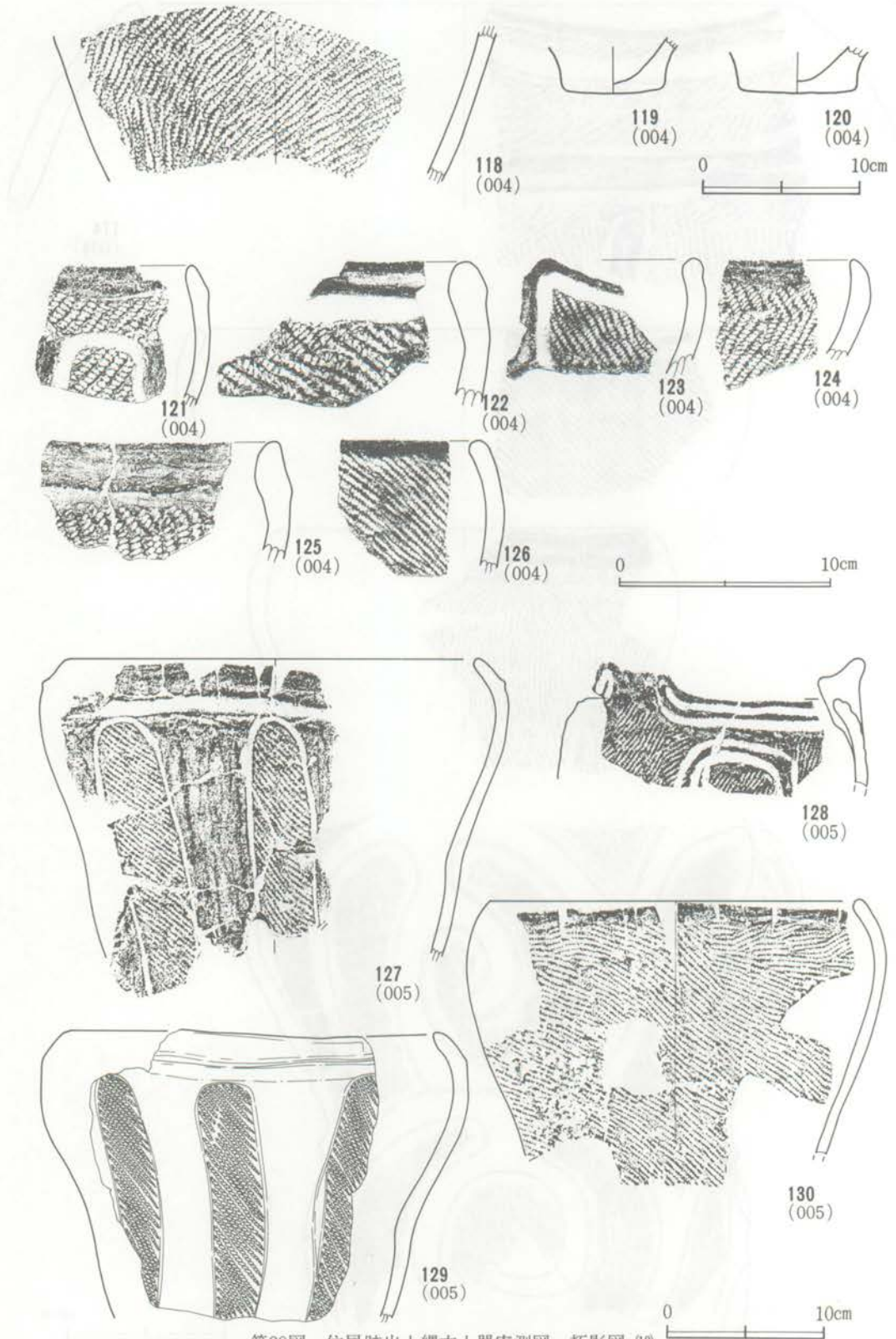
005号住居跡

第IV群第1類 (第28図128)

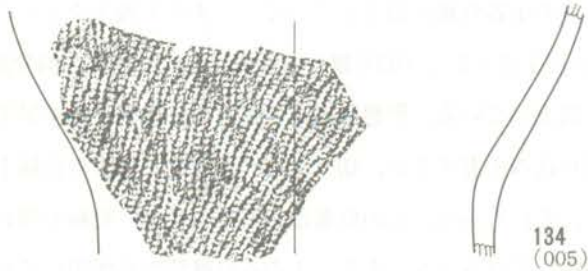
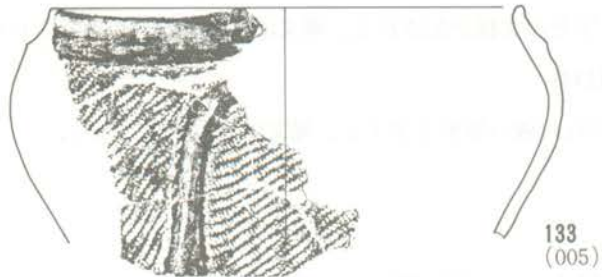
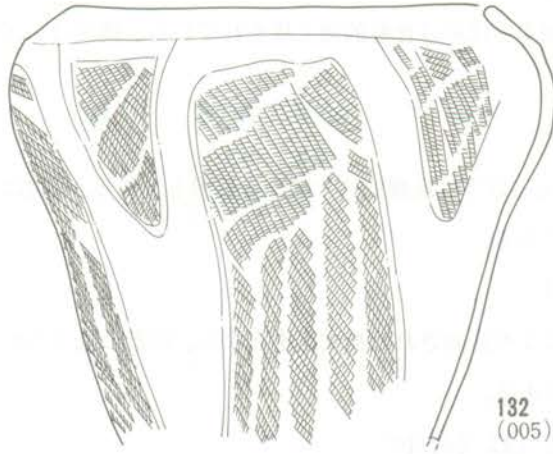
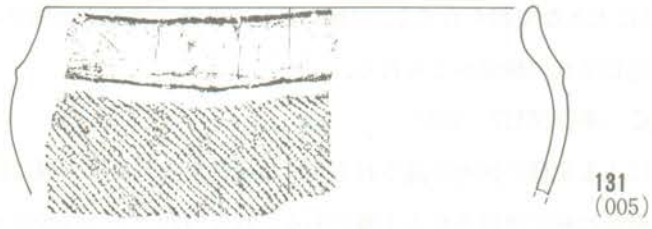


第27図 住居跡出土縄文土器実測図 (11)

新山台遺跡 (No.15)



第28図 住居跡出土縄文土器実測図・拓影図 (12)



0 10cm

第29図 住居跡出土縄文土器実測図 (13)

128は口縁部に大きな突起を有する。口縁に沿って2条の沈線文が施される。文様は磨消縄文帯によって、逆U字状の構成がとられる。

第1類異種C (第28図127, 129)

胴部は沈線による文様の区画が施されるが、口縁部無文帯の区画線は微隆起線によるもので、いわば沈線と微隆起線が併用される土器である。127, 129ともに口縁部が内湾し、頸部のくびれの弱い器形を呈する。いずれも胴部文様は沈線により区画された内側に縄文が充填される構成をとる。文様を区画する沈線は比較的細く描かれている。縄文はいずれもLRが施されている。

第4類 (第28図130)

130は口縁部が内湾し、以下は直線的にすぼまる器形を呈する。縄文は多方向に回転施文されており、原体はLRである。

第5類 (第29図131)

口縁部は微隆起線により区画された無文帯を有する。胴部に施文される縄文は、横方向に回転され、原体はRLである。

第6類 (第29図132, 133, 図版10)

132は口縁部が内湾し、頸部は弱くくびれる。口縁部は微隆起線により無文帯が区画され、胴部はU字状、逆U字状の文様が配される。縄文は無節L縄文が施文される。

第7類 (第29図134)

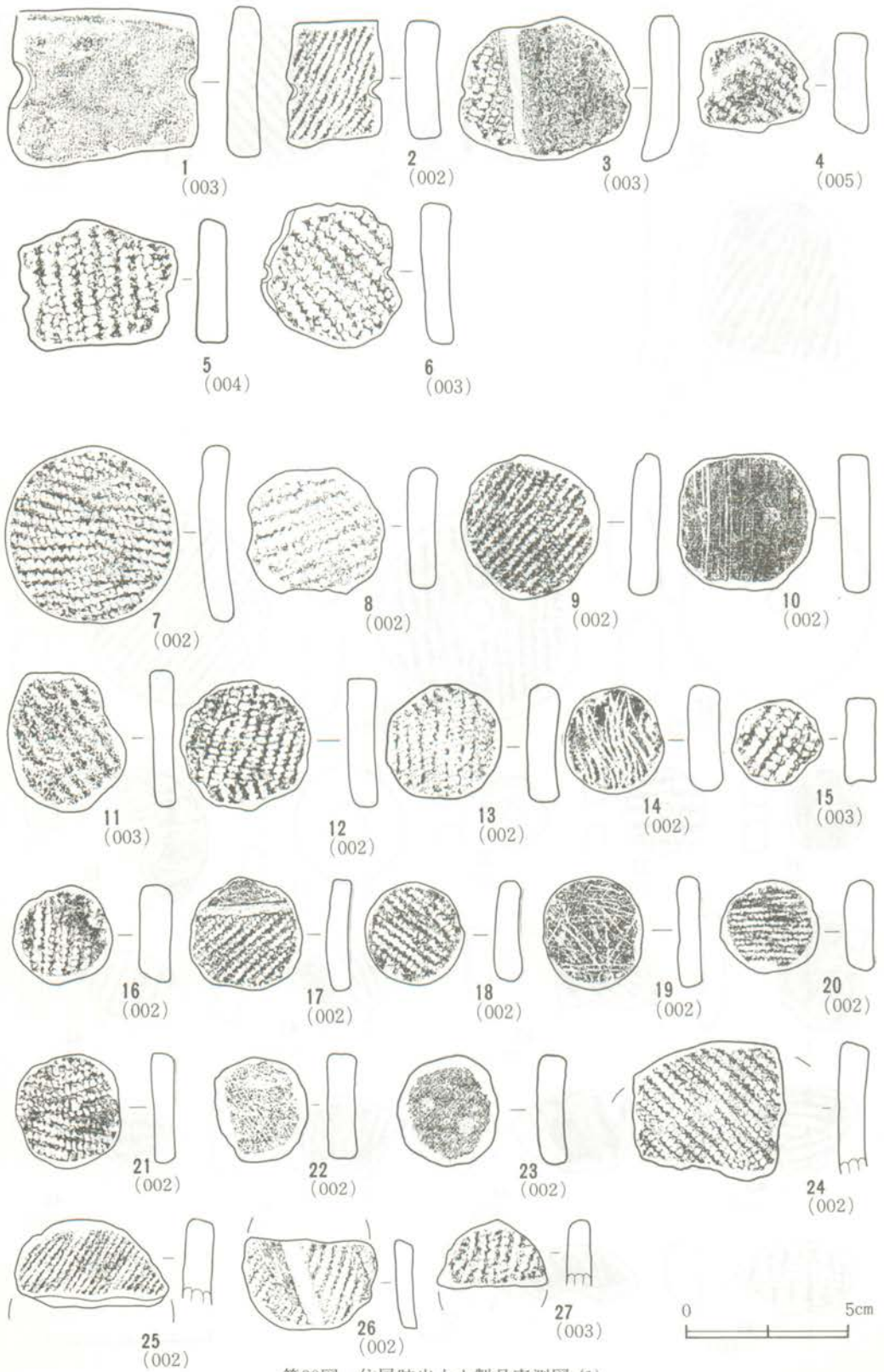
134は頸部のくびれの強い器形を呈する。縄文はRL縄文である。

○土製品

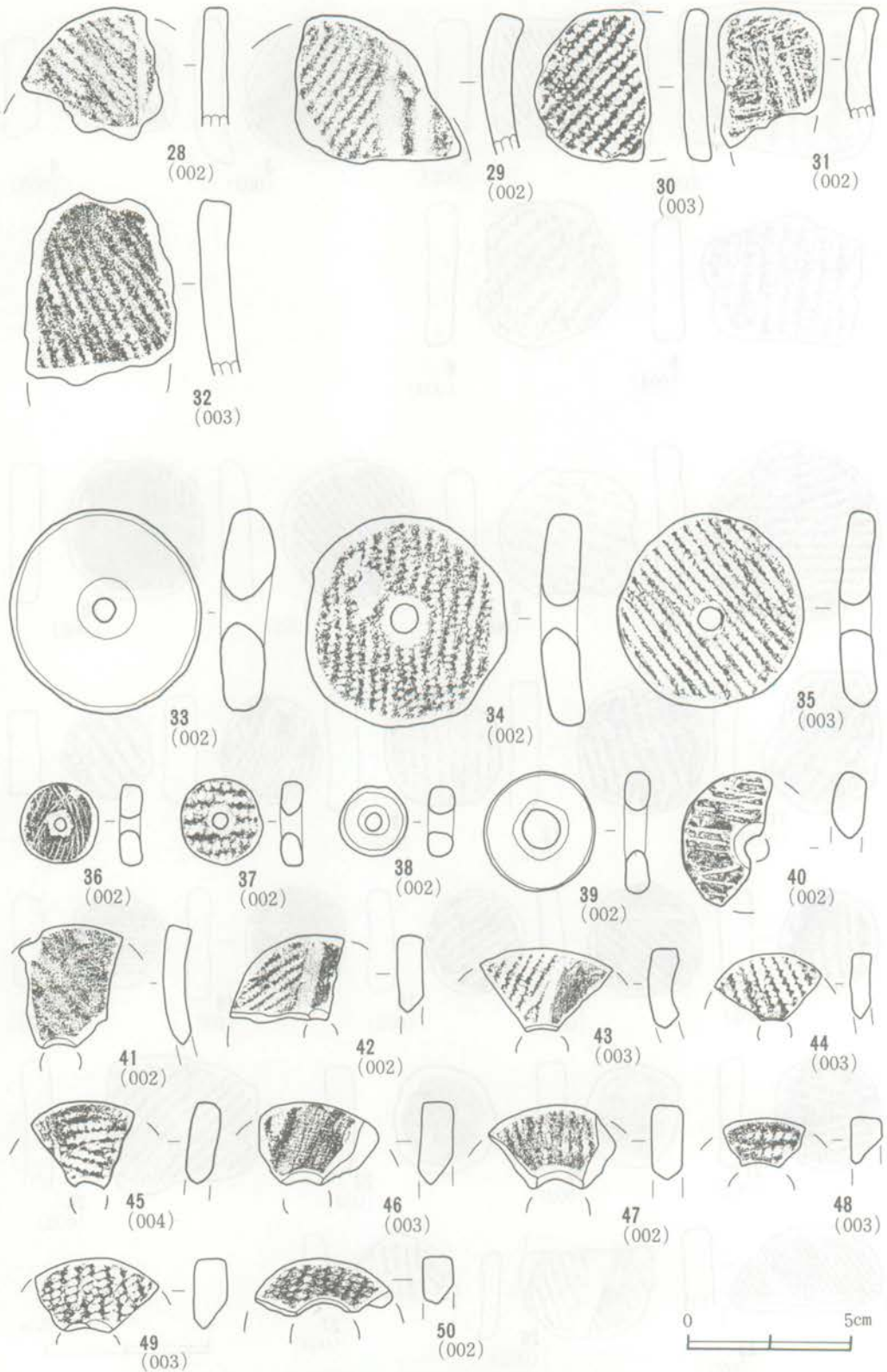
土器片錘 (第30図1～6, 図版18)

住居跡内からは6点の土器片錘が出土している。いずれも覆土中からの出土である。住居跡毎の内訳は002号跡から1点(2), 003号跡から3点(1, 3, 6), 004号跡から1点(5), 005号跡から1点(4)出土している。形態は様々で長方形, 楕円形等を呈する。いずれも2ヶ所に糸掛けのための切り込みを有するが、切り込みの位置は土器片の長軸上とは限らず、短軸上に施されたもの(2, 6)もある。この位置は土器片の長軸, 短軸を問わず、土器製作時の粘土紐輪積の方向に関係しているようである。1のみ口縁部片を使用しており、他は全て胴部片を使用している。土器片の周囲はいずれも粗く打ち欠いただけのものが多く、4点を数える。他の2点も部分的に擦痕を有する程度である。重量は最大のもので41.12g, 最小のもので13.36gを量り、平均重量は23.28gである。

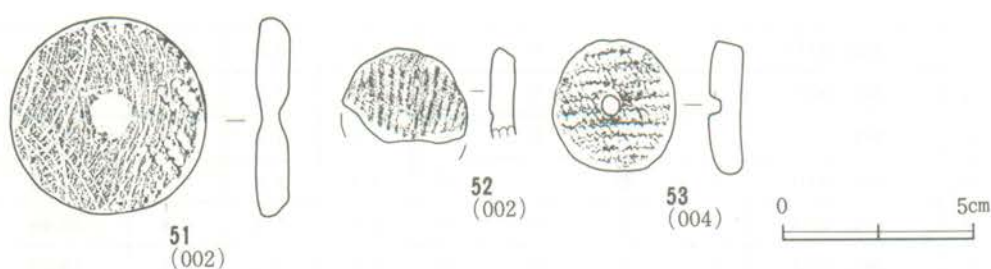
土製円盤 (第30図7～27, 第31図28～32, 図版18, 19)



第30图 住居跡出土土製品実測图 (1)



第31图 住居跡出土土製品実測图 (2)



第32図 住居跡出土土製品実測図 (3)

26点出土している。内訳は002号跡から21点、003号跡から5点で他からは出土していない。形状は円形を主体とし、長方形 (31)、楕円形 (32) に近いものは少ない。土器片の周囲の観察により、A：極めて良く研磨されるもの (7, 24)、B：良く研磨されるもの (11, 14, 18, 19, 20, 28, 29, 31)、C：部分的に研磨されるもの (8, 9, 15, 16, 21, 22, 23, 26, 30, 32)、D：打ち欠いただけのもの (10, 12, 13, 17, 25, 27) とに識別できる。その割合はA = 8%、B = 31%、C = 38%、D = 23%である。A、Bを併せた周囲全体に研磨が施されるものの比率は約4割である。完形品に限って見てみると、重量は最大のもので30.68g、最小8.43gで平均重量は13.54gである。

有孔土製円盤 (第31図33~50、第32図、図版19、20)

孔が貫通するもの18点、未貫通のものが3点出土している。内訳は002号跡から13点(孔が未貫通のもの2点を含む)、003号跡から6点、004号跡から2点(孔が未貫通のもの1点を含む)である。穿孔は全て両側から施されている。このうち表面の孔径と裏面の孔径がほぼ等しいもの (34, 35, 36, 38, 39, 43, 45, 47) は44%、表面の孔径が裏面よりも大きいもの (40) は6%、裏面の孔径が表面よりも大きいもの (33, 37, 41, 42, 44, 46, 48, 49, 50) が50%という割合である。土器片の周囲は良く研磨されており、極めて良く研磨されるものが過半数を占める。穿孔が未貫通のものについてはいずれも土器片の表面から穿孔され、51のみ裏面からも穿孔された痕跡を有する。また穿孔が貫通する、しないを問わず、有孔土製円盤の孔痕はほとんどのものが円錐状を呈するが、53のみ孔痕は円柱状を呈する。

第2表 住居跡出土土製品計測表

(単位：cm)

挿図番号	遺物番号	器種	長軸	短軸	最大厚	重量(g)
1	003, 0001	土器片 錘	5.9	3.8	1.0	41.12
2	002, 0052	土器片 錘	3.5	2.9	1.1	17.10

新山台遺跡 (No.15)

3	003, 0005	土 器 片 錘	5.3	3.8	0.9	27.25
4	005, 0001	土 器 片 錘	3.4	2.8	1.0	13.36
5	004, —	土 器 片 錘	4.9	3.4	0.9	20.81
6	003, 0001	土 器 片 錘	4.3	4.0	0.9	20.03
7	002, 0354	土 製 円 盤	5.3	5.2	0.8	30.68
8	002, 2054	土 製 円 盤	4.1	3.5	0.9	19.00
9	002, 2054	土 製 円 盤	4.3	3.9	0.9	18.50
10	002, 2017	土 製 円 盤	4.2	3.9	0.9	19.36
11	003, 0001	土 製 円 盤	3.6	3.8	0.7	11.13
12	002, 1350	土 製 円 盤	4.0	3.6	0.9	16.43
13	002, 1350	土 製 円 盤	3.6	3.2	1.2	16.35
14	002, 0909	土 製 円 盤	3.0	3.0	1.0	11.18
15	003, 0001	土 製 円 盤	2.8	2.4	1.0	8.43
16	002, 1350	土 製 円 盤	3.1	2.8	1.0	10.18
17	002, 1350	土 製 円 盤	3.5	3.1	0.7	9.48
18	002, 2056	土 製 円 盤	3.1	3.0	0.9	9.47
19	002, 1255	土 製 円 盤	3.1	3.2	0.7	9.18
20	002, 2054	土 製 円 盤	3.0	2.6	0.9	8.88
21	002, 2054	土 製 円 盤	3.2	3.1	0.7	9.42
22	002, 1350	土 製 円 盤	2.9	2.8	0.9	10.97
23	002, 1350	土 製 円 盤	3.2	2.9	0.9	11.53
24	002, 0001	土 製 円 盤	4.7	3.5	0.9	(23.17)
25	002, 1172	土 製 円 盤	4.7	2.6	0.9	(13.38)
26	002, 2055	土 製 円 盤	4.2	2.6	0.5	(9.38)
27	003, 0001	土 製 円 盤	3.4	1.8	0.7	(5.91)
28	002, 0852	土 製 円 盤	4.2	3.5	0.9	(12.21)
29	002, 2054	土 製 円 盤	4.8	3.7	1.0	(23.23)
30	003, 0001	土 製 円 盤	3.5	4.0	0.7	(15.43)
31	002, 0477	土 製 円 盤	3.2	3.0	0.7	(10.85)
32	003, 0001	土 製 円 盤	4.6	4.8	1.0	(35.98)
33	002, 0203	有 孔 土 製 円 盤	5.9	5.9	1.5	65
34	002, 0056	有 孔 土 製 円 盤	6.2	6.2	1.2	58
35	003, 0059	有 孔 土 製 円 盤	5.7	5.7	1.0	37.10
36	002, 0245	有 孔 土 製 円 盤	2.4	2.4	0.6	4.74
37	002, 0528	有 孔 土 製 円 盤	2.5	2.5	0.6	5.18
38	002, 0001	有 孔 土 製 円 盤	2.1	2.1	0.9	3.49
39	002, 1033	有 孔 土 製 円 盤	3.4	3.5	0.8	10.38

40	002, 1350	有孔土製円盤	—	—	1.0	(10.30)
41	002, 2055	有孔土製円盤	—	—	0.7	(9.07)
42	002, 1350	有孔土製円盤	—	—	0.8	(8.69)
43	003, 0001	有孔土製円盤	—	—	0.9	(7.65)
44	003, 0184	有孔土製円盤	—	—	0.6	(3.89)
45	004, —	有孔土製円盤	—	—	0.9	(7.09)
46	003, 0001	有孔土製円盤	—	—	1.0	(9.35)
47	002, 2055	有孔土製円盤	—	—	0.9	(10.60)
48	003, 0164	有孔土製円盤	—	—	0.9	(3.70)
49	003, 0001	有孔土製円盤	—	—	1.0	(9.35)
50	002, 2057	有孔土製円盤	—	—	0.9	(7.63)
51	002, 0721	有孔土製円盤	5.1	5.0	0.9	26.00
52	002, 2057	有孔土製円盤	—	—	0.7	(6.27)
53	004, —	有孔土製円盤	3.2	3.2	0.8	11.03

○石器

新山台遺跡において、住居跡から出土した石器はそのほとんどが覆土中に包含されたものである。ここではそれらを器種毎に説明してゆくことにしたい。また、詳しい計測値等は第5表を参照されたい。

打製石斧（第33図1，図版24）

002号住居跡からの出土である。側縁がわずかに抉入する厚手の打製石斧である。形態的には不完全なもので、未製品であろう。材質には緑色片岩が用いられており、楕円形を呈する断面形と併せて考えると石棒の未製品の可能性もある。

磨製石斧（第33図2～4，図版24）

2，3ともに002号住居跡からの出土である。2は刃部が欠損するが表面の磨きは丹念に行なわれている。断面は厚みがあり、若干丸味を帯びている。3は基部幅に較べて刃部幅が広がる小形の磨製石斧である。磨きは非常に丹念で、つるつるとした感触を受ける。断面形は四角形を呈する。2，3ともに材質には砂岩が用いられており、定角式と呼ばれるものである。4は扁平な河原石を利用し、その一边を刃部として使用したものである。裏面は大きく剥離している。その剥離状況をみると裏面中央に横一直線の段を残して剥離していることから、あるいはその横一直線は溝を切った跡かもしれない。材質には泥質砂岩が用いられている。

磨石（第33図5～7，第34図8，9，図版24）

5点出土しているがいずれも破損品である。5は005号住居跡からの出土である。表裏に1ヶ

新山台遺跡 (No.15)

所ずつ敲打痕を有する。安山岩製。6は003号住居跡からの出土で多孔質安山岩製である。7, 8はいずれも002号住居跡からの出土で7は砂岩製, 8は輝石安山岩製である。9は003号住居跡からの出土で両端を欠く。断面形は楕円形を呈し, 表裏ともに縦方向の擦痕を認める。形態的に, あるいは磨製石斧として使用されたものかもしれない。材質には砂岩が用いられる。

軽石 (第34図10~12, 図版24)

10, 11は002号住居跡からの出土, 12は003号住居跡からの出土である。

砥石 (第34図13, 14, 図版24)

13は002号住居跡からの出土である。器厚は薄く板状の砥石である。表裏ともに擦痕が認められる。材質は砂岩である。14は003号住居跡からの出土で明確な面取りがなされている。表面には主として横方向の擦痕が認められる。材質は白色凝灰岩。

石鏃 (第34図15~26, 第35図27~32, 図版24)

住居跡内からは19点の石鏃が出土しているが, そのうち002号住居跡からの出土が15点を数え圧倒的多数を占める。これらは基部の形状の相違から3種類に分類することができる。

第1類 (15)

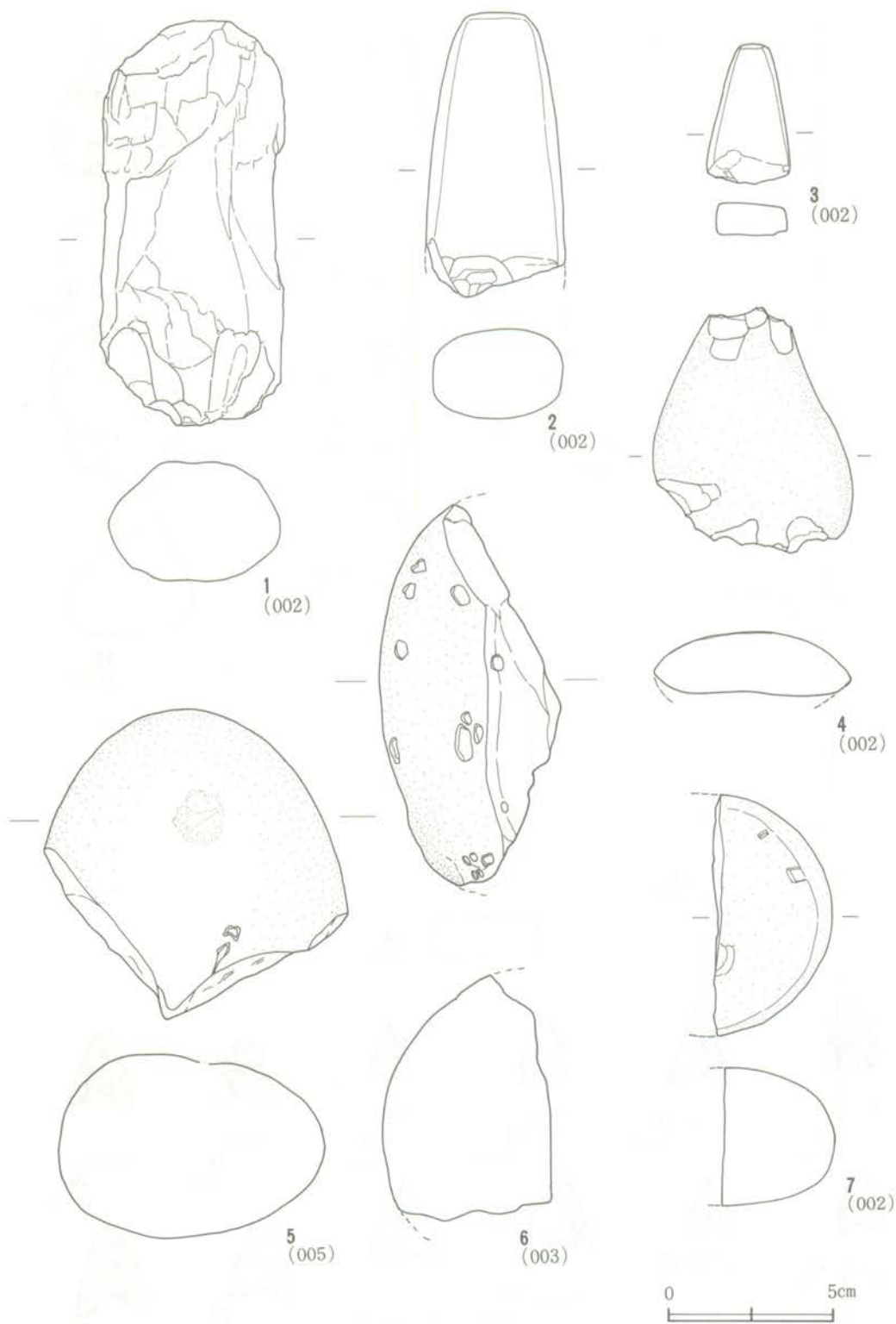
基部の抉りがなく, 形状は二等辺三角形を呈するものである。15は歴史時代001号住居跡の覆土中からの出土で, 剥離は粗く, 一次剥離面を表裏ともに残す。裏面は縁辺部のみ調整剥離が行なわれている。石材は黒曜石である。

第2類 (16~30)

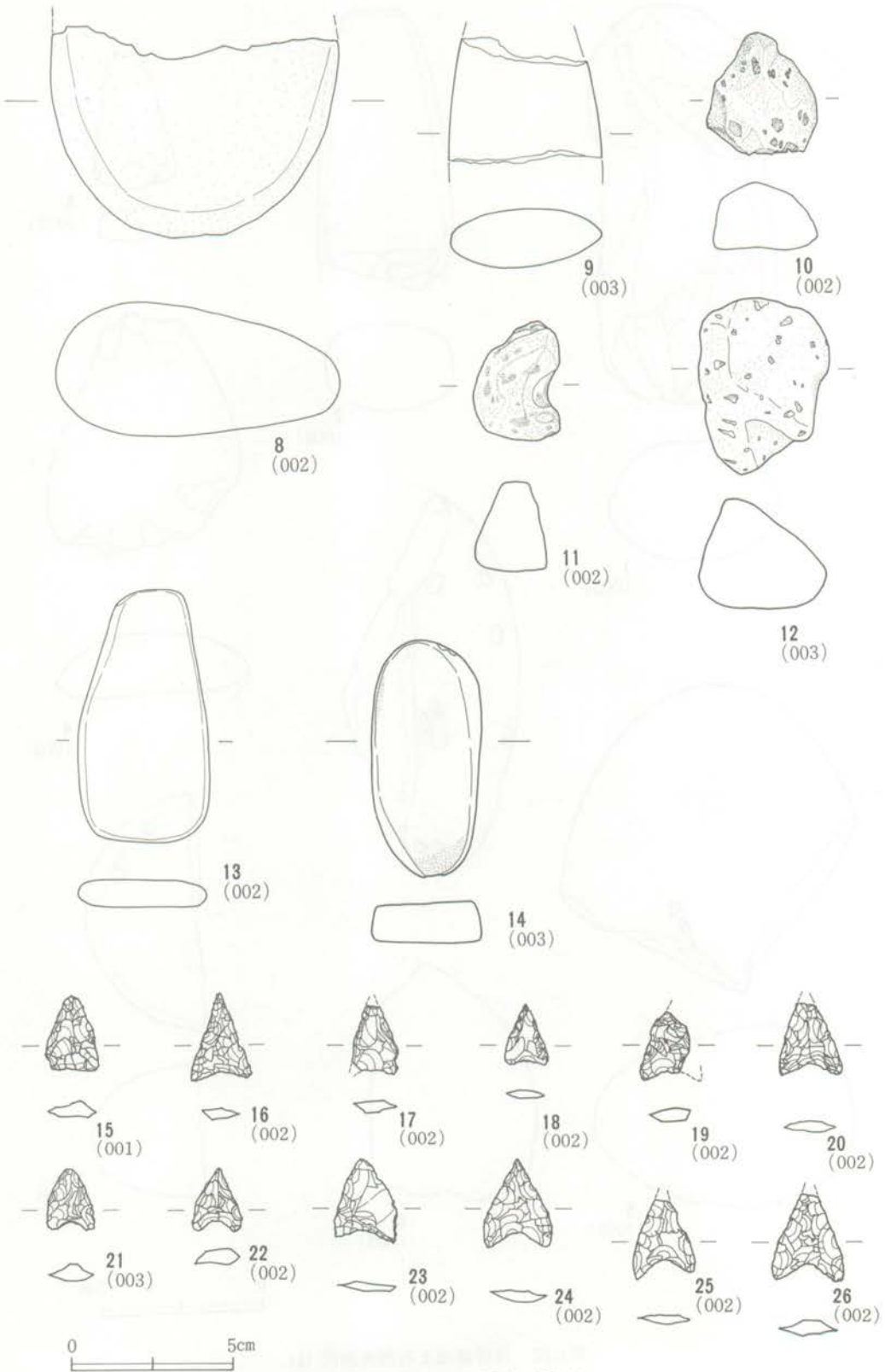
基部に抉りをもつものである。このうち16~20, 23は抉りが緩やかで弧状を呈する。16は, 全面に細かい剥離を施し, 先端を鋭く尖らせたものである。先端はわずかに欠損する。石材はチャートが用いられる。17は先端部と脚部に欠損が見られ, 剥離はひじょうに大まかなものとなっている。チャート製。18は小形で薄い作りのものである。剥離は表裏ともに主として縁辺部に施されている。石材はチャートが用いられる。19は先端部を含めて全体の約 $\frac{1}{2}$ 程が欠損する。石材は黒曜石である。20は先端部が欠損するが比較的整った形状を有する。裏面の剥離は縁辺部を主体に施される。石材はチャート。21は安山岩製で粗い剥離が施される。003号住居跡出土。22は表面が丸味を持ち, 裏面は一次剥離面を残す。安山岩製。23は表裏ともに一次剥離面の未加工面を残し縁辺部に簡単な調整が施される。チャート製。24は安山岩製で先端部は鋭く尖る。25は先端部が欠損するが剥離は比較的細かい。安山岩製。26も先端部欠損, 安山岩製。27は側縁が丸く張り出した形状を呈する。剥離は比較的丹念に施される。安山岩製。28~30はいずれも大きく欠損部を持つ。石材は, 28, 30が安山岩, 29がチャートである。

第3類 (31, 32)

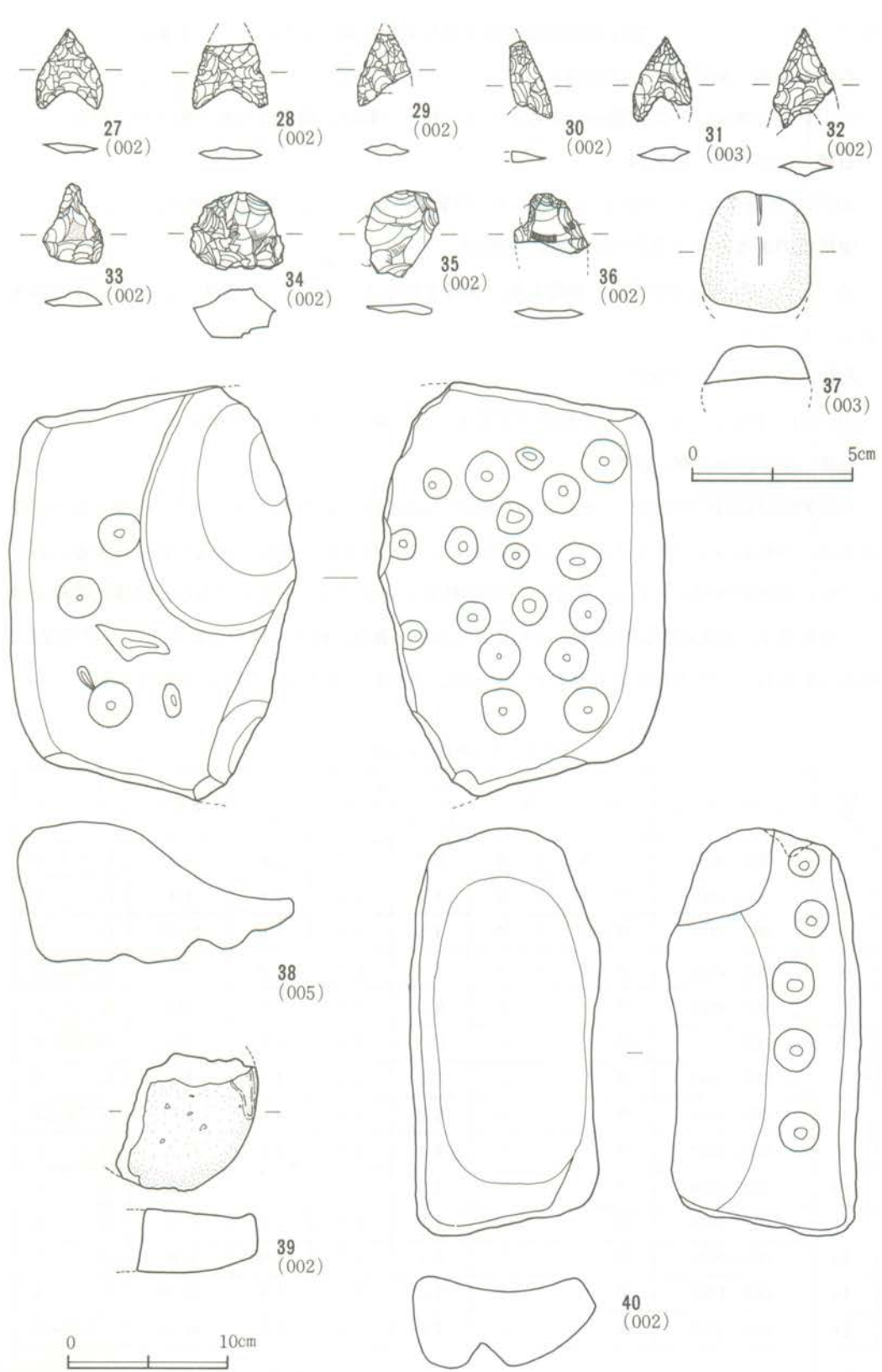
基部の抉りが顕著で, 明確な脚部を作り出すものである。31は片脚を欠損し, 側縁は丸味を



第33图 住居跡出土石器実測図(1)



第34図 住居跡出土石器実測図 (2)



第35图 住居跡出土石器实测图(3)

新山台遺跡 (No.15)

持つ。石材はチャート。32は直線的な側縁を持ち先端は鋭く尖る。チャート製。

石鏃未製品 (第35図33, 図版24)

安山岩製で裏面は一次剝離面である。先端部付近の側縁に簡単な剝離が施されている。

石核 (第35図34, 図版24)

002号住居跡覆土からの出土である。メノウ製で裏面の一部に自然面を残す。

使用痕のある剝片 (第35図35, 36, 図版24)

35は安山岩製, 36は半欠品で黒曜石製, 側縁を抉るようなリタッチを有し, あるいは石鏃未製品かもしれない。

石錘 (第35図37, 図版24)

003号住居跡から一点だけの単独出土である。砂岩製で全体の $\frac{1}{2}$ が欠損する。

石皿 (第35図38~40, 図版25)

38は005号住居跡の床面からやや浮いた位置で, 裏面を上にして検出された。石皿としての使用の後, 多孔石として使用されたものと思われ, 表面に5孔, 裏面に18孔の孔を有する。石材には脆い花崗岩が用いられる。39は002号住居跡からの出土で, 小破片であるが側縁に明確な縁の一部を残す。40も002号住居跡からの出土である。表面は縁から緩やかに中央に向けて窪む。裏面に多孔石としての孔が5孔穿たれている他, 側面にも1孔穿たれる。雲母片岩製。

第3表 住居跡出土石器計測表

挿図 番号	遺物番号	器種	計測値 (cm)			重量(g)	石質
			長さ	幅	厚		
1	002, 0992	打製石斧	11.9	5.6	3.6	314	緑色片岩
2	002, 1019	磨製石斧	8.4	4.3	2.6	158	砂岩
3	002, 0814	磨製石斧	4.1	2.6	1.0	15.63	砂岩
4	002, 2054	磨製石斧	7.4	6.1	2.0	78	泥質砂岩
5	005, 0029	磨石	9.1	9.3	5.5	585	安山岩
6	003, —	磨石	11.2	5.6	5.2	348	多孔質安山岩
7	002, 0142	磨石	7.1	3.5	4.1	132	砂岩
8	002, 0068	磨石	6.2	9.0	4.0	300	輝石安山岩
9	003, 0001	磨石	3.8	4.9	1.7	37.6	砂岩
10	002, 0130	軽石	3.7	3.5	2.1	1.93	浮岩
11	002, 1079	軽石	3.6	2.7	2.7	2.33	浮岩
12	003, 0039	軽石	5.2	4.2	3.2	9.98	浮岩
13	002, 1316	砥石	7.5	4.1	0.8	45.48	砂岩
14	003, 0001	砥石	7.0	3.4	1.3	46.08	白色凝灰岩

15	001, 0004	石	鉄	2.3	1.7	0.4	1.39	黒曜石
16	002, 1050	石	鉄	2.7	1.9	0.3	1.11	チャート
17	002, 1555	石	鉄	2.2	1.5	0.4	1.01	チャート
18	002, 1867	石	鉄	1.9	1.4	0.2	0.52	チャート
19	002, 1105	石	鉄	2.0	1.6	0.4	1.00	黒曜石
20	002, 0463	石	鉄	2.2	2.0	0.4	1.08	チャート
21	002, 0179	石	鉄	2.0	1.5	0.5	1.32	安山岩
22	002, 0313	石	鉄	2.0	1.6	0.5	0.55	安山岩
23	002, 0283	石	鉄	2.6	2.0	0.3	1.26	チャート
24	002, 1243	石	鉄	2.7	2.2	0.4	1.53	安山岩
25	002, 1577	石	鉄	2.5	2.0	0.3	1.33	安山岩
26	002, 0244	石	鉄	2.7	2.3	0.5	1.66	安山岩
27	002, 0736	石	鉄	2.5	2.1	0.3	1.51	安山岩
28	002, 0862	石	鉄	2.1	2.4	0.4	(1.58)	安山岩
29	002, 0136	石	鉄	2.2	2.3	0.4	(0.92)	チャート
30	002, 1724	石	鉄	2.3	1.4	0.4	(0.86)	安山岩
31	003, 0032	石	鉄	2.6	1.9	0.4	(1.05)	チャート
32	002, 1207	石	鉄	3.0	2.0	0.5	(1.59)	チャート
33	002, 0271	石	鉄未製品	2.5	2.0	0.5	(1.74)	安山岩
34	002, 0757	石	核	2.3	3.0	1.5	(8.97)	メノウ
35	002, 1724	ユ	ーフレ	2.6	2.4	0.3	2.39	安山岩
36	002, 0208	ユ	ーフレ	1.9	2.3	0.3	0.85	黒曜石
37	003, —	石	錘	3.7	3.5	1.0	(17.73)	砂岩
38	005, 0022	石	皿	25.0	18.0	8.4	1.760	花崗岩
39	002, 1138	石	皿	8.4	8.8	4.0	210	多孔質安山岩
40	002, 1811	石	皿	24.8	11.6	4.8	1.580	雲母片岩

第3節 土壇出土遺物

○土器

103号土壇

第IV群第1類 (第36図1)

1は口縁部が内湾し、頸部がくびれる器形を呈する。口縁部は横ナデにより無文部を作り出し、以下は磨消縄文帯が懸垂する。地文の縄文は縦方向に回転施文され、原体はRLである。

第2類 (第36図2)

2は口縁部が内湾し、以下は直線的にすぼまる器形を呈する。口縁部には幅の広い沈線を巡

らせ、口縁部無文帯を区画する。縄文は多方向に回転され、原体は無節Lである。

第4類 (第36図3, 4, 図版10)

3は頸部が強くくびれる器形を呈する。口縁部は横ナデにより無文部を作り出す。縄文は原体無節Lを縦方向に施文する。4は口縁部が内湾する鉢形土器である。縄文は口縁部付近に横方向、胴部に縦方向の原体RLが施文される。

第7類 (第37図5, 6)

6は縦方向のへら削りによる整形痕を残す底部である。

104号土坑

第1類 (第37図7, 第47図1)

7は胴部径8.0cmを測る小形の土器である。磨消縄文帯が懸垂し、縄文はRLである。

第2類 (第37図8, 第47図2, 3)

8は推定口径30cmを測る。口縁部は内湾し、頸部は緩やかにくびれる。縄文は縦方向に回転施文され原体はRLである。

第4類 (第37図9)

9は推定口径26cmを測る。縄文原体はRLで、施文方向は縦位が主となる。

第5類 (第37図10)

10は推定口径25cmを測る。微隆起線により区画された口縁部無文帯を有する。縄文は原体RLを横方向、縦方向に施文し羽状縄文を作り出している。

第7類 (第38図11, 12, 第47図4)

11はRL縄文の施される胴部破片で、器形のくびれは弱い。12は微隆起線による杵状区画文を有する突起部つき口縁部小破片である。口唇部付近には刺突文を有する。小破片のため本類に収めた。12と第47図4は同一個体である。

106号土坑

第1類 (第47図6)

6は沈線によって区画された幅の狭い磨消縄文帯が懸垂するものである。縄文はRLを縦方向に回転施文する。

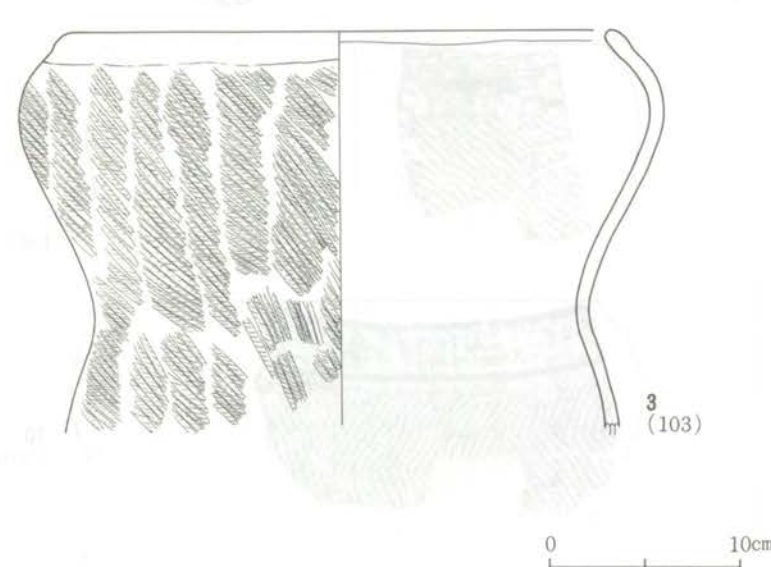
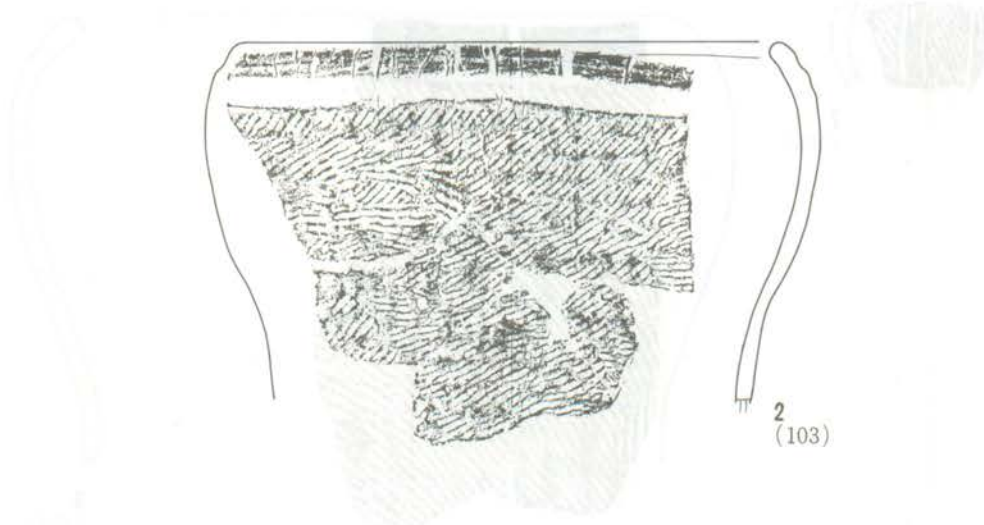
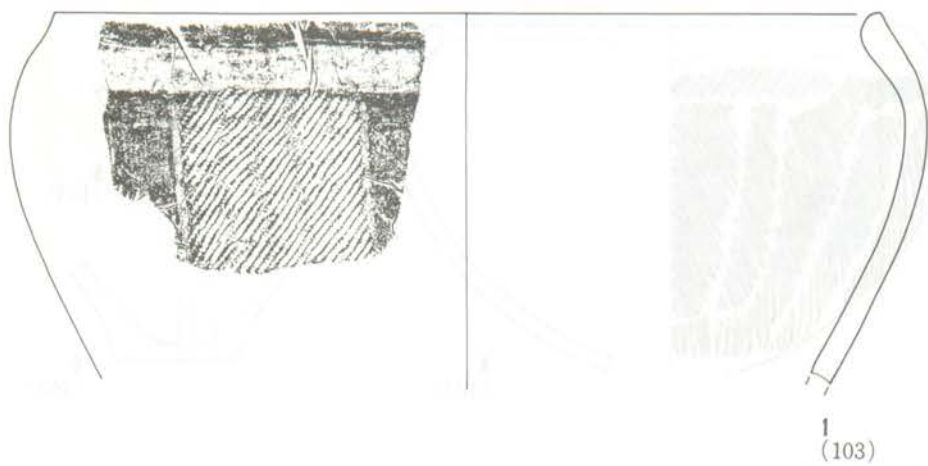
第2類 (第47図7~10)

7, 9はいずれも口縁部の区画沈線以下にRL縄文を施すものである。縄文は回転の方向を横方向と縦方向にとり羽状を呈する。

第6類 (第38図13)

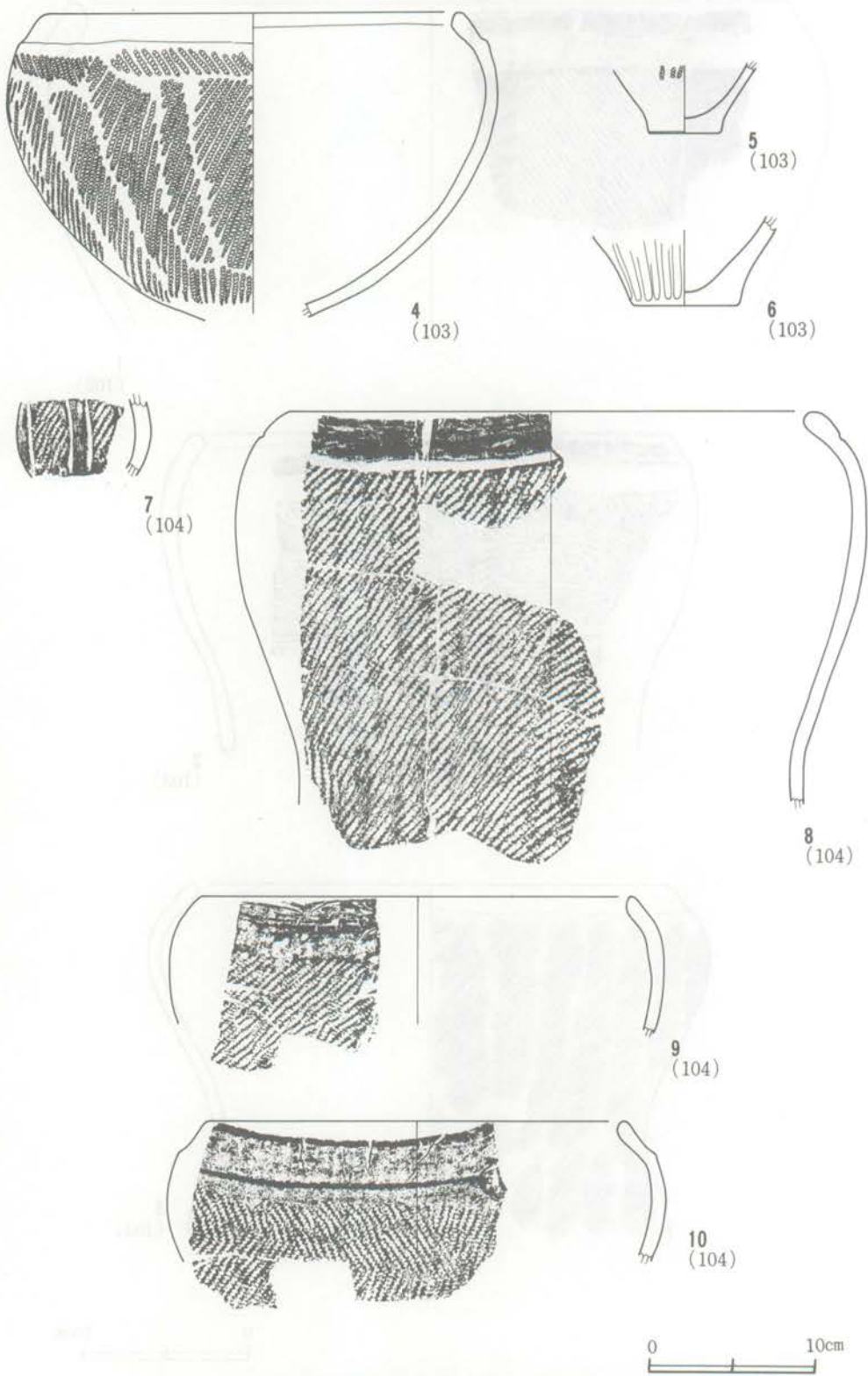
13は微隆起線により曲線状の文様を描出する土器である。地文にはLR縄文が施される。

107号土坑

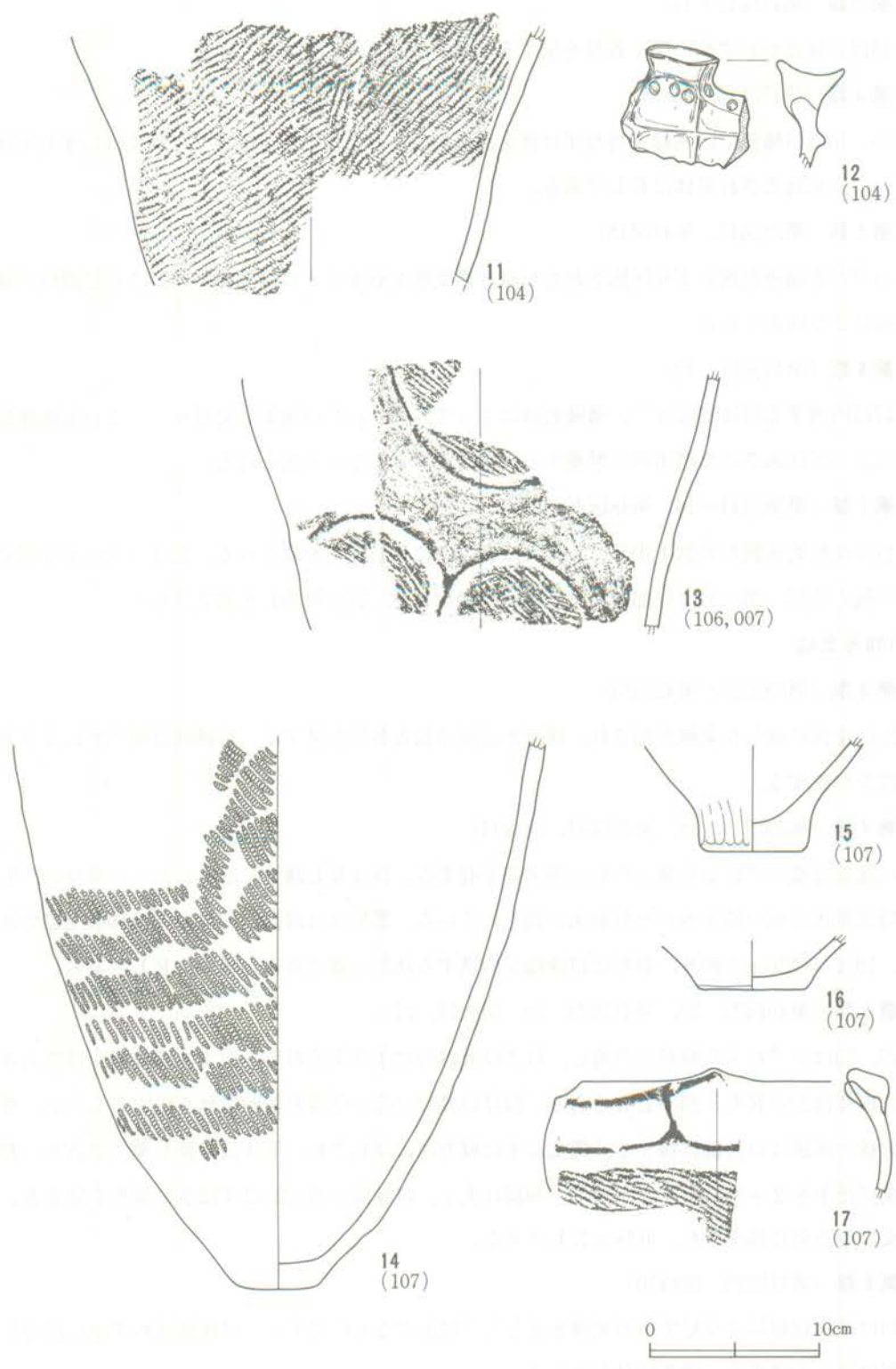


第36図 土坑出土縄文土器実測図 (1)

新山台遺跡 (No.15)



第37図 土壇出土縄文土器実測図 (2)



第38图 土坛出土縄文土器実測图 (3)

新山台遺跡 (No.15)

第2類 (第47図12~14)

13は口縁部がわずかに開く器形を呈する。地文はLR縄文である。

第4類 (第47図15, 16)

15, 16は口縁部に区画線を持たずに無文部を形成する土器である。地文の縄文はいずれも横方向に回転施文され原体はRLである。

第5類 (第38図17, 第47図18)

いずれも微隆起線により区画された口縁部無文帯を有する。口縁部無文帯はさらに縦位の隆起線により区画される。

第6類 (第47図17, 19)

17は内湾する口縁部破片で、微隆起線によって区画された口縁部無文帯から、これも微隆起線によって区画された磨消帯が懸垂する文様構成をとるものと思われる。

第7類 (第38図14~16, 第48図20, 21)

14は比較的長胴形の胴下半部で、縄文は横方向にRL縄文が施される。15はヘラによる調整痕の残る底部, 20, 21は胴部破片で、縄文は20がRL, 21は無節Lが施文される。

108号土坑

第3類 (第39図20, 第42図31)

20は全面に細かな条線が施され、緩やかに胴の張る器形を呈する。口縁部は横ナデにより無文部を形成する。

第4類 (第39図18, 19, 第40図21, 図版11)

口縁部は横ナデにより磨消された無文部を有する。18はRL縄文を施文した上に部分的にLR縄文原体に細い縄を巻いた付加条が施されている。器形は口縁部が内湾する深鉢形土器である。19は口径26cmを測り、器形は口縁部が内湾する鉢形土器である。縄文はRLである。

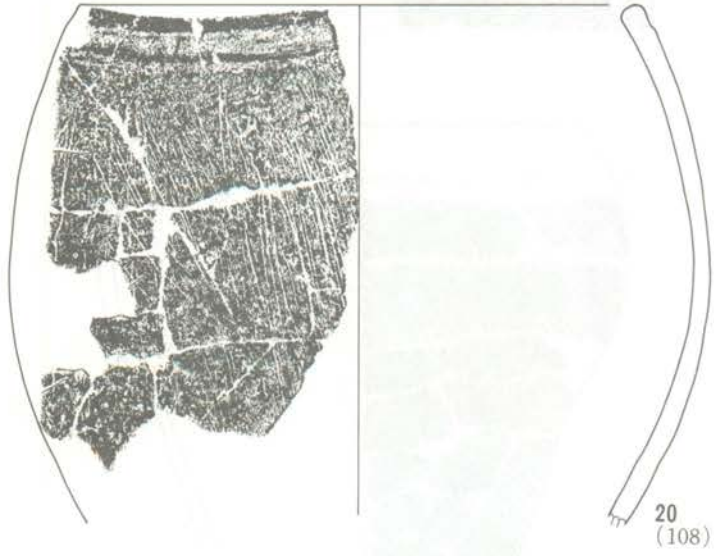
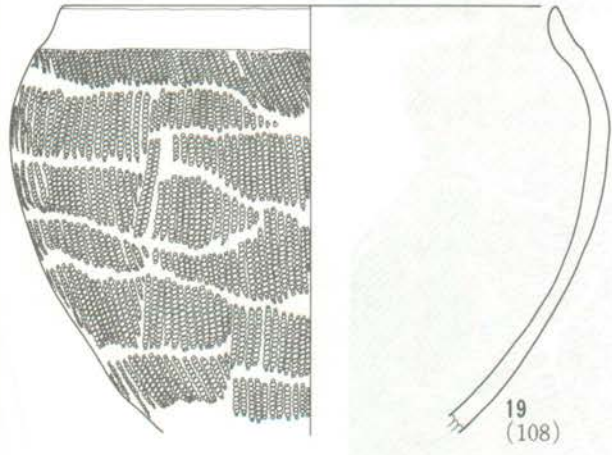
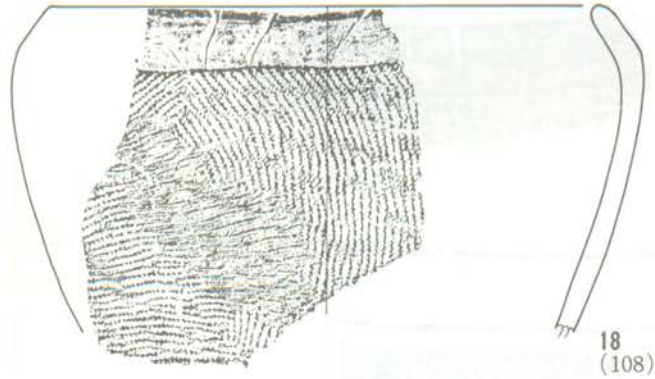
第5類 (第40図22, 23, 第41図24, 25, 図版10, 11)

22, 23はいずれも口縁部が内湾し、以下は直線的にすばまる器形を有する深鉢形土器である。縄文原体は22がRL, 23がLRである。24は口縁部に巡る微隆起線が波状を呈するもので、微隆起線の頂部は口唇部に接する。縄文は主に縦方向に回転され、原体は無節L縄文である。25は橋状把手を2ヶ所に有する土器で、胴部は丸く、口縁部が直立的にすばまる器形を呈する。縄文は縦方向に施文され、原体はRLである。

第6類 (第41図26, 図版10)

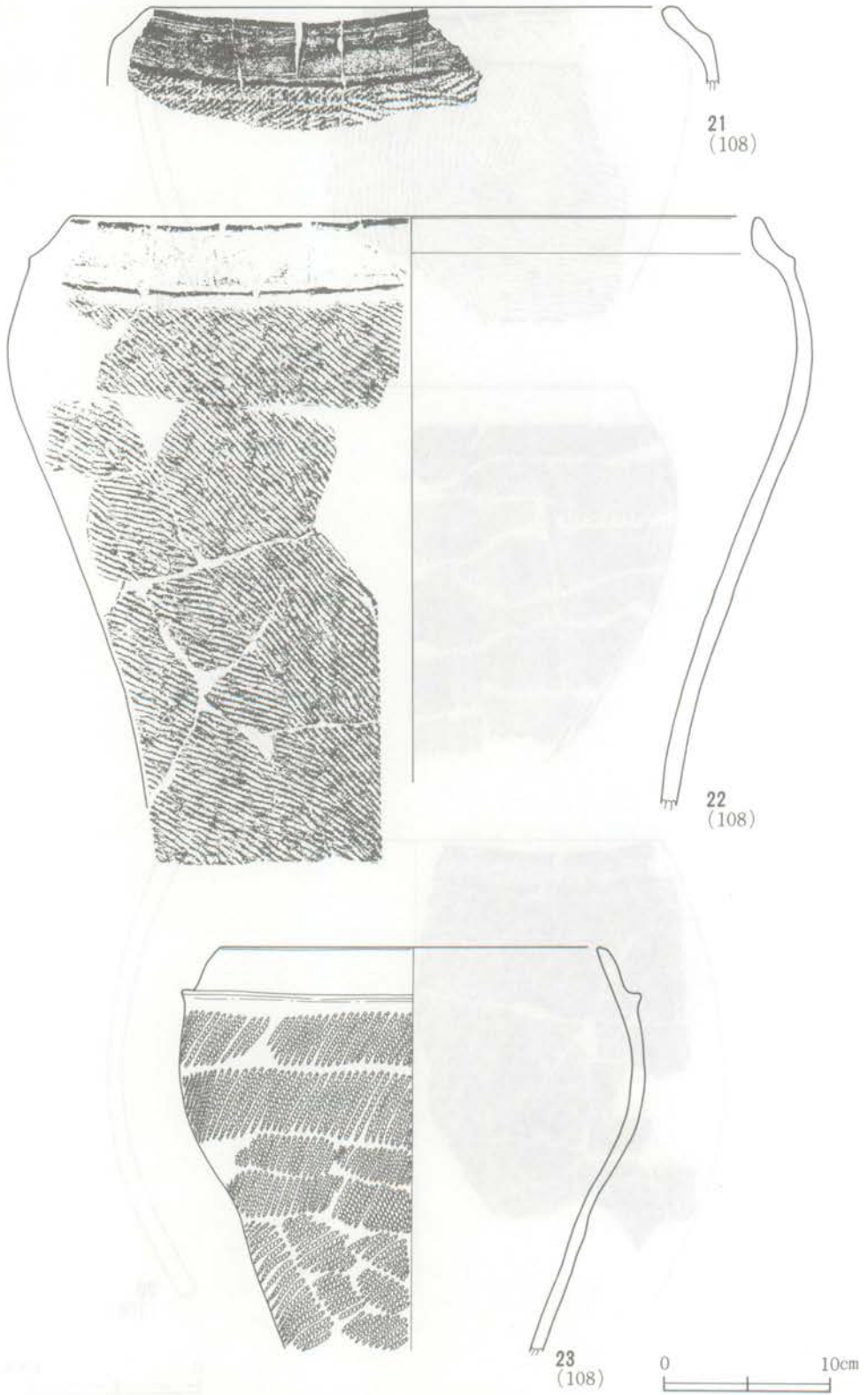
26は微隆起線によりU字状の文様を主として描出するものである。口縁部はわずかに内湾し、頸部は弱くすばまる。縄文はRLである。

第7類 (第41図27~30, 第42図32)

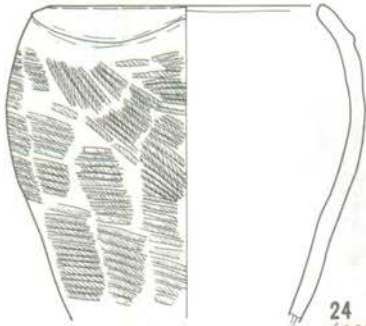


0 10cm

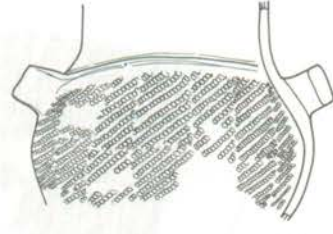
第39図 土壇出土縄文土器実測図(4)



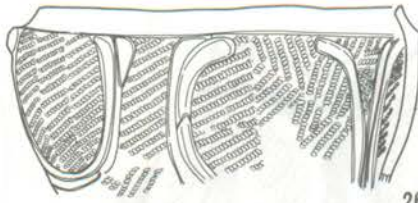
第40図 土坑出土縄文土器実測図 (5)



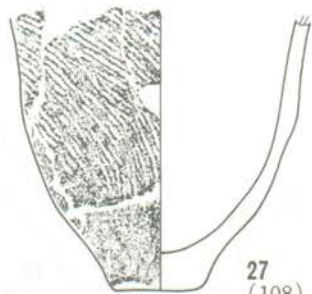
24
(108)



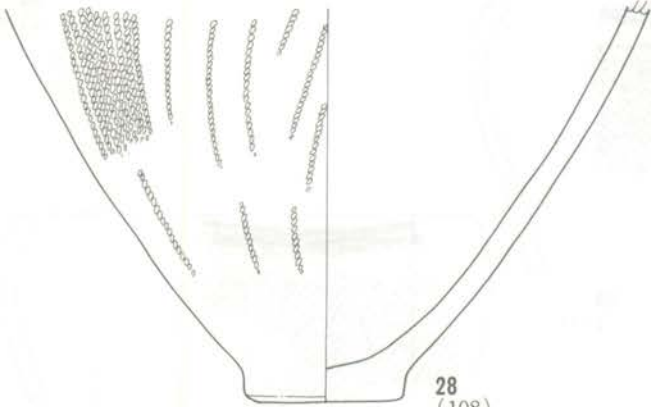
25
(108)



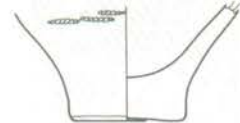
26
(108)



27
(108)



28
(108)



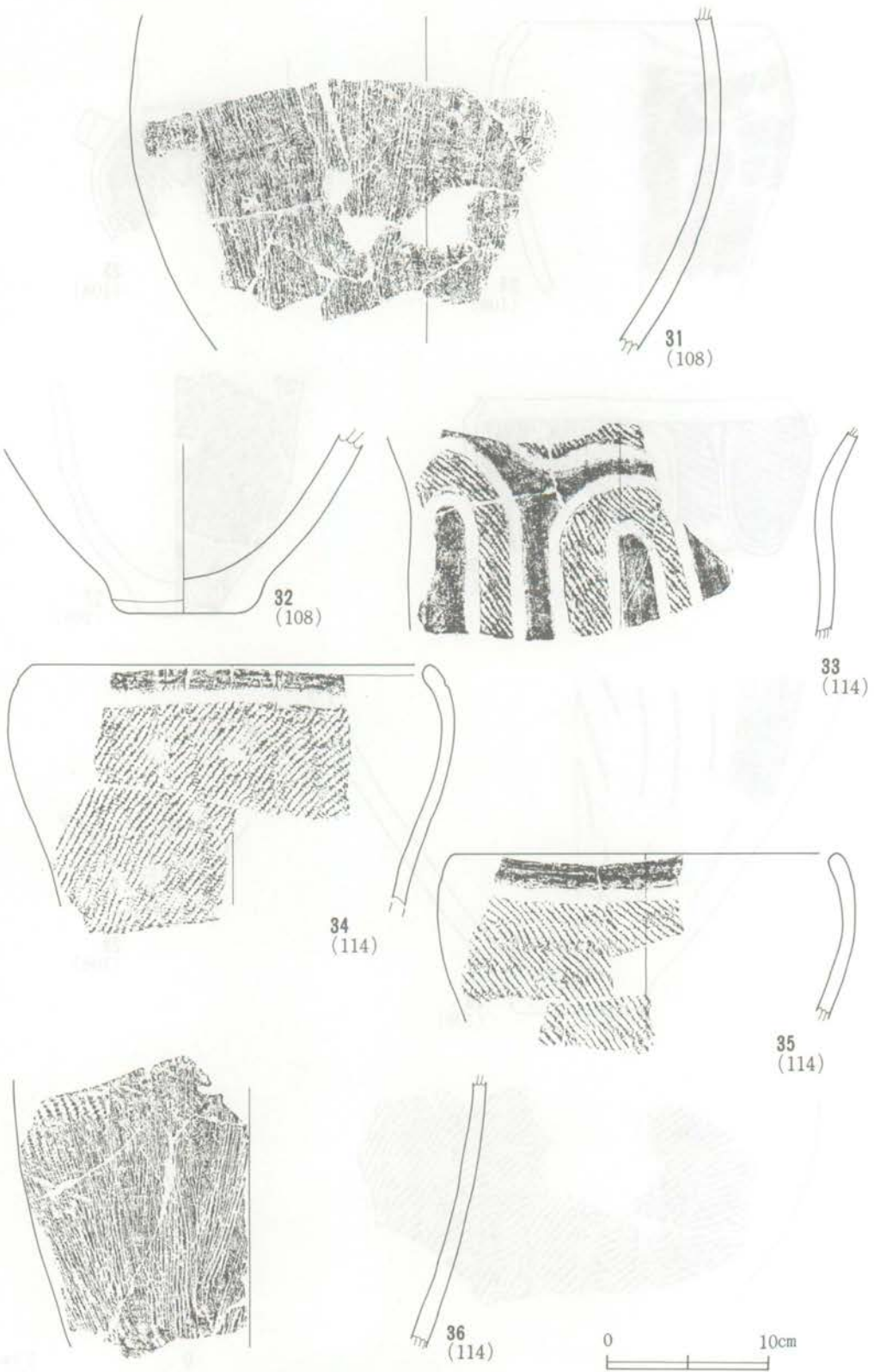
29
(108)



30
(108)



第41図 土壇出土縄文土器実測図(6)



第42図 土壇出土縄文土器実測図 (7)

27は底部径4.5cmを測る。頸部のくびれは弱く、直線的に立ち上がる器形を呈する。縄文は無節L縄文が施される。32は底径7.3cmを測る無文の底部である。ひじょうに厚手の作りで、大形土器の底部であろう。

109号土坑

第6類 (第48図22)

22は内湾する口縁部破片である。微隆起線により円文状の文様構成がとられるものでであろう。

114号土坑

第1類 (第42図33, 図版11)

33は磨消縄文の手法を用いるが、縄文帯を逆U字状に残し、他を磨消するという文様の構成である。便宜上本類に取めたが、称名寺式的様相の濃い土器である。

第2類 (第42図34, 35)

34, 35はいずれも口縁部が内湾し、キャリパー形に近い器形を呈するものと思われる。縄文は34が縦方向に回転するRL, 35は横方向に回転するRLである。

第7類 (第42図36)

36は主に条線文の施された胴下部片で、一部にRL縄文が併用される。

115号土坑

第1類 (第43図37, 38, 第44図39, 図版11)

37は口径42cm, 現存高36.8cmを測る。全面にLR縄文が施され、文様は沈線により区画された磨消縄文帯がU字状、逆U字状に構成されている。38は現存高40cmを測る。頸部がくびれてキャリパー状の器形を呈すると思われる。37と同じく、文様はU字状、逆U字状の構成をとる。底部付近はへら状工具による整形痕が残る。縄文はLRである。39は口径34.4cmを測り、内湾する口縁部を有する。縄文は原体LRが施され、口唇部付近はナデによる磨消を行ない無文部を形成する。

116号土坑

第5類 (第48図24)

24は比較的高い隆起線により口縁部無文帯の区画が施されている。隆起線の頂部は圧されている。

117号土坑

第1類異種A (第48図25~27)

いずれも口縁部に円形の刺突文の巡るものである。文様は幅の狭い磨消縄文帯により、円文状に描出される。縄文は3点ともにRLである。

第2類 (第48図28, 29)

いずれも内湾する口縁部である。施文される縄文は28がRL, 29はRLで付加条が施される。

第6類 (第48図30, 31)

いずれも平行する2本の微隆起線を主体に文様が描出される土器である。

第7類 (第44図40, 図版12)

40は条線文が主体となり、胴上部にはRL縄文の施文も見られる土器である。口唇部付近は横ナデにより無文部を形成する。口径21cm, 器高27cmを測る。

118号土坑

第1類 (第44図41)

41は沈線により区画された文様帯が曲線的な文様を描出する深鉢形土器底部である。底径は5.4cmを測る。

第1類異種A (第44図42)

42は橋状把手を有し、内湾する器形の口縁部破片である。口唇部に沿って刺突文が巡る。文様は沈線により区画された磨消縄文帯の先端が尖がり、向かい合う構成をとる。縄文は無節Rが施文される。

第4類 (第44図43~45)

43~45はいずれも口縁部が内湾する器形を呈する。縄文は43がLR, 44がRL, 45は無節Lが施文される。

第5類 (第45図46~48, 図版12)

47は口縁部が内湾し、頸部は細くすぼまる器形を呈する。縄文は縦方向に回転施文され、原体はRLである。48は緩やかな波状口縁を呈し、波頂部には2対の突起を有する。縄文は縦方向に回転され、原体はRLである。

第6類 (第45図49, 図版12)

49の口縁部下に見られる隆帯は太く、隆帯頂部は圧されて、断面形は台形に近い。隆帯は口縁部に巡り、一部で渦文状を呈する。隆帯より上は幅の広い口縁部無文帯となる。推定口径48.4cmを測る浅鉢形土器である。

第7類 (第46図50, 51)

51の器形は頸部が強くすぼまる。縄文は主として斜方向に原体RLが施文される。

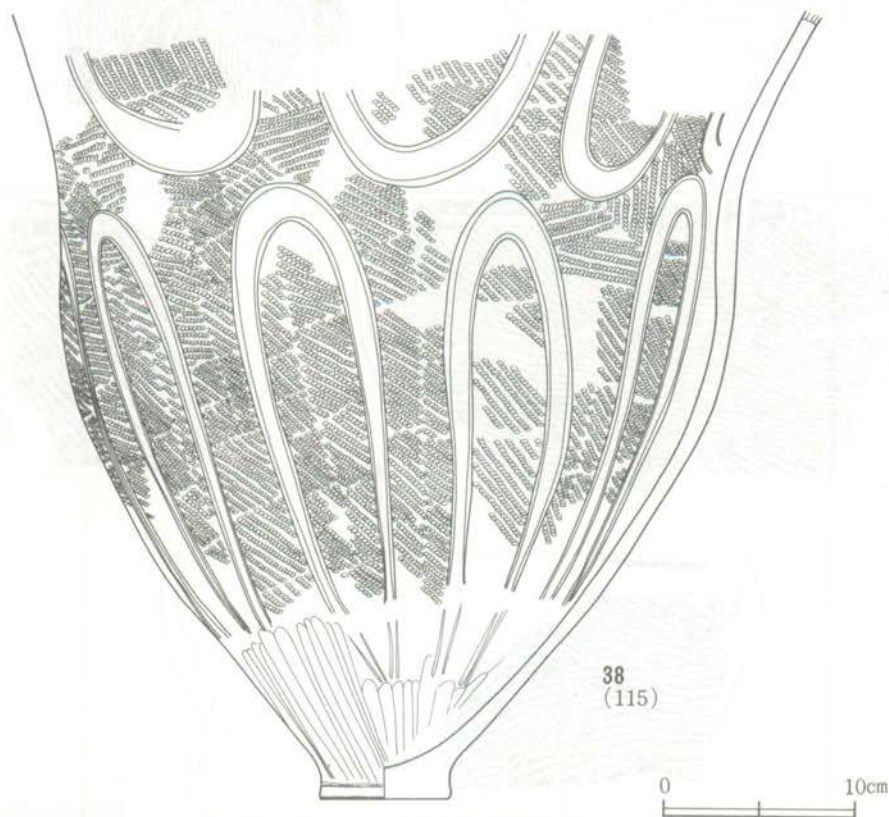
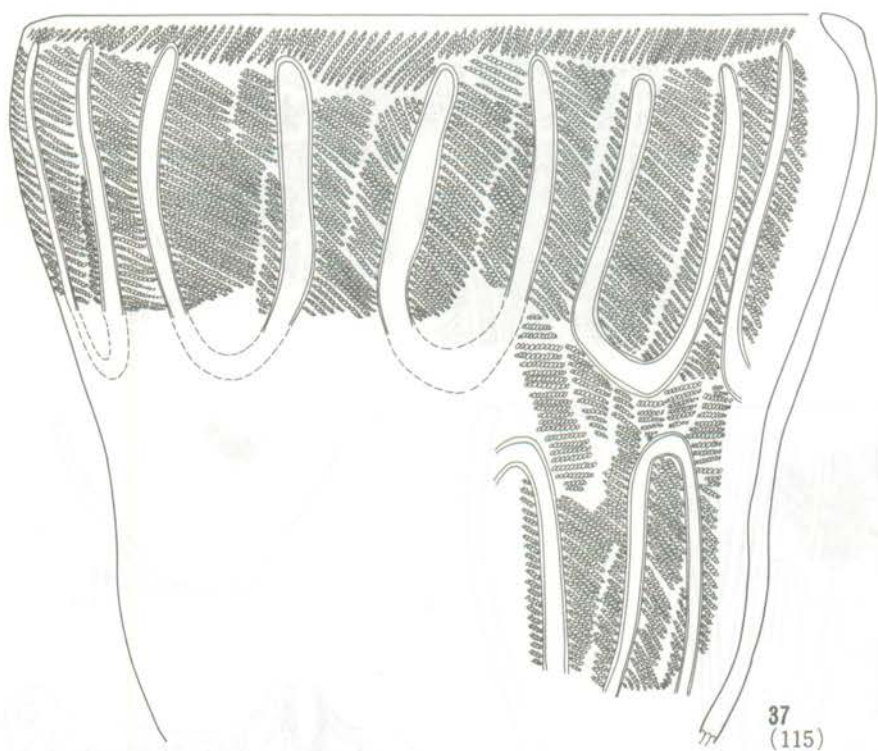
119号土坑

第1類 (第48図32)

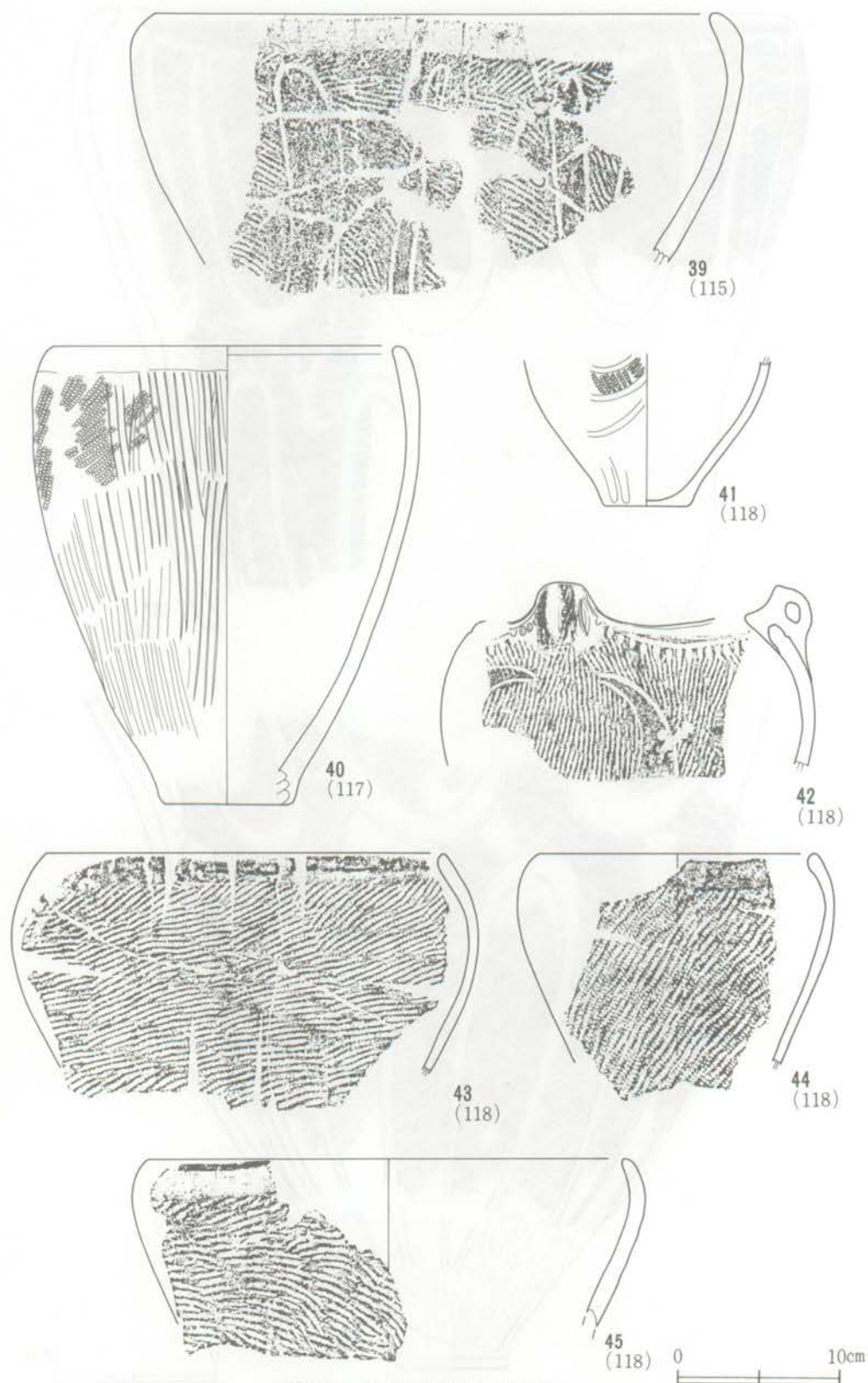
32はやや細く硬化した沈線により磨消縄文帯の区画が行なわれる。

第7類 (第48図33)

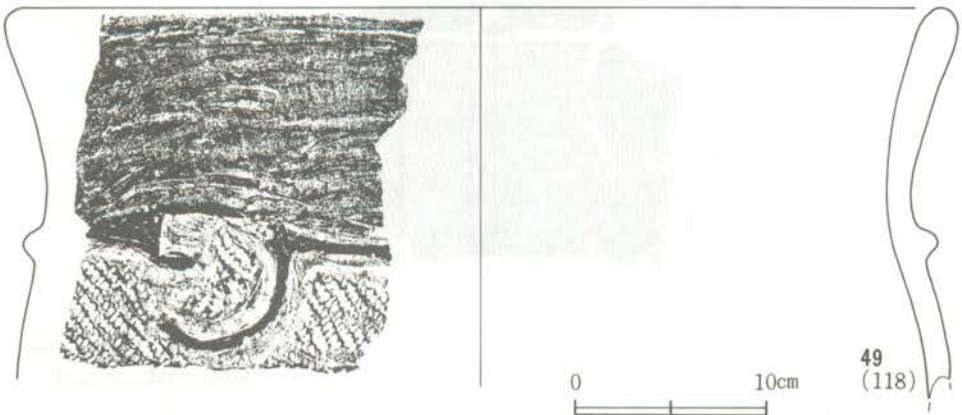
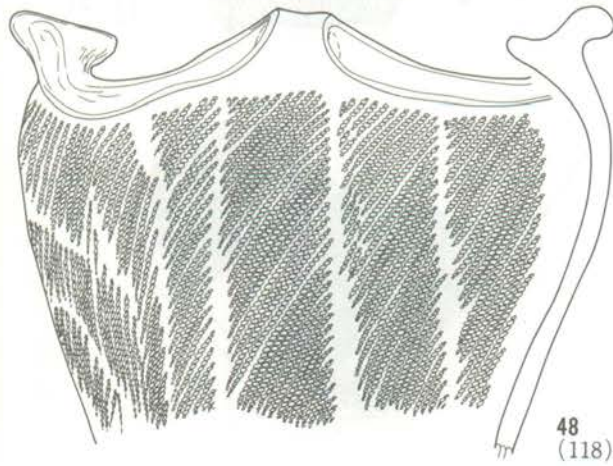
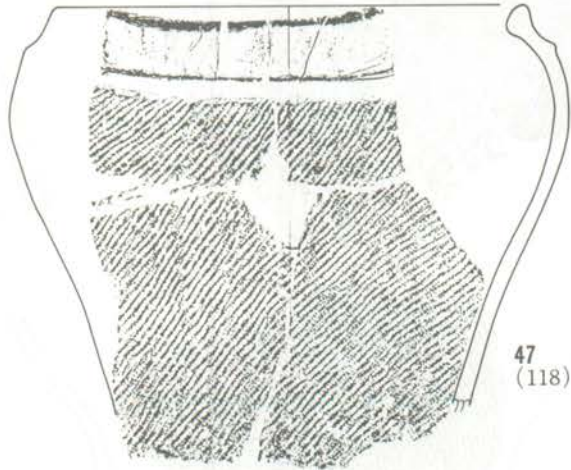
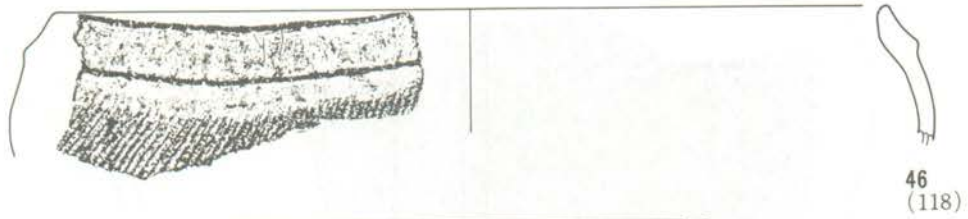
33はLR縄文の施される胴部破片である。



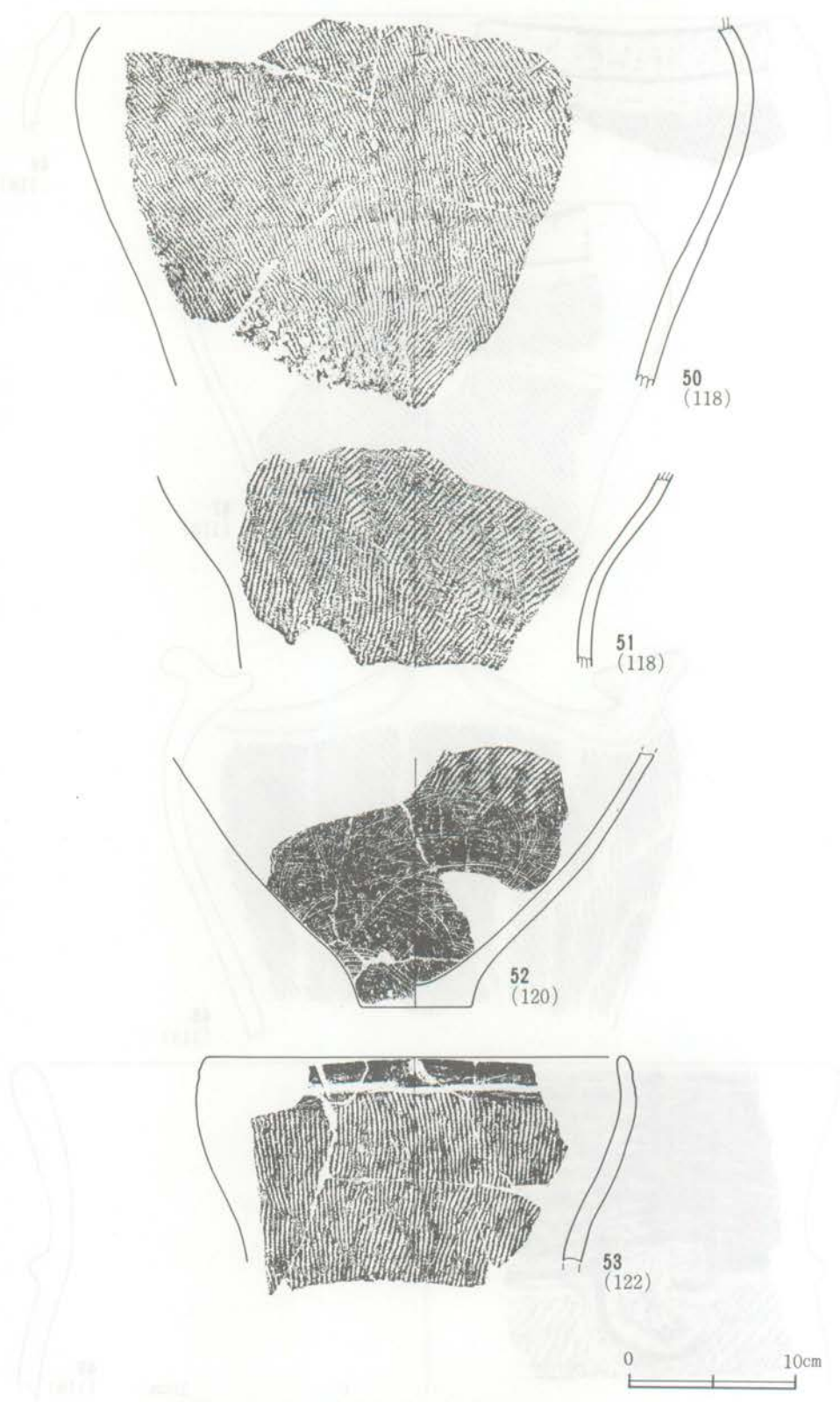
第43図 土壇出土縄文土器実測図(8)



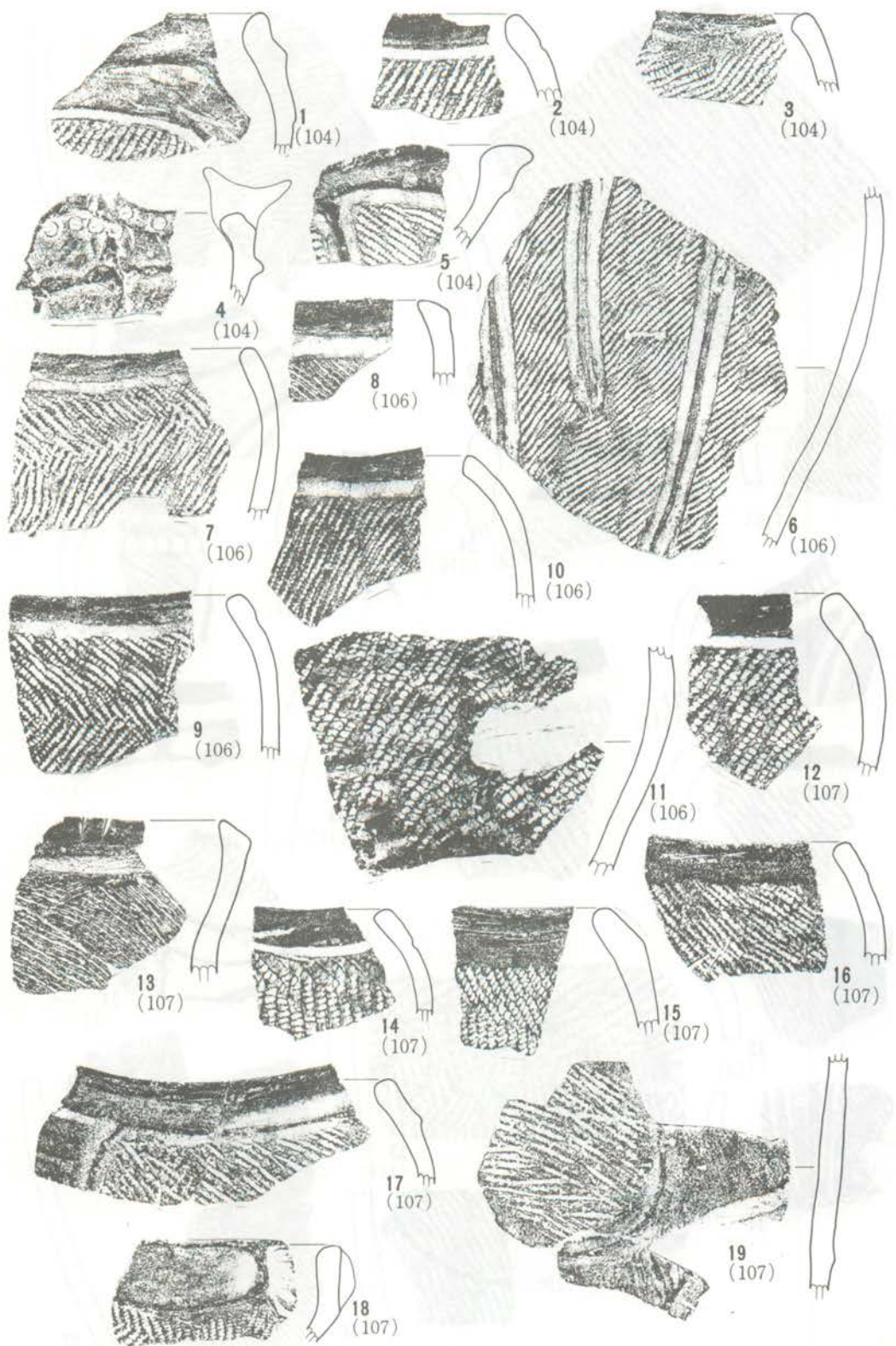
第44図 土壇出土縄文土器実測図 (9)



第45图 土坛出土縄文土器実測图 (10)

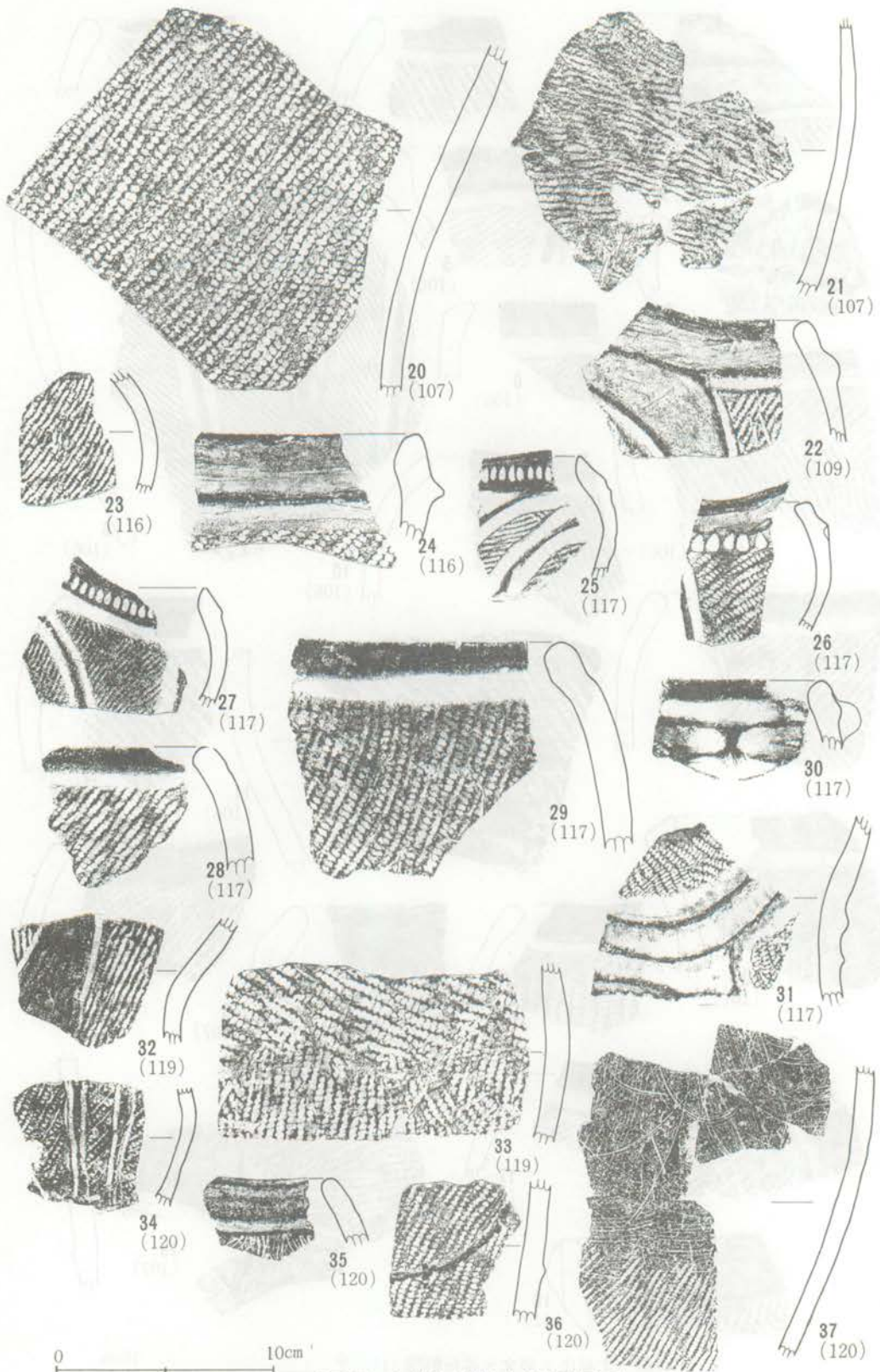


第46図 土壇出土縄文土器実測図 (1)



第47図 土坑出土縄文土器拓影図 (1)

0 10cm



第48図 土坑出土縄文土器拓影図 (2)

120号土坑

第1類 (第48図34)

34は沈線によって区画された磨消縄文帯が懸垂するものである。縄文は原体RLに付加条が施される。

第3類 (第48図35)

35は口縁部に一条の沈線が巡り、以下は条線の施される土器である。

第6類 (第48図36)

36は磨消縄文帯を併用せずに単独の微隆起線により文様が描出される。

第7類 (第46図52, 第48図37)

いずれも条線と縄文が併用される土器で、条線は弧状ないし円状に描出される。施文される縄文は2点ともRLである。

122号土坑

第2類 (第46図53)

推定口径25cmを測る。口縁部は緩やかに内湾する。口縁部無文帯を区画する沈線以下は全面に原体RL縄文が施される。

○土製品

土器片錘 (第49図1, 図版20)

106号土坑から1点だけ出土している。形状は長方形に近く、長軸上の2ヶ所に糸掛けのための切り込みを有する。重量は16.60gである。

土製円盤 (第49図2～7, 図版20)

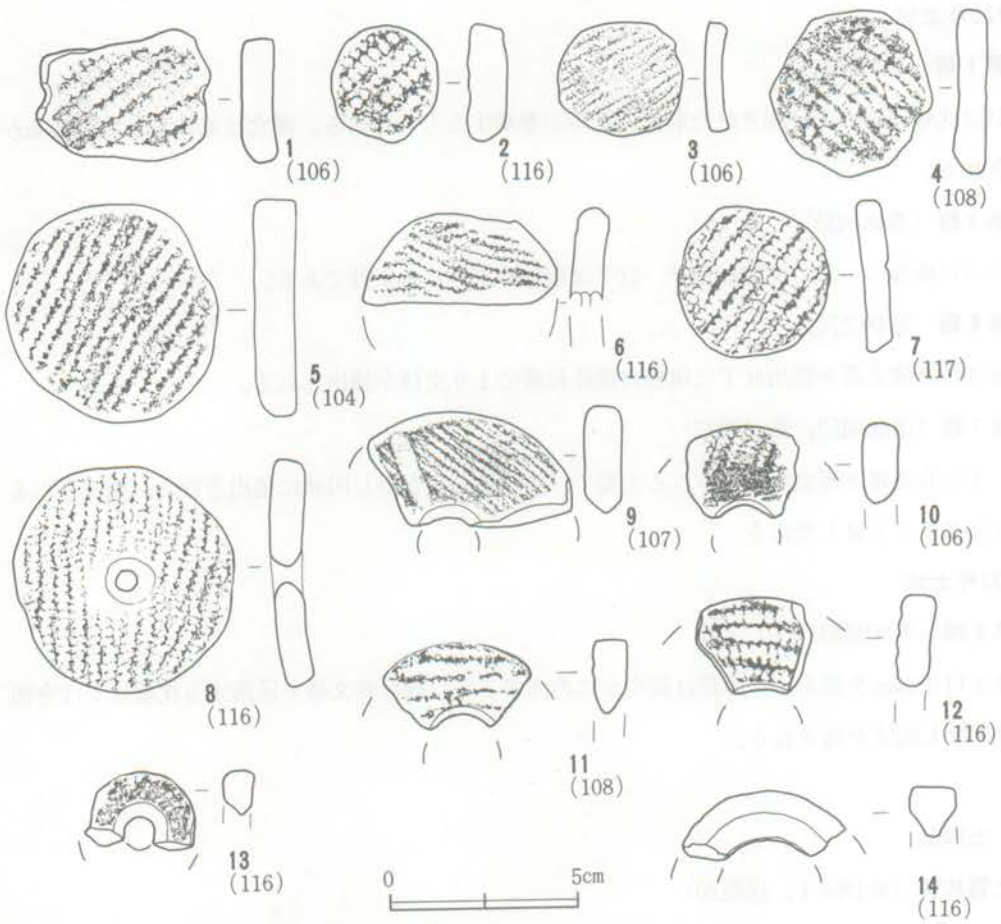
6点出土している。116号土坑から2点、104号、106号、108号、117号の各土坑から1点ずつを数える。全て胴部土器片を利用している。重量は最大のもので44.35g、最小7.60gで平均重量は19.34gである。土器片の周囲は全面研磨されるものと部分的に研磨されるものが半々であり、極めて良く研磨されるものはなかった。

有孔土製円盤 (第49図8～13, 図版20)

6点出土している。116号土坑から4点、106号、107号、108号土坑から各一点を数える。8以外は全て欠損品である。穿孔は裏面の孔径の方が表面より大きいもの(10, 11, 13)と両面から同じく穿孔されるもの(8, 9, 12)とに識別できる。

環状土製品 (第49図14, 図版20)

116号土坑から1点だけ出土している。欠損品である。焼成は普通、胎土には砂粒を含む。推定外径は5.5cmである。



第49図 土壇出土土製品実測図

第4表 土壇出土土製品計測表

(単位: cm)

挿図番号	遺物番号	器種	長軸	短軸	最大厚	重量(g)
1	106-0001	土器片 鉢	4.5	2.8	0.8	16.60
2	116-0001	土製円盤	2.9	2.9	1.1	12.89
3	106-0001	土製円盤	3.4	2.7	0.5	7.60
4	108-0063	土製円盤	4.3	4.0	0.9	17.23
5	104-0001	土製円盤	5.6	5.5	1.1	44.35
6	116-0001	土製円盤	5.0	2.2	0.9	(12.04)
7	117-0017	土製円盤	4.0	3.7	0.7	14.64
8	116-0016	有孔土製円盤	5.8	5.8	0.9	40.90
9	107-0001	有孔土製円盤	—	—	1.0	(19.05)
10	106-0001	有孔土製円盤	—	—	1.0	(7.30)

11	108-0001	有孔土製円盤	—	—	0.8	(7.10)
12	116-0001	有孔土製円盤	—	—	0.9	(7.79)
13	116-0051	有孔土製円盤	—	—	0.8	(4.35)
14	116-0013	環状土製品	—	—	1.2	(8.84)

○石器

磨石 (第50図 1, 2, 図版25)

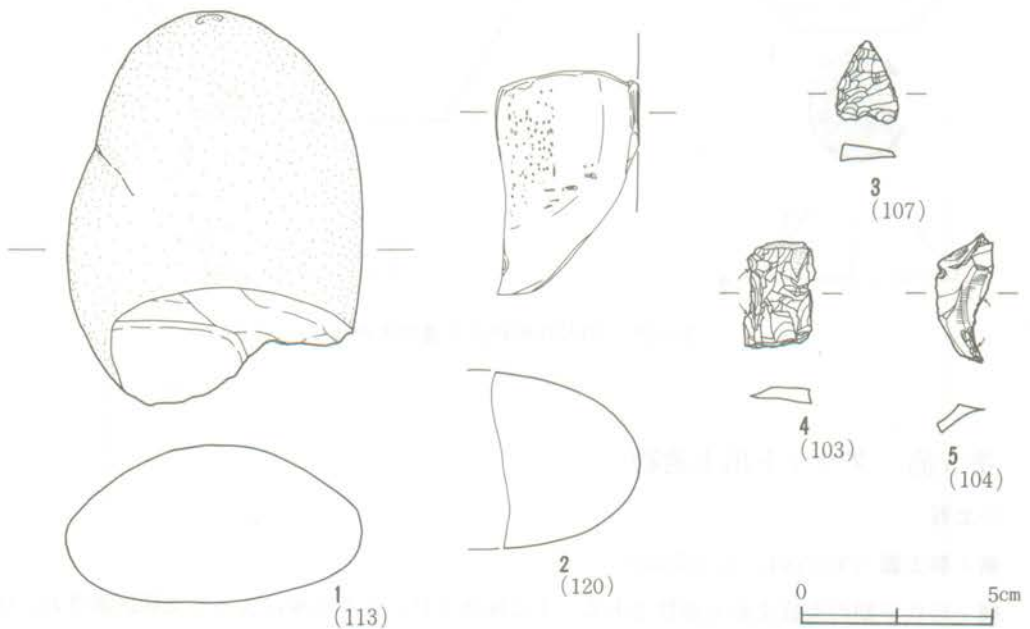
1は113号土坑からの出土で、表面は丹念に磨かれる。石材は石英斑岩。2は120号土坑からの出土で側面には敲石としての敲打痕が残る。砂岩製。

石鏃 (第50図 3, 図版25)

107号土坑からの出土で、安山岩製である。基部は小さく挟まれる。表面は主として側縁に剝離が施され、裏面はほぼ全面に一次剝離面を残す。

使用痕のある剥片 (第50図 4, 5, 図版25)

4は縦長の剥片を用いたもので、石材はチャートである。103号土坑出土。5は側縁の挟れた部位にリタッチを有するもので、石材は黒曜石である。104号土坑からの出土。



第50図 土坑出土石器実測図

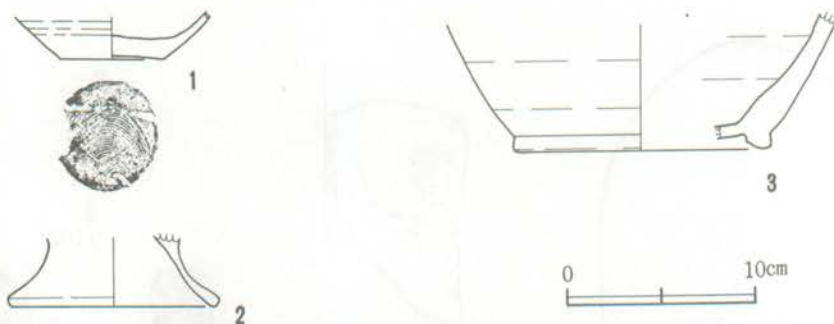
第5表 土壇出土石器計測表

挿図 番号	遺物番号	器種	計測値 (cm)			重量(g)	石質
			長さ	幅	厚		
1	113, 0002	磨石	10.0	7.8	4.1	410	石英斑岩
2	120, 0018	磨石	5.8	3.8	4.5	118	砂岩
3	107, 0001	石鉄	2.2	1.6	0.4	1.27	安山岩
4	103, 0001	ユーフレ	2.8	1.9	0.3	2.87	チャート
5	104, 0051	ユーフレ	3.2	1.6	0.3	1.89	黒曜石

第4節 歴史時代の遺物

001号住居跡出土遺物 (第51図1～3)

1は底径5.5cmを測る坏底部である。ロクロにより整形が行なわれ、回転糸切り痕を有する。2は高台で、推定外径11cmを測る。内外面ともにナデによる調整を施す。上部との剥離面に貼り付けの痕跡を残す。3は須恵器瓶底部で、推定底径は13.5cmを測る。外面へラケズリ、内面ナデにより調整される。



第51図 001号住居跡出土遺物実測図

第5節 グリット出土遺物

○土器

第1群土器 (第62図1, 2, 図版15)

縄文時代早期の条痕文系土器群である。1は棒状工具による沈線によって文様区画され、区画内は同じく棒状工具による斜沈線が充填される野島式土器である。胎土に含まれる繊維は微量で色調は赤褐色を呈す。2は沈線と竹管状工具による押し引きによって文様が区画され、区画内は無節L縄文が充填される。胎土に含まれる繊維は多量である。鶉ヶ島台式土器に比定で

きる。

第II群土器（第52図，第62図3～21，図版15）

縄文時代前期の土器群である。胎土に含まれる繊維の有無で2種類に分類できる。

第1類

胎土に繊維を含む土器である。施文工具には竹管状工具が用いられる。第52図1，2，第62図7，9～11，15は半截竹管により連続瓜形文を施すものである。1は，口縁部に間隔を置いて二条の連続瓜形文が施され，以下はいわゆる肋骨文的文様を描出する。2は，三条の連続瓜形文以下はLR縄文上に平行斜沈線が施される。口唇部には刻目を有する。9も口唇部に刻目を有し，二条の連続瓜形文と平行斜沈線により文様が構成される。第52図3，4，6は地文に縄文が施された後，口縁部に平行斜沈線を巡らすものである。3，4の沈線間の幅は狭い。3は地文にRL縄文を施し，胴部には二条の平行沈線間に鋸歯状の平行沈線を加えるものである。第62図8，12～14は連続する刺突文の施されるものである。8は波状口縁を呈し，地文には無節L縄文が施される。12，13は刺突のあいまに工具が器面から離れず，平行沈線を残す。16，17は縄文のみ施されるもので，16には羽状縄文の下半部のみが残る。

本類は全体に焼成の不良のものが多く，黒浜式とその併行期に位置づけられるものである。

第2類

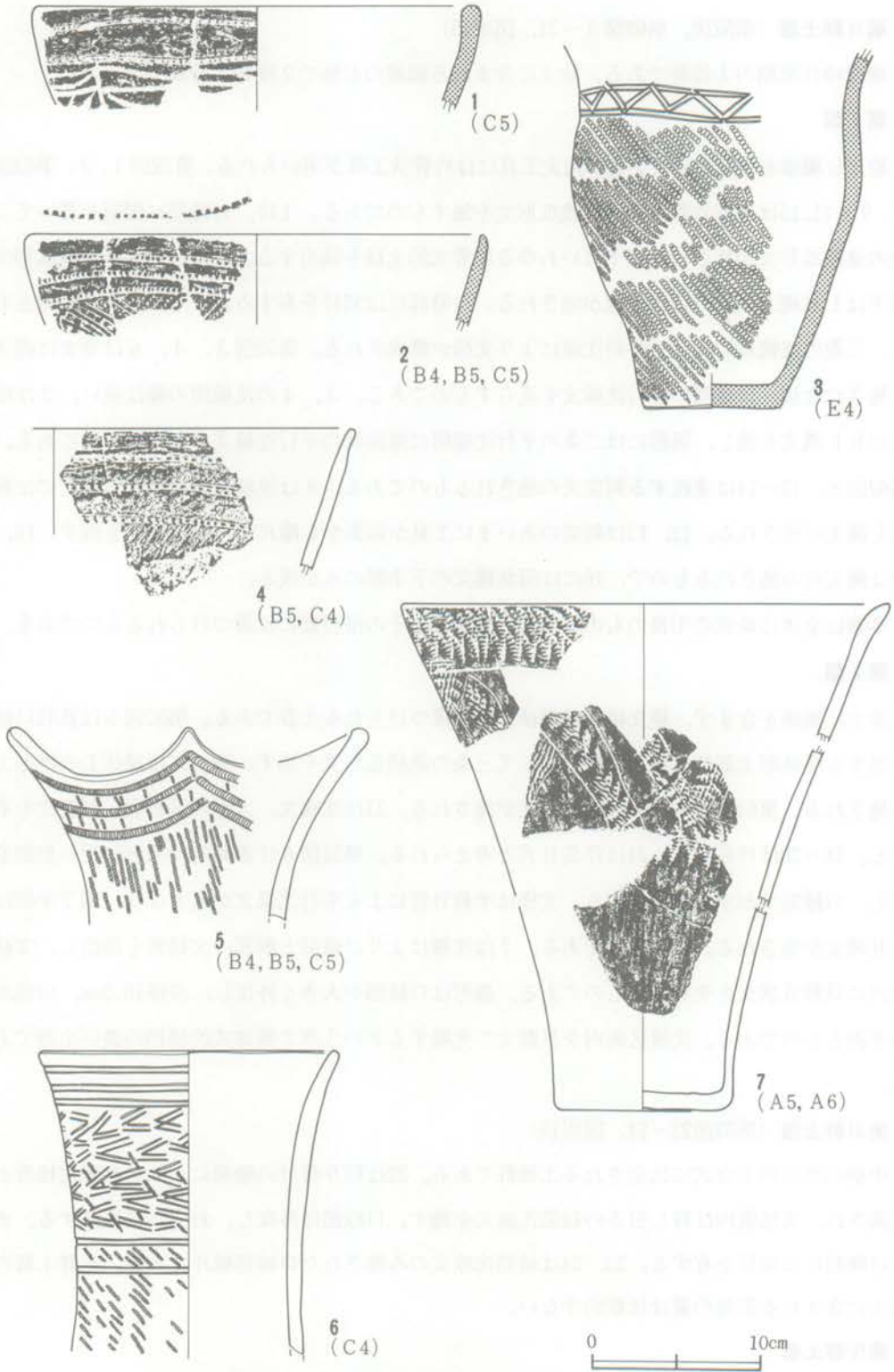
胎土に繊維を含まず，縄文時代前期後半に位置づけられる土器である。第52図5は波状口縁を呈する深鉢形土器で，波状口縁に沿って三条の連続瓜形文を施す。地文には原体Lの撚糸文が施される。第62図18～20も連続瓜形文が施される。21は沈線文，大形の瓜形文，刺突文を有する。18～20は浮島I式，21は浮島II式と考えられる。第52図6は直線的で筒形に近い形態を有し，口縁部はわずかに外反する。文様は半截竹管による平行沈線文が主となり，胴下半部はLR縄文が施される。浮島I式である。7は沈線により口縁部と胴部の文様帯を描出し，文様帯内に貝殻波状文を充填するものである。器形は口縁部が大きく外反し，底径10.5cm，口径29cmを測るものである。沈線区画内を貝殻文で充填するという点で興津式的様相の濃い土器である。

第III群土器（第62図22～24，図版15）

中期前半の阿玉台式に比定される土器群である。22は貼り付けの隆帯により口縁部文様帯が区画され，文様帯内は押し引きの結節沈線文を施す。口縁部は外反し，わずかに肥厚する。また口縁部には刻目を有する。23，24は結節沈線文のみ施された口縁部破片である。本群土器の胎土に含まれる雲母の量は比較的少ない。

第IV群土器

本遺跡出土土器の主体を占めるのが本群で，加曾利E式後半の土器群である。型式的にはE



第52図 第II群土器実測図

Ⅲ式に含まれるものが最も多く、微隆起文を特徴とする土器もまとまった出土を見せている。ここでは本群土器をさらにいくつかの類型に分け、以下にその説明を行なってゆきたい。

第1類 (第53図8～10, 第63図25～32, 図版12, 16)

胴部に磨消縄文帯を有する土器である。8はRL縄文と懸垂文からなる土器である。9は磨消縄文の文様帯がU字状を呈し、地文はLR縄文が施される。10は横位の沈線により口縁部に無文帯を作り出している。胴部は原体の比較的細かいLR縄文を施し、磨消縄文帯はX字状の構成をとる。器形は緩いキャリパー形で、波状口縁に小突起を有する。25～29は磨消縄文帯が曲線的に描出されるもので、25の口唇部直下には二段の刺突文が施される。口縁部の形態は波状を呈する26を除いて内湾する。31はS字状の沈線文間に磨消が行なわれている。

本類は、時期的には新山台遺跡における加曾利E式土器群の中では比較的古い段階のものと、後期初頭の称名寺式土器に含まれるものが存在する。

第2類 (第53図11～第54図15, 第63図33～44, 図版12, 13, 16)

口縁部に横位一条の沈線文を施すことにより口縁部無文帯を有し、以下は全面に縄文の施される土器である。口縁部の無文帯は器形の内湾するものの方が狭く、15では口唇部直下といえる位置に沈線が施されている。逆に口縁部がやや外反する器形を有する12では幅広の無文帯となる。全体に沈線は太く描かれ、口縁部の形態は緩く内湾するものが多い。施される縄文の原体は全て単節であるが、方向別、撚別の扁在は認められない。40は原体RL縄文の施文方向を変えることで羽状縄文を描出している。

第3類 (第54図16, 第55図17, 18)

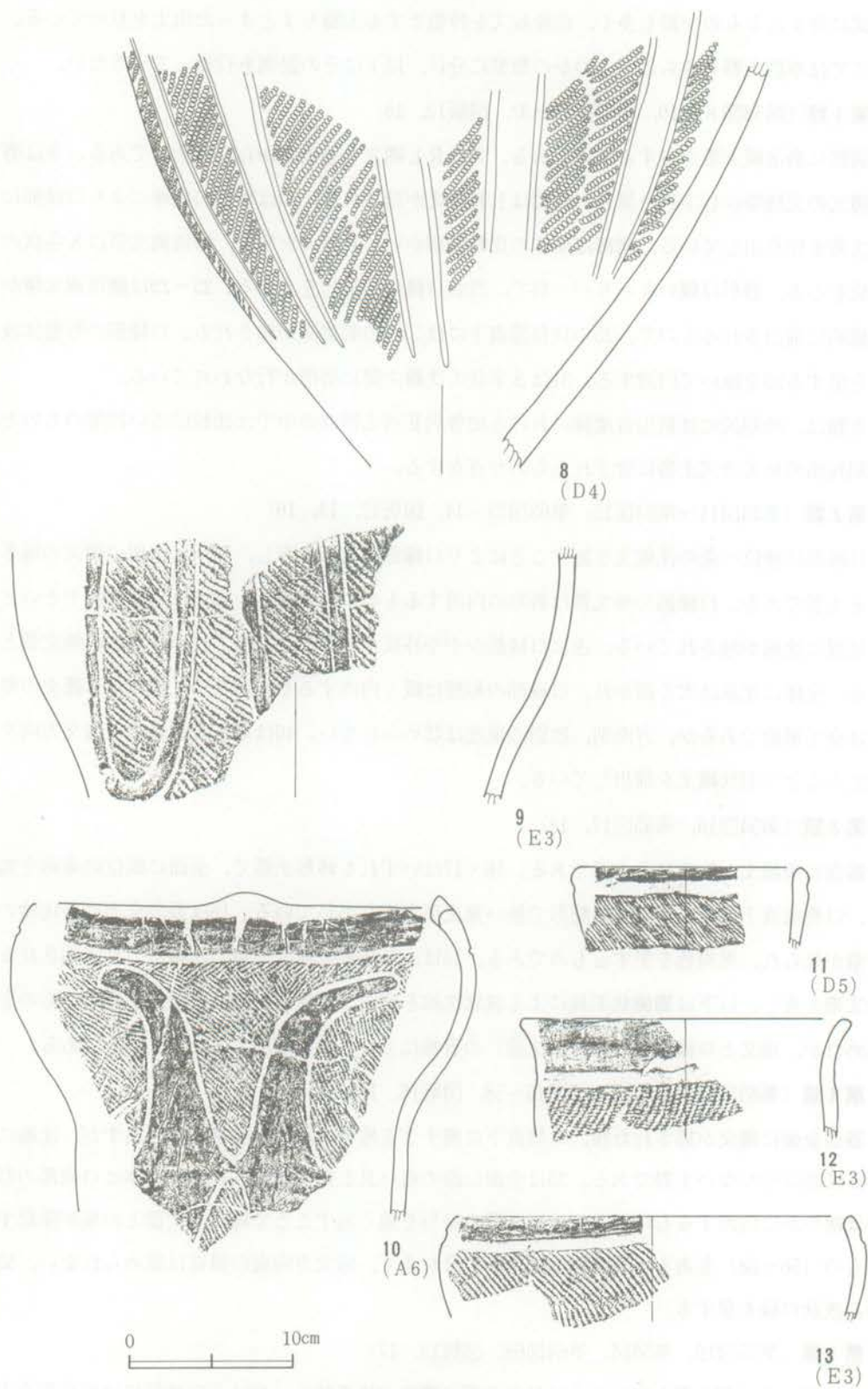
器面に条線文が施される土器である。16・17はいずれも鉢形土器で、全面に縦位の条線を施し、口唇部直下は横ナデによる整形で狭い無文部を作り出している。16は器表全面に炭化物の付着が見られ、黒褐色を呈するものである。18は、口縁部に横位一条の沈線により区画される無文帯を有し、以下は櫛歯状工具による波状沈線を施す。本類は単純に条線文を有するものを集めたが、地文と口縁部の区画文(沈線)の有無によりさらに細別することも可能である。

第4類 (第63図35, 第64図, 65図45～58, 図版16, 17)

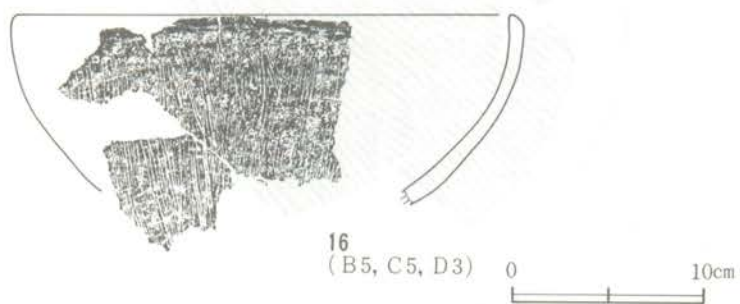
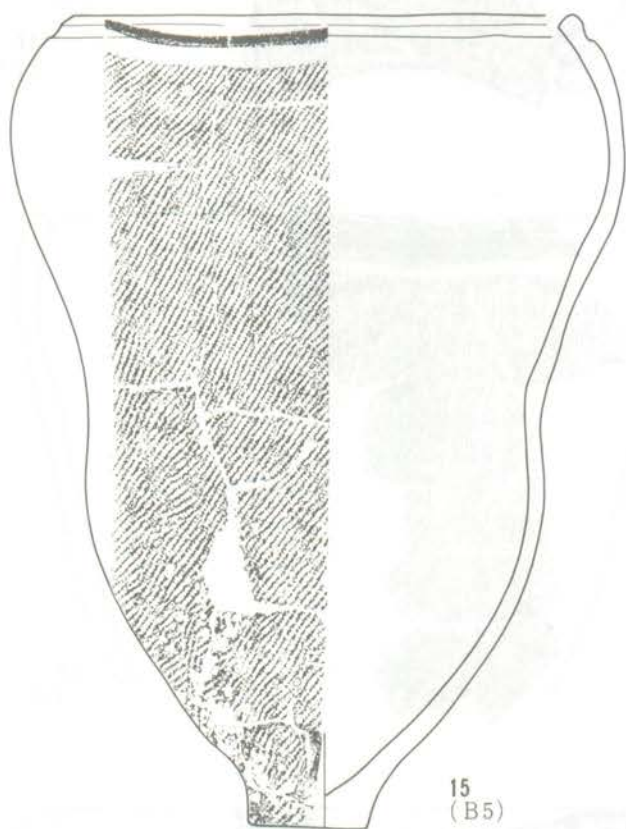
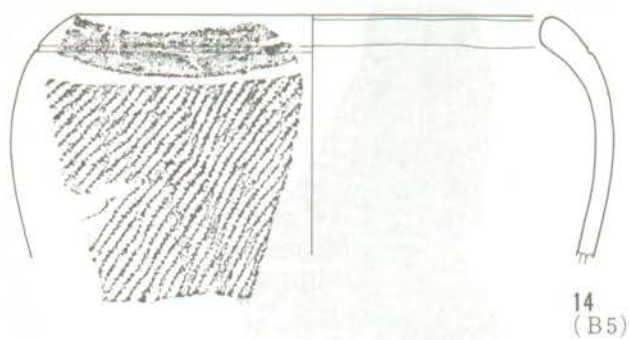
器面全面に縄文が施された後、口唇直下に横ナデを施し口縁部無文帯を作り出すが、沈線による区画は持たない土器である。35は全面に節の粗いRL縄文が施される。全体に口縁部の形態は緩やかに内湾するものが多く、無文帯の整形を強く施すことで縄文施文部との境が隆起するもの(56～58)もある。縄文原体は単節LRが多く、施文方向別の扁在は認められない。53のみ波状口縁を呈する。

第5類 (第55図19, 第56図, 第64図68, 図版13, 17)

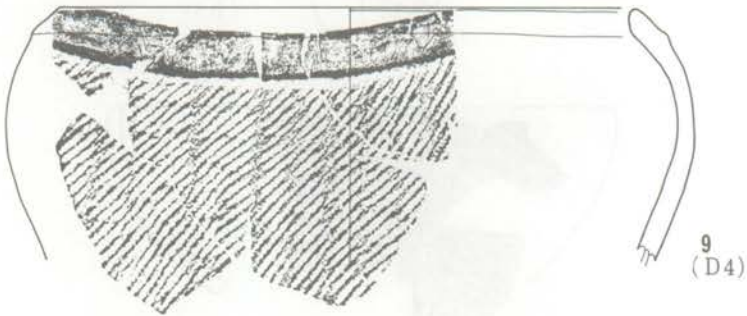
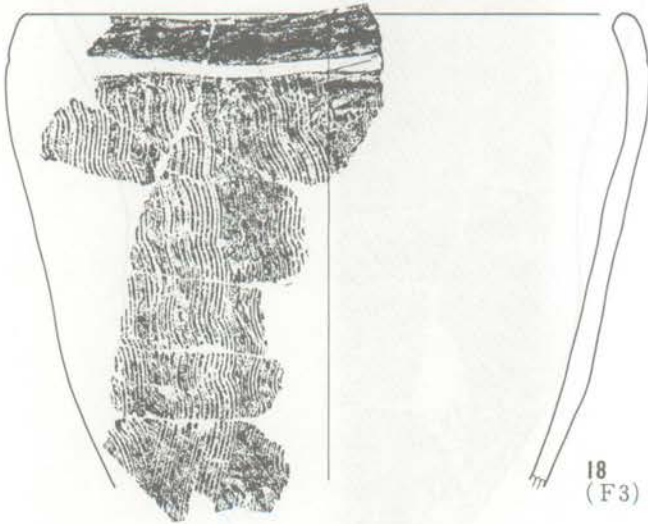
第2類, 第4類土器と同じように器面全面に縄文が施される。やはり口縁部には無文帯を有



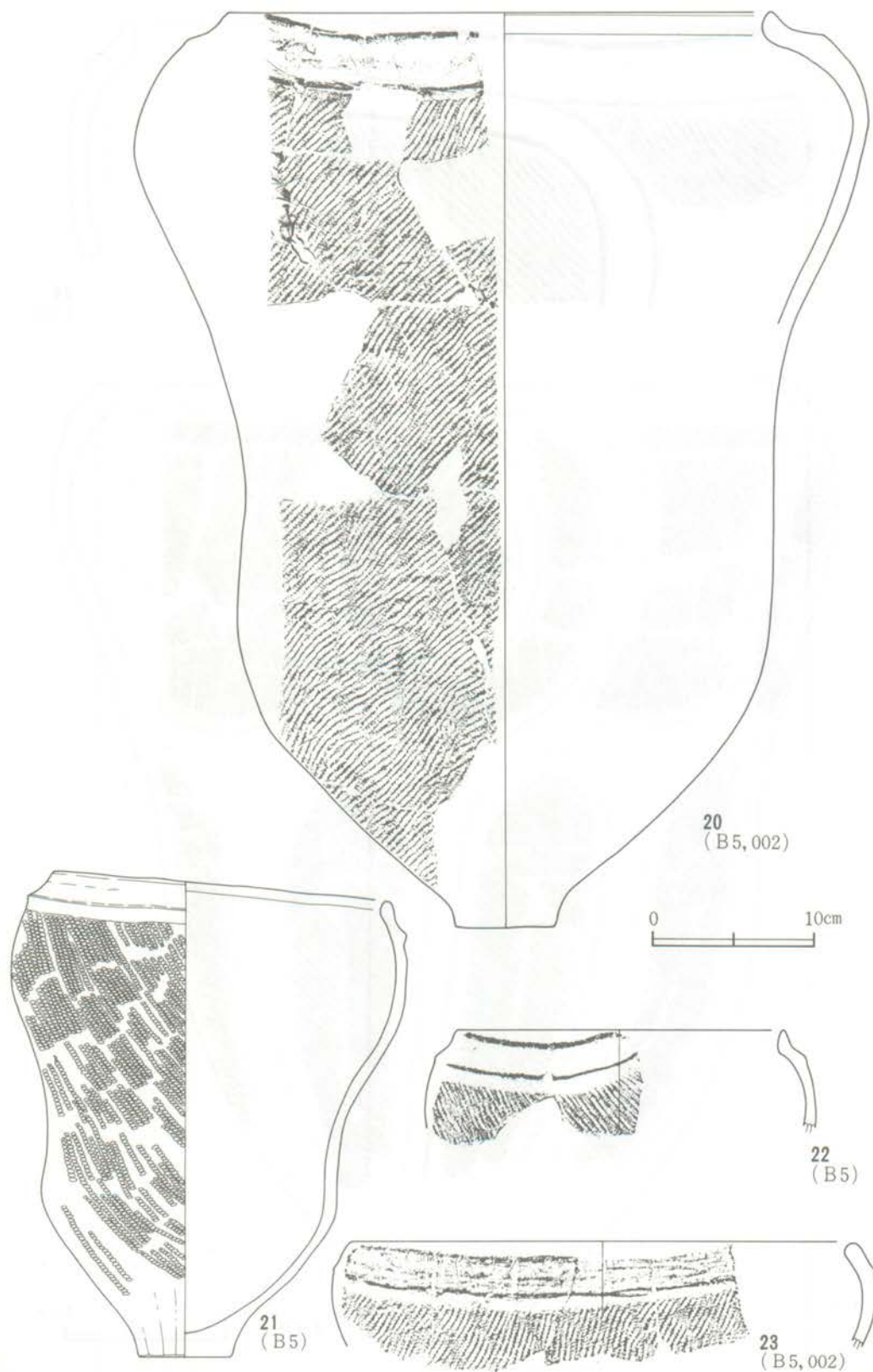
第53图 第IV群土器実測图(1)



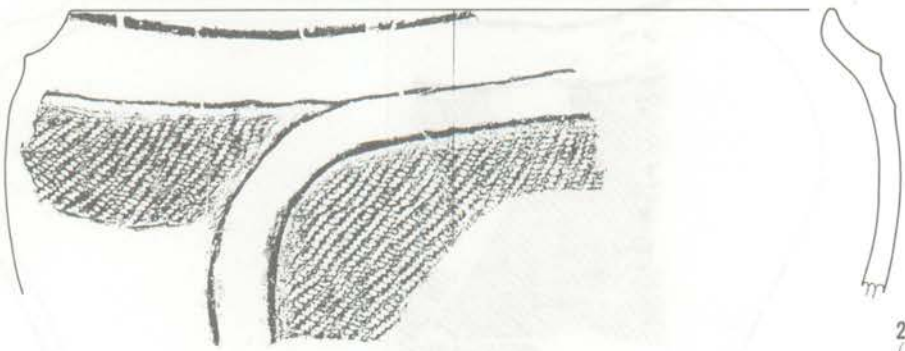
第54図 第IV群土器実測図(2)



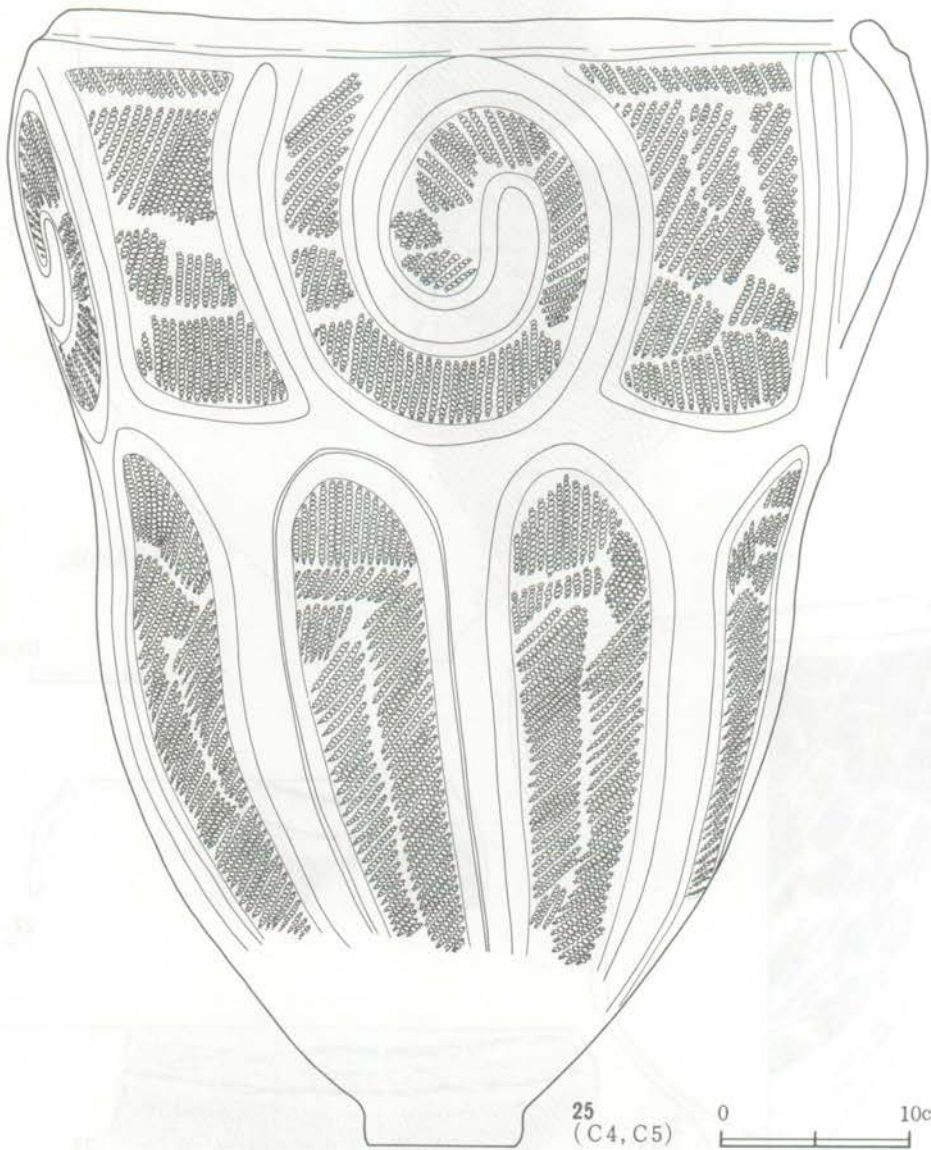
第55図 第IV群土器実測図 (3)



第56图 第IV群土器実測图(4)



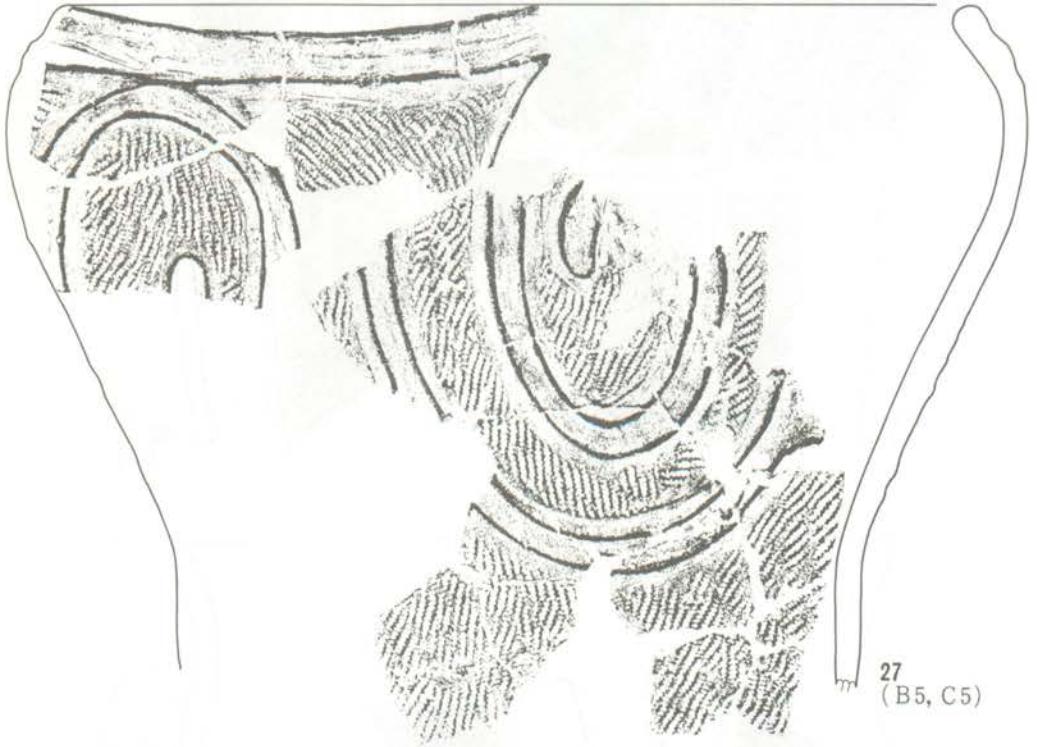
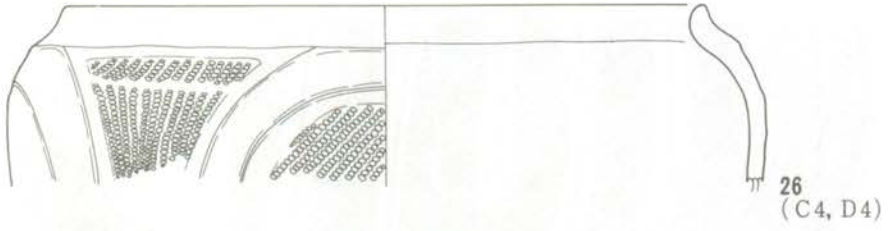
24
(B5)



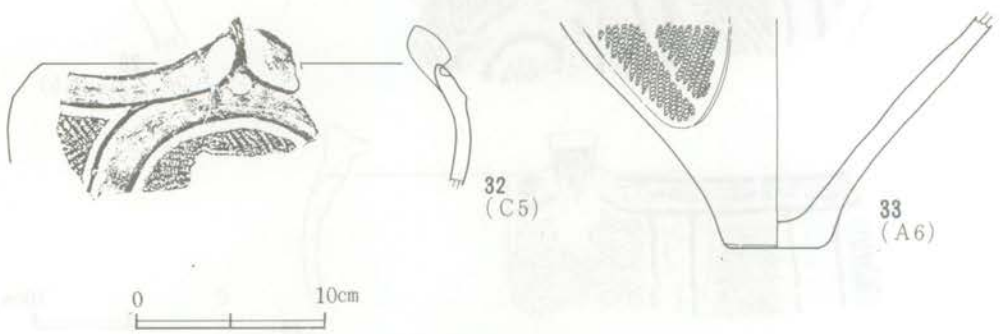
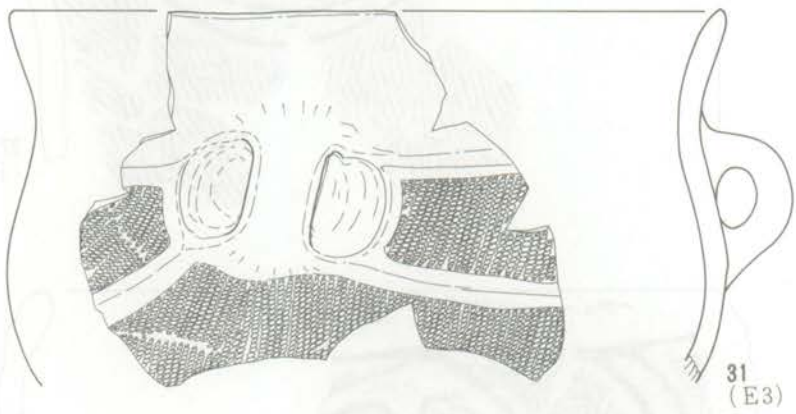
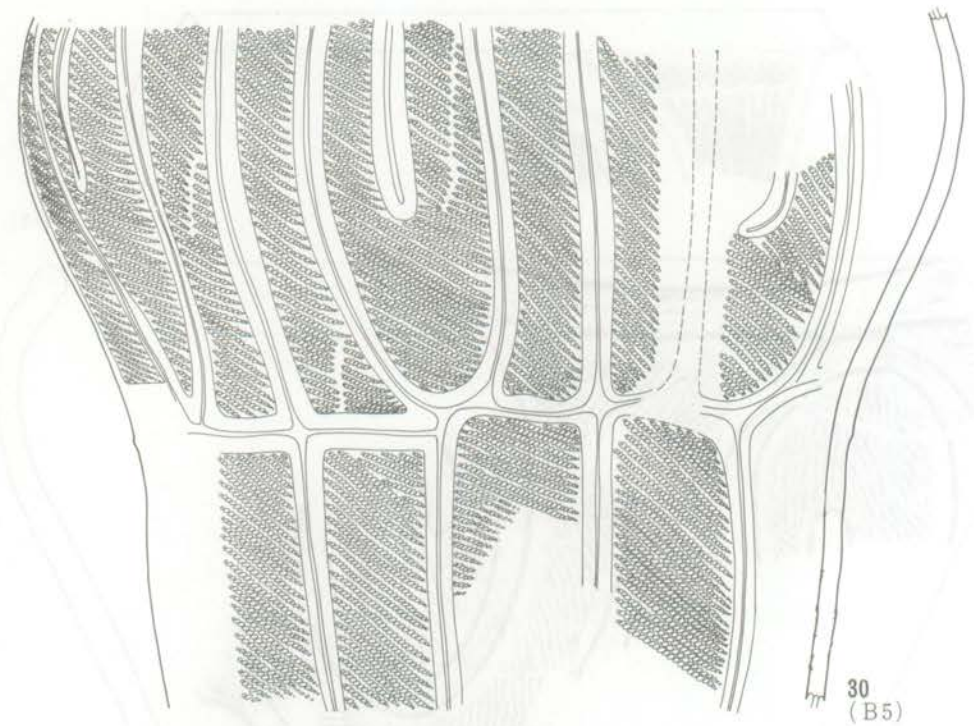
25
(C4, C5)

0 10cm

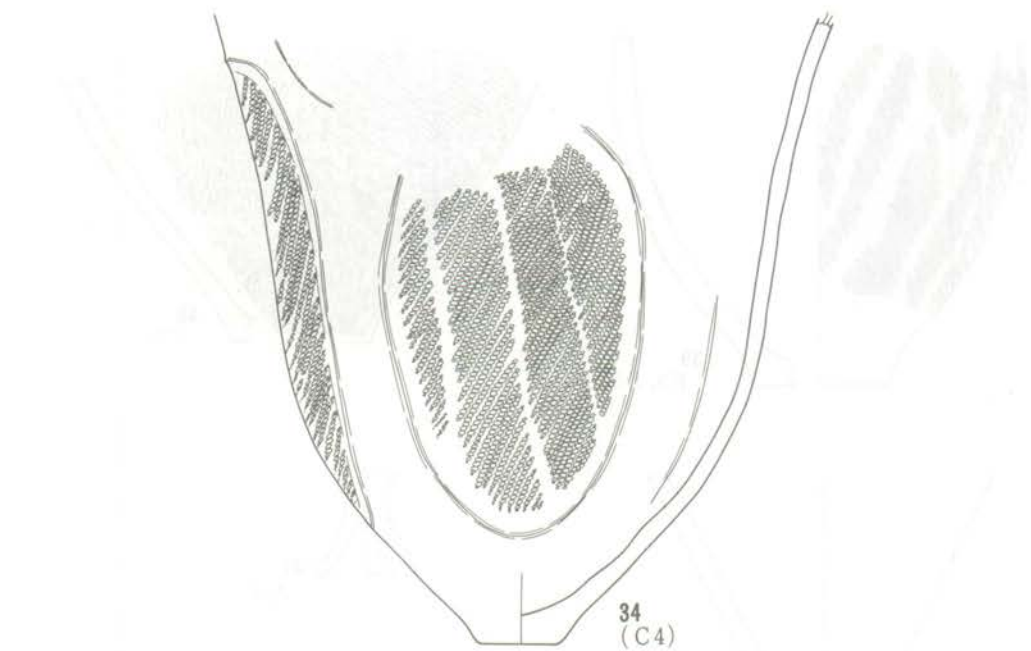
第57図 第IV群土器実測図(5)



第58図 第IV群土器実測図(6)



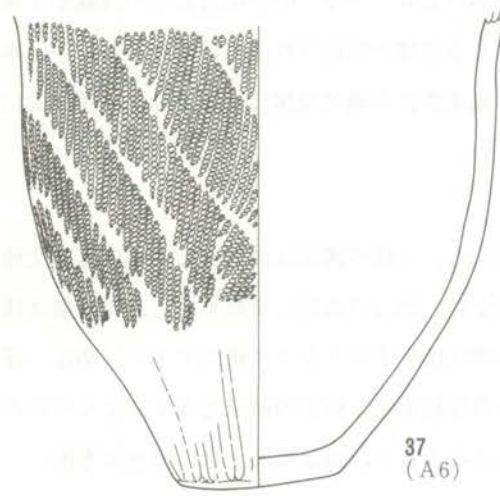
第59図 第IV群土器実測図 (7)



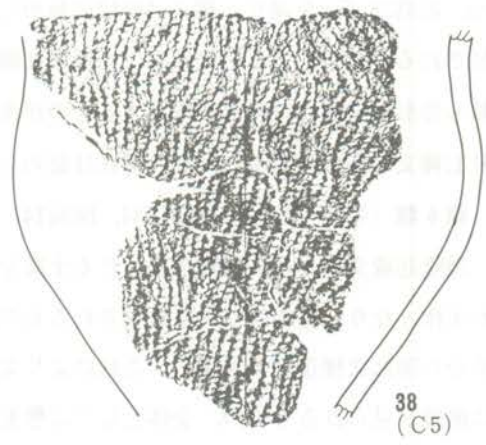
34
(C4)



36
(B6)



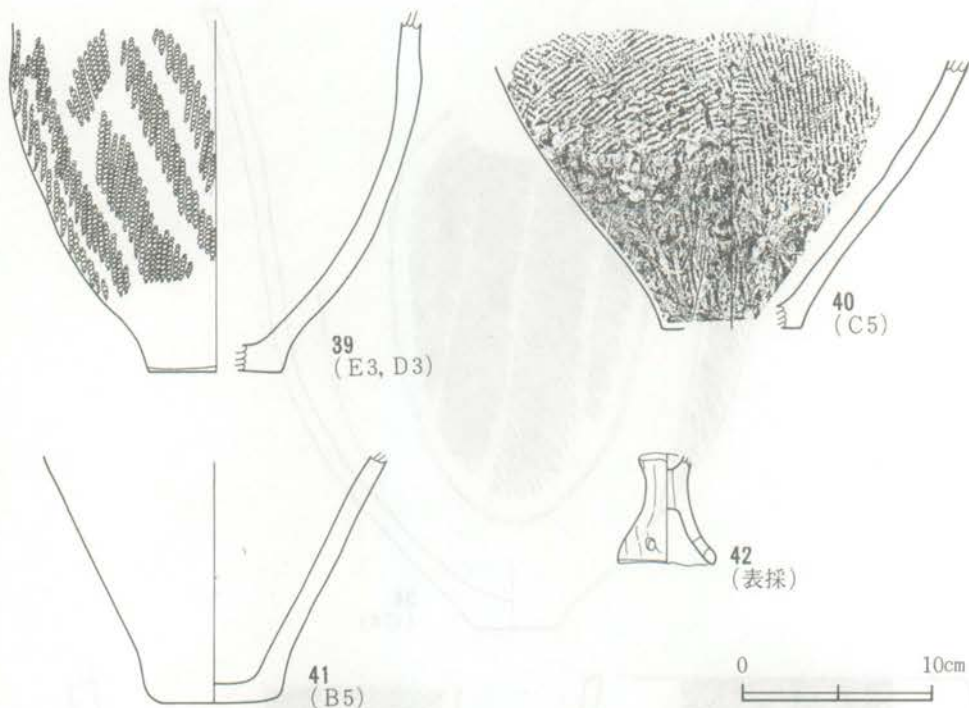
37
(A6)



38
(C5)



第60図 第IV群土器実測図(8)

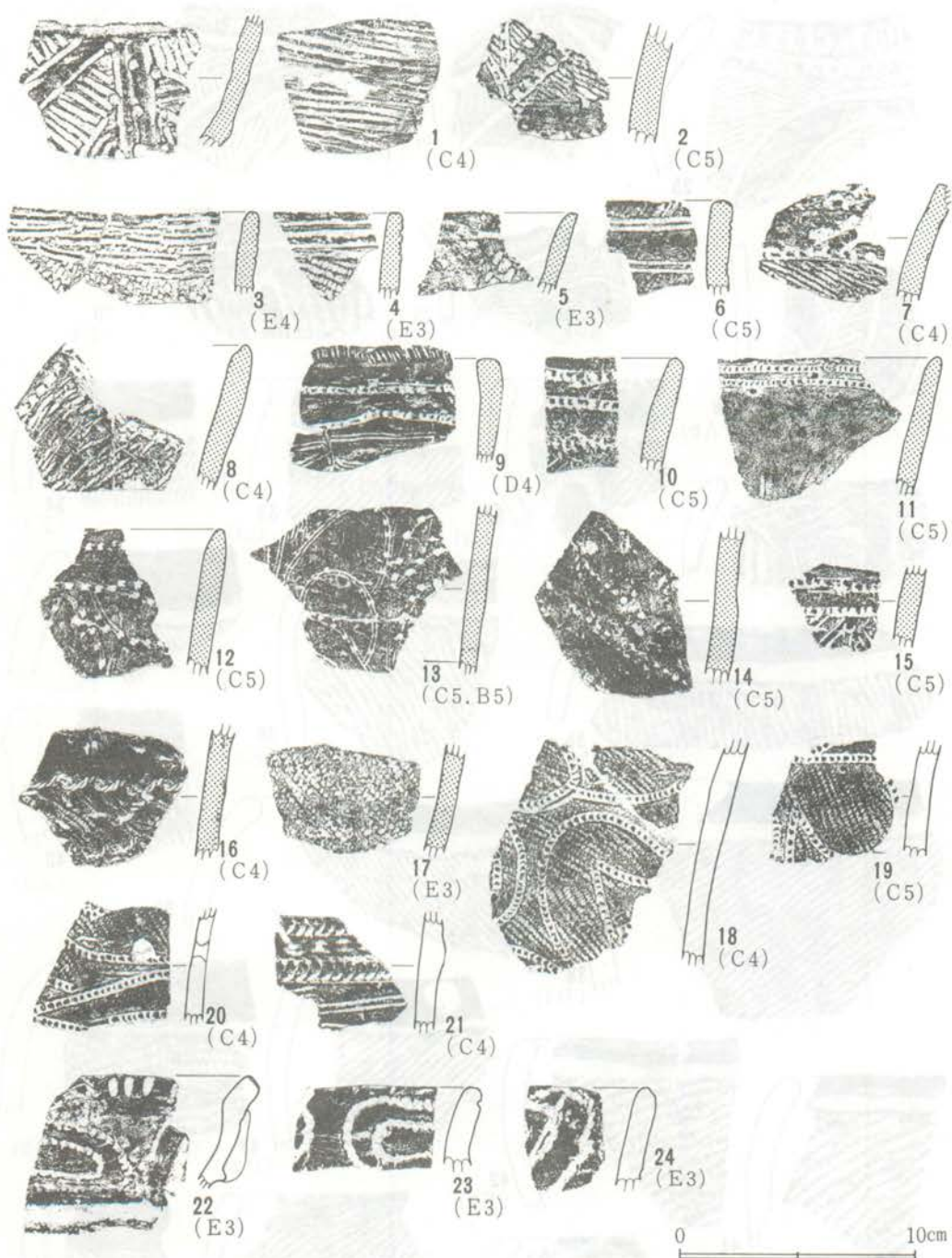


第61図 第Ⅳ群土器実測図 (9)

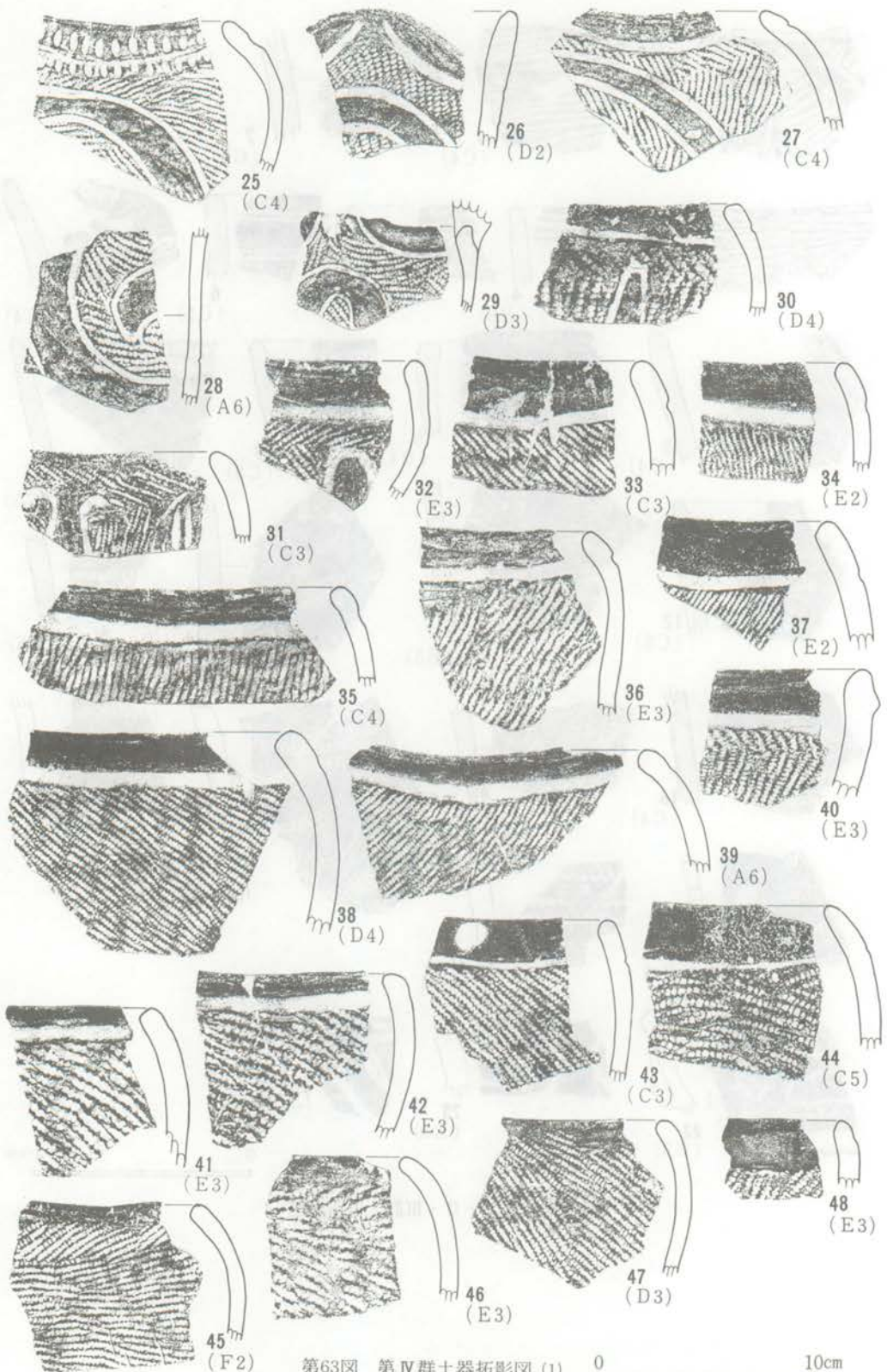
するが、縄文施文部との区画は微隆起状の隆帯によるものである。19は口径30.4cmを測り、口縁部は緩やかに内湾する。器面はR L縄文が施される。20は口径33.6cm，器高54.6cmを測り，典型的なキャリパー形を呈する深鉢形土器である。全面にR L縄文が施される。21は口径20.8cm，器高28.6cmを測り，縄文は縦位に転がし，原体はL Rである。68は微隆起状の隆線が2条施されるもので，あるいは胴部にも微隆起線文による文様が描出されるものかもしれない。本類も器形は全体に口縁部が内湾するものが多い。施文される縄文原体は全て単節で，圧倒的にR L縄文が多いが施文方向別の偏在は認められない。

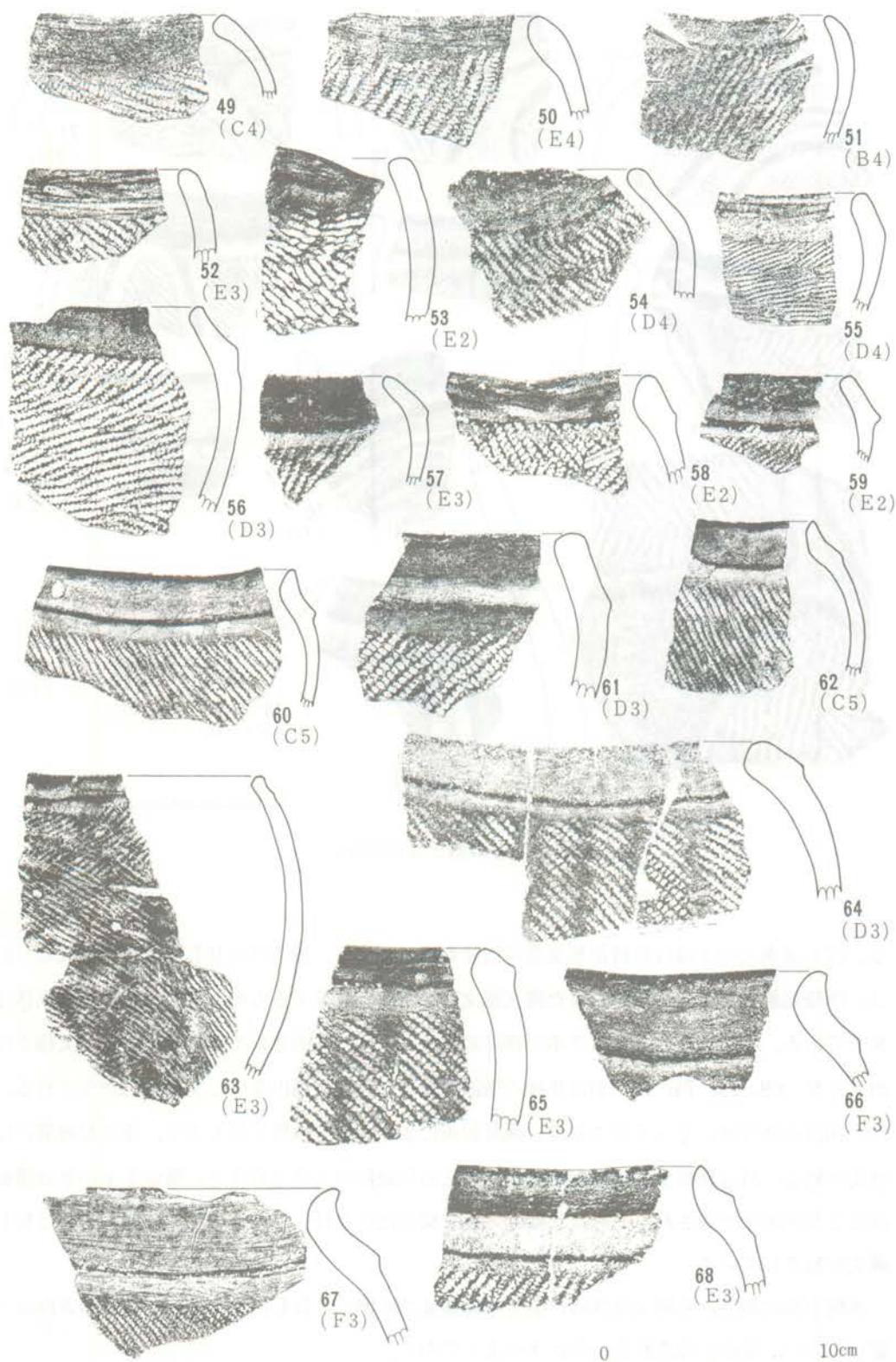
第6類 (第57～59図，第60図34，図版14)

微隆起線文により文様の描出される土器を一括した。文様の構成は渦巻状文等の曲線的文様が主体となり，直線的に文様構成されるものは少ない。29は口縁部に突起を有し，口縁部文様帯から胴部文様帯が垂下する。これにより文様の構成はT字状となり直線的である。30は一部に曲線が見られるものの，全体としては懸垂する微隆起線文と横位の微隆起線文により枠状の文様構成がとられる。次に曲線的な文様のものをみても，25は胴部上半に渦巻文を配し，下半部には逆U字状の懸垂文が施される。渦巻文の上端は口縁部無文帯と接する。地文はR L縄文が施されている。27は口径48.0cmを測る大形の土器で，渦巻文を主体とした文様構成であ

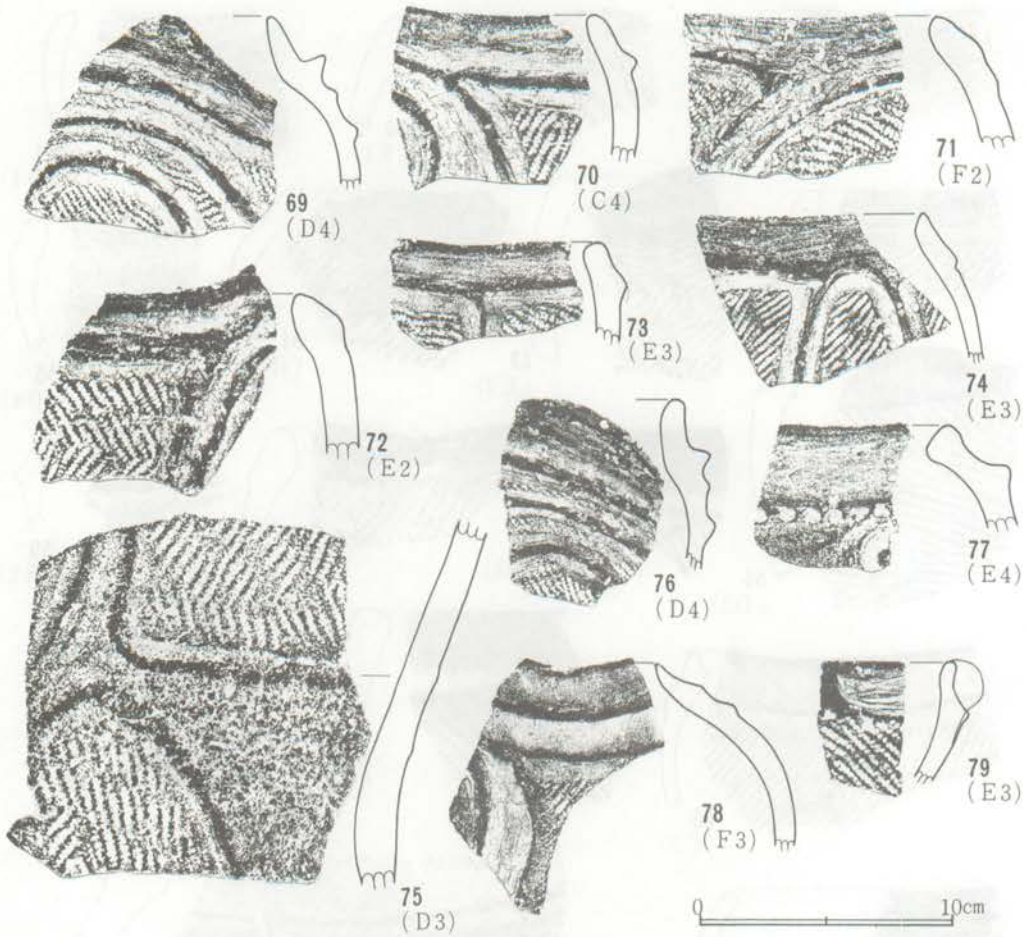


第62图 第I·II·III群土器拓影图





第64图 第IV群土器拓影图(2)



第65図 第Ⅳ群土器拓影图 (3)

る。27も渦巻文の上端は口縁部無文帯の微隆起線と接する。地文にはRL縄文が施される。34は、微隆起線文によって区画された縄文施文部が楕円形を呈するものと思われる。縄文原体はRLである。本類土器の多くは2本の微隆起線文によって区画された文様帯によって文様を描出するが、69、73、74、76、30は単独の微隆起線により文様描出ないし文様区画がなされる。69、76は波状口縁にそって3本単位の微隆起線により文様を描出するもので、微隆起線間には地文が残る。31は鉢形土器の器形を呈し、幅広の口縁部無文帯を有する。横位2本の単独隆起線により区画文が施され、さらに比較的大きな橋状把手を付している。地文には斜方向にRL縄文が施されている。

本類土器に施される縄文原体は、全て単節縄文で圧倒的にRL縄文が多い。施文の方向は一定しないが、縦位に施されるものが多いようである。

第7類 (第60図35~38, 第61図39~41, 図版14)

いずれも口縁部を欠いた土器で、類別に無理がある土器である。37は縦位のヘラナデによる調整痕が残る。41は無文の土器であるが、全面にヘラナデが施されている。

小形土器（第61図42）

小形の器台形土器の形状を呈す。2ヶ所に穿孔を施す。

○土製品

土器片錘（第66図1～9，図版21）

遺構外からは9点の土器片錘が出土している。全て土器片を再利用したもので、長軸上に糸掛けのための切り込みを2つ有する。また、土器片錘の長軸は全て土器の横方向に相当する。

1、2は口縁部破片を利用し、他は全て胴部破片である。土器片の周囲は研磨されるもの（7～9）と部分的に研磨されるもの（1）とがある。

重量は最大のもので69g、最小のもので6.81gを測り、平均重量は23.90gである。

土製円盤（第66図10～31，第67図32～50，図版21，22）

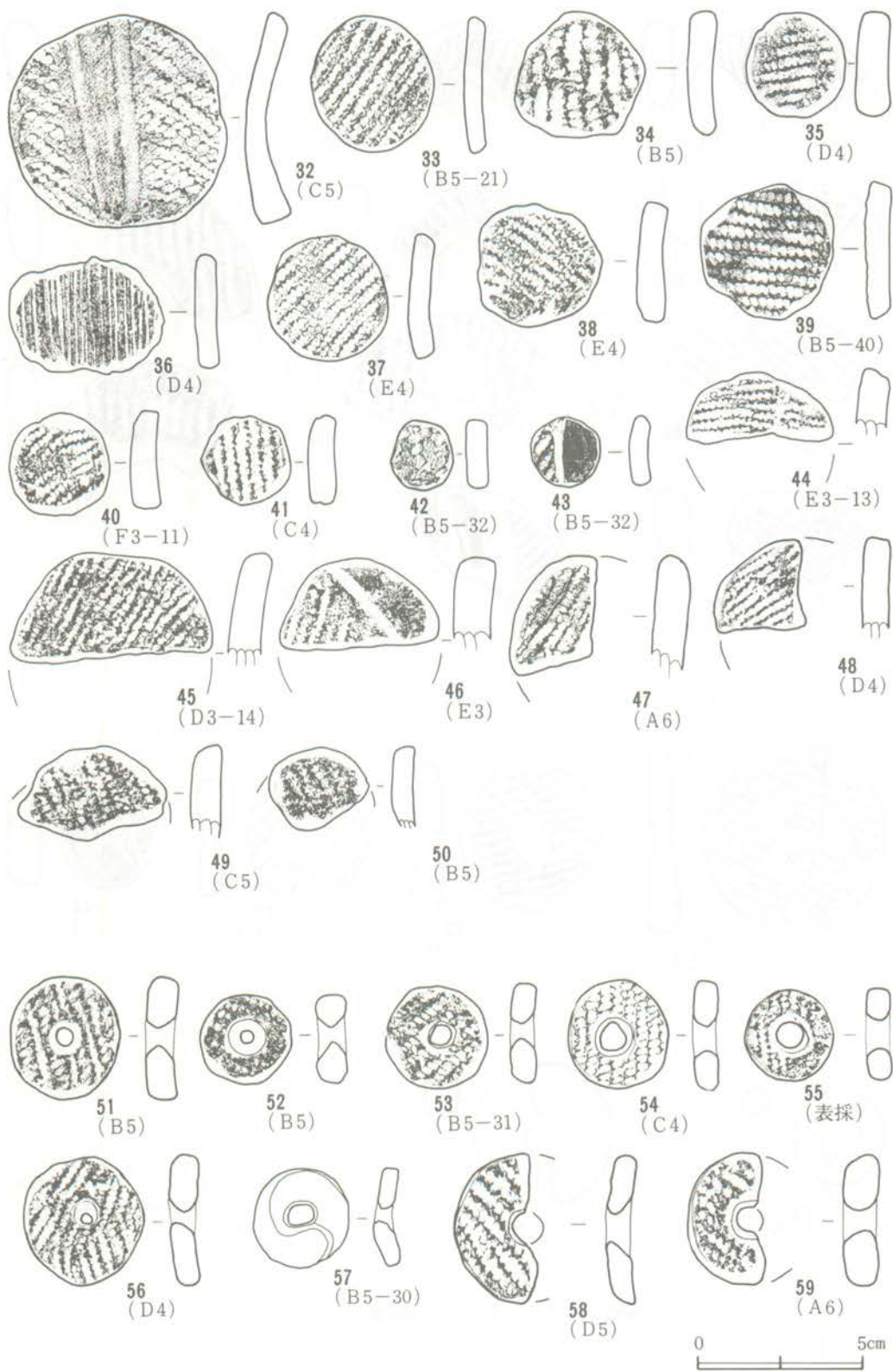
39点出土している。形状はほとんどが円形を呈するが、36のみ楕円形を呈する。口縁部土器片を利用したものは1・2の2点だけで、他は全て胴部土器片である。土器片の周囲は打欠整形後に研磨されている。重量は最大のもので45.87g、最小のもので2.85gを測り、平均重量は完形品のもので14.91gである。周囲の状態の観察によりA：極めて良く研磨されるもの（16、22、23、30、31、33、35、42、50）、B：良く研磨されるもの（10、11、14、19、24、25、29、32、37、40、43、44、45、47）、C：部分的に研磨されるもの（12、13、15、17、20、27、34、39、41、46、49）、D：打ち欠いただけのもの（18、21、26、28、36、38）とに識別できる。その割合は順に、A=23%、B=35%、C=28%、D=15%となり、A、Bを併せた周囲全体に研磨が及ぶものの比率は6割近くとなる。

有孔土製円盤（第67図51～59，第68図60～74，図版22，23）

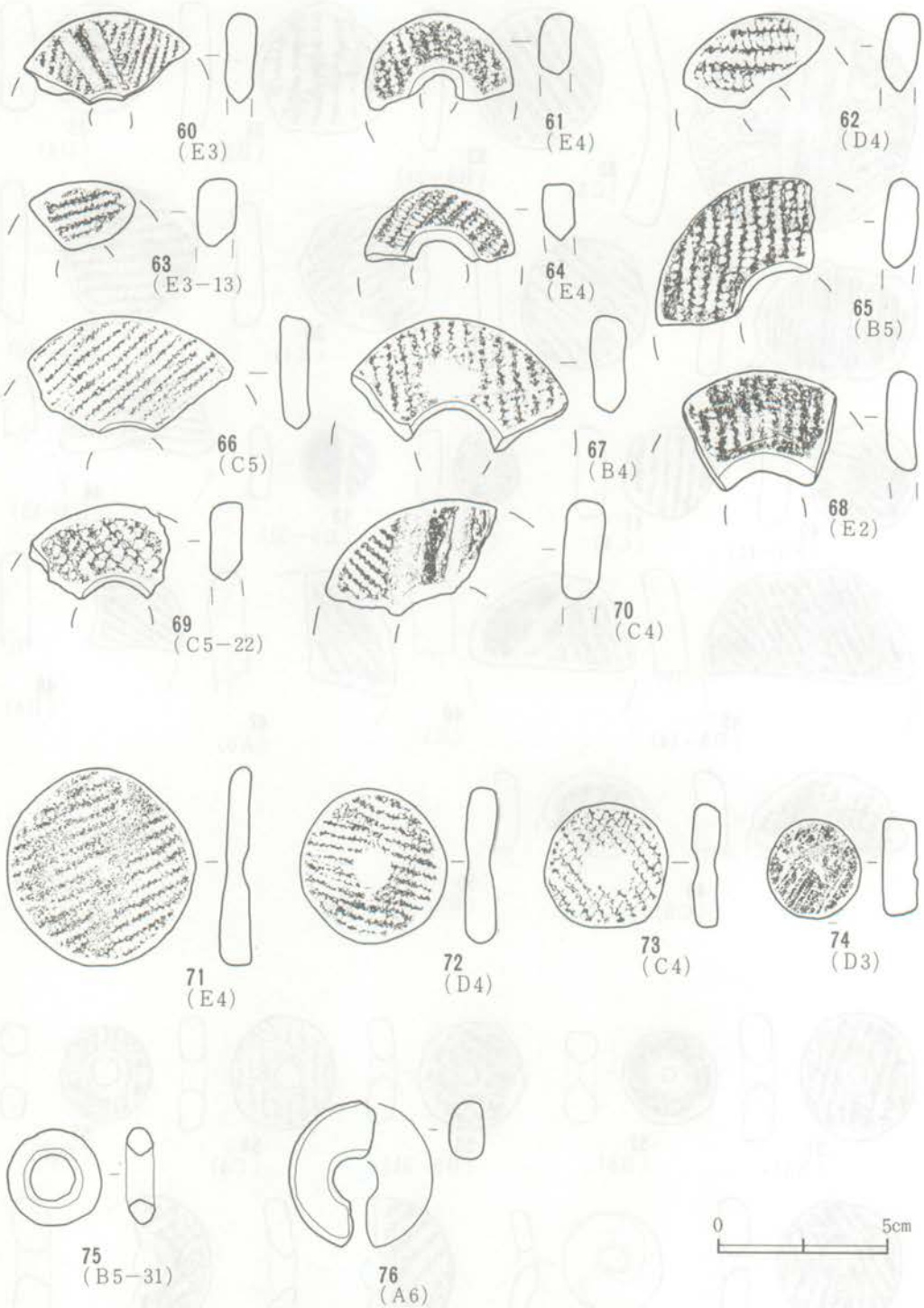
孔は貫通するもの（51～70）と、未貫通のもの（71～74）とがある。前者は全て両側から穿孔が施されている。縄文等の文様が施される面を表面とすると、表面からの方が大きく穿孔されるもの、すなわち表面の孔径が裏面の孔径より大きいもの（59、68）が20%、裏面から大きく穿孔されるもの（53、57、58、60、62、65、66、67、69、70）が50%、表裏面とも同じような孔径を有するもの（51、52、54、55、56、61、63、64）が40%となり、全体としては裏面から大きく穿孔されるものがわずかに多い。穿孔は工具の回転使用によるものと思われるが、孔径は小さいもので0.3cm、大きいもので3cm（推定）を測る。大きな孔径を有するもの（64～70）はいずれも破損品であるが、形状はドーナツ形に近くなる。円盤の周囲は全て研磨されており、極めて良く研磨されるものが66%以上ある。しかし未貫通のものも含めて、穿孔状態の違いと



第66図 グリット出土土製品実測図 (1)



第67図 グリット出土土製品実測図 (2)



第68図 グリット出土土製品実測図 (3)

周囲の状態の違いには明確な関係を見出すことはできず、周囲の整形を終えた後、周囲の状態の良いものを選んで穿孔を施したと考える方が自然かもしれない。

環状土製品 (第68図75, 図版23)

土器片等の再利用ではなしに製作されたもので、外径2.8cm、内径1.3cmを測る。成形は粘土紐をまるめてつなぎ、ヘラ削り調整される。

挾状耳飾り (第68図76, 図版23)

A 6区から一点だけ出土している。半欠品で径4.2cmを測り、現存重量は9.12gである。焼成は普通で胎土には砂粒を多く含む。

第6表 グリット出土土製品計測表

(単位: cm)

挿 番 図 号	遺物番号	器 種	長軸	短軸	最大厚	重量(g)
1	B 5-30, 0199	土器片 錘	6.1	5.3	1.8	69.00
2	F 3, 0001	土器片 錘	3.7	3.6	1.1	21.06
3	D 3, 0001	土器片 錘	6.4	3.2	0.8	21.86
4	C 5-03, 0001	土器片 錘	3.6	2.5	1.0	9.90
5	A 5, 0001	土器片 錘	4.2	3.0	1.0	15.01
6	B 5-43, 0037	土器片 錘	3.2	2.4	0.8	6.81
7	D 3, 0001	土器片 錘	5.6	4.2	1.2	30.10
8	D 4, 0001	土器片 錘	5.2	3.8	1.2	25.20
9	B 6, 0001	土器片 錘	4.8	3.3	1.1	16.17
10	B 5-31, 0201	土製 円盤	6.1	5.7	1.1	41.37
11	B 5-31, 0253	土製 円盤	4.2	4.1	1.3	26.17
12	B 6-10, 0046	土製 円盤	4.0	3.8	1.1	18.49
13	C 5, 0001	土製 円盤	3.2	3.0	1.2	12.79
14	B 4, 0001	土製 円盤	4.3	4.1	1.1	20.02
15	F 3, 0002	土製 円盤	3.6	4.4	1.1	14.25
16	E 2, 0001	土製 円盤	3.7	3.6	1.0	16.05
17	B 5, 0001	土製 円盤	6.5	5.6	1.0	37.25
18	D 3-14, 0001	土製 円盤	4.2	4.1	1.0	22.25
19	C 4, 0002	土製 円盤	3.4	3.4	1.0	12.62
20	C 4, 0001	土製 円盤	4.0	4.1	0.8	18.90
21	C 5, 0001	土製 円盤	5.2	4.5	0.8	23.65
22	D 3, 0001	土製 円盤	3.0	3.0	0.8	10.07
23	D 3-14, 0001	土製 円盤	3.2	3.0	1.1	14.84
24	C 4, 0001	土製 円盤	3.3	3.0	0.9	10.10
25	B 5, 0001	土製 円盤	2.4	2.3	0.9	10.05

新山台遺跡 (No.15)

26	B 5, 0001	土製円盤	2.9	2.9	1.0	5.42
27	B 5-41, 0115	土製円盤	3.0	2.9	0.9	7.90
28	B 5, 0001	土製円盤	3.3	2.5	1.1	9.52
29	B 5-31, 0221	土製円盤	3.5	3.5	1.0	14.40
30	E 3, 0001	土製円盤	2.8	2.8	0.9	8.25
31	D 4-23, 0001	土製円盤	2.7	2.6	1.0	8.42
32	C 5, 0001	土製円盤	6.6	6.2	1.2	45.87
33	B 5-21, 0012	土製円盤	4.0	3.8	0.6	10.97
34	B 5, 0001	土製円盤	4.0	3.8	0.8	13.51
35	D 4, 0004	土製円盤	3.0	3.1	1.1	11.50
36	D 4, 0001	土製円盤	4.8	3.5	0.7	13.68
37	E 4, 0001	土製円盤	3.7	3.7	0.7	15.01
38	E 4, 0001	土製円盤	3.9	3.6	0.9	12.10
39	B 5-40, 0002	土製円盤	4.1	4.0	0.7	14.44
40	F 3-11, 0001	土製円盤	3.1	3.1	0.9	9.49
41	C 4, 0002	土製円盤	2.8	2.6	0.9	6.09
42	B 5-32, 0097	土製円盤	2.1	2.0	0.7	3.65
43	B 5-32, 0109	土製円盤	2.2	2.1	0.5	2.85
44	E 3-13, 0001	土製円盤	4.5	2.0	1.0	(8.02)
45	D 3-14, 0001	土製円盤	6.2	3.2	1.0	(24.52)
46	E 3, 0003	土製円盤	5.0	2.8	1.2	(18.12)
47	A 6, 0001	土製円盤	3.5	2.6	1.1	(9.12)
48	D 4, 0001	土製円盤	2.7	2.9	0.8	6.90
49	C 5, 0001	土製円盤	4.6	2.8	1.0	12.87
50	B 5, 0002	土製円盤	3.0	2.5	0.7	5.20
51	B 5, 0002	有孔土製円盤	3.6	3.4	0.9	13.57
52	B 5, 0001	有孔土製円盤	2.8	2.6	1.0	7.27
53	B 5-31, 0039	有孔土製円盤	3.2	3.0	0.8	7.69
54	C 4, 0001	有孔土製円盤	3.2	3.0	0.8	7.81
55	表採	有孔土製円盤	2.7	2.7	0.8	5.62
56	D 4, 0001	有孔土製円盤	4.0	3.7	0.9	14.07
57	B 5-30, 0170	有孔土製円盤	3.0	3.0	0.8	6.37
58	D 5, 0001	有孔土製円盤	4.5	2.6	0.8	(8.56)
59	A 6, 0001	有孔土製円盤	4.0	2.3	1.1	(9.37)
60	E 3, 0003	有孔土製円盤	4.0	2.5	0.9	(11.77)
61	E 4, 0001	有孔土製円盤	4.4	2.6	1.0	(11.19)
62	D 4, 0001	有孔土製円盤	4.2	2.5	1.0	(10.37)

63	E 3-13, 0001	有孔土製円盤	3.1	1.9	1.2	(6.52)
64	E 4, 0001	有孔土製円盤	4.5	2.2	1.0	(8.91)
65	B 5, 0001	有孔土製円盤	4.6	4.0	1.0	(8.10)
66	C 5, 0001	有孔土製円盤	6.1	3.2	0.8	16.85
67	B 4, 0001	有孔土製円盤	6.4	3.7	1.0	(22.83)
68	E 2, 0001	有孔土製円盤	4.6	3.2	0.9	(14.79)
69	C 5-22, 0001	有孔土製円盤	4.1	2.7	0.9	(10.77)
70	C 4, 0002	有孔土製円盤	5.1	2.7	1.2	(19.12)
71	E 4, 0001	有孔土製円盤	5.5	5.5	1.0	33.02
72	D 4, 0001	有孔土製円盤	4.4	4.3	0.9	19.55
73	C 4, 0001	有孔土製円盤	3.7	3.6	0.7	11.67
74	D 3, 0001	有孔土製円盤	2.8	2.8	1.1	9.45
75	B 5-31, 0254	環状土製品	2.8	2.8	0.8	5.57
76	A 6, 0001	挾状耳飾り	4.2	—	1.0	(9.12)

○石器

打製石斧 (第69図1, 図版26)

緑色片岩製である。形状は短冊形を呈し、粗い剥離が施される。

磨製石斧 (第69図2～9, 図版26)

2, 3はいずれも定角式の磨製石斧である。2は基部と刃部の約1/2を欠損するが、丹念な研磨が施され、刃部には使用の際に生じた刃こぼれも認められる。3は大部分が欠損して全体を窺いえないが、表面及び側面に一部敲打痕がみられる。石材は、2が石英砂岩、3が珪質頁岩。4, 5も大半を欠損する。石材は4が珪質頁岩、5が緑色片岩。6は貝殻状の形状を持つもので、裏面は剥離が激しい。基部は厚味を帯びる。緑色片岩製。7の刃部は欠損するが、基部にも剥離が行なわれている。断面形は楕円形を呈し、研磨は比較的丁寧である。材質には珪質頁岩が用いられる。8は基部のみの残存であるが、裏面も大きく剥離している。石材は緑色片岩。9も基部のみの残存で、先端は丸く仕上げられている。泥質砂岩製。

磨石、敲石 (第70図10～第72図30, 図版26, 27)

10は扁平な形状を呈し、表裏面に擦痕を認める。砂岩製。11も比較的扁平な形状を持ち、全面よく研磨されている。石材は石英砂岩。12は半欠品である。表裏ともによく研磨され、側面には敲打痕を残す。石英斑岩製。13も半欠品だが、表面はよく研磨され裏面には敲打痕が残る。石材は泥岩。14は輝石安山岩製で、側面を中心に敲打痕が著しい。15～17はいずれも大半を欠損する。16は表裏ともに磨耗が激しく、窪んでいる。石材は15が石英岩、16が砂岩、17が泥岩

新山台遺跡 (No.15)

である。18は扁平な両面をよく研磨している。石英砂岩製。19は砂岩製で、側面の敲打により表裏面ともに風化状に剝離が進んでいる。20は石英岩製で、先端に敲打痕を残す。21は扁平な形状を持ち、全面よく研磨される。石材は砂岩。22も扁平な形状を持つが研磨は粗い。石材は中粒砂岩である。23は頁岩製で、一部に敲打痕を認める。24は断面が凸レンズ状を呈し、裏面の一部にわずかに窪んだ使用痕を認める。石材は石英砂岩である。25は表裏面ともに中央付近に擦痕を認めるが使用は激しくない。石英斑岩製。26は大部分を欠損するが、側面近くの表面に敲打痕を認める。側面はやや粗く研磨される。泥岩製。27は両端に剝離痕を認めるもので、材質には砂岩が用いられる。28は石英砂岩製で表裏ともによく研磨される。先端の側面の中央付近に敲打痕を認める。29は表面がよく研磨され磨耗している。裏面は敲打による剝離が進んでいる。石英斑岩製。30はほとんど自然礫そのままを使用するが、先端部付近に敲打痕を認める。31は輝石安山岩製で、全面に研磨が施される。表裏とも中央に一ヶ所ずつ凹石としての使用痕を認める。32は多孔質安山岩製で破損品である。表面に一ヶ所凹石としての使用痕を認めるが、本来は石皿の可能性もある。

砥石 (第73図33, 図版27)

C 4-23区からの出土である。側面の中央付近に肩部を持つ。表裏ともに中央部付近に顕著な擦痕を有する。石材は砂岩製。

石棒 (第73図34~36, 図版27)

34・35ともに頭部が残存する。34は表採品、35はB 5-41区からの出土で、いずれも材質には緑色片岩が用いられる。36は茎部のみの破損品で、径10.5cmを測る大形のものである。石材は流紋岩である。F 2-44区からの出土。

石弾 (第73図37, 図版27)

E 3区からの出土で、側面は剝離している。重量は118gを測る。

石皿 (第74図38~40, 図版27, 28)

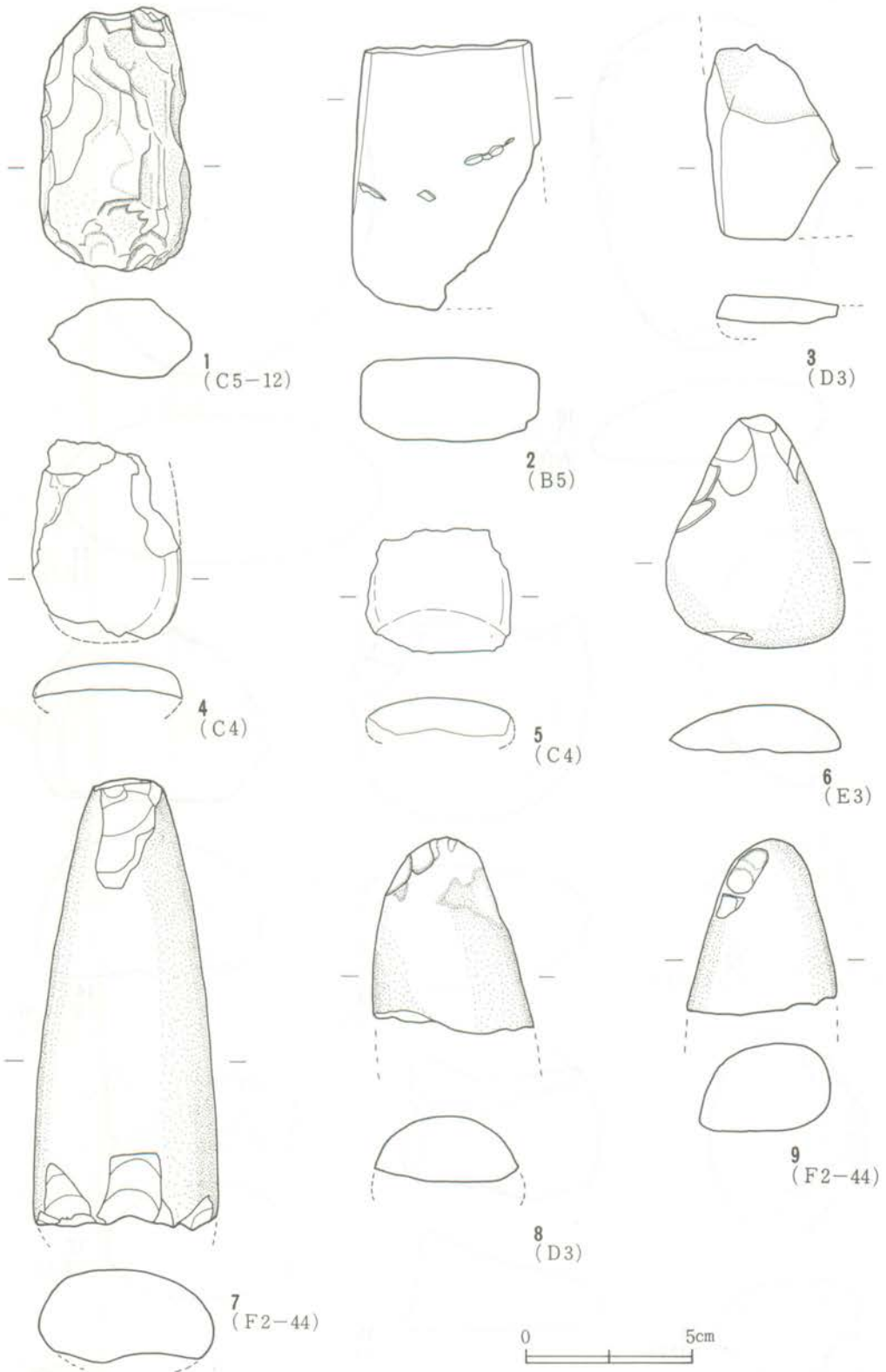
38はC 5-21区からの出土で、器高11.5cmを測る。縁は明瞭でなく、中央に向かって緩やかに窪む。石材は砂岩である。39はB 5-41区からの出土で花崗岩製。表面に12孔、裏面に2孔の多孔石として使用された孔が穿たれている。40は多孔質安山岩製の小破片である。1ヶ所に断面三角形の孔が穿たれる。

ポイント (第74図41, 図版28)

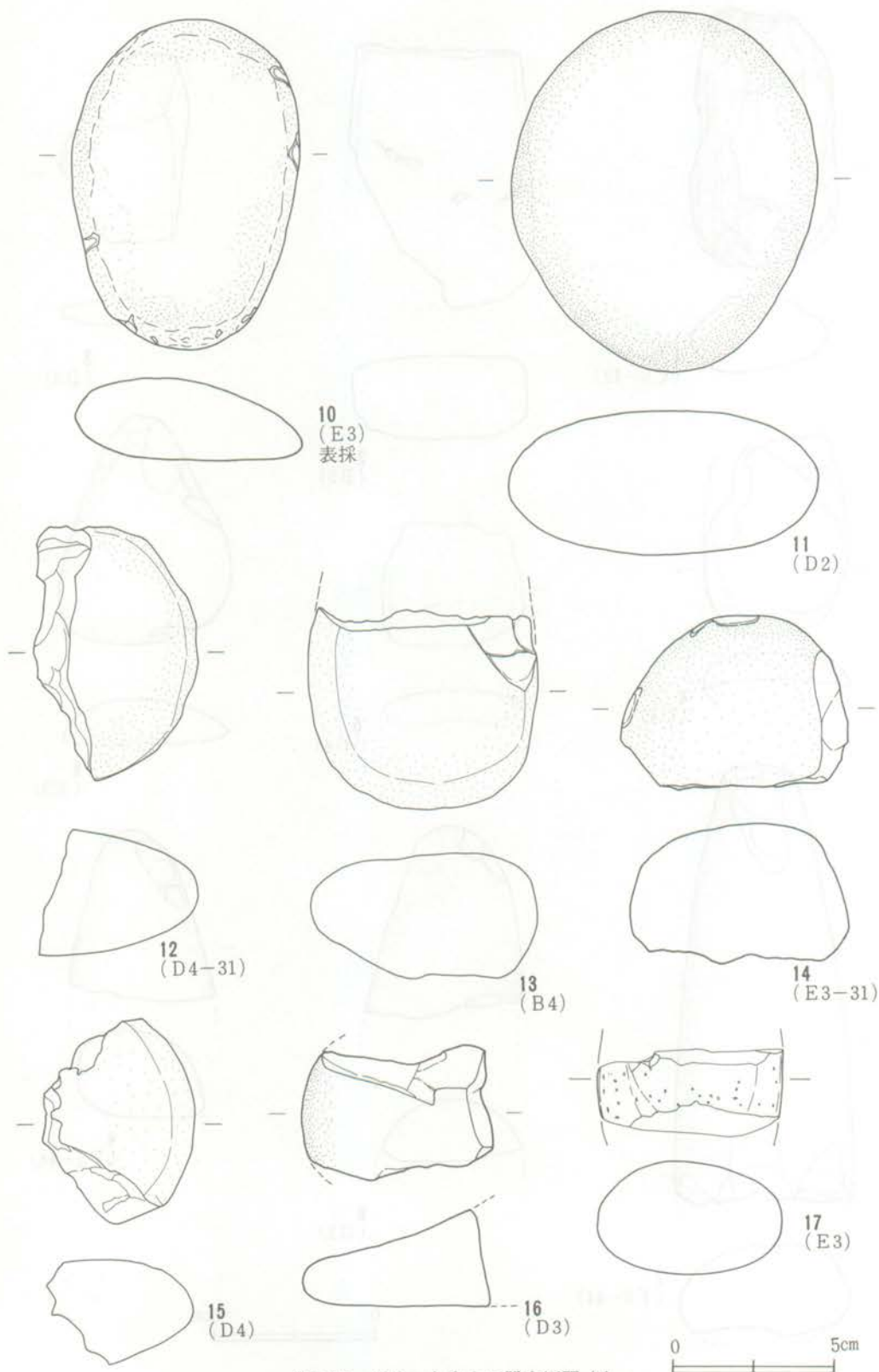
D 4区でロームからは浮いた位置で出土した。剝離は細かく施されたとは言い難いが、縁辺部は鋭い。材質には頁岩が用いられている。先土器時代の所産と考えられる。

ブレイド (第74図42, 図版28)

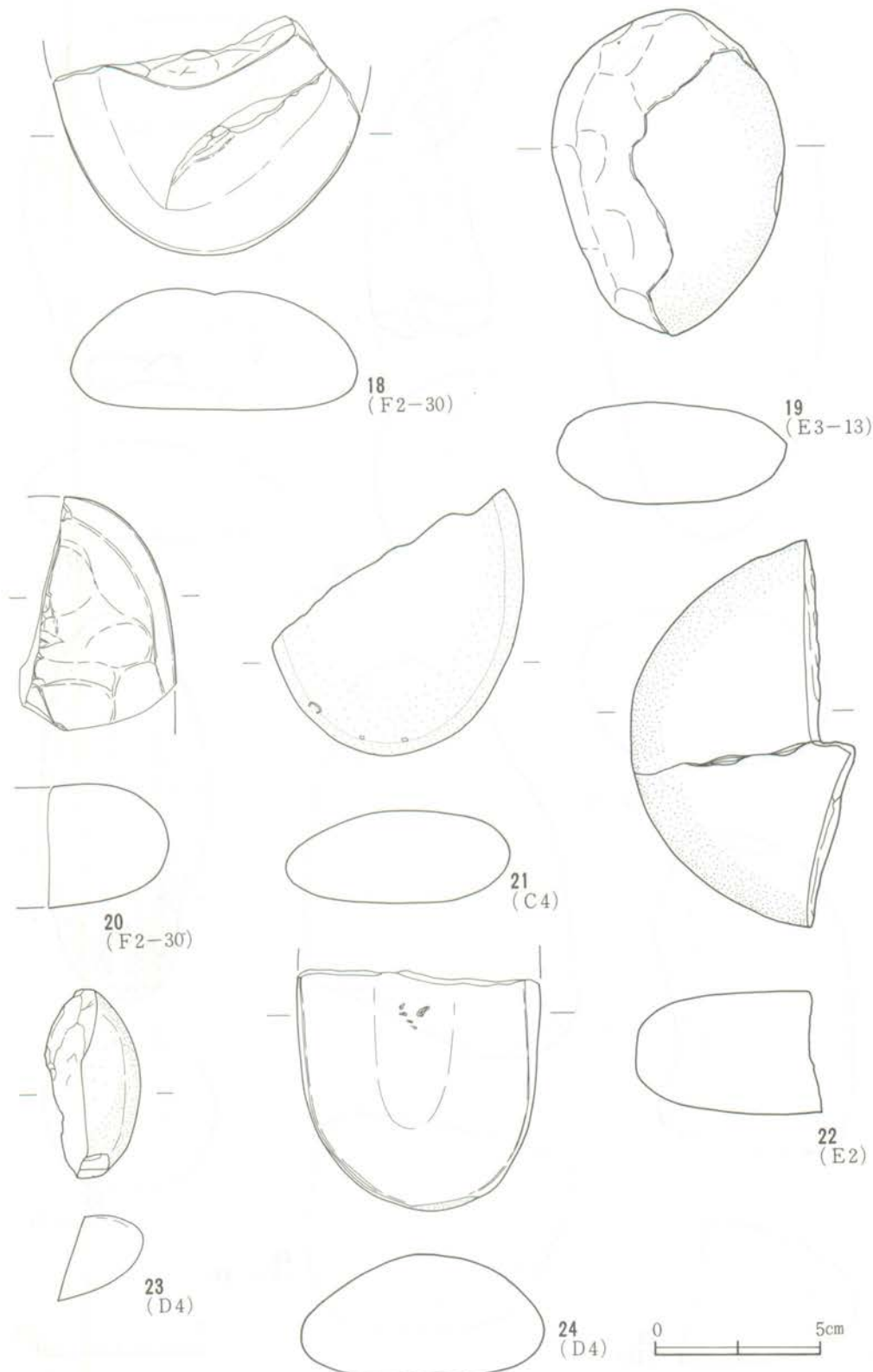
117号土坑覆土からの出土であるので包含層出土遺物とした。材質はチャートで断面は台形を



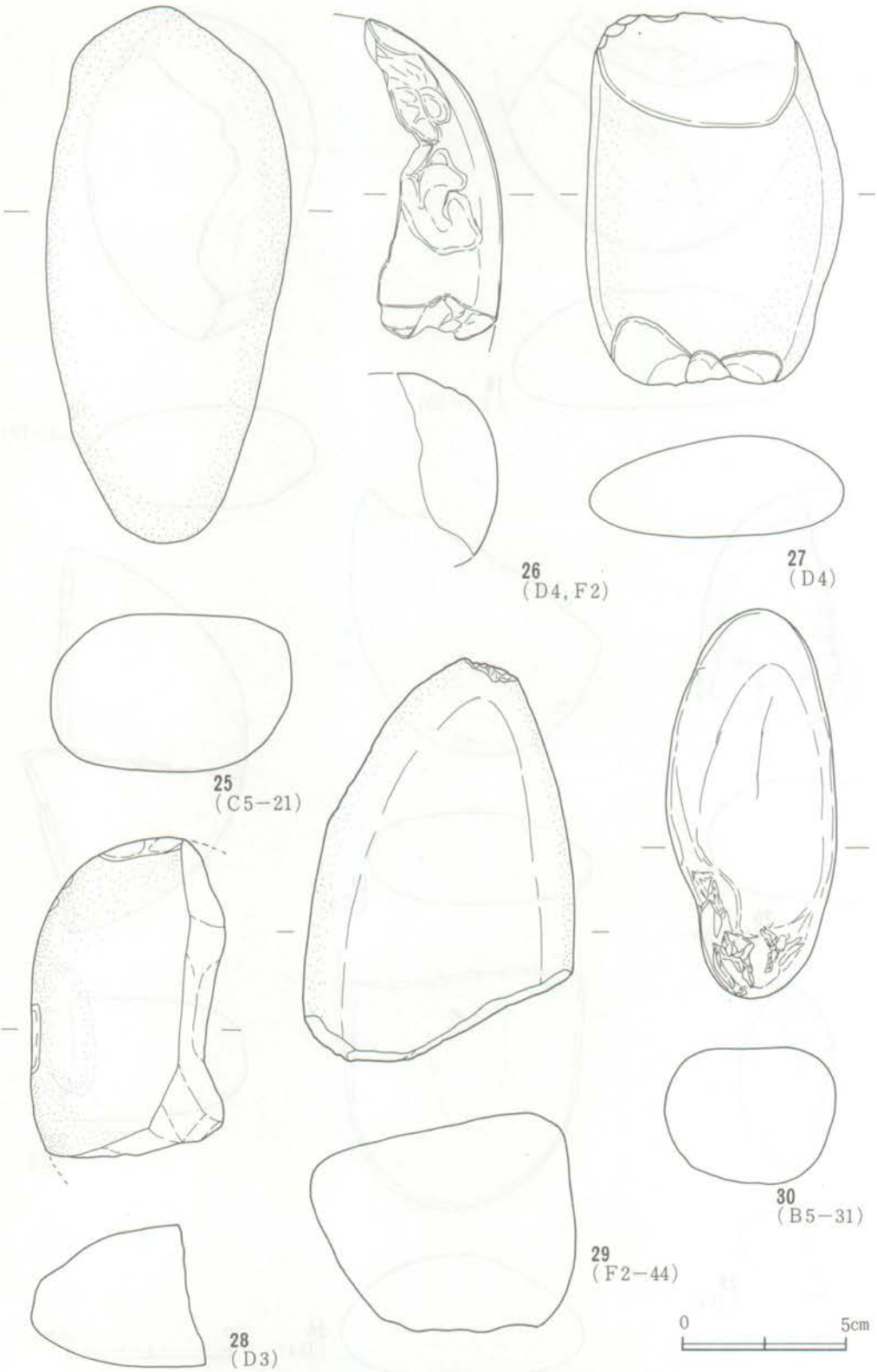
第69図 グリット出土石器実測図(1)



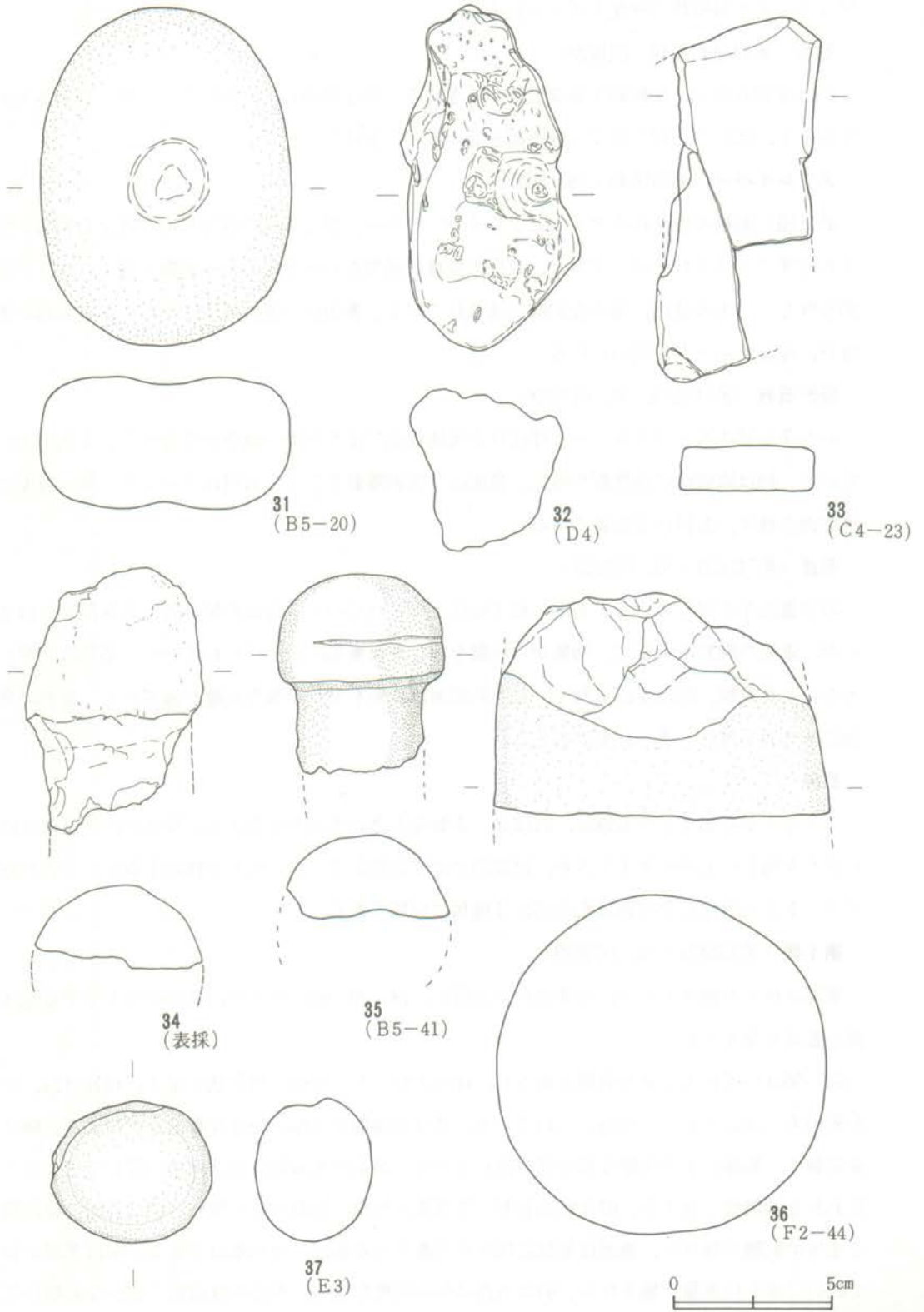
第70図 グリット出土石器実測図 (2)



第72図 グリット出土石器実測図 (3)



第72図 グリット出土石器実測図(4)



第73図 グリット出土石器実測図(5)

新山台遺跡 (No.15)

呈する。先土器時代の所産と考えられる。

石核 (第74図43, 44, 図版28)

43は黒曜石製で、比較的丁寧な剥離が施される。44は安山岩で、剥片として取り扱えるものであるが、凹形の打留を伴う剥離面を認めるので石核とした。

スクレイパー (第74図45~48, 図版28)

45は粗い剥離の施されるサイドスクレイパーである。46は片側の縁辺にのみ丹念な剥離が施されるサイドスクレイパーである。47は両側縁に使用されたと思われる剥離を残す。48は自然面を残し、一方の縁辺に細かな剥離が施されている。裏面は一次剥離面である。材質は48が黒曜石、他はチャートが用いられる。

楔形石器 (第74図49, 50, 図版28)

いわゆるピエス・エスキューと呼ばれる両極打法により剥離の施されたもので、2点出土している。49は両側縁に自然面を残し、裏面は一次剥離面である。石材はチャート。50は表面に自然面を残す。石材は安山岩である。

石錐 (第74図51~53, 図版28)

51は錐先を欠損している。基部は扁平に仕上げられている。安山岩製。52は先端部を欠損するが、錐先の調整は丁寧で、両側から剥離を施し断面菱形に仕上げられている。基部は肥厚し大きい。頁岩製。53は安山岩製で、錐先の断面は菱形を呈し丁寧な剥離が施される。基部は裏面に自然面を残し、薄く仕上げられる。

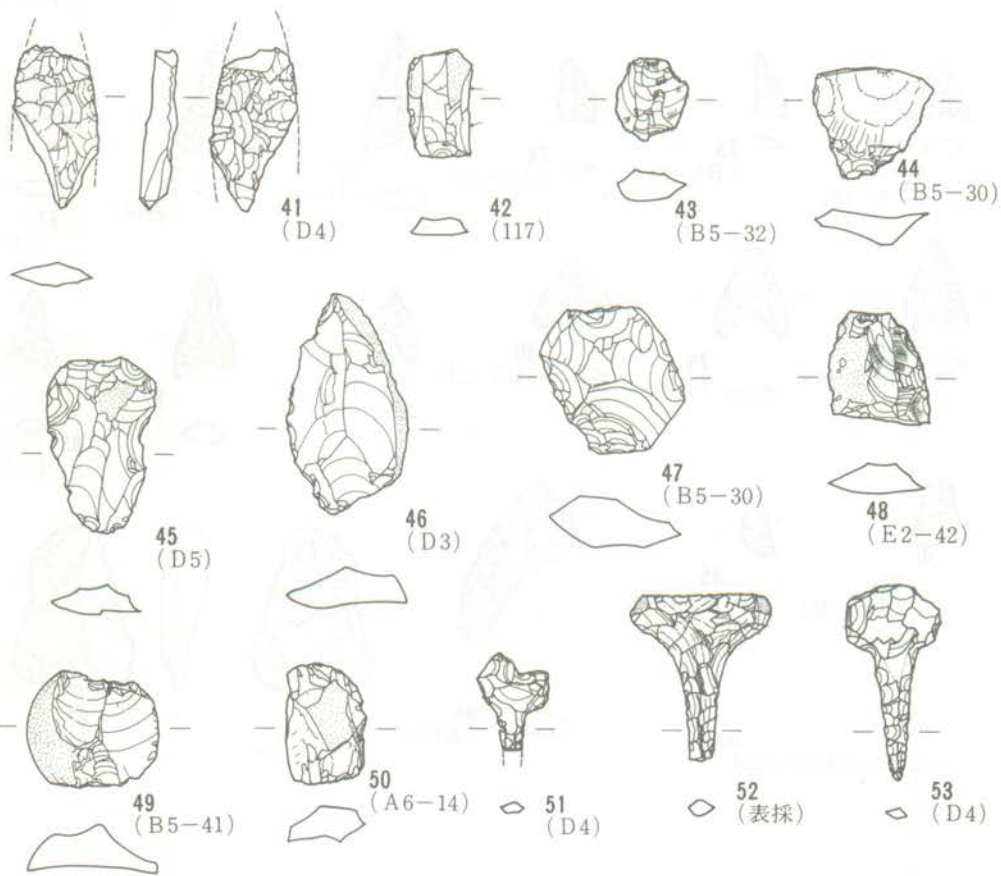
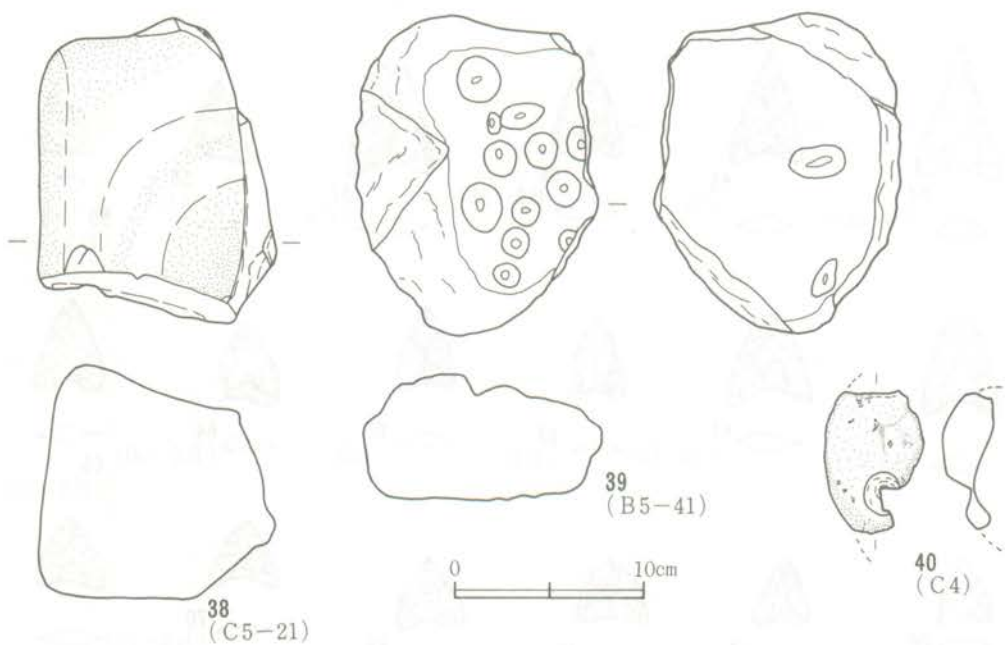
石鏃

グリットから出土した石鏃は、破損品、未製品を含めて34点を数える。形状的には基部に緩い抉りを施したものが大半を占め、材質的には安山岩が多く用いられ全体の半数近くを占める。グリットから出土した石鏃は形状的に3種類に分類できる。

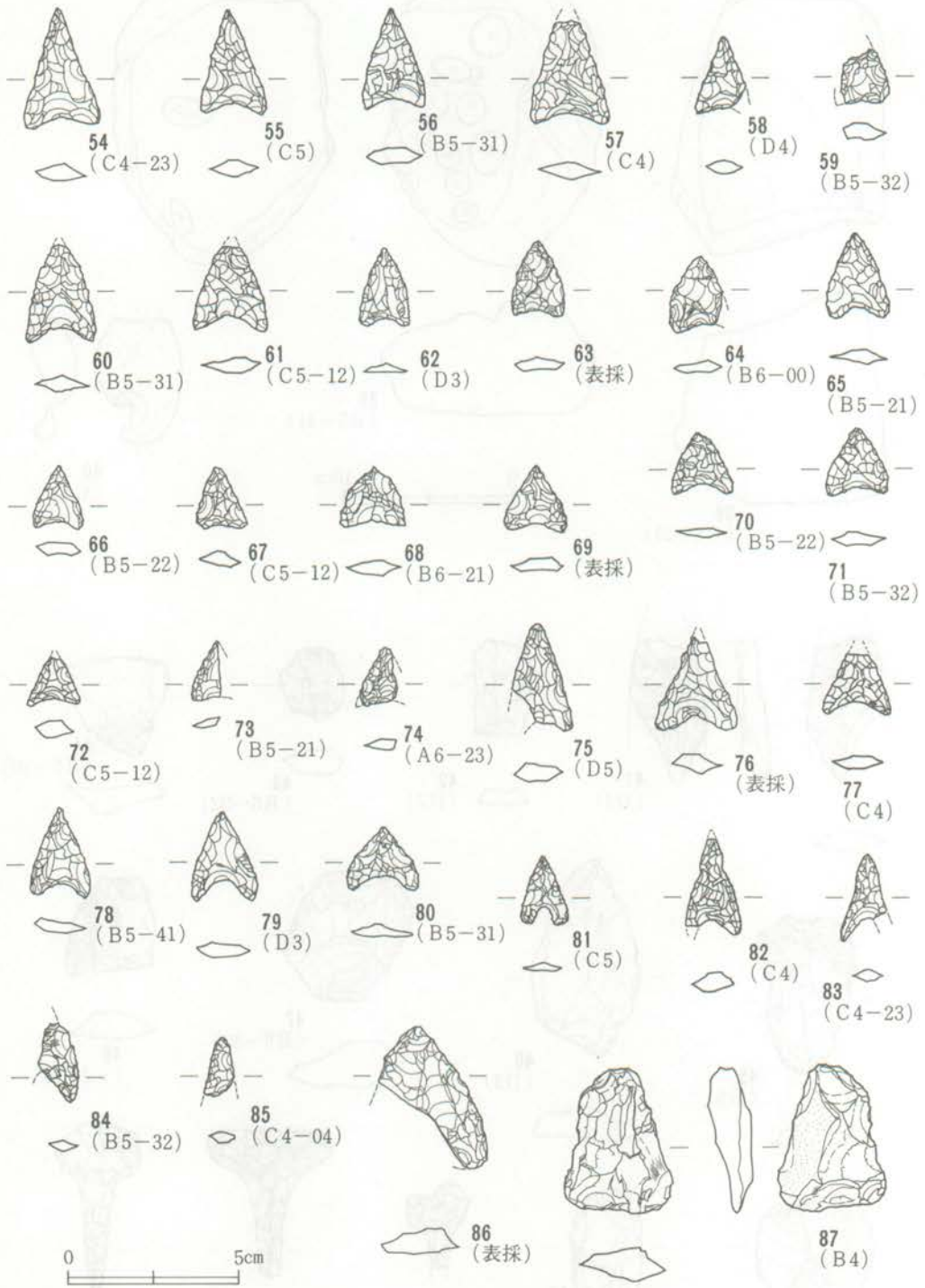
第1類 (第75図54~80, 図版29)

基部に抉りを施すもので、全体に抉りは弱く、78, 79, 80がやや半円状の抉りを呈する他は緩い弧状を呈する。

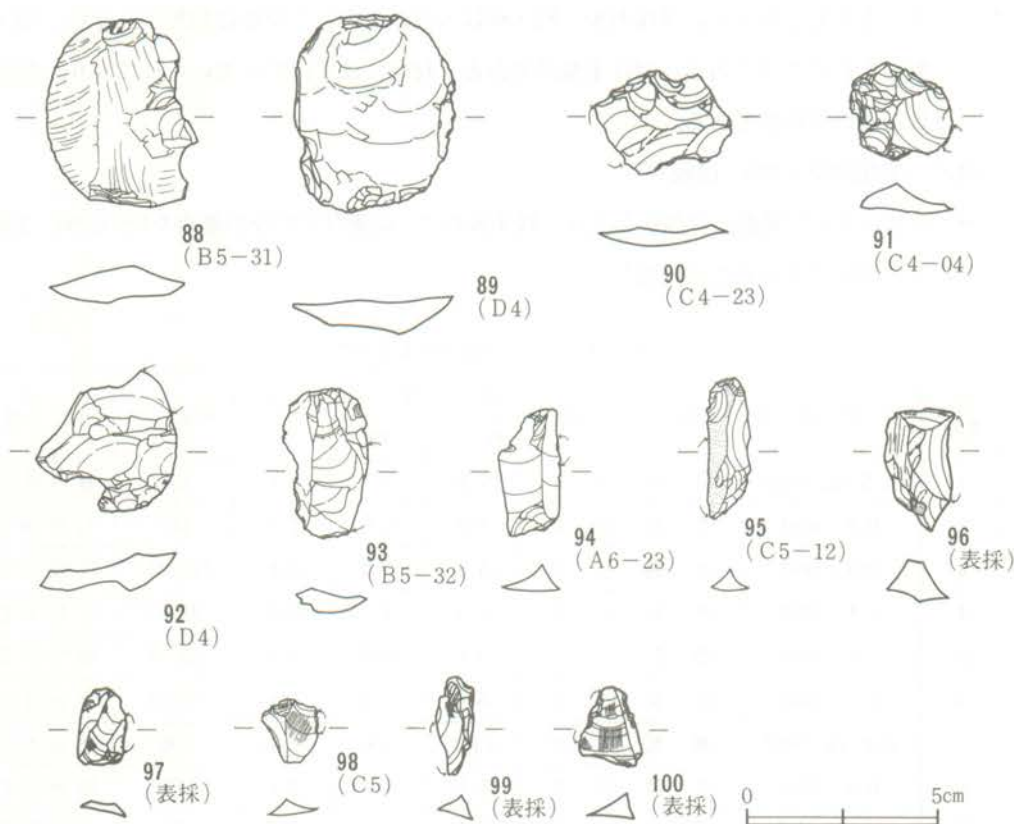
54~56はいずれも丁寧な剥離が施され、縁辺の整った二等辺三角形状を呈す。材質は54, 55が安山岩、56はチャートが用いられている。57は先端部が欠損、58は片翼部が欠損する。60は頁岩製で、剥離により明瞭な稜を作り出している。裏面の先端部付近は使用に際して生じたと思われる剥離痕を有する。61は安山岩製で先端部が欠損、剥離はやや粗い。62は表面の縁辺部を主体に剥離が施され、裏面は基部に抉りを剥離させる他は一次剥離面である。63は黒曜石製で縁辺に細かい剥離が施される。64は表面に粗い剥離を施し、裏面の縁辺部に細かな剥離が施される。65~67はいずれも安山岩製。68はチャート製で側縁が丸く張り出す形状を持つ。69~74



第74図 グリット出土石器実測図(6)



第75図 グリット出土石器実測図 (7)



第76図 グリット出土石器実測図 (8)

は形状が正三角形に近いものである。材質的にはバラつきがある。75は直線的な縁辺を持ち剥離は粗い。76は先端部を欠損、両翼は幅広に作り出されている。77も先端部が欠損、剥離は丁寧で明瞭な稜を作り出している。78は表裏ともに粗い剥離を施し、表面は縁辺にも剥離調整が行なわれる。79は基部の抉りが顕著である。75～79はいずれも材質に安山岩が用いられている。80は、基部の顕著な抉入と張り出した側縁の形状が特徴的である。材質はチャート。

第2類 (第75図81, 図版29)

基部の抉入が非常に特徴的で、明瞭に脚部を作り出すものである。C5区から一点だけ出土している。材質は頁岩が用いられている。

第3類 (第75図82, 83, 図版29)

形状が逆Y字状を呈するものである。82・83はいずれも片脚の欠損するもので、チャート製である。82は両側縁にも抉りを施し肩部を持つ。

破損品・未製品 (第75図84～87, 図版29)

84は先端部及び片脚部を欠損するが、残存する側縁に肩部らしき形状を有し、あるいは第3

類に含まれるかもしれない。黒曜石製。85・86は欠損部が大きく全容は判然としない。86はチャート製で大形のものである。87は未製品である。材質には安山岩が用いられており、形状的にへら状石器の可能性もある。

剥片 (第76図88~100, 図版30)

88, 89はいずれも裏面に自然面を大きく残す剥片で、両極打法的な剥離痕を持つ。90~100はいずれも使用痕のある剥片を一括した。

第7表 グリット出土石器計測表

挿図 番号	遺物番号	器種	計測値 (cm)			重量(g)	石質
			長さ	幅	厚		
1	C 5-12, 0027	打製石斧	7.7	4.5	2.4	105	緑色片岩
2	B 5, 0001	磨製石斧	7.8	5.9	2.5	188	石英砂岩
3	D 3, 0001	磨製石斧	(5.8)	(3.9)	(0.8)	(27.22)	珪質頁岩
4	C 4, 0001	磨製石斧	5.9	4.5	(0.8)	27.85	珪質頁岩
5	C 4, 0001	磨製石斧	3.7	4.5	(1.0)	28.89	緑色片岩
6	E 3, 0001	磨製石斧	6.8	5.3	1.4	70.00	緑色片岩
7	F 2-44, 0001	磨製石斧	(13.2)	5.6	(2.7)	330	珪質頁岩
8	D 3, 0001	磨製石斧	(5.7)	4.9	(1.9)	75	緑色片岩
9	F 2-44, 0001	磨製石斧	(5.1)	4.5	(2.6)	76	泥質砂岩
10	E 3, 表採	磨石	9.9	7.1	2.4	252	砂岩
11	D 2, 0001	磨石	10.7	9.5	4.3	612	石英砂岩
12	D 4-31, 0001	磨石	7.6	5.1	3.7	161	石英斑岩
13	B 4, 0001	磨石	6.0	7.2	3.6	245	泥岩
14	E 3-31, 0001	敲石	7.1	5.1	4.0	200	輝石安山岩
15	D 4, 0001	磨石	6.1	4.7	3.2	105	石英岩
16	D 3, 0001	磨石	(5.9)	3.8	(3.0)	80	砂岩
17	E 3, 0001, 0003	磨石	(2.5)	5.7	3.5	65	泥岩
18	F 2-30, 0001	磨石	(6.1)	8.9	3.4	290	石英砂岩
19	E 3-13, 0001	敲石	9.6	7.1	3.0	275	砂岩
20	F 2-30, 0001	磨石	(6.8)	4.6	3.5	165	石英岩
21	C 4, 0001	磨石	(7.6)	7.5	2.7	195	砂岩
22	E 2, 0001	磨石	11.2	6.8	3.6	325	中粒砂岩
23	D 4, 0001	磨石	5.5	2.8	2.4	68	頁岩
24	D 4, 0001	磨石	7.0	7.5	3.7	258	石英砂岩
25	C 5-21, 0016	磨石	15.7	7.4	4.6	817	石英斑岩
26	D 4, 0003 F 2, 0001	敲磨石	9.2	3.7	4.5	136	泥岩

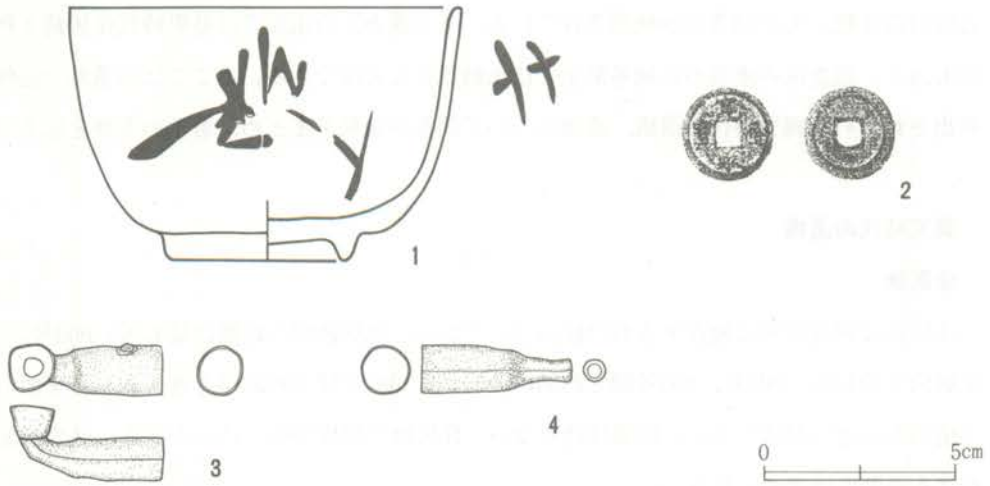
27	D 4, 0001	敲	石	10.8	7.8	2.9	360	砂 岩
28	D 3, 0001	磨敲	石 石	9.2	5.7	4.3	338	石 英 砂 岩
29	F 2-44, 0001	磨敲	石 石	11.7	8.2	6.4	892	石 英 斑 岩
30	B 5-31, 0289	敲	石	11.5	5.3	4.2	368	チャート
31	B 5-20, 0022	磨凹	石 石	10.3	7.9	4.0	599	輝石安山岩
32	D 4, 0003	敲凹	石 石	10.5	5.5	4.9	208	多孔質安山岩
33	C 4-23, 0001	砥	石	10.2	4.5	2.4	88	砂 岩
34	表採	石	棒	7.4	5.6	2.5	126	緑色片岩
35	B 5-41, 0007	石	棒	6.0	5.3	2.3	102	緑色片岩
36	F 2-44, 0001	石	棒	6.9	10.6	10.4	794	流 紋 岩
37	E 3, 0001	石	弾	5.1	4.4	3.7	118	石 英 砂 岩
38	C 5-21, 0014	石	皿	15.0	12.6	11.8	486	砂 岩
39	B 5-41, 0013	石	皿	16.2	12.6	6.2	795	花 崗 岩
40	C 4, 0001	石	皿	16.2	12.8	5.2	47.58	玄 武 岩
41	D 4, 0002	ポ イ ン ト		4.1	2.3	0.6	7.02	頁 岩
42	117, 0065	ブ レ イ ド		2.7	1.7	0.4	3.28	チャート
43	B 5-32, 0123	石	核	2.1	1.9	0.8	5.88	黒 曜 石
44	B 5-30, 0149	石	核	2.8	3.2	0.7	6.78	安 山 岩
45	D 5, 0003	スクレイパー		4.5	2.4	0.6	10.72	チャート
46	D 3, 0001	スクレイパー		5.6	3.2	1.0	17.19	チャート (赤)
47	B 5-30, 0224	スクレイパー		3.7	3.5	1.8	17.62	チャート (赤)
48	E 2-42, 0001	スクレイパー		2.7	2.6	0.8	5.67	黒 曜 石
49	B 5-41, 0115	楔 形 石 器		3.1	3.5	1.1	15.21	チャート (赤)
50	A 6-16, 0054	楔 形 石 器		3.2	2.2	0.9	7.46	安 山 岩
51	D 4, 0004	石	錐	2.6	1.9	0.3	4.02	安 山 岩
52	表採	石	錐	4.3	3.7	0.4	6.92	頁 岩
53	D 4, 0004	石	錐	5.0	2.5	0.3	1.41	安 山 岩
54	C 4-23, 0001	石	鐵	3.5	2.3	0.4	2.86	安 山 岩
55	C 5, 0001	石	鐵	3.0	1.9	0.5	1.73	安 山 岩
56	B 5-31, 0014	石	鐵	2.8	1.9	0.4	1.88	チャート
57	C 4, 0001	石	鐵	2.9	2.4	0.5	3.01	安 山 岩
58	D 4, 0001	石	鐵	2.2	1.3	0.4	1.01	凝灰質砂岩
59	B 5-32, 0121	石	鐵	1.6	1.4	0.5	0.86	凝灰質砂岩
60	B 5-31, 0235	石	鐵	2.8	2.1	0.5	1.50	頁 岩
61	C 5-12, 0005	石	鐵	2.4	2.2	0.4	1.83	安 山 岩
62	D 3, 0002	石	鐵	2.2	1.5	0.3	0.89	チャート
63	表採	石	鐵	2.2	1.6	0.4	0.99	黒 曜 石

新山台遺跡 (No.15)

64	B 6-00, 0008	石	鐵	2.1	1.6	0.4	0.12	黒曜石	
65	B 5-21, 0071	石	鐵	2.5	1.9	0.4	1.38	安山岩	
66	B 5-22, 0042	石	鐵	1.9	1.5	0.3	0.80	安山岩	
67	C 5-12, 0005	石	鐵	1.8	1.5	0.4	0.62	安山岩	
68	B 6-21, 0010	石	鐵	1.7	2.0	0.4	1.08	チャート	
69	表採	石	鐵	2.0	1.9	0.3	1.10	安山岩	
70	B 5-22, 0043	石	鐵	1.8	1.9	0.3	0.51	安山岩	
71	B 5-32, 0117	石	鐵	1.8	1.9	0.4	1.05	チャート	
72	C 5-12, 0005	石	鐵	1.4	1.5	0.5	1.02	安山岩	
73	B 5-21, 0061	石	鐵	1.6	0.9	0.2	(0.45)	チャート	
74	A 6-23, 0032	石	鐵	1.7	1.2	0.3	0.51	黒曜石	
75	D 5, 0003	石	鐵	3.1	1.7	0.6	1.82	安山岩	
76	表採	石	鐵	2.7	2.4	0.6	2.30	安山岩	
77	C 4, 0001	石	鐵	1.8	2.1	0.4	1.12	安山岩	
78	B 5-41, 0095	石	鐵	2.6	1.8	0.5	1.30	安山岩	
79	D 3, 0001	石	鐵	2.5	2.0	0.5	1.55	安山岩	
80	B 5-31, 0147	石	鐵	1.8	2.2	0.4	1.30	チャート	
81	C 5, 0001	石	鐵	2.0	1.4	0.3	0.53	頁岩	
82	C 4, 0001	石	鐵	2.8	1.7	0.6	1.14	チャート	
83	C 4-23, 0001	石	鐵	2.5	1.2	0.3	3.59	チャート	
84	B 5-32, 0120	石	鐵	2.3	1.2	0.3	0.58	黒曜石	
85	C 4-04, 0001	破	損	品	1.7	0.8	0.3	(0.39)	流紋岩
86	表採	破	損	品	4.0	2.4	0.7	6.20	チャート
87	B 4, 0001	未	裂	品	4.2	3.3	1.0	15.84	安山岩
88	B 5-31, 0128	剥	片	4.7	3.9	0.9	18.85	安山岩	
89	D 4, 0001	剥	片	5.0	4.4	0.9	26.45	チャート (赤)	
90	C 4-23, 0001	剥	片	2.6	3.7	0.5	3.59	チャート	
91	C 4-04, 0001	剥	片	2.5	2.7	0.7	4.21	頁岩	
92	D 4, 0001	剥	片	3.5	3.7	1.0	9.89	頁岩	
93	B 5-32, 0123	剥	片	3.7	2.3	0.6	5.88	メノウ	
94	A 6-23, 0012	剥	片	3.2	1.6	0.7	3.90	チャート	
95	C 5-12, 0040	剥	片	3.5	1.2	0.6	2.14	黒曜石	
96	表採	剥	片	3.1	1.8	1.1	6.83	黒曜石	
97	表採	剥	片	1.9	1.2	0.3	0.82	黒曜石	
98	C 5, 0001	剥	片	1.7	1.7	0.4	0.66	黒曜石	
99	表採	剥	片	2.5	1.0	0.6	1.17	黒曜石	
100	表採	剥	片	2.1	1.7	0.7	1.80	黒曜石	

○その他の遺物（第77図1～4，図版30）

1は陶製の碗で，器面は淡い灰茶褐色を呈す。また外面中央には暗青褐色の染料で絵付が施される。口径10.4cm，器高6.4cmを測る。2は江戸時代の寛永通宝で，いわゆる「新寛永」に属する。3・4はキセルでいずれも銅製である。3が雁首，4が吸い口，断面はいずれも円形を呈す。A6-13区からの出土で両者は同一キセルに用いられたものであろう。



第77図 その他の遺物

第4章 小 結

新山台遺跡の発掘調査区域は、道路建設に伴う敷地内のため細長いものとなっているが、地形的には北西方向に緩く突出する台地の先端をかすめた形となっている。そのため台地上全体の様相は明確にしえなかったが、縄文時代加曾利E式終末期に位置づけられる土器を出土する住居跡4軒、土壇23基等が検出されている。また調査区の南端では歴史時代住居跡1軒の検出もあり、調査区の南側の台地基部上では土師器片も表採できる。ここでは当遺跡で主体的に検出されている縄文時代の遺構、遺物について調査の成果をまとめ、若干の考察を加えてみたい。

縄文時代の遺構

住居跡

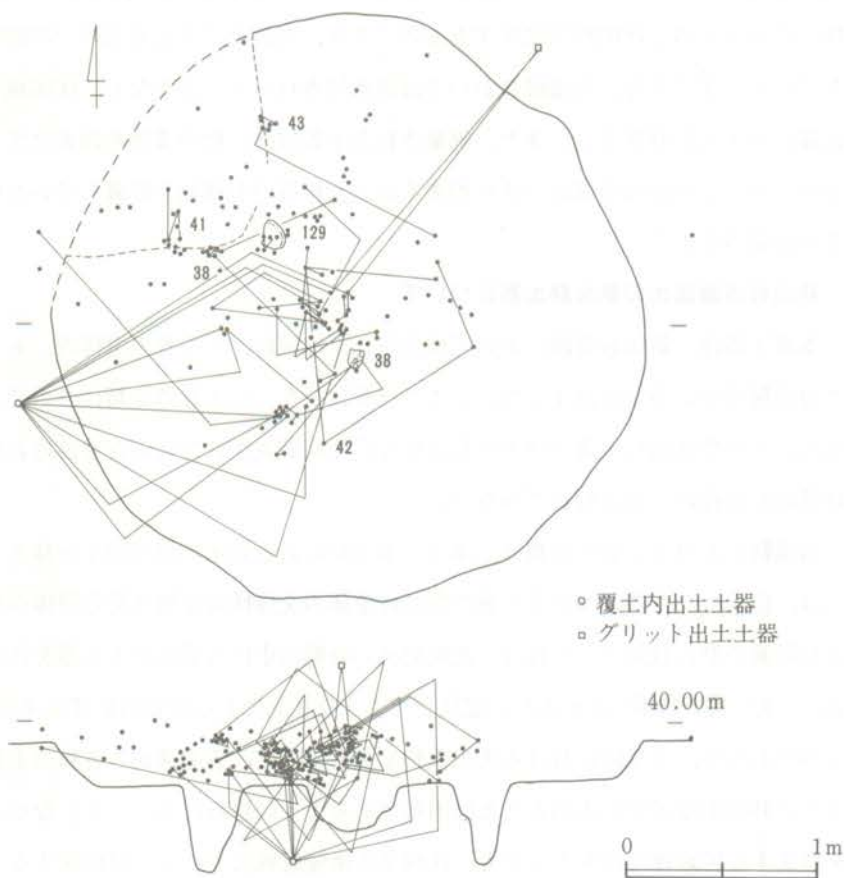
住居跡は調査区内に散在する形で検出されており、住居跡間の距離は最も近い003号、004号住居間で約12m、003号、005号間で約30m、004号、002号間で約33mを各々測る。平面形は全て楕円形に近い形状を呈し、周溝は持たない。住居跡の規模や掘り込みの深さ、柱穴の配置における規則性は認められない。

遺物は各住居跡から多数出土している。そのうち住居跡の時期を決定できるものとして、004号住居跡柱穴内から検出された第IV群6類土器と005号住居跡の炉に用いられた、同じく第IV群6類土器とがある。いずれも微隆起線により文様の描出される土器である。この2点を除いて他の土器の出土の状況は、床面より浮いた位置から各類土器が混然として出土している。

最も多量の遺物の出土を見た002号住居跡において主要土器の接合関係を図示(第78図)したが、住居跡内出土土器とグリット出土土器の接合例も多く見られる。002号住居跡内からは完形品に近い個体も多く出土しており、図上復元の可能だったものまで含めて、その数は24を数える。また土器片錘及び土製円盤等の土製品35点、石鏃15点等、おそらくは廃絶前の一住居が保有していたと思われる「道具一式」の量を超えるもので、002号住居跡から検出されたものの中には、他住居等で使用された後当住居跡に廃棄されたものが多く存在していると思われる。このように多くの遺物が検出されたことは、単に住居の規模の大きさゆえに廃棄された遺物が増えていったのではなく、廃絶前の002号住居が集落内における首長の意義を有していたと考え、そこに、ある意志を持って廃棄行為があったとみることもできる。

土壇

土壇は住居跡間の空白部を埋めるように位置する。002号住居跡付近やそれ以南には検出されおらず、調査区の北側に偏在する形をとる。また、どの住居跡からも比較的距離を置いた位置(D3区、B4区北東端)に9基の土壇群が配列され、機能的にも他の土壇群と区別されるも



第78図 002号住居跡出土主要土器接合図

のかもしれない。以下に覆土の状態や遺物の出土状態をもとに各土坑、あるいはD3区土坑群の機能的側面について考えてみたい。

平面形は全て円形を基本とする。規模は径が1.0m～1.5mに収まるものがほとんどである。掘り込みの深さは、50cm前後を測るものが多い。覆土はほとんどが自然堆積であるが、人為的に途中まででも埋め戻されたと思われる状況を呈するものが5基を数える。このうち4基は005号住居跡の付近に扁在している。

土坑内から出土した遺物は多量で、完形品あるいは大形破片を出土する土坑も多い。このうち115号土坑における遺物の出土状態は、坑底に深鉢形土器が倒置されており、他の多くの土坑に見られるような単なる廃棄ではない。覆土の堆積は自然堆積であり、003号住居と約2mの距離しかないため単純に墓坑とは言えないが、幼児骨等の埋葬施設とも考えられる。他の土坑からの遺物の出土状態は、圧倒的に覆土の中層以上からの出土が多く、いずれの場合も多量の土器破片を伴っている。このことは、各土坑の多くがある程度自然な状態で埋没の過程を経て

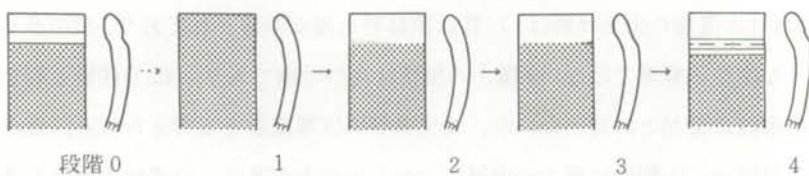
凹地となり、そこに土器の投棄が行なわれたものと考えられる。以上は、いわゆる「ゴミ捨て場」的な土壇の二次的利用に関するものであり、当然その土壇本来の一次的利用(機能)が存在していたはずである。当遺跡においては埋め戻された土壇は少なく、住居域とは区画されない位置に各土壇が存在する。また、廃棄された土器以外に他の遺物を顕著に伴なうものは存在しなかった。このため当遺跡の土壇の多くは、食料等の有機物を貯蔵していた場所としてとらえるのが妥当であろう。

新山台遺跡出土の第Ⅳ群土器について

本群土器は、新山台遺跡において検出された住居跡、土壇等の遺構内、あるいは遺跡を覆った包含層中から多量に出土した。ここでは既に行なった土器の分類について、もう一度検討を加え、その型式的な位置づけとそれに伴ない今回調査された新山台遺跡における生活の営みの時間的な消長の一部に触れてみたい。

当遺跡における土器の分類は、諸々の事情からある意味で便宜的な分類となった。まず第1には、出土した土器のうちその量の割には全体の文様構成を知り得る個体が少なかったこと、また従来の型式設定からすれば、比較的狭い時期の中に当遺跡出土土器を比定できるからである。この「狭い時期」こそ未だに混乱したような状況にある加曽利E式終末期(EⅢ式・EⅣ式)なのであるが、当遺跡における出土資料を見る中では、各遺構から各類の土器が伴出しており、そこに時間的な差異を求めることは困難であるように思われる。しかしながら、口縁部無文帯を形成する区画線だけをとっても、沈線文と微隆起線文という一見相反する手法が存在する。一般に、微隆起線文を有するものの方がより新しい段階に属すると考えられており、当遺跡出土土器で分類した4類、5類、7類土器の中にも口縁部無文帯を形成する区画線という限られた枠内ではあるが、時間的な推移が認められる(第79図0→4)。

第79図における土器は全て深鉢形土器で地文(縄文、条線)のみを有し、胴部文様は持たないことを基本とする。段階1は第7類土器としたもののうちの一部がこれに相当する。全面に縄文または条線文を施し、口唇部はへらによる整形(第25図94)が加えられたり、刻目を施す



第79図 口縁部無文帯区画の推移模式図

もの(第19図17)等があるが、全体からみた出土量は僅少である。段階2は、主として横ナデによる整形が口唇部から口縁部に及び、地文を磨消して口縁部に無文部を形成する。第4類土器がこれに相当する。段階3は、口縁部の横ナデが強く行なわれており、無文部が沈下して、地文と接する部分は微隆起線状に隆起した感じを与える。第4類土器のうちの一部がこれに相当する。量的には非常に少ないが、108号土壇出土の土器(第39図20, 第40図21)があげられる。段階4は、無文部と施文部の区画を指でつまむように整形し、微隆起線を形成する。そのため微隆起線直下は沈線状に地文が磨消される。ここに見られる微隆起線はつまみ上げによるもので、一部に見られる粘土紐貼り付けによる隆帯とは様相を異にする。第5類土器がこれに相当する。また段階0とした沈線区画による口縁部無文帯を有する第2類土器については、上記の段階1~4にスムーズに連続するものではなく、微隆起線文による口縁部区画が発生する直接の契機とはならない。時間的な位置づけとしては、器形的に内湾する口縁部形態を有するものが多く、加曾利E式終末期の前段階から盛行する沈線区画による磨消縄文帯の手法に共通する手法であるという点で、微隆起線文土器の前段階から存在していたものと思われる。

以上はあくまでも加曾利E式終末期における口縁部無文帯の形成を、主として口縁部断面の観察により順序づけたものである。これを既設の型式にあてはめてゆくことはできないが、上記のような口縁部区画線のあり方は、それ自体に時間的な推移関係を含むものの、これを型式設定の材料とするのではなく、加曾利E式終末期の中で、より新しい段階のものとされる微隆起線文発生への過程と理解したい。当然のことながら、土器型式の流れを握むには、少なくとも文様構成の変化、同一型式内における器形の変化、そして出土層位等を考慮しなければならないし、その一つでも欠けた資料をもって型式を設定しても、その型式は存在的価値のあるものとはならない。その意味で微隆起線文という手法は、前段階において主体的に用いられる沈線文区画と磨消縄文帯の手法にとって代わるものでなく、前段階の手法に加えて新たに用いられた手法であると言え、そこには加曾利E式最終末期における時代的な要請をもって発生したという根拠が存在するはずである。要約すれば、微隆起線文土器を伴う加曾利E式終末期土器群は、それを伴わない加曾利E式終末期土器群より新しいわけであり、そこに加曾利E式最終末期という一つの時代を見ることができるといえる。

それでは、この微隆起線文を有する加曾利E式最終末期の土器は、後出する後期初頭称名寺式にどのように連続するのだろうか。当遺跡からは、称名寺式期に位置づけられる資料の出土が少ないが、称名寺式土器を概観すると、文様の区画線をはじめとして文様の描出方法はほとんどが沈線によるものである。この比較的細く、きっちりとした感じに描かれる沈線を有しながら、口縁部無文帯の区画が微隆起線により施される土器が、005号住居跡炉から2点出土している(第28図127, 129)。これらは第6類とした微隆起線のみにより文様の描出される土器(第

第 II 篇

大安場遺跡 (No.7)

遺跡コード 343—011
所在地 香取郡大栄町吉岡字大安場1321—1他
調査研究員 斎木勝, 岸本雅人

来光台第 1 遺跡 (No.8)

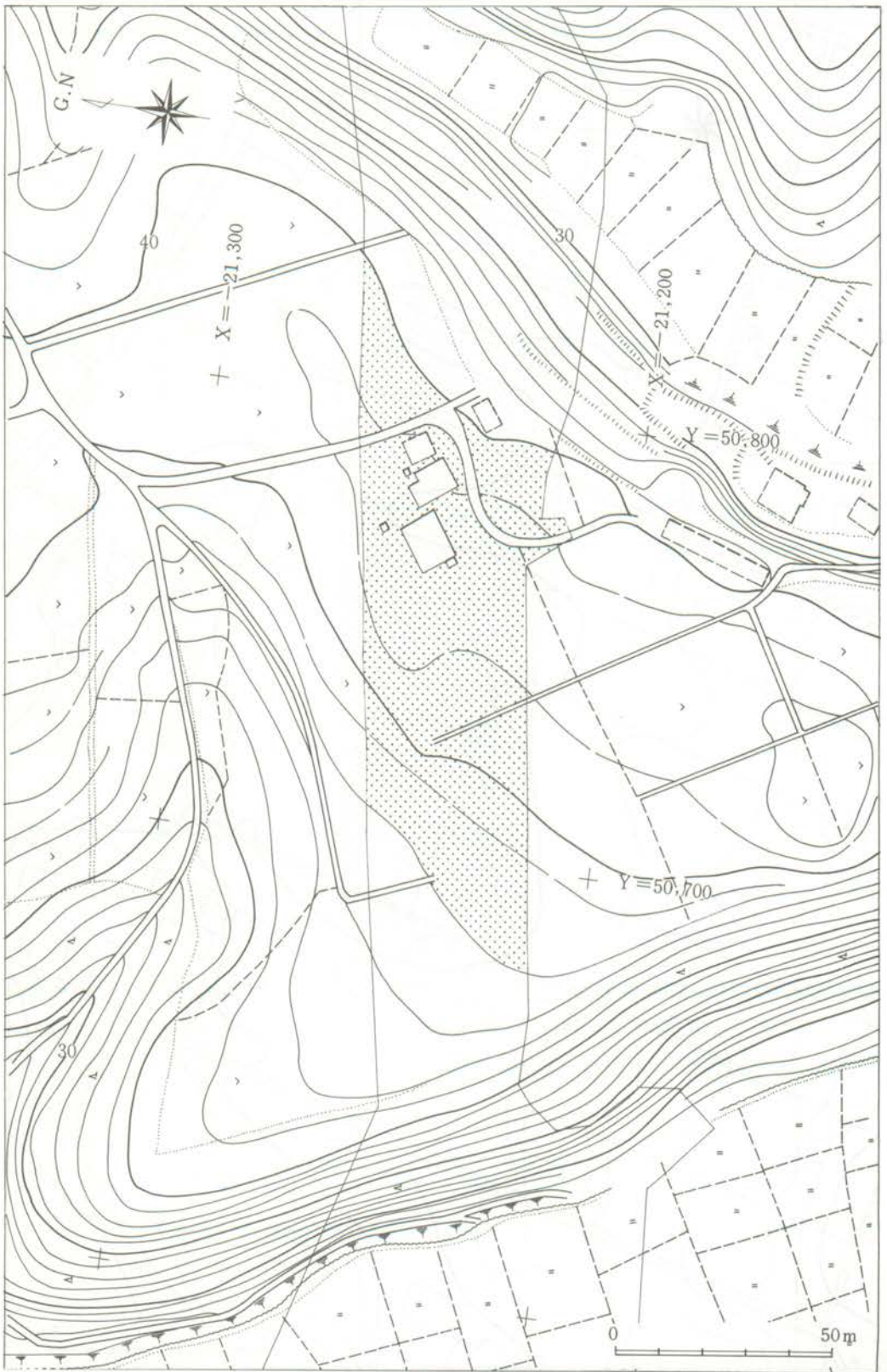
遺跡コード 343—012
所在地 香取郡大栄町吉岡字来光台1148—1他
調査研究員 池田大助, 岸本雅人

来光台第 2 遺跡 (No.9)

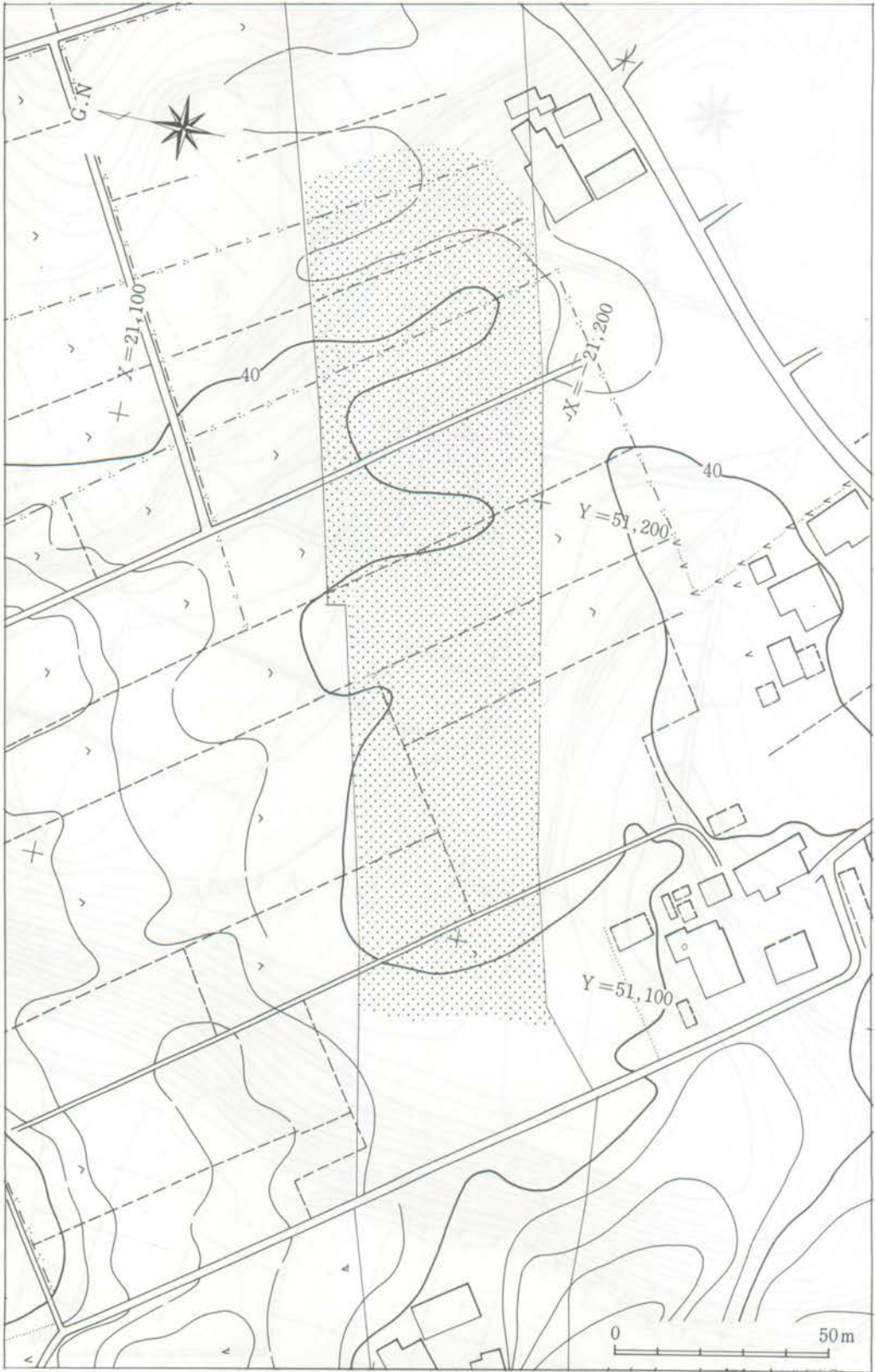
遺跡コード 343—013
所在地 香取郡大栄町吉岡字来光台1148—1他
調査研究員 池田大助, 岸本雅人

来光台第 3 遺跡 (No.10)

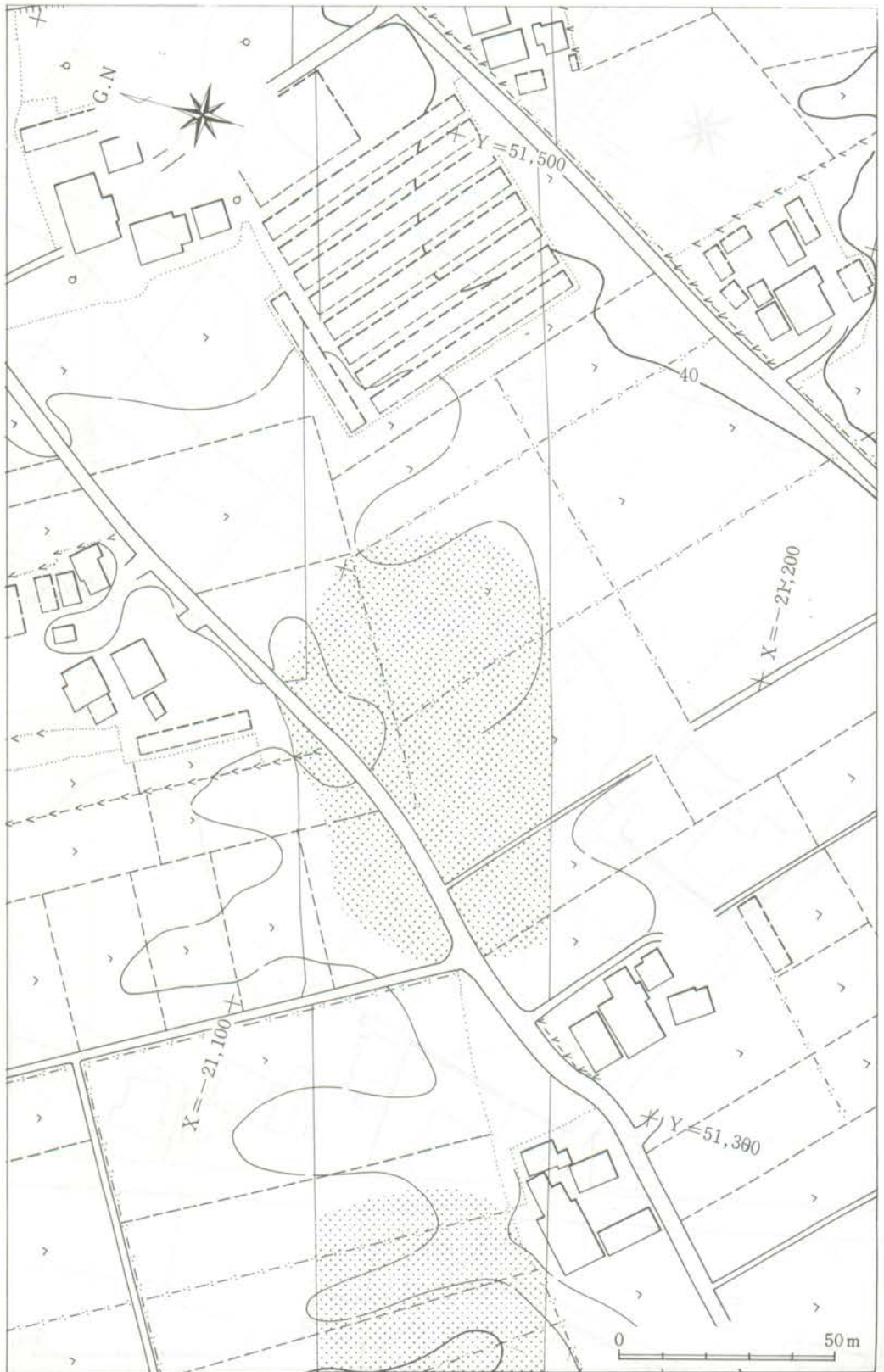
遺跡コード 343—014
所在地 香取郡大栄町吉岡字来光台1119—1他
調査研究員 鈴木定明, 池田大助, 岸本雅人



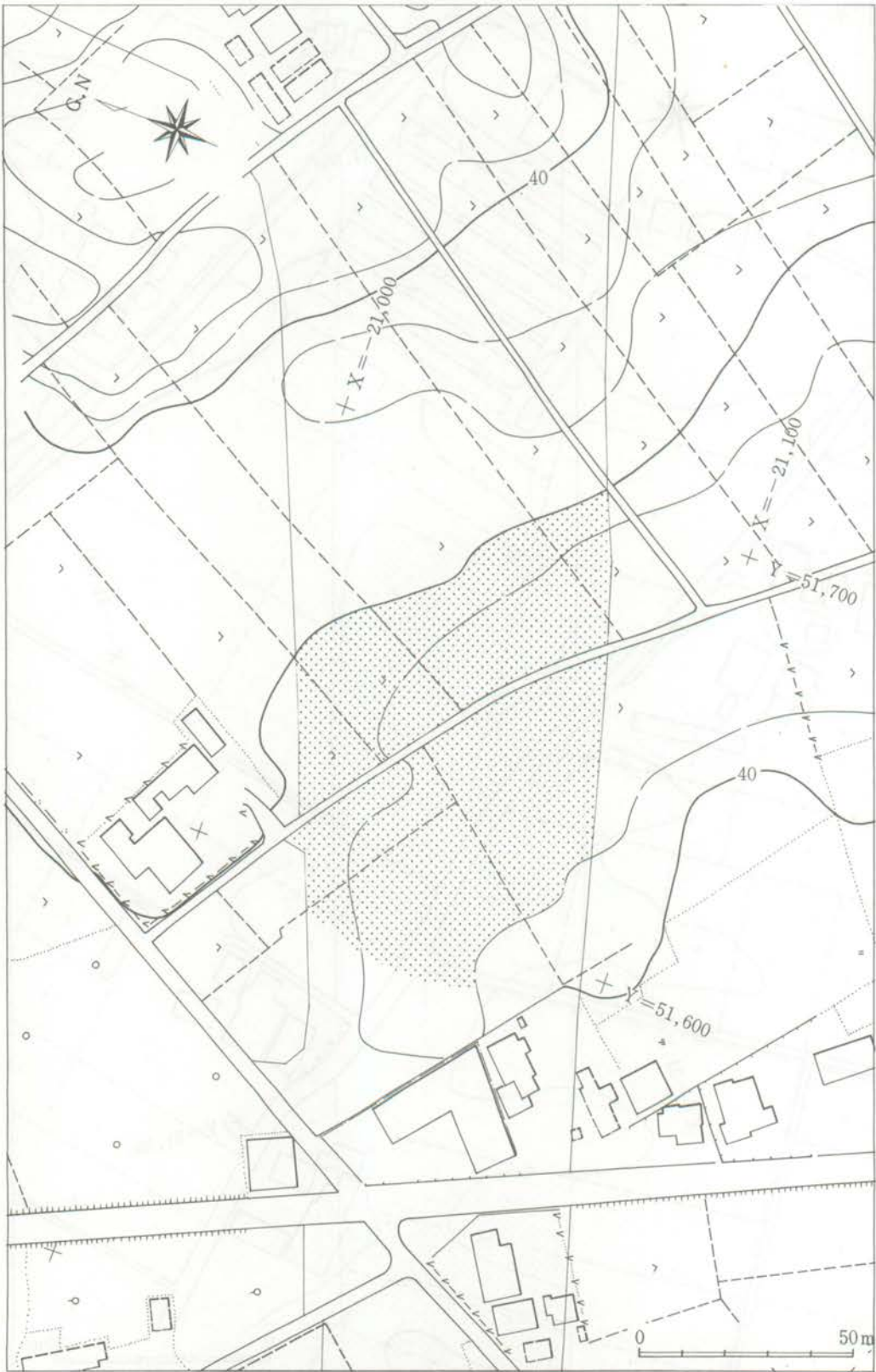
第80図 大安場遺跡地形図 (1/1,500)



第81図 来光台第1遺跡地形図 (1/1,500)



第82図 采光台第2遺跡地形図(1/1,500)



第83図 来光台第3遺跡地形図 (1/1,500)

第1章 調査概要

発掘区の設定方法は、対象地全体に20×20mの大グリットを設け、さらに4×4mの小グリットに区分けしてこれを基本区とした。確認調査の面積は、対象面積の約20%である。

大安場遺跡は、対象地6100㎡（包含地）で、昭和57年1月7日より調査を開始し、1月30日まで期間を要した。グリット設定後H区より発掘を開始し、1月12日にH区内で南北に走る溝状遺構を検出した。1月20日にはほぼ全域の確認調査を終了した。その後H区の溝状遺構の拡張作業と、先土器の確認調査を開始した。溝状遺構の調査を完了して、1月30日にすべての調査を終了した。

来光台第1遺跡は、対象地（包含地）6210㎡で、昭和56年11月16日より調査は開始され、12月16日をもって終了した。グリット設定後東側より発掘を開始し、11月25日に長円形の落込みを確認し、付近を拡張した。12月にはいり、確認された遺構の調査に着手、併行して先土器時代の確認調査も行ない、12月16日にすべての調査を終了した。

来光台第2遺跡は、対象地6900㎡（包含地）で、昭和56年10月19日に着手され、一時中断後12月16日に終了した。グリット設定後、A区より発掘を開始し、順次東側へ掘り進めた。溝状遺構が確認されたので、その方向に沿って拡張を行ない、規模、方向等を確認した。調査対象地内に一部植木があり、その移植作業により一時調査を行なえず、他遺跡の調査に移行した。再び調査にはいり、12月16日にすべての調査を終了した。

来光台第3遺跡は、対象地6800㎡（包含地）で、昭和56年9月16日より調査が開始され、10月16日までの1ヶ月間を要した。E2区より着手し、順次西側のグリットに進んだ。B2区より土壇が確認され、拡張後発掘を行なった。先土器時代の確認調査も併行して行ない、10月16日にすべてを終了した。

第2章 調査成果

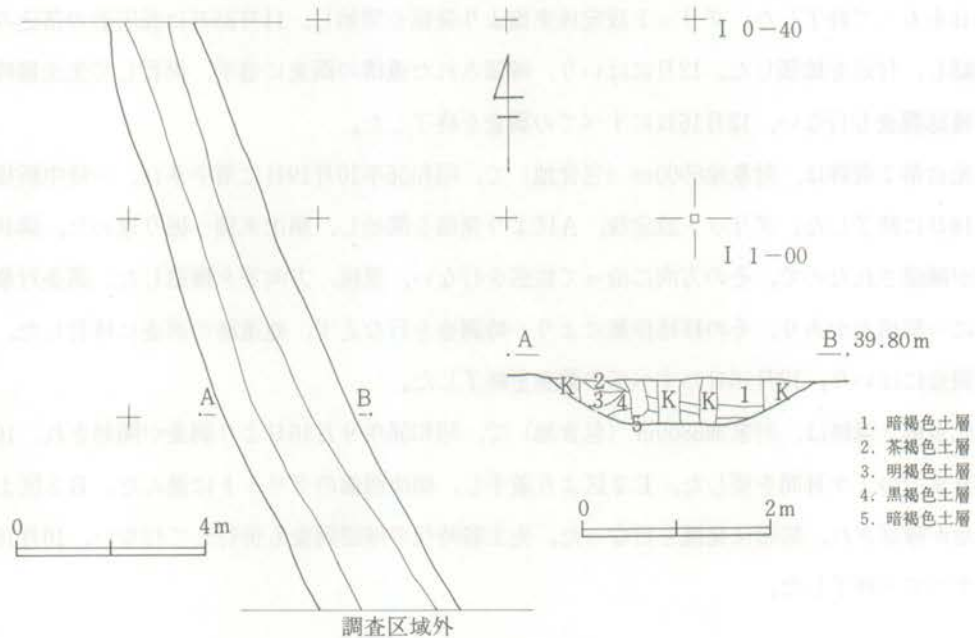
要 調査概略

第1節 大安場遺跡 (No.7)

検出遺構

本遺跡より検出された遺構は、溝状遺構1条のみである。

調査区の東端に位置し、部分的ではあるがほぼ南北に走るようである。規模は、上端1.9~2.5m、下端0.6~1.2mを測る。確認面は暗褐色土層中である。溝底面はハードローム面に達し、比較的平坦である。覆土は自然堆積の状況を呈するが、攪乱が著しい。遺物の出土は認められなかった。



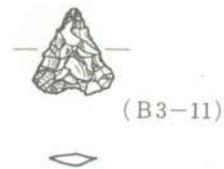
第84図 溝状遺構実測図

出土遺物

本遺跡より出土した遺物はきわめて少なく、縄文土器片と石鏃1点が検出されたのみであった。ただ、縄文土器片は小片のため図示し得なかった。

石器 (第85図)

黒曜石製の石鏃である。形態は、基部に若干の抉入が



第85図 石器実測図

あることより、凹基無基礎と思われる。脚がきわめて太いことが特徴である。最大長21mm，幅15.4mm，厚さ2.3mmを測る。

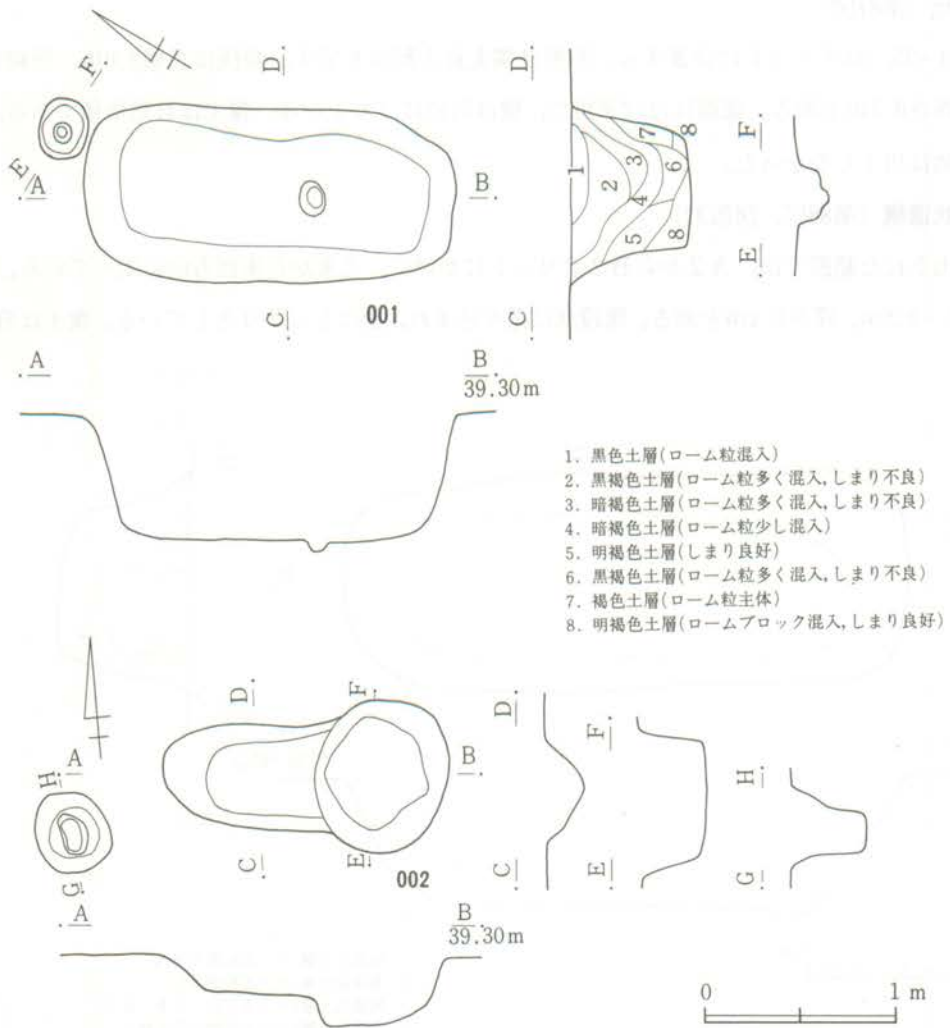
第2節 来光台第1遺跡 (No.8)

検出遺構

本遺跡より検出された遺構は、土坑2基のみである。

001号土坑 (第86図，図版31)

G 1-33, 43グリットにかけて位置する。形態は隅丸長方形を呈し，規模は長軸2.0m，短軸0.9m，深さ0.6mを測る。底面はほぼ平坦である。底面および壁外にピットが穿たれるが，い



第86図 001号・002号土坑実測図

ずれも浅い。覆土は自然堆積である。

遺物の出土はみられない。

002号土坑 (第86図)

G 2-23, 24グリットにかけて位置する。形態は不整楕円形を呈し、規模は長軸1.5m, 短軸0.5~0.8m, 深さ0.4mを測る。土坑外に深さ44cmのピットが存在する。

遺物の出土はみられない。

第3節 来光台第2遺跡 (No.9)

検出遺構

本遺跡より検出された遺構は、土坑1基と溝状遺構2条のみである。

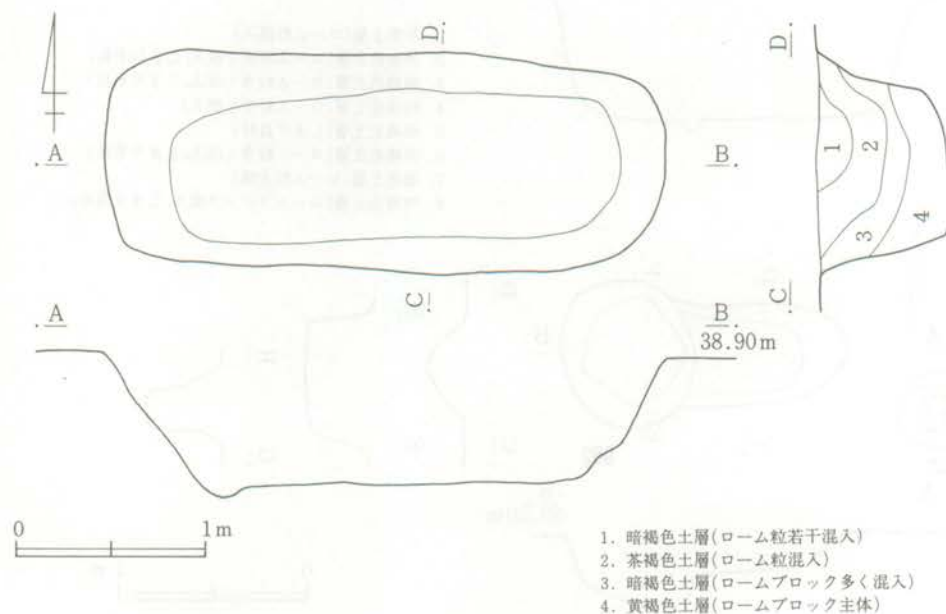
土坑 (第87図)

A 1-33, 34グリットに位置する。形態は隅丸長形状を呈す。規模は長軸3.0m, 短軸1.1m, 深さ0.7mを測る。底面はほぼ平坦で、壁は斜めに立ち上がる。覆土は自然堆積である。

遺物は出土しなかった。

溝状遺構 (第88図, 図版32)

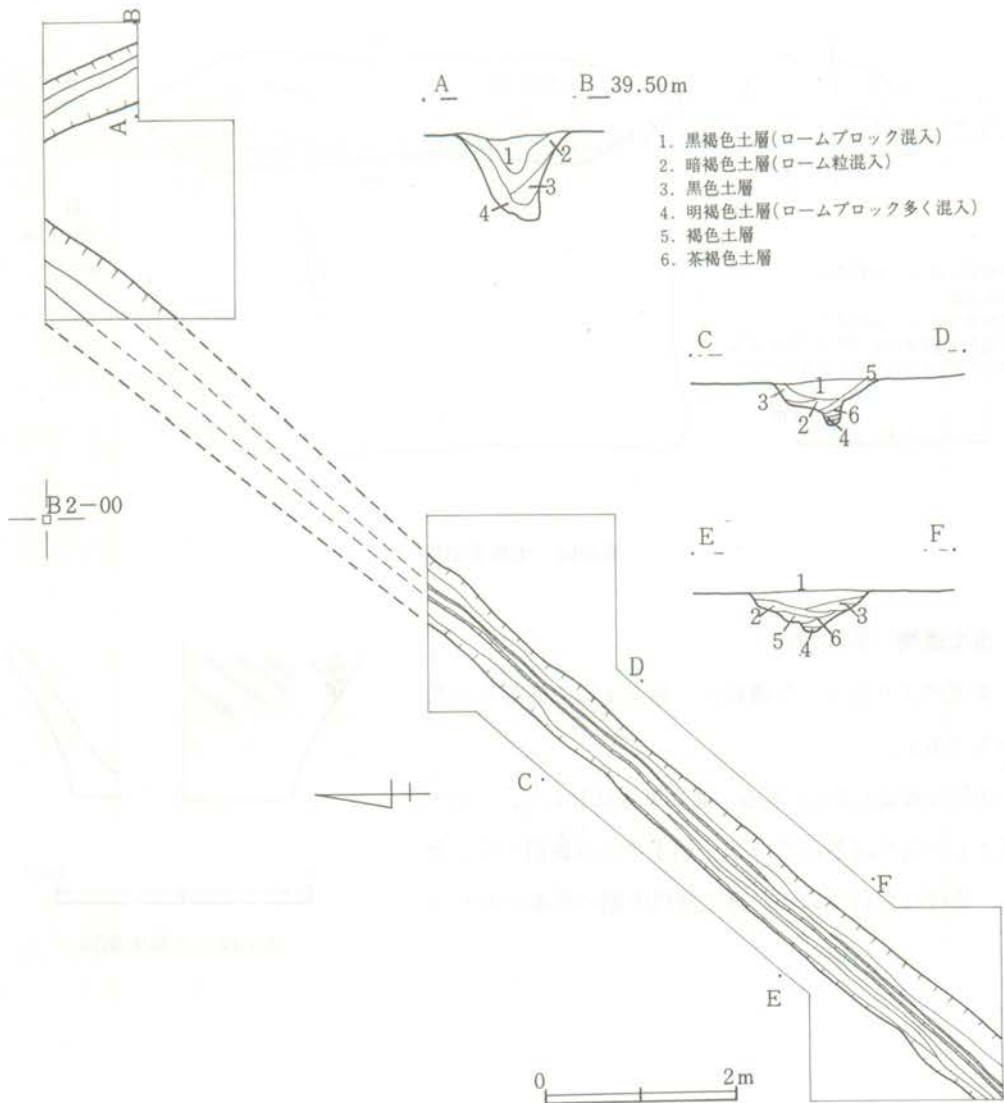
検出された範囲では、A 2 から B 2 グリットにかけて、北東から南西方向に走っている。幅は0.5~0.8m, 深さ0.4mを測る。階段状に掘り込まれ、壁はしっかりとしている。覆土は自然



第87図 土坑実測図

堆積と思われるが、層中にはローム粒を多く含み、かなり固くしまっている。B2グリットでは、本溝と交差するような形でほぼ南北に走るもう一条の溝がみられる。幅0.5m、深さ0.8mを測り、断面は略U字形を呈す。これらの溝は、断面形および覆土の状況より、同一時期に設けられたものではないようである。

遺物はまったく出土しなかった。



第88図 溝状遺構実測図

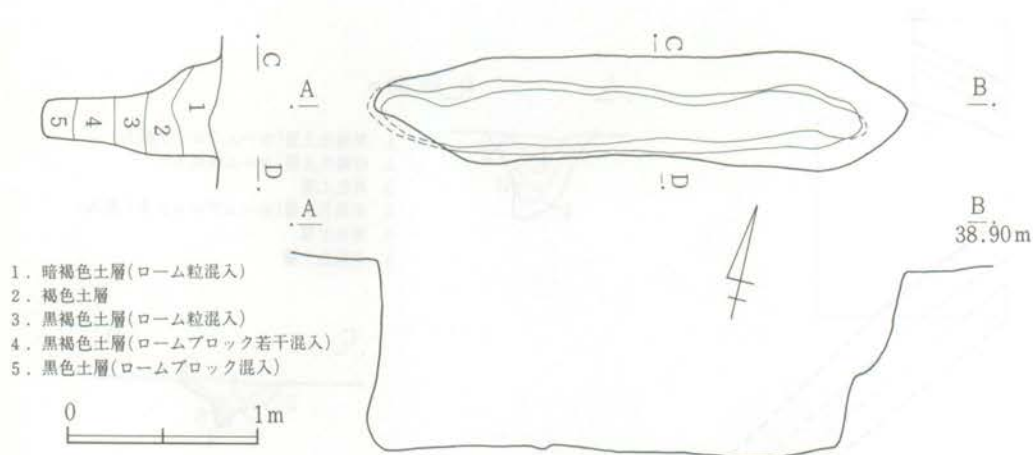
第4節 来光台第3遺跡 (No.10)

検出遺構

本遺跡より検出された遺構は、土壇1基のみである。

土壇 (第89図, 図版33)

B 2-13, 14グリットに位置する。平面形は長楕円形を呈する。規模は上端長2.8m, 幅0.5m, 深さ1.0mを測る。底面はほぼ平坦である。壁はほぼ垂直に掘り込まれるが、一部オーバーハング状のところもみられる。遺物は出土しなかった。

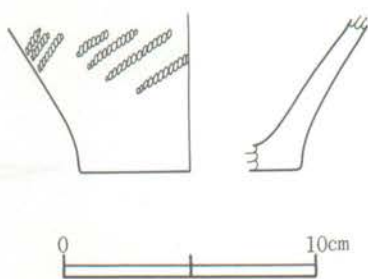


第89図 土壇実測図

出土遺物 (第90図)

本遺跡より出土した遺物は、縄文土器の底部片一点のみである。

底径は推定8.7cmを測る。縄文原体はRLで、一部ナデにより磨り消されている。胎土中には長石を多く含み、焼成は良好である。縄文時代中期の所産であろう。



第90図 土器実測図

第 III 篇

新堀第 1 遺跡 (No.11)

遺跡コード 343-006

所在地 香取郡大栄町吉岡字新堀559-1他

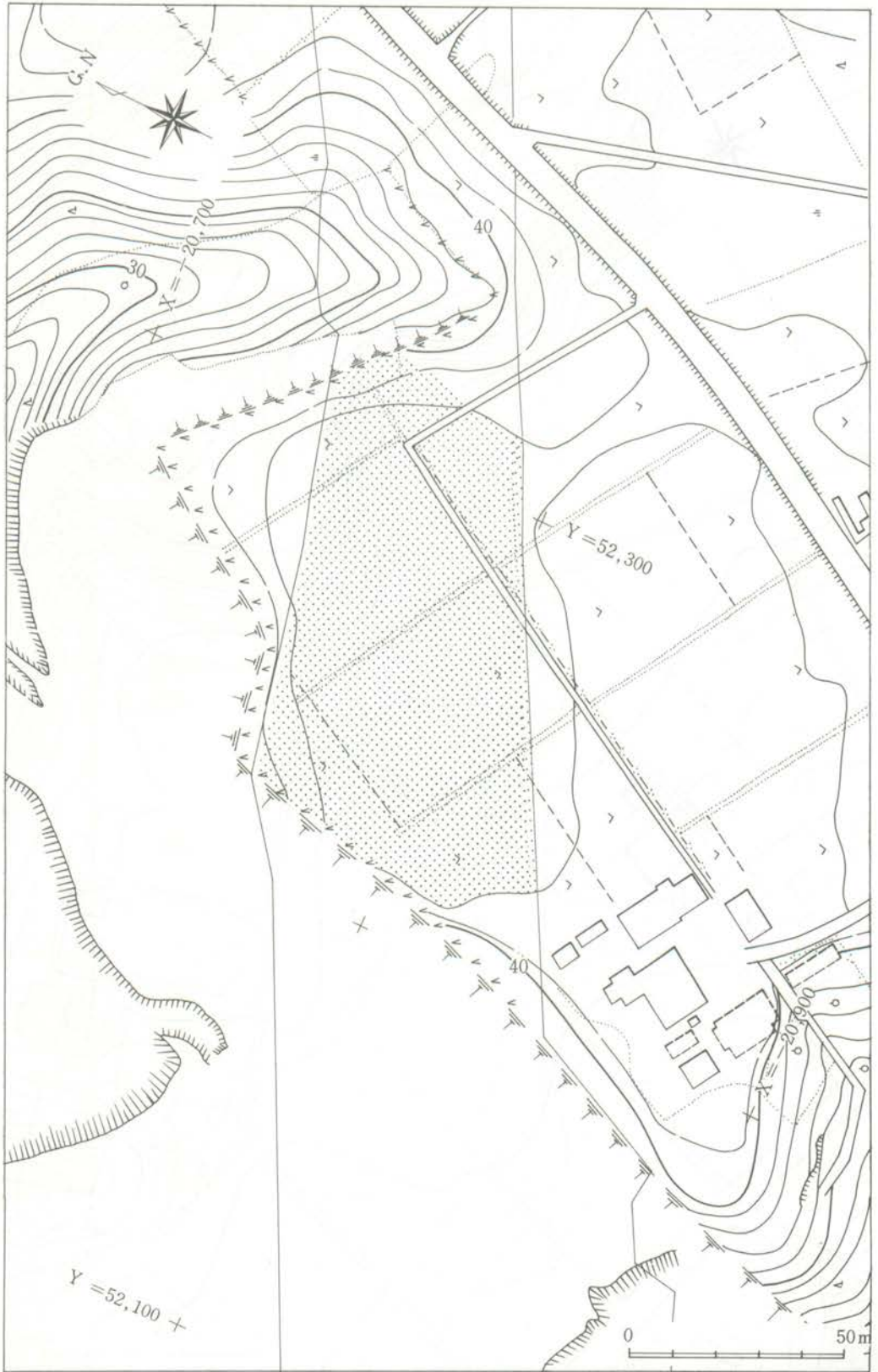
調査研究員 高橋賢一，岸本雅人

新堀第 2 遺跡 (No.12)

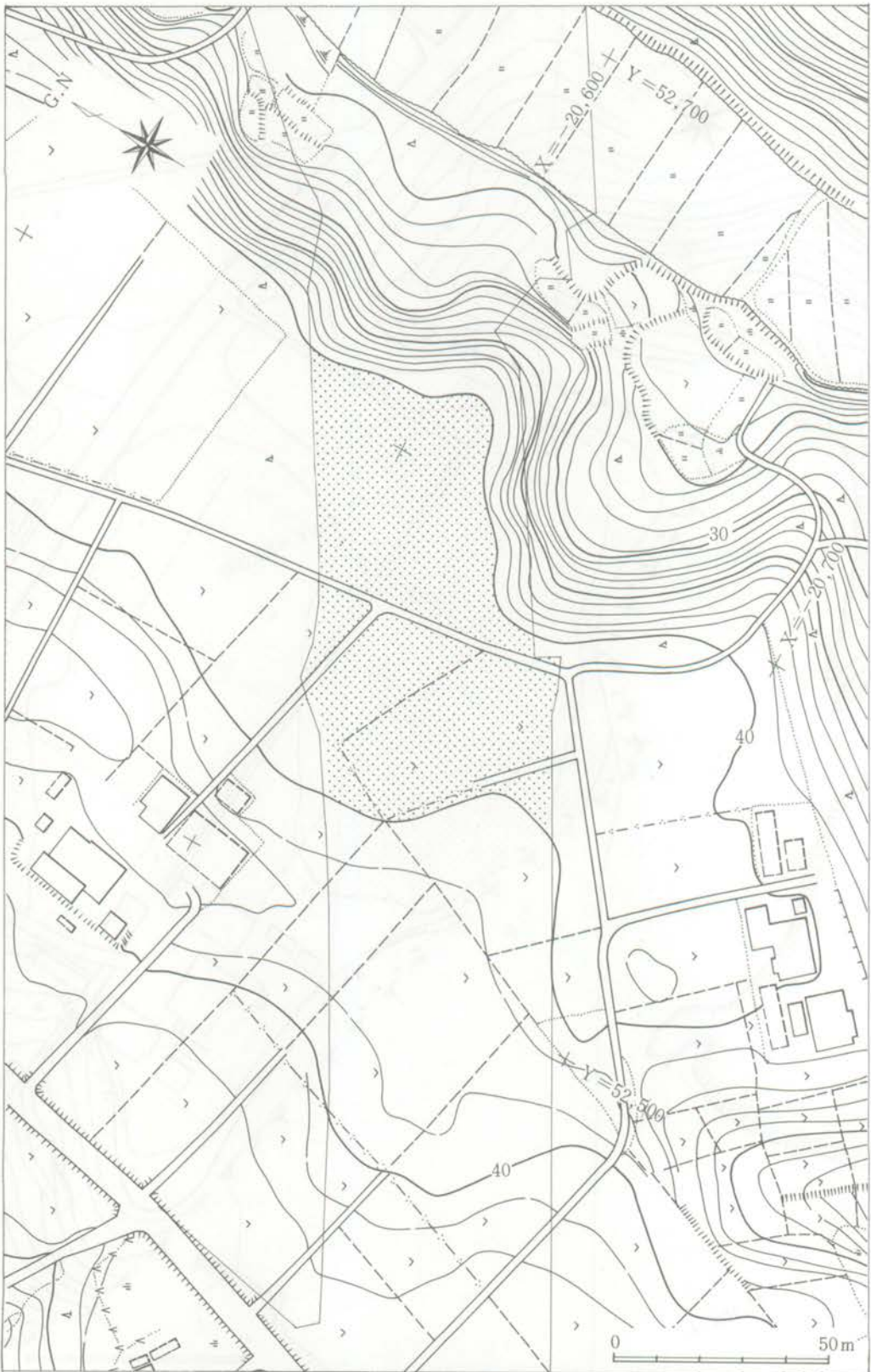
遺跡コード 343-007

所在地 香取郡大栄町吉岡字新堀557-6他

調査研究員 高橋賢一，岸本雅人



第91図 新堀第1遺跡地形図 (1/1,500)



第92図 新堀第2遺跡地形図 (1/1,500)

第1章 調査概要

発掘区の設定方法は、対象地全体に20×20mの大グリットを設定し、この大グリットあたり幅2mのトレンチを52m設けたものである。

新堀第1遺跡は、対象地6,610㎡(包含地)で、昭和55年8月1日より調査が開始され、9月15日までの1ヶ月半の期間を要した。遺跡全域にゴボウ収穫用機械による溝状の深耕が行われており、一様に攪乱が著しかった。8月5日までグリット設定作業を行ない、6日より確認調査に着手した。遺跡の西側が宅地造成により削平を受けており、文化課、公団、センター間で協議が行なわれ、範囲を決定した。8月25日、C3-00グリットでフレイクを確認し、先土器時代遺物の包含が予知された。その後、付近を拡張し遺物の分布を調査した。

新堀第2遺跡は、対象地4,600㎡(包含地)で、昭和55年9月13日より開始され、11月28日まで要した。遺跡内の約半分が山林であったため、伐木、伐採に約10日間を要した。10月1日より発掘に着手し、山林部側のグリットより調査を開始した。10月15日、C4、D4グリットより幅2mの溝状の落ち込みを確認し、その後付近を拡張する。10月30日よりC5、B5グリットの排土を行なう。11月18日C5グリット内のハードローム層上面よりフレイクが出土し、その範囲確認のため、付近の拡張を行なう。その後、先土器時代の遺物の確認を広域的に行なったが、まったく確認されず、11月28日にすべての調査を終了した。

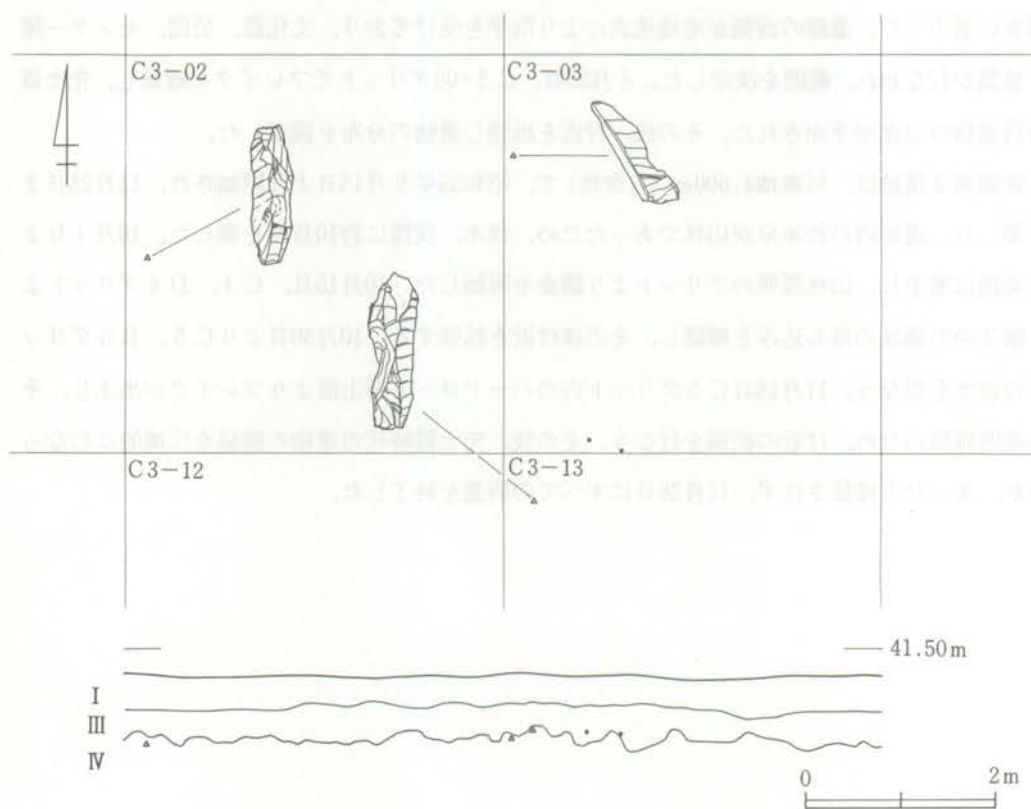
第2章 調査成果

製 陶 土 器 時 代

第1節 新堀第1遺跡 (No.11)

検出遺構

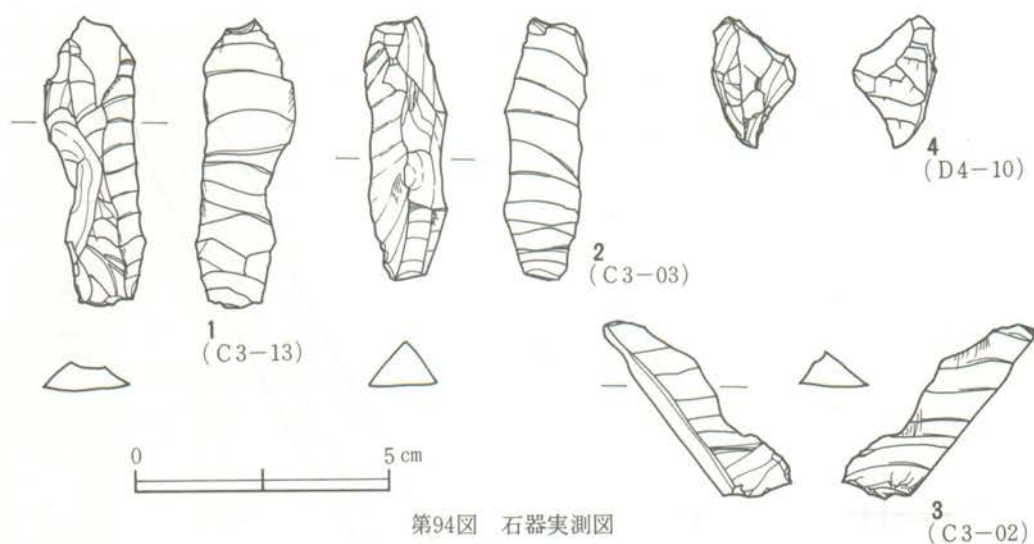
本遺跡より検出された遺構はなかったが、先土器時代の遺物がC3, D4グリットより検出された。4点のみの出土で、層位はハードローム(第IV層)上端面である。



第93図 C3グリット石器出土状況図

出土遺物 (第94図, 図版35)

1, 2とも石刃状を呈す。いずれも縦長剥片を利用しており、断面はそれぞれ台形, 三角形を呈す。基部付近に若干調整がみられる。石材はメノウである。1は長さ5.5cm, 幅1.87cm, 厚さ0.68cm, 重さ6.51g, 2は長さ5.0cm, 幅1.76cm, 厚さ0.96cm, 重さ7.31gを測る。3は剥片であるが、基部の調整に1, 2と共通するものがみられる。断面は三角形状を呈す。メノウ製



で、長さ4.30cm、幅1.30cm、厚さ0.68cm、重さ3.19gを測る。4はチャート製の剥片である。長さ2.55cm、幅1.6cm、厚さ0.6cm、重さ2.00gを測る。

第2節 新堀第2遺跡 (No.12)

検出遺構 (第95図)

先土器時代の石器が、C4、C5グリットより検出された。出土地点にまとまりがなく、単独の出土としてよいであろう。層位はほとんどIII層からIV層上面にかけての出土である。ポイント1点と剥片5点のみで、石材は頁岩、チャート、メノウ、砂岩により構成される。

遺構としては、溝状遺構が1条検出されたのみである。C4区からC5区のみ確認であるが、ほぼ北西から南東に向けて走っている。幅2.2m、深さ0.5m程を測る。

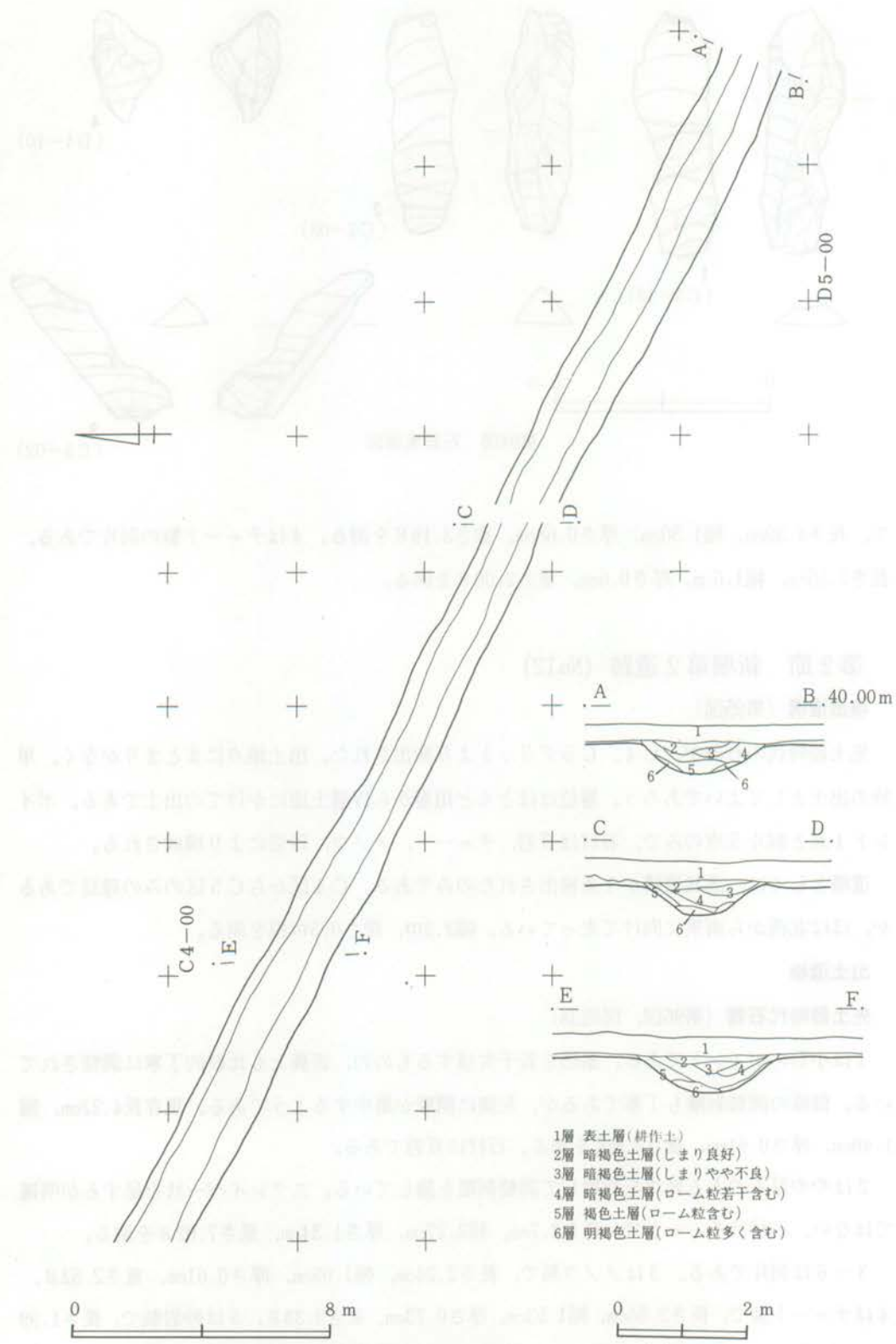
出土遺物

先土器時代石器 (第96図、図版38)

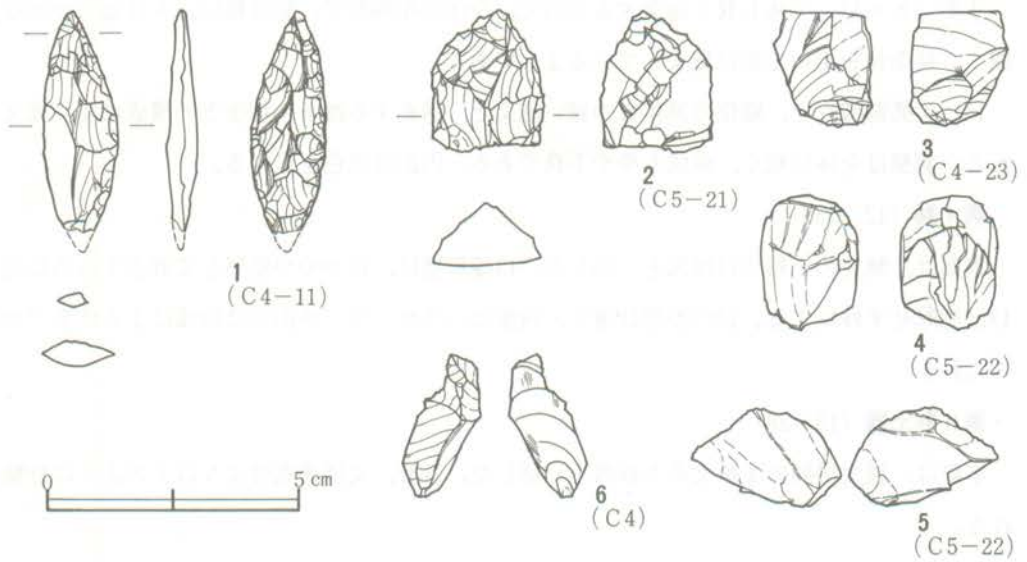
1は小形のポイントである。基部を若干欠損するものの、表裏とも比較的丁寧に調整されている。側縁の調整剥離も丁寧であるが、左側に調整が集中するようである。現存長4.22cm、幅1.49cm、厚さ0.61cm、重さ2.6gを測る。石材は頁岩である。

2はやや厚みのある剥片を利用して調整剥離を施している。スクレイパー状を呈するが明確ではない。石材はチャートで、長さ2.7cm、幅2.27cm、厚さ1.34cm、重さ7.02gを測る。

3～6は剥片である。3はメノウ製で、長さ2.24cm、幅1.95cm、厚さ0.61cm、重さ2.52g、4はチャート製で、長さ2.56cm、幅1.93cm、厚さ0.73cm、重さ3.33g、5は砂岩製で、長さ1.99cm、幅1.94cm、厚さ0.65cm、重さ3.02gを測る。6は頁岩製で、長さ2.65cm、幅1.64cm、厚さ



第95図 溝状遺構実測図



第96図 先土器時代石器実測図

0.2cm, 重さ0.68gを測る。

縄文式土器 (第97図, 図版37)

本遺跡より出土した縄文土器は、全体量が少ないながらも、早期の撚糸文系および沈線文系の土器群が主体を占める。他に前・中期の土器片も若干ながら散見する。

第1群土器 (1~14)

本群は、縄文早期前半の撚糸文系土器群である。文様構成等から以下のように分類される。

第1類 (1~5)

口縁部はやや肥厚しながら直立し、口唇下より施文されるものを本類とした。

施文が全体に浅いため原体の確認はやや困難であるが、5がY型となる以外はすべてJ型に属すると思われる。口唇部および内面のミガキは丁寧で、色調は暗褐色を呈す。焼成は良好で、胎土内には石英、長石および砂粒が多く含まれる。

第2類 (6)

整形および調整は第1類と同様であるが、口唇部と文様帯の間に無文帯を有すものを本類とした。

J型で原体LRをかなり密に施文している。施文部上端部は補修孔が穿たれている。色調は淡褐色を呈し、焼成は良好で、胎土内に砂粒を若干含む。

第3類 (7~11, 14)

胴部破片および底部を一括した。

Y型(7) 7は原体Rを用いて施文している。

J型(8~11) 原体LRを施文するもので、全体に不規則で、節は粗い。8は施文がかなり深く、絡条体を用いて密に施文しているようである。

14は尖底部破片で、縦位の原体Rの細い施文と、横走する撚糸の押圧との構成により施文される。調整は全体に粗く、焼成もやや不良である。内面は黒色を呈する。

第4類 (12, 13)

本類は、無文の土器の口縁部を一括した。口縁形態は、12がやや肥厚して直立するのに対し、13は肥厚せず外反する。13の器壁は薄く、内面はヘラケズリ、外面には指頭によるナデツケがみられる。

第II群土器 (15~28)

本群は、縄文早期の沈線文系土器群を一括した。器形、文様構成等より以下のように分類される。

第1類 (15)

唯一の胴部片で、縦位にはほぼ等間隔で浅い沈線が施される。胎土中に、長石、石英を主とする小砂粒を多く含む。焼成はやや脆弱で燈褐色を呈す。三戸式に比定されるようである。

第2類 (16~18)

本類は、横走する細沈線文を主体とする土器を一括した。田戸下層式に比定できる。16は、口唇部が平坦な口縁部片である。条間の密な細沈線を施文する。長石を主とする小砂粒を多く含む、焼成は良好である。17は胴部片で、横走する数条の沈線下に細かい貝殻腹縁文を施したものである。この貝殻文はくり返し施文されたようで、重複している部分がみられる。焼成は良好で、胎土中には繊維を若干含む。18は、横走する3~4本1単位の細沈線の区画内に、やや太い短沈線を綾杉状に充填したものである。

第3類 (19~27)

沈線と貝殻腹縁文との組み合わせにより構成されるものを本類とした。田戸上層式に比定できる。

19, 20は同一個体で、上下に押し引き様の沈線を配した低い隆帯によって区画される。隆帯の上下区画には、三角形と直線を呈する沈線が組み合わされ、沈線間には部分的に貝殻腹縁文が充填される。焼成は良好で、胎土中には長石を主とした砂粒を含む。21も文様構成的には19, 20と同様であるが、隆帯上の沈線は短く途切れ、端部に刺突が施される。19・20に比して焼成がやや脆弱である。22は、その断面形より口辺部と考えられる。直線に弧線を組み合わせたもので、弧線端部には円形の刺突が加えられる。貝殻文が若干みられる。23, 24は低い隆帯の上下に三角形を呈する刺突列を加えたものである。23の隆帯上には、頂部に刺突を施した瘤状突起がみられる。焼成はやや不良で、胎土中に小砂粒を多く含む。25は本類中唯一の口縁部片で、

小波状を呈する口縁の波頂部であろう。波頂部には貝殻を深く押圧した瘤状突起がみられる。口縁に沿って押し引きによる沈線が施され、以下に貝殻文を配している。突起下には、沈線によって区画された孔が設けられている。口縁部内側には深い刻みが施される。26は横位の刺突列と直線及び弧線を呈する貝殻文を組み合わせた文様が施される。内外面とも赤褐色を呈し、胎土中には長石を主とした砂粒を多く含む。27は厚さ1.9cmを測るきわめて厚手の土器片である。部分的ではあるが、器面には曲線を描く貝殻腹縁文が深く施文されている。

第4類 (28)

無文土器の口縁部片で、口縁形態及び胎土等より沈線文系の土器群に含まれるものと思われる。内外面とも調整による擦痕がみられるが、特に外面が著しい。

第5類 (31)

田戸下層式に比定される底部片である。斜位に太沈線が施文される。胎土中に、長石、石英を主とする比較的大粒の砂粒を多く含む。

第Ⅲ群土器 (29, 30, 32)

本群は、縄文時代早期の条痕文系土器を一括した。29, 30は口縁部片で、器表面に不定方向の条痕を施すものであるが、施文が浅く擦痕と区別つかない程である。内面には条痕が施されず、調整痕が残るのみである。口縁部はやや外傾しながら直立し、29は尖頭状、30は角頭状を呈す。繊維痕はほとんどみられない。砂粒を若干含む、29が淡褐色、30が暗褐色を呈す。32は、砲弾形を呈す尖底である。器厚はやや薄く、表面に条痕が密に施文されている。胎土中に繊維を含む。

第Ⅳ群土器 (33~35)

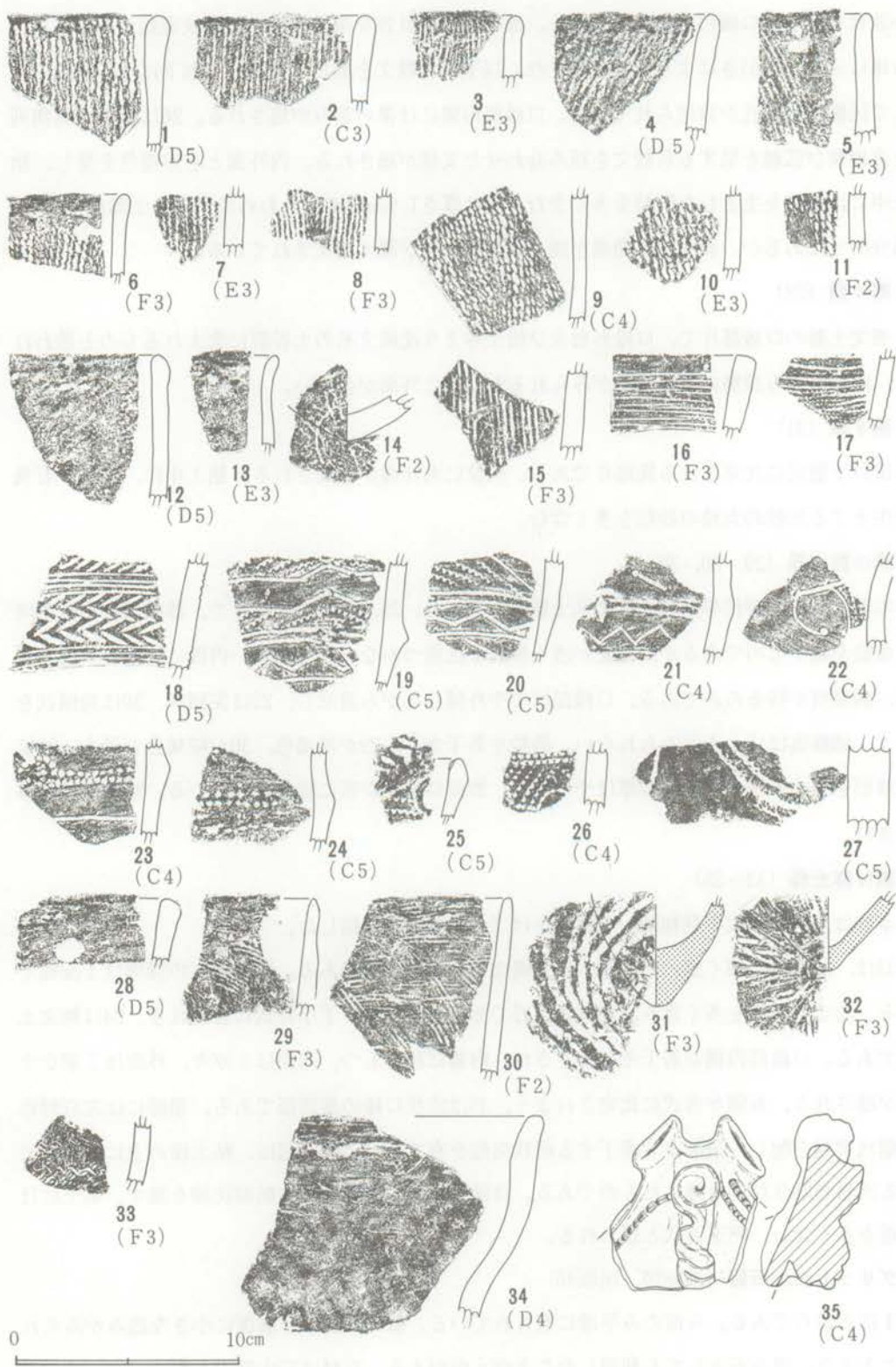
本群は、縄文時代中期初頭~中葉にかけての土器群を一括した。

33は、器表面に細く整ったLRの結節縄文を施したものである。結節縄文の間隔は1cm程である。胎土に砂粒を多く含む、焼成は良好で赤褐色を呈す。下小野式に含まれる。34は無文土器である。口縁部内側が若干そぎ落とされ、内側に稜をもつ。内面はミガキ、外面は丁寧なナデが施される。五領ヶ台式に比定されよう。35は波状口縁の波頂部である。頂部には左右対称に扇状突起を配し、頂部より垂下する紐状突起を有する。この突起は、粘土棒の上に粘土紐による渦巻の貼り付けを施したものである。口縁に沿って1・2条の結節沈線を施す。胎土には雲母を多く含む。阿玉台式と思われる。

グリット出土石器 (第98図, 図版46)

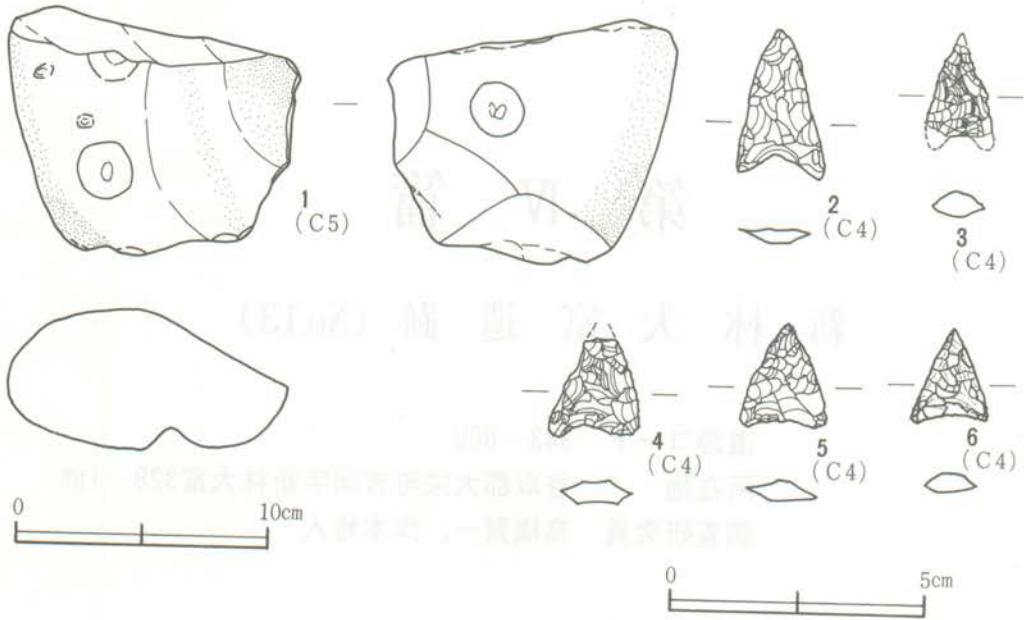
1は石皿片である。片面のみ平滑に磨られている。縁辺部および裏面に小さな凹みがみられることより、凹み石としても利用したことがうかがえる。石材は安山岩である。

2~5は石鏃である。2は基部の抉りが深く入るもので、長三角形を呈す。薄手の作りで



第97図 グリット出土縄文土器拓影図

ある。3は脚部を欠損するものの、抉りの入った無茎鏃であろう。4～6は基部の抉りがきわめて浅く、三角形に近い形態を示すものである。3の脚部は非対称形を呈す。



第98図 石器実測図

第8表 グリット出土石鏃計測表

単位：cm

番号	遺物番号	長さ	幅	厚	重量(g)	石質
2	C-4, 0008	2.9	1.73	0.28	1.43	チャート
3	C-4, 0007	(1.78)	(1.31)	(0.52)	1.08	黒曜石
4	C-4, 0001	(1.91)	1.82	0.45	1.31	黒曜石
5	C-4, 0005	1.98	1.72	0.38	1.02	チャート
6	C-4, 0006	1.79	1.49	0.40	0.58	安山岩

第 IV 篇

新林大富遺跡 (No.13)

遺跡コード 343-008

所在地 香取郡大栄町吉岡字新林大富328-1他

調査研究員 高橋賢一, 岸本雅人

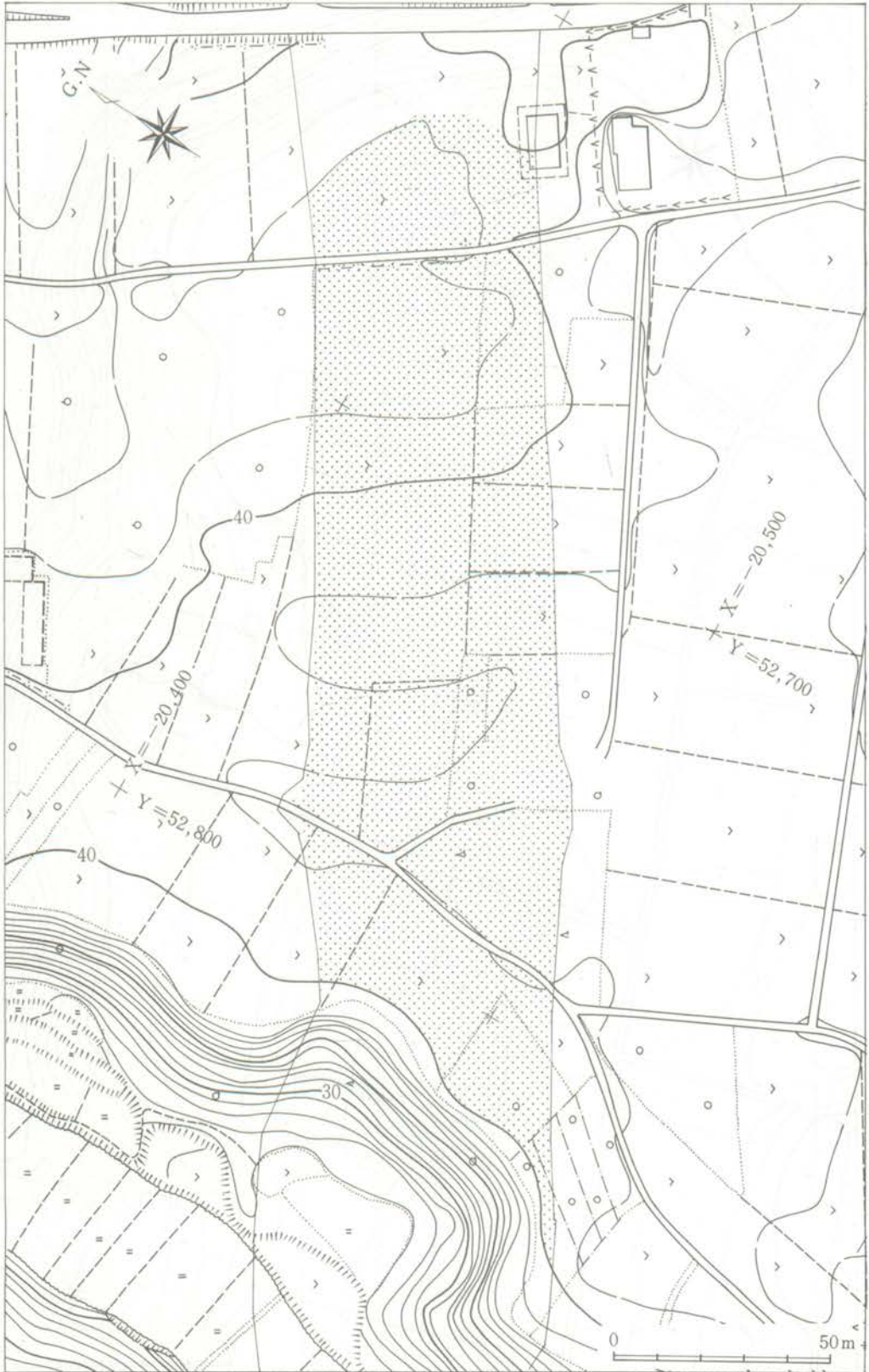
花立台遺跡 (No.14)

遺跡コード 343-009

所在地 香取郡大栄町臼作字花立台520-66他

調査研究員 高橋賢一, 岸本雅人

遺跡名	所在地	遺跡コード	調査年	調査者	調査結果
新林大富遺跡	香取郡大栄町吉岡字新林大富328-1他	343-008	2000	高橋賢一, 岸本雅人	
花立台遺跡	香取郡大栄町臼作字花立台520-66他	343-009	2000	高橋賢一, 岸本雅人	



第99图 新林大富遺跡地形図 (1/1,500)



第100図 花立台遺跡地形図 (1/1,500)

第1章 調査概要

発掘区の設定方法は、対象地全体に20×20mの大グリットを設定し、この大グリットあたり幅2mのトレンチを52m設けたものである。

新林大富遺跡は、対象地14300㎡（包含地）で、昭和55年12月2日から昭和56年2月28日までの約3ヶ月間を要した。12月6日までに遺跡の環境整備、調査グリットの設定作業を行ない、8日よりB・C区の発掘作業を開始した。トレンチ内より若干の撚糸文系土器片が確認されたので、農道より西側のB・C区は全面表土を排土した。1月に入ってから、D～G区の確認調査に移行し、遺構・遺物等確認されない調査区においては、先土器時代の調査も継続して行なった。2月15日、F9-23グリット内で住居跡を確認した。この住居跡を調査し、2月28日すべての調査を終了した。

花立台遺跡は、対象地17600㎡（包含地）で、昭和56年2月2日より調査が開始され、3月31日まで約2ヶ月間を要した。遺跡の西側より着手したが、遺構は検出されず、遺物も縄文土器片、石器が若干出土したのみである。

第2章 調査成果

奥州遺跡調査1第

第1節 新林大富遺跡 (No.13)

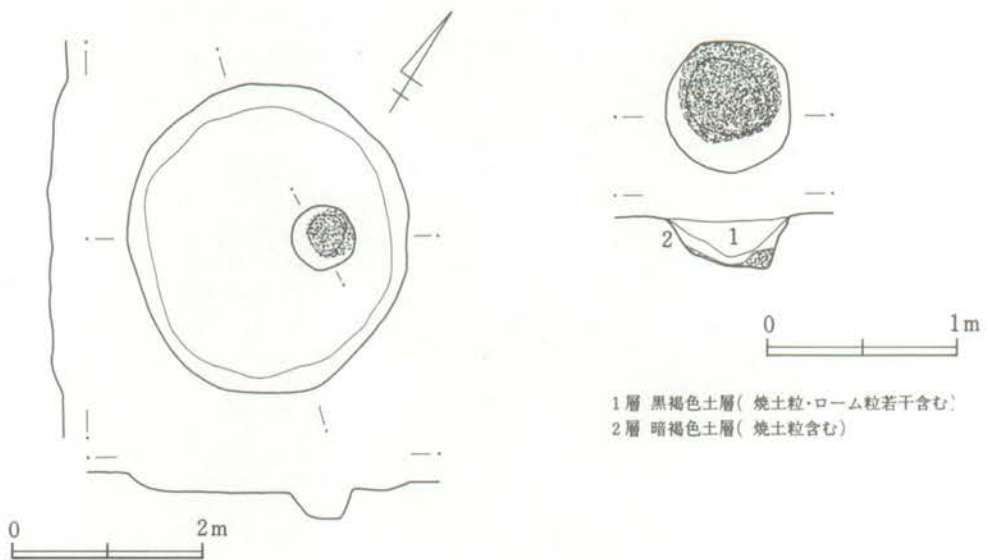
検出遺構

本遺跡からは、住居跡が1軒検出されたのみである。

001号住居跡 (第101図, 図版39)

F 9-31, 32グリットに位置する。ソフトローム面で確認したが、耕作による攪乱が著しく、壁はほとんど遺存していなかった。

規模は、長径3.2m、短径3.0mを測り、ほぼ円形のプランを呈す。床面はハードローム上面に設けられるが、それほどしまった状態ではなかった。壁はほとんど遺存していないが、床面より斜位に立ち上がる。柱穴は検出されず、炉が住居の北東側に設けられていた。径0.7m程の円形を呈し、深さ0.3mと比較的深く掘り込まれている。炉内には焼土がブロック状にみられ、特に炉壁には焼土がはりつくように遺存していた。遺物の出土はあまり多くないが、南半に集中しているようである。

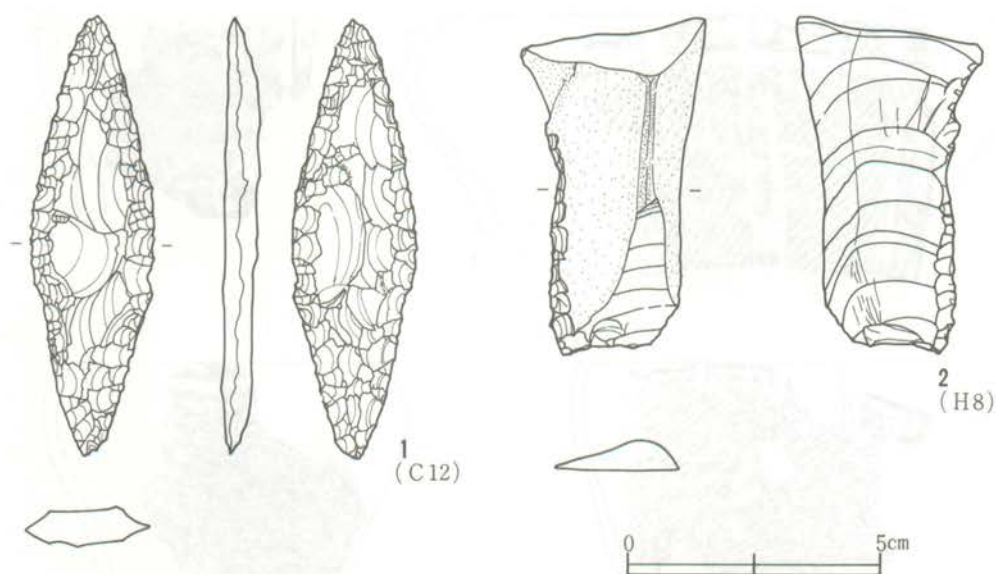


第101図 001号住居跡実測図

出土遺物

先土器時代 (第102図 1, 2, 図版40)

1は、C12区の攪乱中より出土したものである。表裏とも主要剝離面を残さずに丁寧に押圧



第102図 石器実測図

剥離されている。両側縁の細部調整も丁寧である。いわゆる神子柴系の尖頭器である。長さ8.3cm、幅2.4cm、厚さ0.6cm、重さ13.35gを測る。頁岩製である。2は、H8区のソフトローム層下面より単独で出土している。片面に自然面を残す縦長の剥片を利用したものである。片側の側縁に、表裏とも細部調整が加えられる。基部には打点が明瞭に残る。サイドスクレイパーを意識したものであろうか。長さ6.35cm、幅3.68cm、厚さ1.3cm、重さ17.6gを測る。頁岩製である。

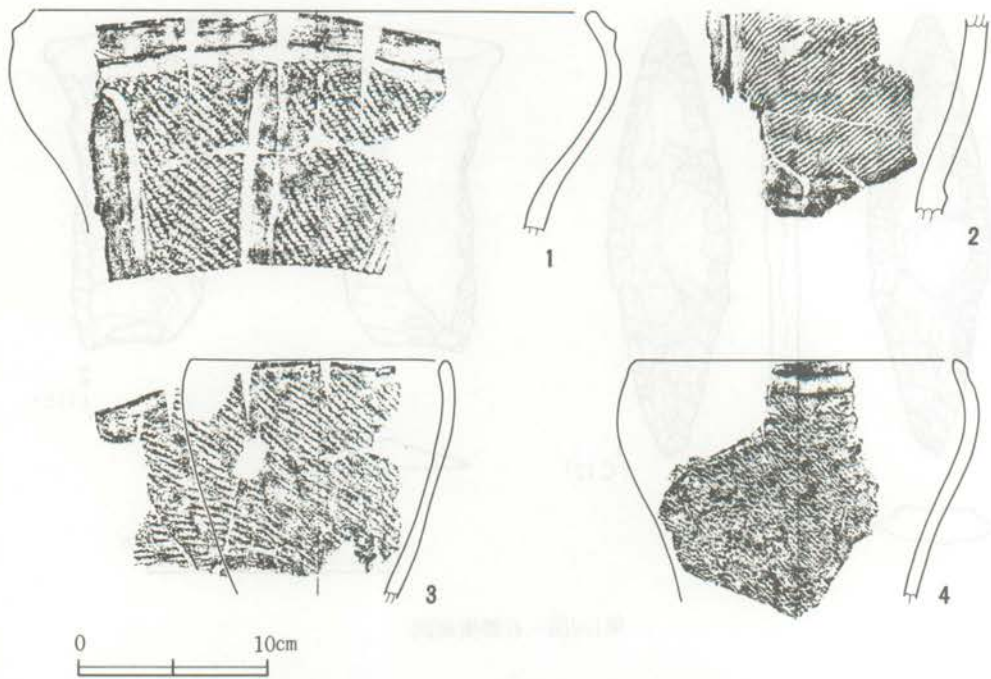
001号住居跡（第103図、図版40）

1は推定口径29.7cmを測るキャリパー形を呈する深鉢の上半部である。口縁は平縁である。口縁下には微隆起線文を貼り付け、その下には沈線によって区画された無文帯が逆U字形に垂下している。縄文の原体はLRである。2は胴部片で、隆帯と微隆起線によって区画された内部にRLの細かい縄文を施したものである。3は推定口径13.5cmを測る鉢形の土器である。平縁で、口縁内面はそぎ落とされたような形状を呈する。縄文の原体はLRである。内面はヘラによる調整が施される。胎土には小砂粒を多く含み、焼成は脆い。内外面とも暗褐色を呈す。4は、口縁部の調整が丁寧で、口縁下は沈線様の凹みがみられる。以下はRLの縄文が全面に施される。器表面にはススの付着が認められる。

これらの土器は、その特徴により縄文中期加曾利EIV期の所産と考えられる。

グリッド出土縄文土器（第104図、図版41）

本遺跡より出土した縄文土器は、早期から中期にかけてのものが主体となるが、量は少ない。



第103図 001号住居跡出土遺物実測図・拓影図

第Ⅰ群土器（1～4）

本群は、早期の撚糸文系および条痕文系の土器群を一括した。

第1類（1，2） 撚糸文系土器

1は推定口径30.0cmを測る。口縁部は肥厚せず、内湾ぎみに外傾する。施文は浅く、原体R Lを施文する。色調は淡褐色を呈し、胎土内には長石粒、石英粒を主とする小砂粒を多く含む。2は口縁部がやや直立する。縄文原体LRをやや粗く施文する。色調、胎土は1とほぼ同様である。

第2類（3，4） 条痕文系土器

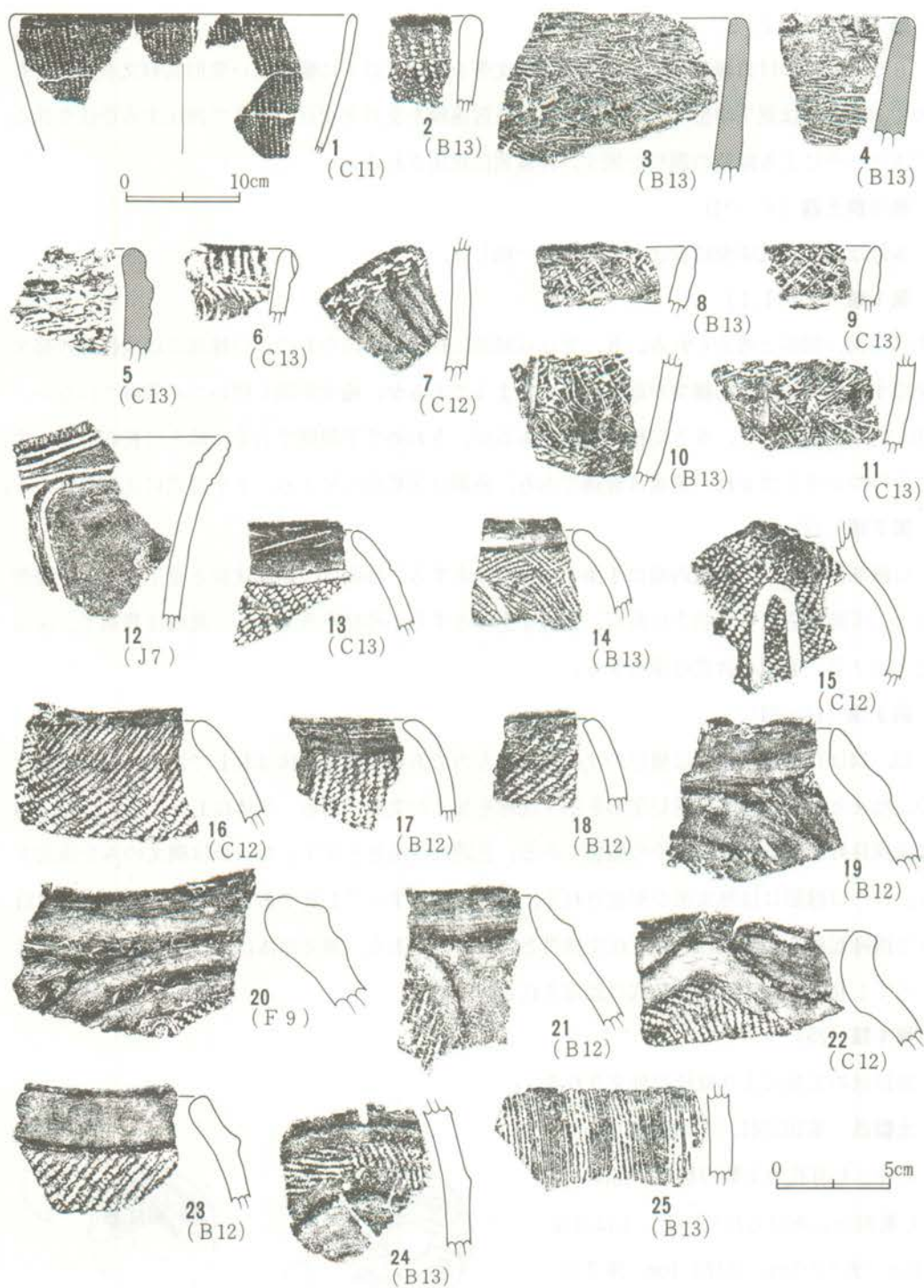
口縁部片で、口唇部はほぼ平坦につくられる。器表面には、細かい条痕が横位および斜位に不規則に施されている。胎土中には、若干の繊維と長石を主とした小砂粒を多く含む。

第Ⅱ群土器（5～11）

本群は縄文時代前期に比定されるものを一括した。

第1類（5）

5は、口唇部に小突起を有する口縁部片である。口縁下には隆帯が施され、器面には竹管による押し引きが全面に施文される。裏面はきわめて丁寧に調整され、胎土中に繊維を多く含む。黒浜式に相当する。



第104図 グリット出土縄文土器拓影図

第2類 (6, 7)

6は、貼りつけ口縁部に太い縦位の条線文帯を加え、以下に幅の広い変形瓜形文を施したものである。7は胴下半部で、アナグラ属の貝殻腹縁を支点を交互に変えて押圧する手法を採る。以下はへらによる縦位の調整を施す。浮島式に比定される。

第III群土器 (8~24)

本群は縄文時代中期に含まれるものを一括した。

第1類 (8~11)

すべて同一個体と考えられる。8, 9は口縁部に折返しのある段をもつ。口縁部には綾絡様の施文を施す。地文としての縄文が施されているようであるが、施文が浅く粗いため明確ではない。10, 11は胴部片で8, 9と同様の施文であるが、きわめて不規則である。胎土に長石を主とする小砂粒が多く含まれ、焼成は普通である。色調は黒褐色を呈する。下小野式に比定されよう。

第2類 (12)

口縁部は外反し、口縁内側に1条の沈線が横走する。外面は、結節沈線と垂下する低い隆帯によって施文される。胎土に長石、雲母を主体とする小砂粒を多く含む。焼成は普通で、淡褐色を呈する。五領ヶ台式に相当する。

第3類 (13~24)

13, 14は口縁無文帯下に横位の沈線を施すものである。縄文原体はRLである。15は胴部片で、地文としての縄文に逆U字形を示す沈線を加えた文様である。原体はLRである。13, 14は焼成良好であるが、15はやや脆弱である。色調は淡褐色を呈す。16~18は縄文のみを施文する。17の口縁部には無文帯が形成される。縄文原体はすべてLRである。19~24は、口縁に沿って微隆起線を一条設け、以下は文様帯とするものである。縄文原体は、24がRLである他はすべてLRとなる。加曾利E式に比定される。

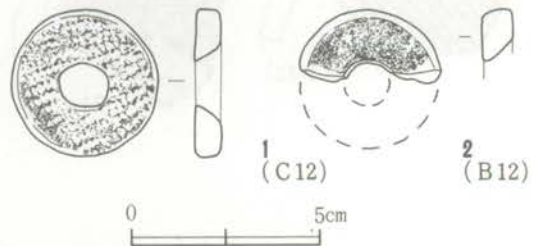
第4類 (25)

楯目状の工具により縦位に施文される。

土製品 (第105図1, 2, 図版40)

1, 2とも有孔の土製円板で、孔はいずれも裏側からあけられている。1は直径3.9cm, 厚さ0.7cm, 孔径1.1cm, 重さ12.35gを測る。周縁は丁寧に磨られている。縄文原体はLRであろう。2は半欠品で、厚さ0.8cmを測る。無文となろう。

石製品 (第106図1, 図版40)



第105図 グリット出土土製品実測図

1は磨石であろうが、表面の磨耗が著しくザラザラしている。中央部にやや凹みがみられることより凹石として利用したかもしれない。

第2節 花立台遺跡

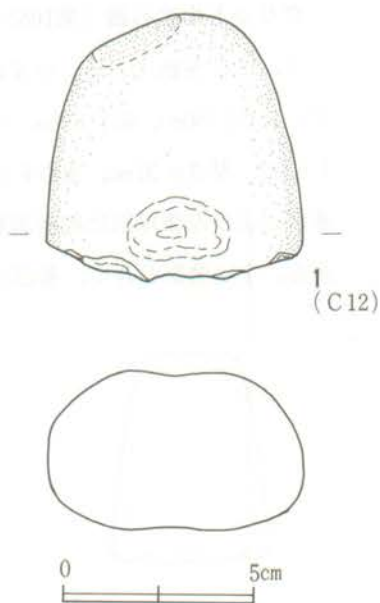
検出遺構

本遺跡より検出された遺構はなかった。

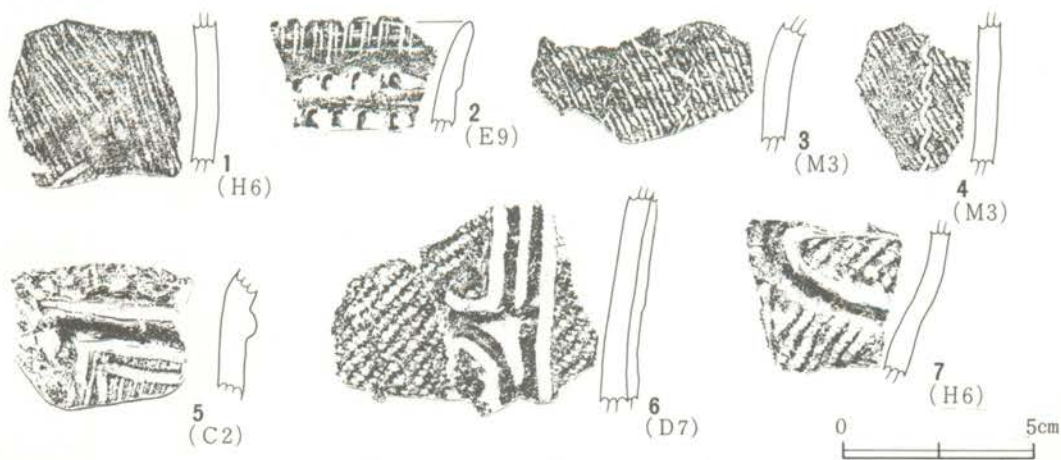
出土遺物

グリット出土縄文土器 (第107図, 図版42)

1は燃糸文系の胴部片で、原体はRである。2は前期後半の土器であろう。口唇部はやや尖り、小波状を呈す。口縁部には竹管状工具による条線が長さ1cm程で施文されており、以下には凹凸文がみられる。この凹凸は、左方向へ粘土を押し出すように施されたものである。3,4は同一個体と思われる。胴部片であるが、縦位の結節縄文が施される。原体はRの撚りであろう。胎土中に石英を主とする砂粒を多く含む。中期初頭の所産であろう。5は胴部片で、太い粘土紐を直線状に貼り付けることにより区画を設け、内側を浅い沈線と縦位の条線で充填する。6は垂下する2本1単位の粘土紐と、それから派生する三叉状を呈す粘土紐を組み合わせている。粘土紐の両側端には、竹管状の工具による浅い沈線が施される。地文にはRLの縄文がみられる。7は曲線を呈す粘土紐を貼りつける。地文は、やや幅の広いLRの縄文を施す。5には雲母を含むが、6,7には混入しない。いずれも中期前半に含まれる。



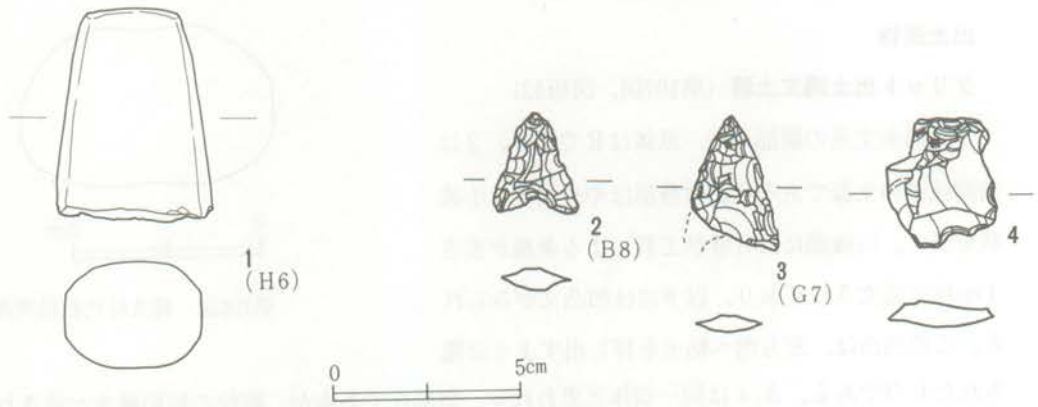
第106図 縄文時代石器実測図



第107図 グリット出土縄文土器拓影図

グリット出土石器 (第108図, 図版42)

2, 3は石鏃である。いずれも抉りが浅く入り, 脚部はやや太く作られている。2は砂岩製で, 長さ1.56cm, 幅1.69cm, 厚さ0.42cm, 重さ0.72gを測る。3は黒曜石製で, 長さ2.3cm, 幅1.53cm, 厚さ0.31cm, 重さ1.07gを測る。4は黒曜石製のノッチドスクレイパーであろうか。基部および左側縁部に剥離調整がみられる。長さ2.4cm, 幅2.06cm, 厚さ0.48cm, 重さ2.80gを測る。1は磨製石斧で, 基部のみの遺存である。全体が丁寧に磨られている。



第108図 石器実測図

結 語

今回報告書に記載した新山台遺跡他8遺跡における成果は以下のとおりである。

新山台遺跡においては、縄文時代中期末に位置づけられる遺構、遺物を主体に先土器時代、歴史時代の遺構、遺物が検出された。縄文時代の遺構は、住居跡4軒、土壇23基を数え、各遺構から多くの遺物を検出している。遺物の出土状態は、ほとんどが廃棄によるものと思われ、あたかも縄文時代中期の終焉を迎え、きわめて短期間のうちに居住域と生活用具を廃棄、移動した様子を思わせる。縄文時代中期末の土器群は、時間的に連続する先後との比較検討の余地を残すが、当該期のものとしてはまとまりを持つものである。調査範囲は台地の縁辺部という限られた範囲であったが、台地縁辺部という環境の中から得られた加曾利E式終末期土器群に加えて、比較的まとまって出土した土製品等は、当該期における一つの集団の生業に関して研究する上で良好な資料と言える。

大安場遺跡、来光台第1、第2、第3遺跡は、溝あるいは土壇を検出したのみで、遺物もほとんどなく確認調査のみで終了した。

新堀第1遺跡では、先土器時代の石器を4点検出したのみである。石材はメノウを主としたもので、器種としては石刃状の剥片がみられる。新堀第2遺跡では、遺構としては溝状遺構1条のみであるが、先土器時代の石器と縄文式土器片が検出された。石器は、頁岩製の小形のポイントが目される。縄文式土器としては、縄文時代早期の撚糸文系および沈線文系の土器群が主体を占めている。

新林大富遺跡では住居跡が1軒検出された。伴出する土器が少ないものの、縄文中期加曾利E式期に比定されよう。他に、先土器時代の石器および縄文時代の土器片、石器がみられた。先土器時代では、頁岩製の神子柴系の尖頭器が出土しており、注目される。花立台遺跡では遺構は検出されず、縄文時代の土器片および石器が若干ながらも検出された。

版 圖 真 寫



1. 遺跡近景



2. 002号住居跡遺物出土状況



1. 002号住居跡



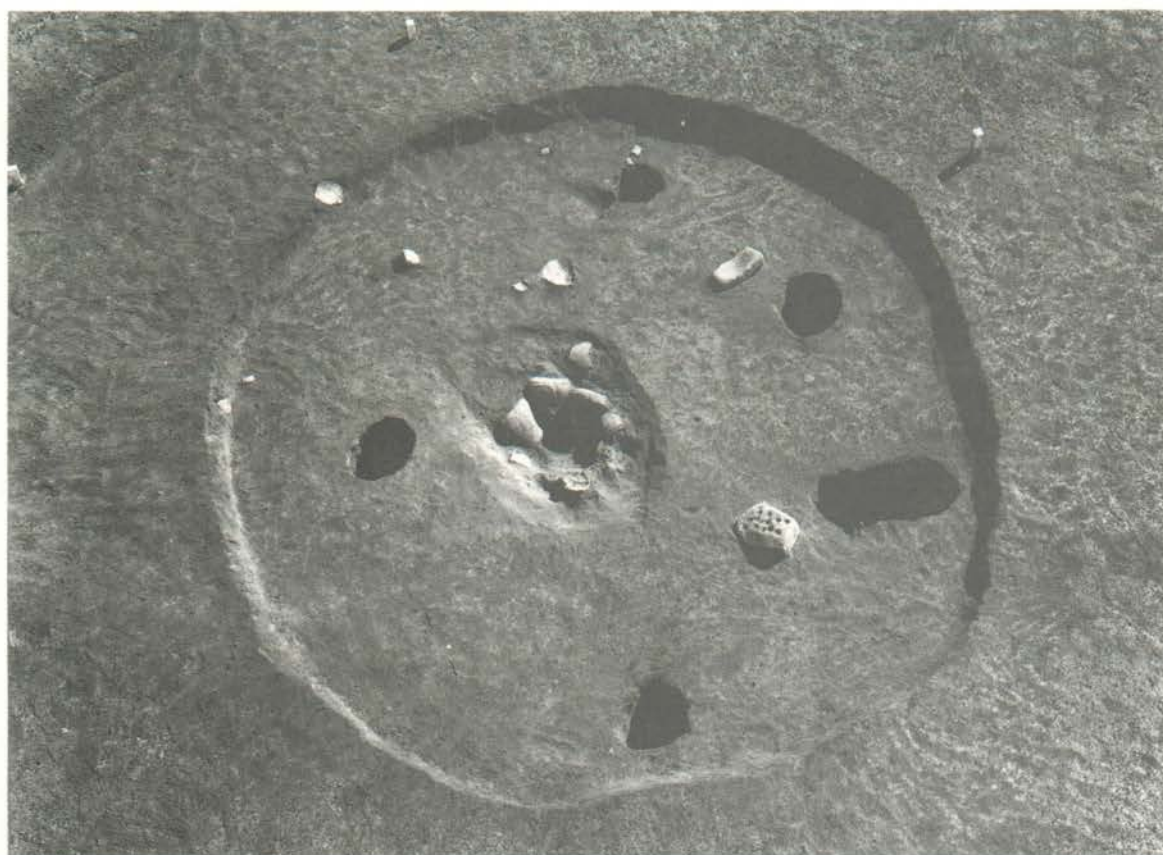
2. 003号住居跡



1. 004号住居跡



2. 004号住居跡ピット内遺物出土状況



1. 005号住居跡



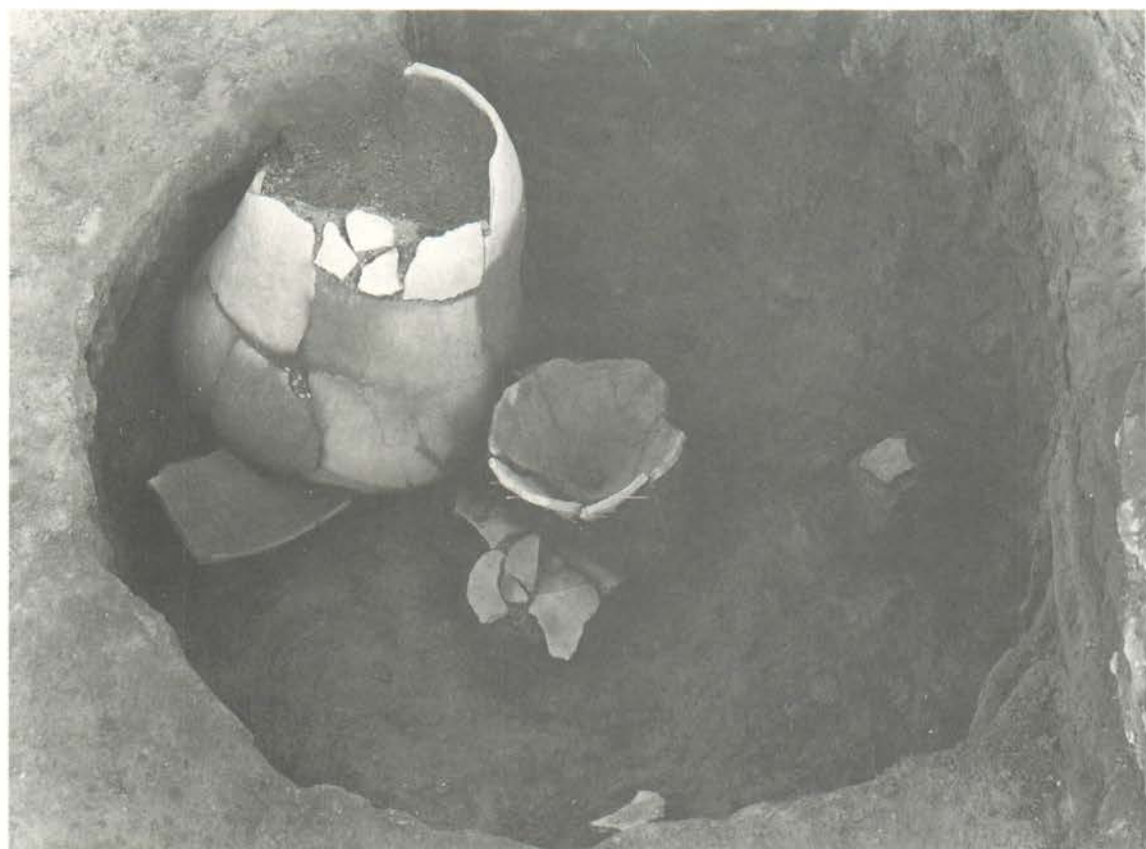
2. 005号住居跡炉状況



1. 107号土坑



2. 108号土坑



1. 115号土坑



2. 118号土坑



1. 001号住居跡



2 発掘風景



1
(F3-20)



2
(F3-20)



3
(F3-20)



4
(F3-20)



5
(F3-20)



6
(F3-20)



7
(E3-12)



8
(E3-02)



9 (E3-13)



10
(E3-03)



11
(E3-03)



12
(E3-12)



13
(E3-13)



14
(E3-03)



15
(E3-03)



16
(E3-03)



17
(E3-22)



18
(E3-13)



19
(E3-23)



20
(E3-22)





117
(004)



133
(005)



4
(103)



22
(108)



25
(108)



26
(108)



18
(108)



24
(108)



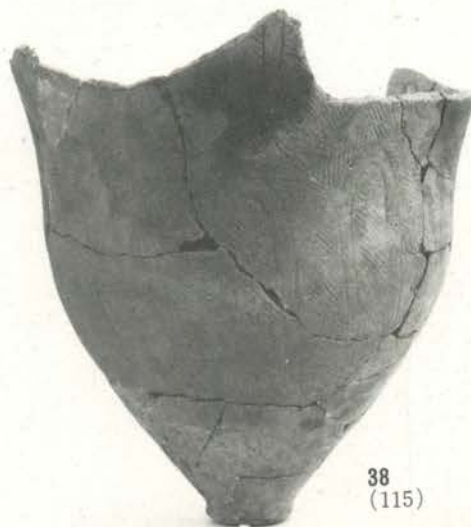
19
(108)



33
(114)



37
(115)



38
(115)



土城、グリット出土縄文土器



6
(C4)



15
(B5)

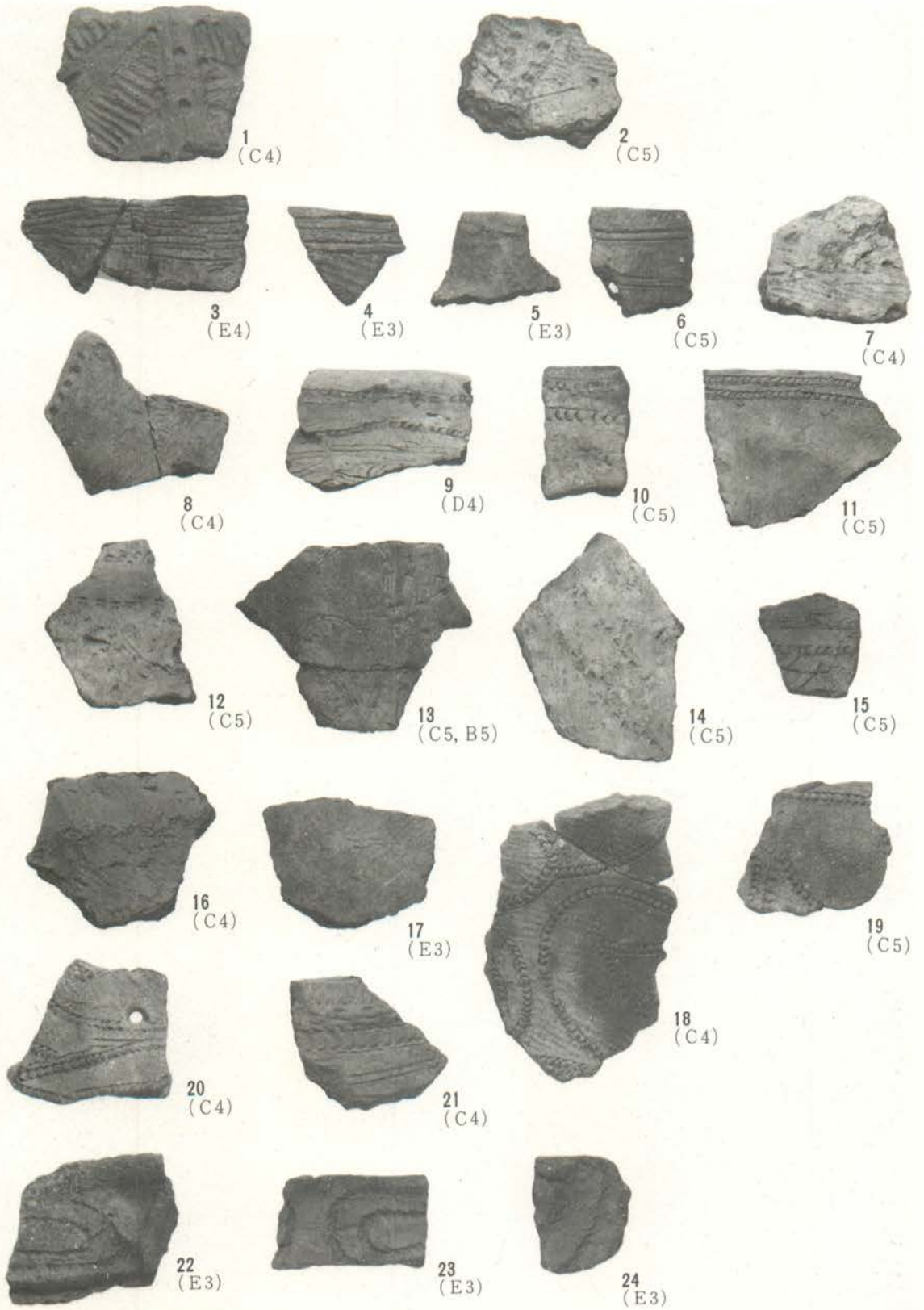


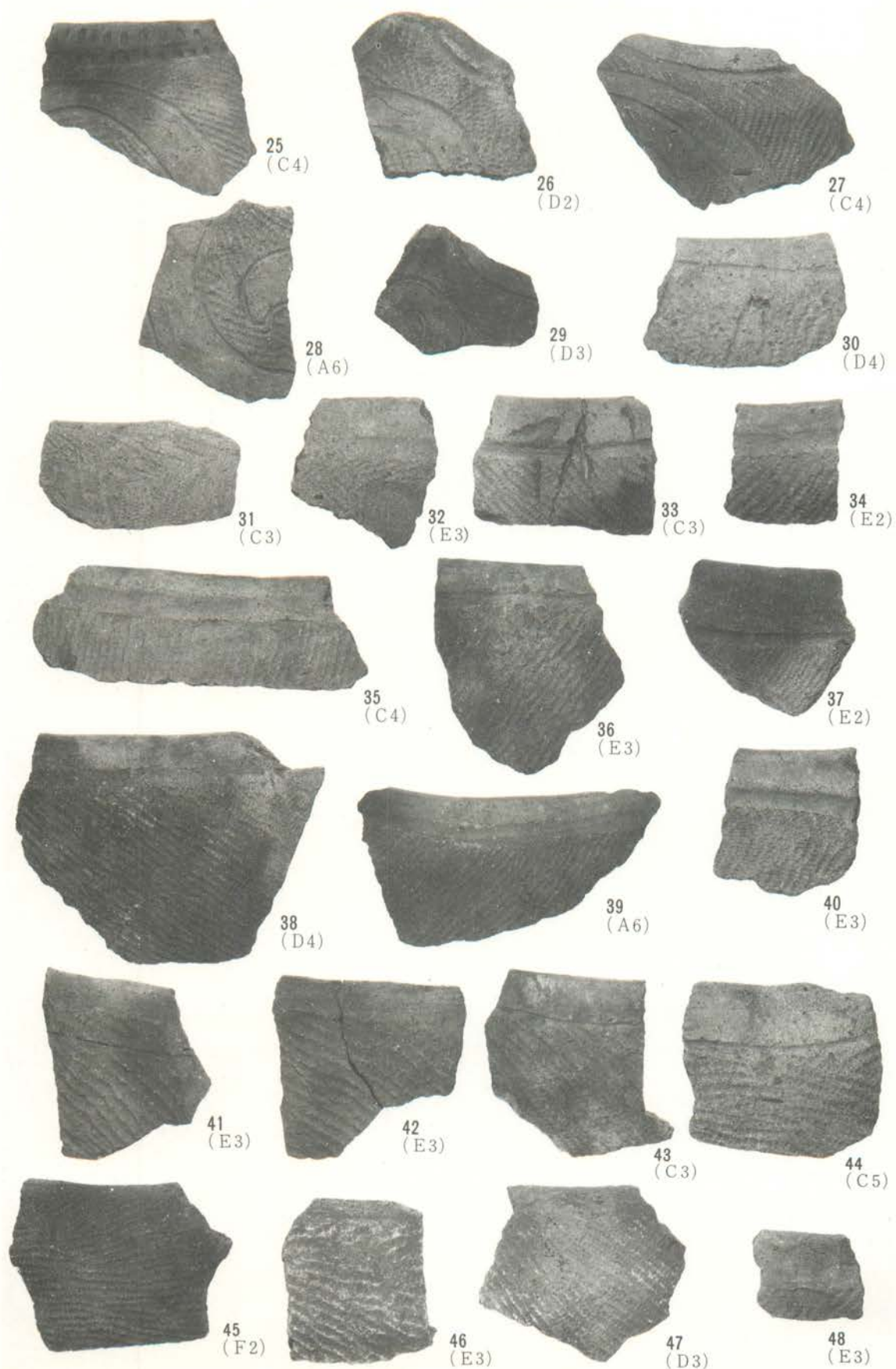
20
(B5)



21
(B5)







第IV群土器 (1)



49
(C4)



50
(E4)



51
(B4)



52
(E3)



53
(E2)



54
(D4)



55
(D4)



56
(D3)



57
(E3)



58
(E2)



59
(E2)



60
(C5)



61
(D3)



62
(C5)



64
(D3)



65
(E3)



63
(E3)



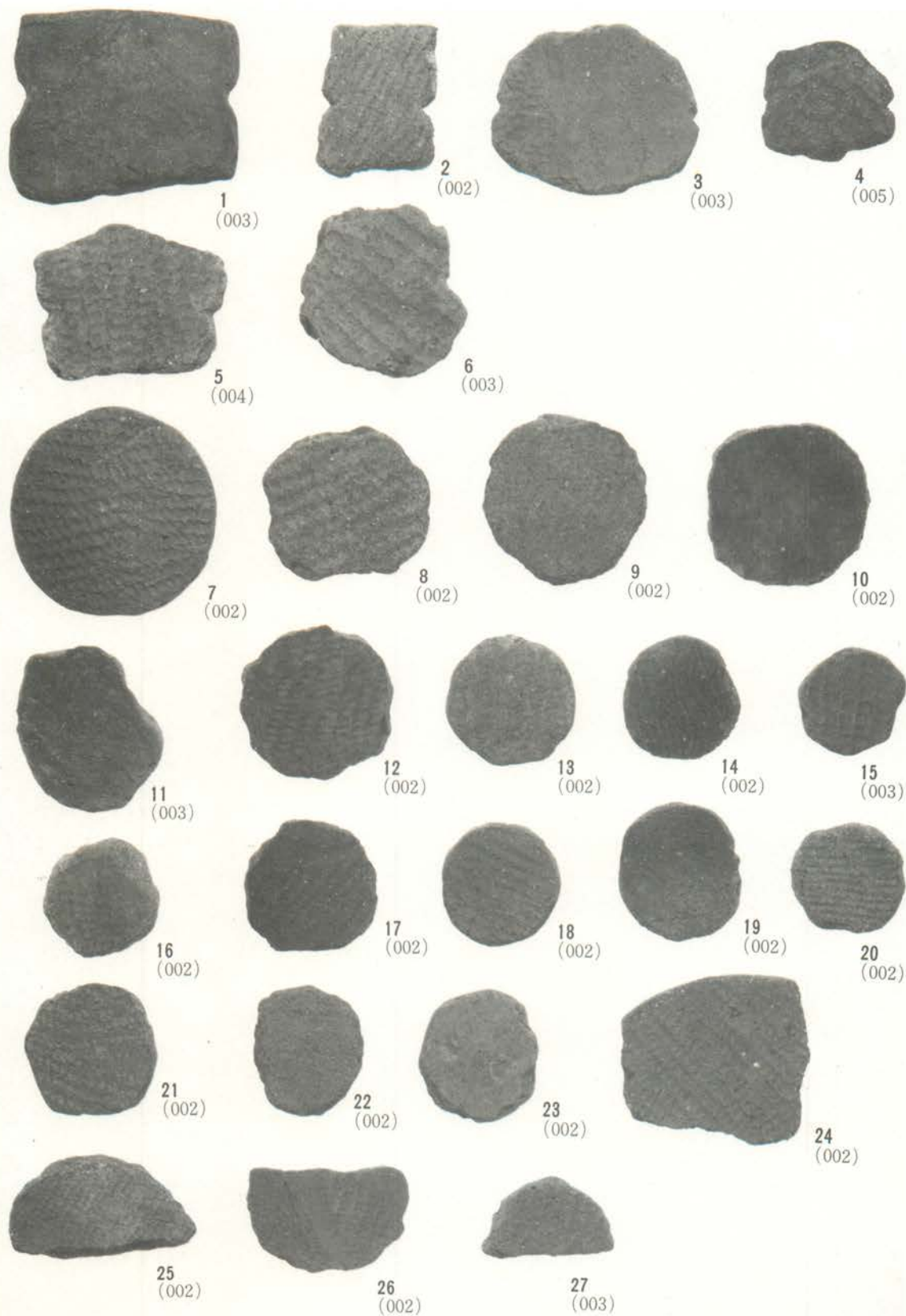
66
(F3)

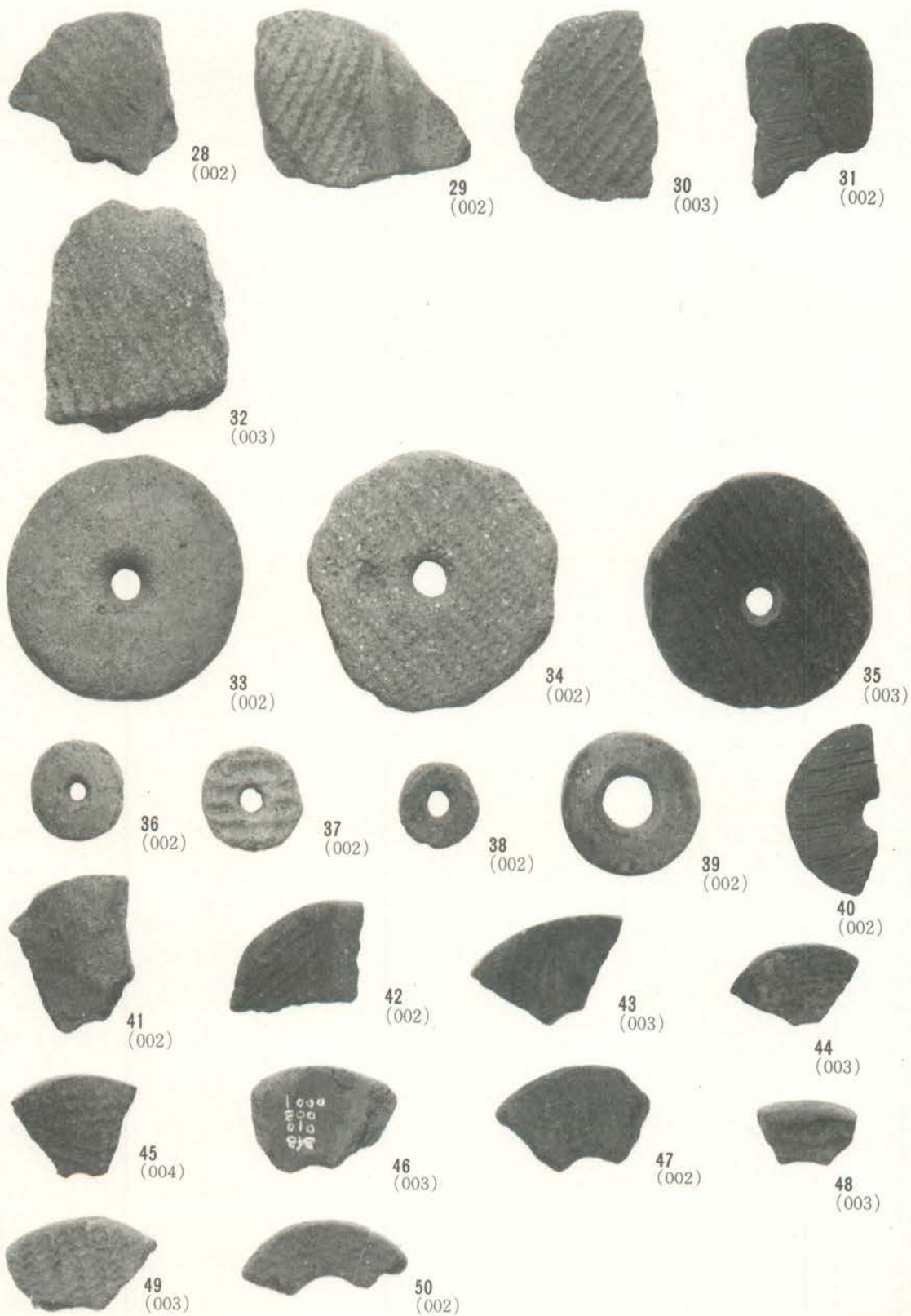


67
(F3)



68
(E3)







51
(002)



52
(002)



53
(004)



1
(106)



2
(116)



3
(106)



4
(108)



5
(104)



6
(116)



7
(117)



8
(116)



9
(107)



10
(106)



11
(108)



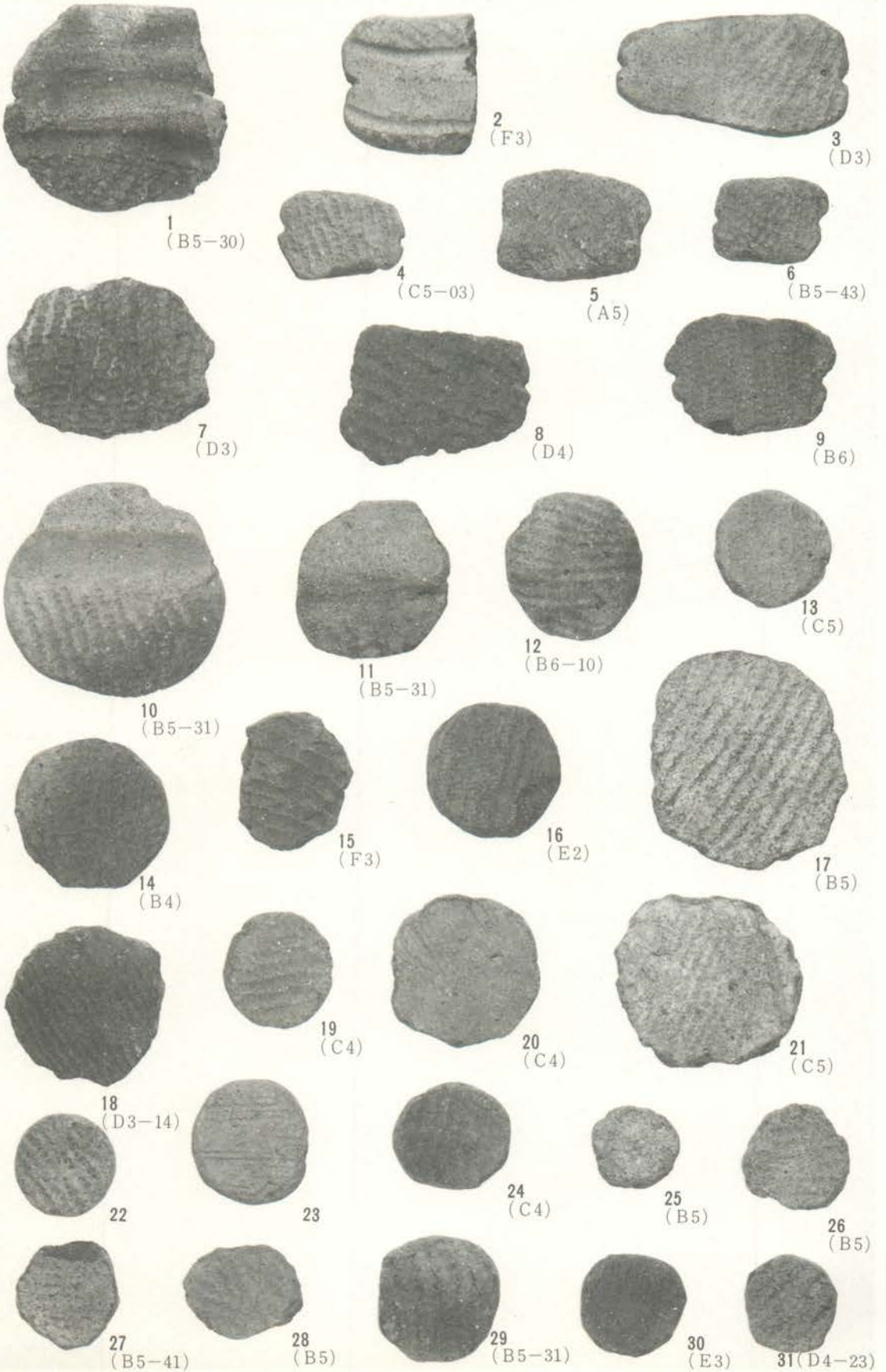
12
(116)



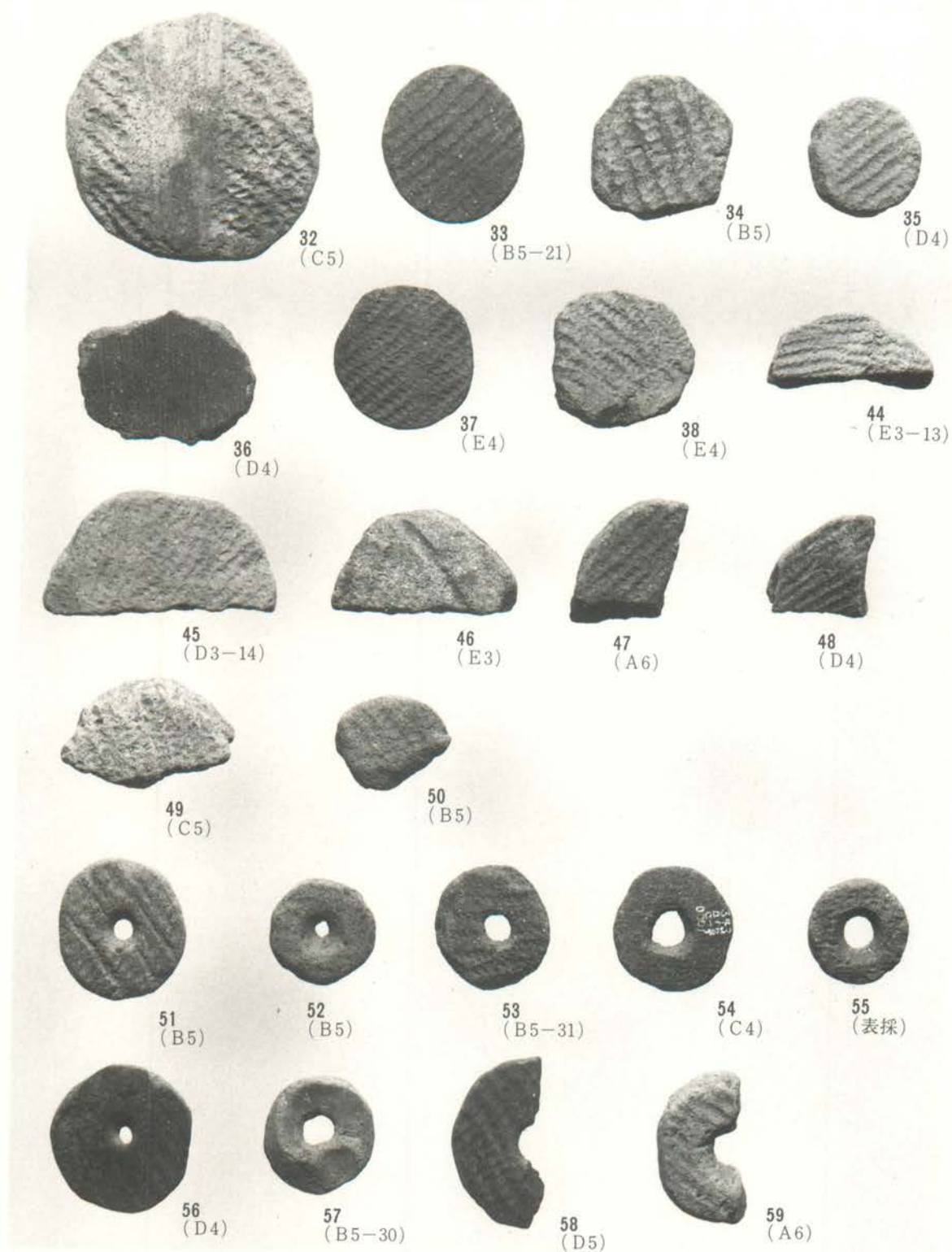
13
(116)



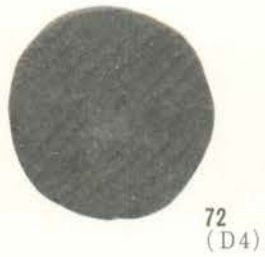
14
(116)



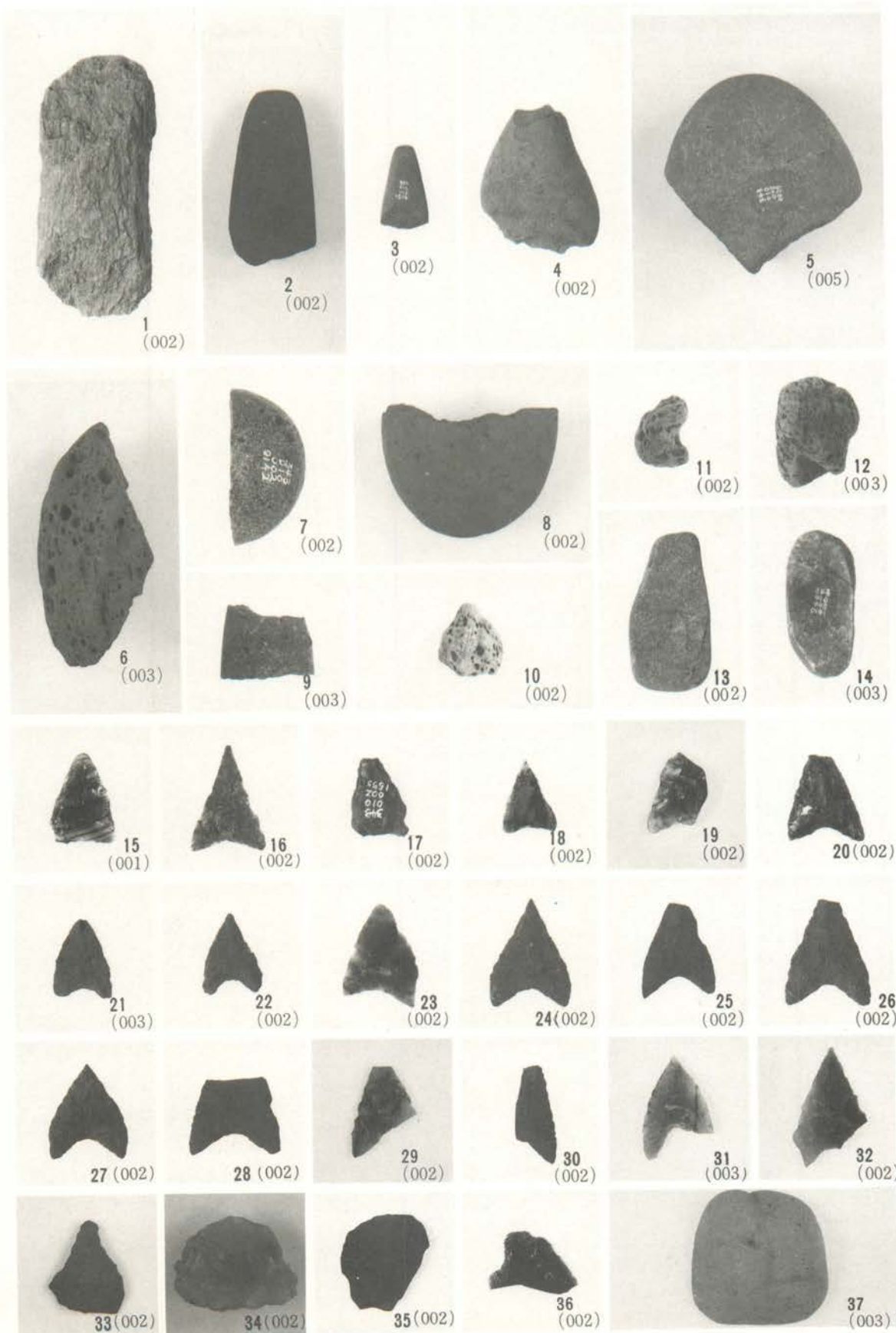
グリット出土土製品 (1)



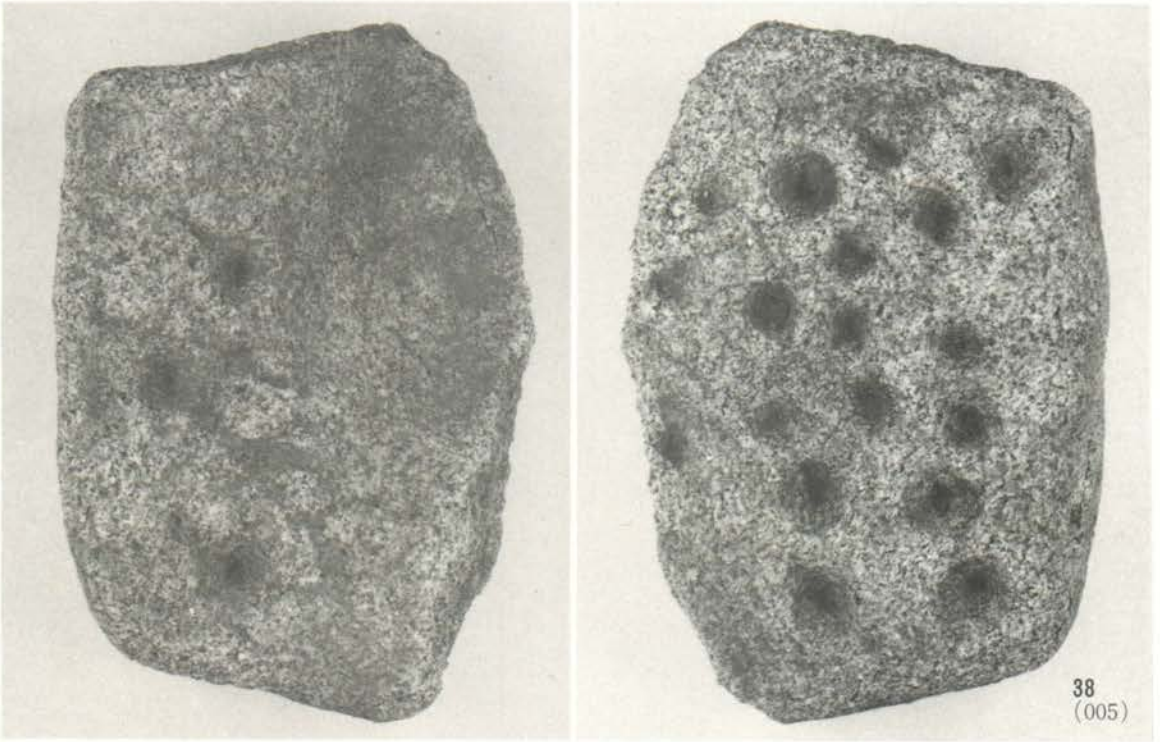
グリット出土土製品 (2)



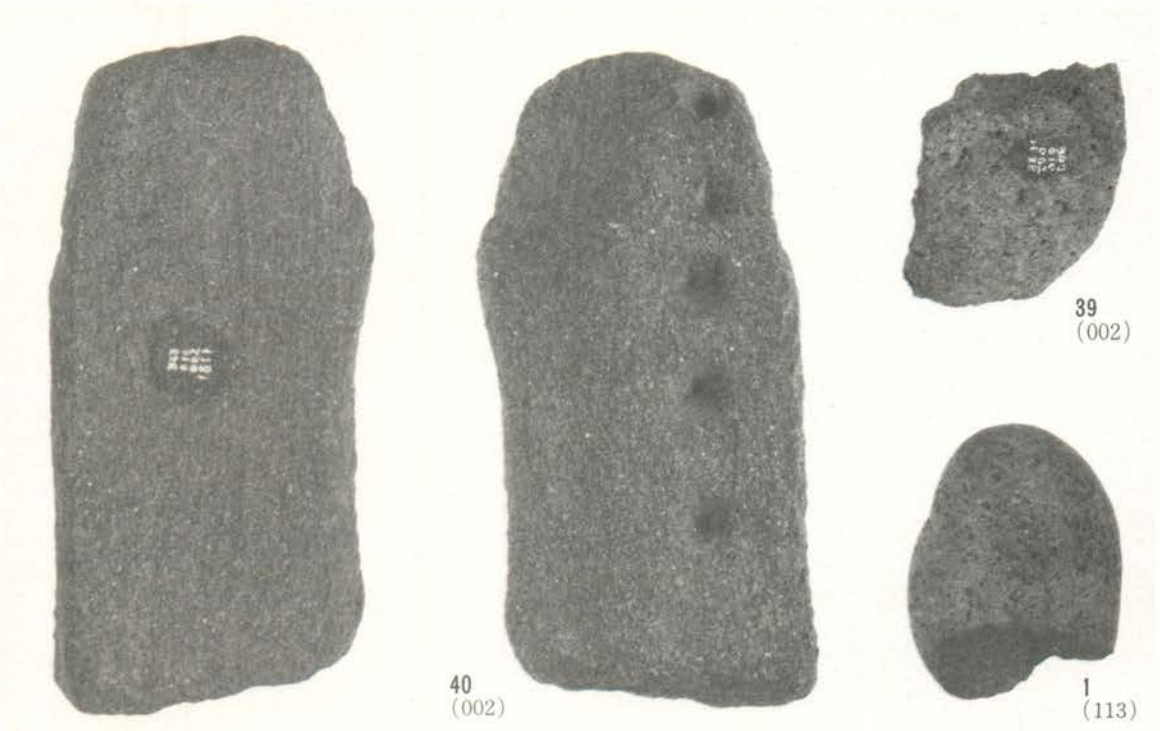
グリット出土土製品 (3)



住居跡出土石器(約2/3)



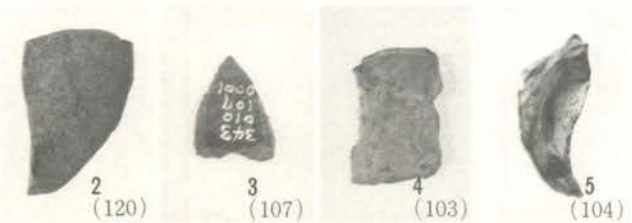
38
(005)



40
(002)

39
(002)

1
(113)



2
(120)

3
(107)

4
(103)

5
(104)

住居跡，土壇出土石器(約1/3, 2/3)



1 (C5-12)



2 (B5)



3 (D3)



4 (C4)



5 (C4)



7 (F2-44)



6 (E3)



8 (D3)



9 (F2-44)



10 (E3)



14 (E3-31)



11 (D2)



12 (D4-31)



13 (B4)



15 (D4)



16 (D3)



17 (E3)



18 (F2-30)



19 (E3-13)



20 (F2-30)



21 (C4)



22 (E2)



23
(D4)



24
(D4)



26
(D4, F2)



27
(D4)



28
(D3)



25
(C5-21)



29
(F2-44)



30
(B5-31)



31
(B5-20)



32
(D4)



33
(C4-23)



34
(表採)



35
(B5-41)



37
(E3)



36
(F2-44)



38
(C5-21)



39
(B5-41)



40
(C4)



41
(D4)



42
(117)



43
(B5-32)



44
(B5-30)



45
(D5)



46
(D3)



47
(B5-30)



48
(E2-42)



49
(B5-41)



50
(A6-14)



51
(D4)



52
(表採)



53
(D4)



54
(C4-23)



55
(C5)



56
(B5-31)



57
(C4)



58
(D4)



59
(B5-32)



60
(B5-31)



61
(C5-12)



62
(D3)



63
(表採)



64
(B6-00)



65
(B5-21)



66
(B5-22)



67
(C5-12)



68
(B6-21)



69
(表採)



70
(B5-22)



71
(B5-32)



72
(C5-12)



73
(B5-21)



74
(A6-23)



75
(D5)



76
(表採)



77
(C4)



78
(B5-41)



79
(D3)



80
(B5-31)



81
(C5)



82
(C4)



83
(C4-23)



84
(B5-32)



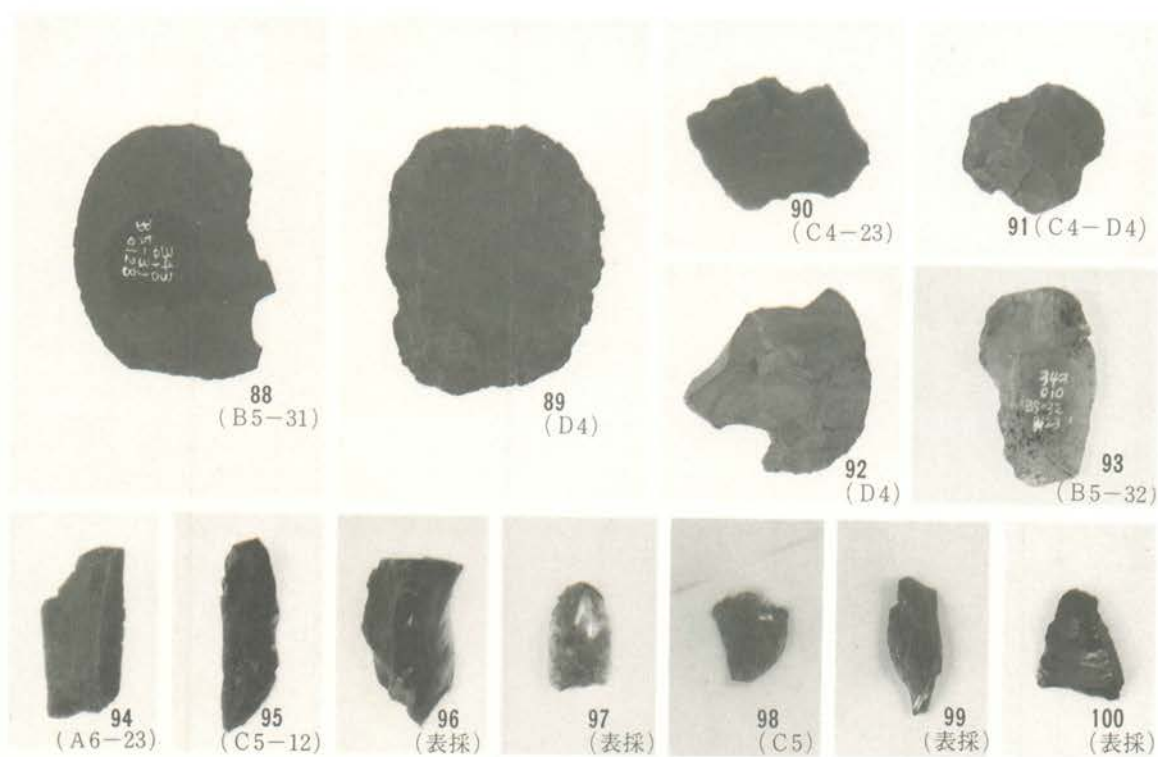
85
(C4-04)



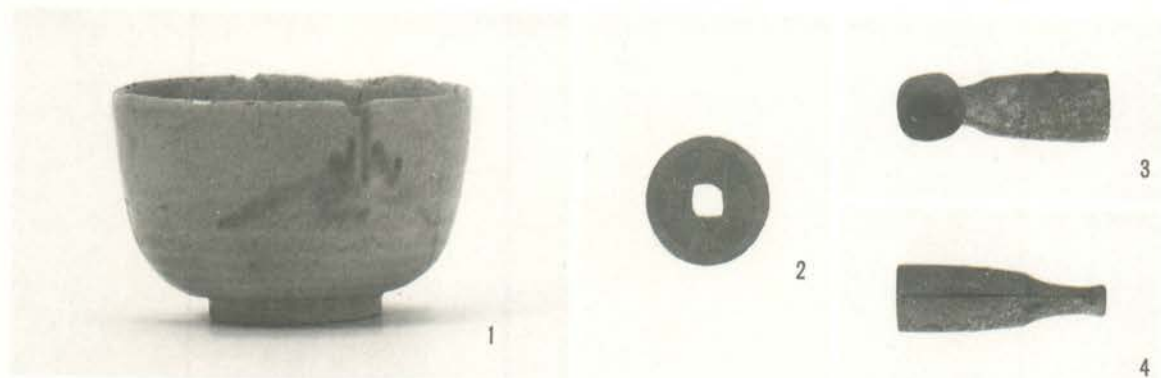
86
(表採)



87
(B4)



1. グリット出土石器(5) (約2/3)



2. その他の遺物



1. 遺跡近景



2. 001号土塚



1. 遺跡遠景



2. 溝状遺構



1. 遺跡近景



2. 土坑



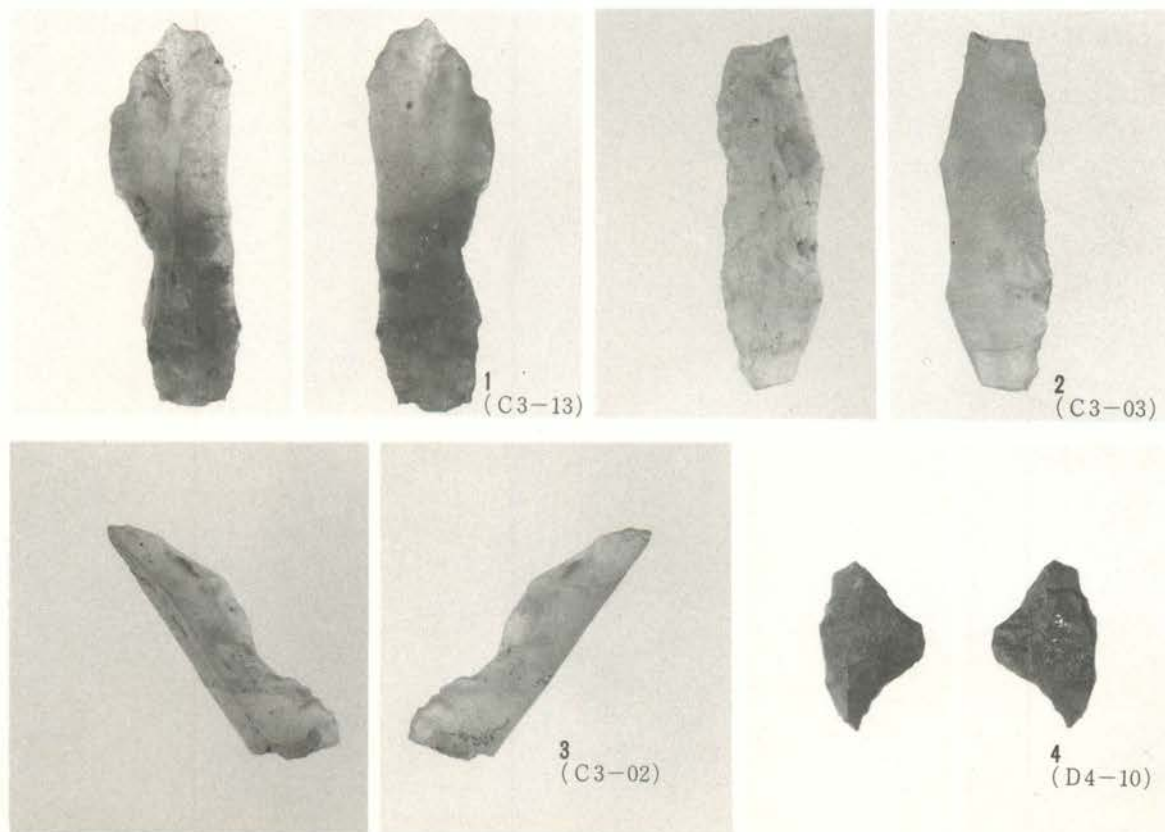
1. 遺跡近景



2. 遺跡近景



1. 先土器時代石器出土状況



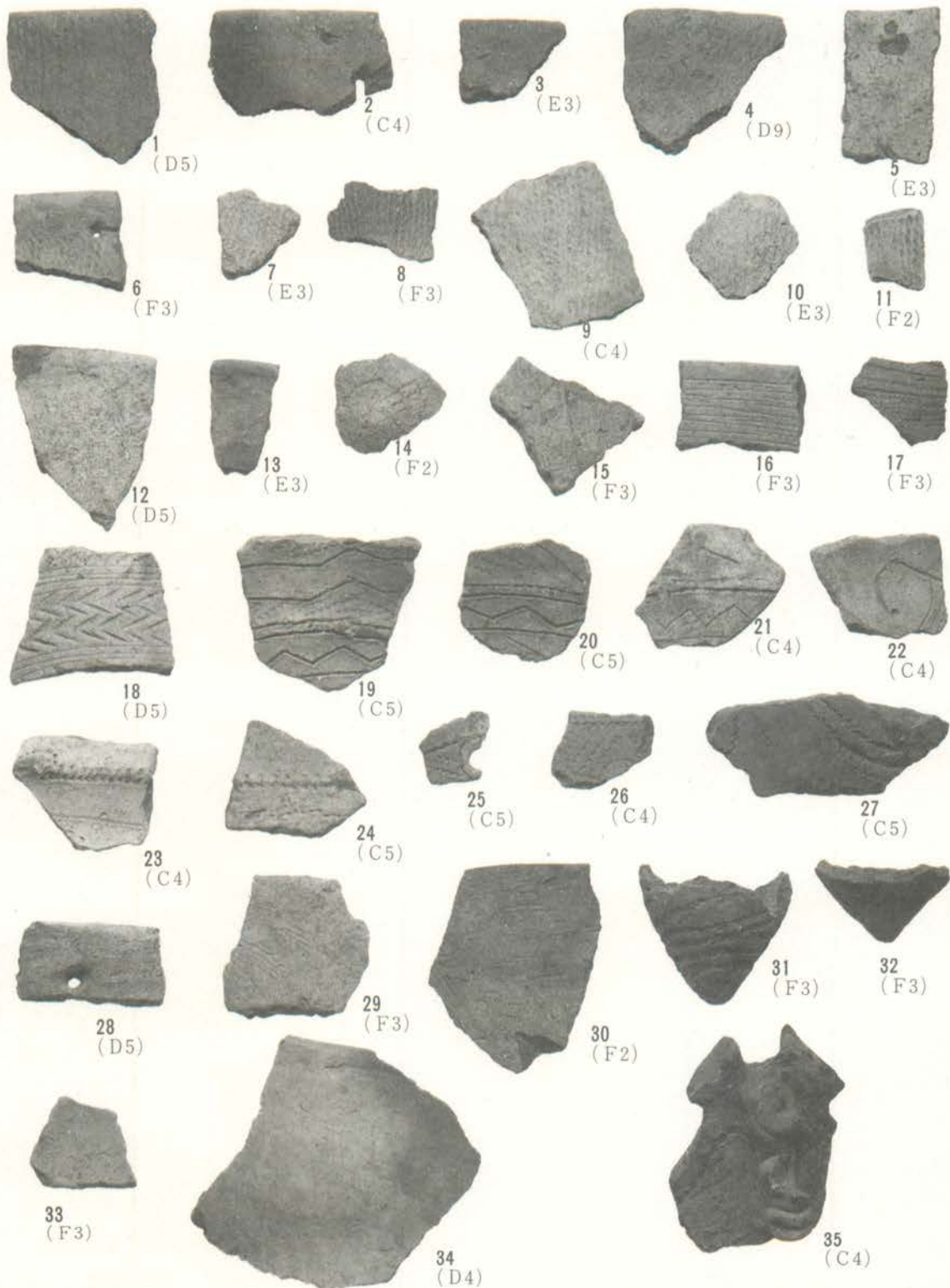
2. 石器(約6/7)



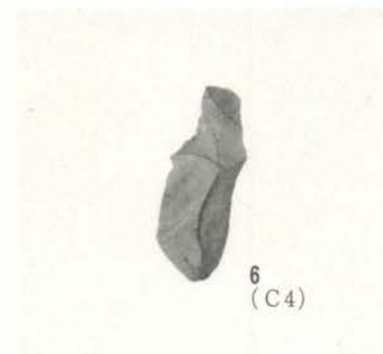
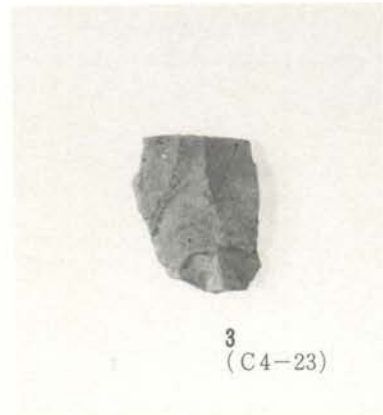
1. 遺跡近景



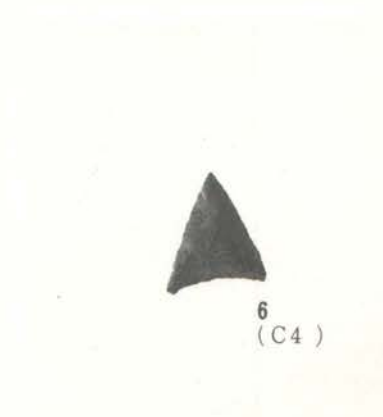
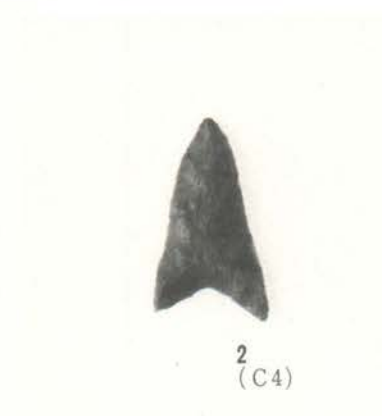
2. 確認トレンチ状況



グリット出土縄文土器



1. 先土器時代石器



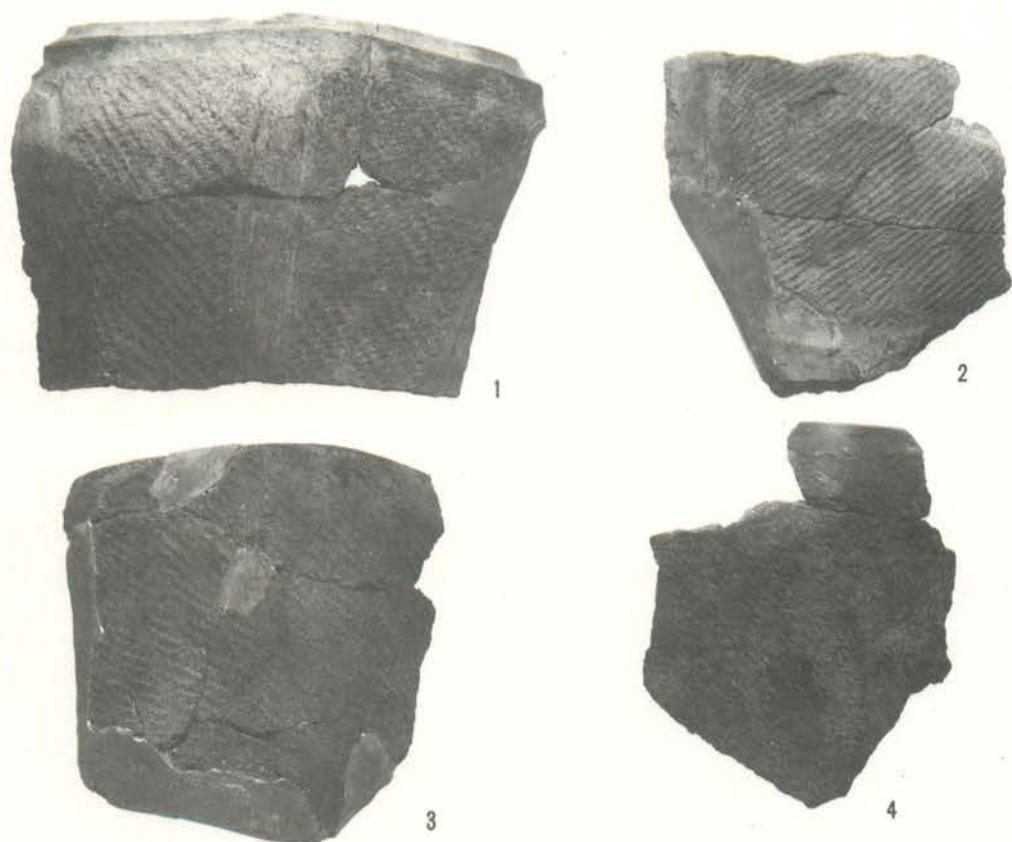
2. 縄文時代石器(約6/7)



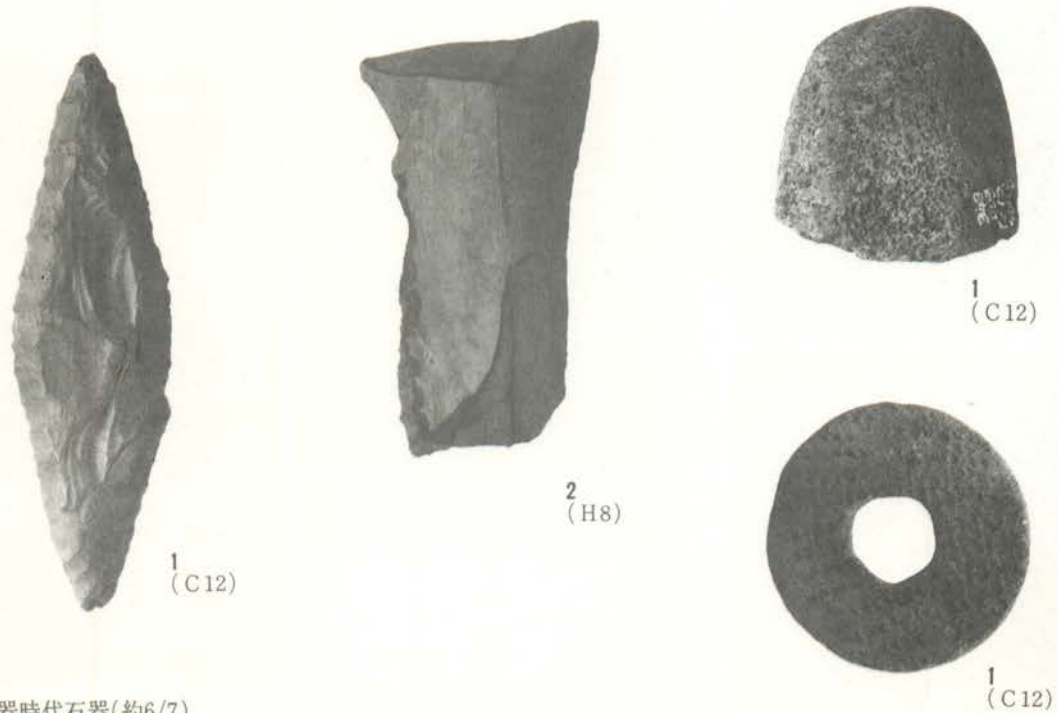
1. 遺跡近景



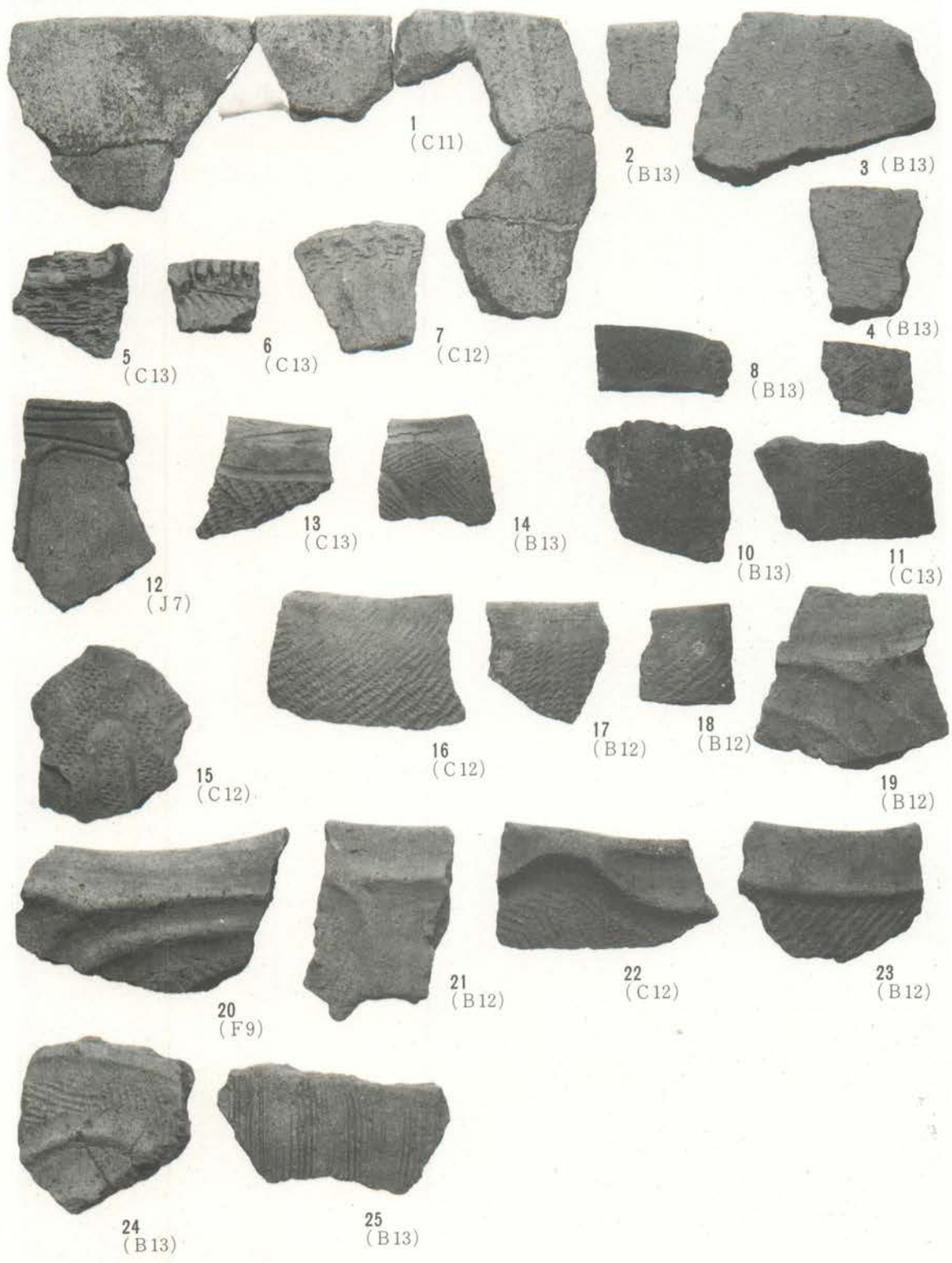
2. 001号住居跡



1. 001号住居跡出土縄文土器



2. 先土器時代石器(約6/7)



グリット出土縄文土器



1. 遺跡近景



2. グリット出土縄文土器



3. グリット出土石器(約6/7)

東関東自動車道埋蔵文化財調査報告書 II

印刷 昭和60年12月20日

発行 昭和60年12月30日

発行 日本道路公団東京第一建設局
東京都港区虎ノ門1-18-1 (03)502-7431

編集 財団法人 千葉県文化財センター
千葉市葛城2-10-1 (0472)25-6478

印刷 千代田印刷株式会社
千葉市都町2丁目25番19号 (0472)33-0541(代)
